

宮城県文化財調査報告書第 53 集

宮城県文化財発掘調査略報

(昭和 52 年度分)

昭和 53 年 3 月

宮城県教育委員会

序

高度成長経済から安定成長経済への転換が進むなかで、我々の生活環境は大きな変化をとげられました。それは、まさに量から質への転換であります。換言すれば、経済的な豊かさから精神的な豊かさへの希求のあらわれであります。こうした中で、我々の祖先が残した貴重な文化遺産全般に対する関心が、最近、ますます高まってきつつあることは誠によるこぼしい限りであります。

しかし、一方、これらの文化財が様々なかたちで滅失や散逸の危機に瀕していることも事実であります。

最近の埋蔵文化財に関する実態調査によると、種々の開発事業に伴う発掘調査の件数は、年ごとに急激な増加を示しています。文化財の保護がいかに適正に進められ、徹底されなければならないかは、文化財保護行政の上で急を要する重要な課題であります。

宮城県教育委員会は、今年度も東北自動車道関係3遺跡、東北新幹線関係5遺跡、一般開発関係8遺跡の発掘調査を実施しました。特に、東北自動車道関係遺跡の築館町佐内屋敷遺跡では、奈良～平安時代の大規模な集落跡の発見があり、東北新幹線関係遺跡の仙台市安久東遺跡では、昨年の高清水町東館遺跡につづき方形周溝墓が確認され、また、観音沢遺跡の調査でも中世建物跡群の中で丸木柱を伴う土墳が検出されるなど、各時代の歴史解明の上で貴重な資料となりました。一般開発関係では、推定玉造柵の城生遺跡調査の結果、築地の確認がなされるなど大きな成果がありました。

この報告書は、それらの調査成果を概略的にまとめ、また、昭和46年から測量調査を実施してきた古墳関係の測量図を収録したものであります。

本書を刊行するに当たり、御尽力と御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる敬意と感謝を申し上げますとともに、学界をはじめ深く関心を寄せられる諸賢に役立つことを切に念願するものであります。

昭和53年3月

宮城県教育委員会 教育長 津軽 芳三郎

例 言

1. 本書は、昭和 52 年度発掘届（通知）一覧、昭和 52 年度発掘調査遺跡分布図、昭和 52 年度東北自動車道関係（3 遺跡）、東北新幹線関係（4 遺跡）、一般開発関係遺跡（2 遺跡）の調査内容を簡略にまとめたものと昭和 45 年から実施してきた古墳関係の測量実測図等を収録したものである。これらの遺跡の詳細な報告は、後日、正式報告書として刊行する予定である。
2. 本書収録遺跡の発掘調査は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、各市町村教育委員会、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、各学校教職員の協力を得た。
3. 東北自動車道・東北新幹線関係遺跡の発掘調査にあたっては、東北大学名誉教授伊東信雄氏、東北大学教授佐藤巧氏、宮城県多賀城跡調査研究所長氏家和典氏の御指導を得た。
4. 東北自動車道関係遺跡に掲載した佐内屋敷遺跡という名称は、宮城県遺跡地名表（宮城県文化財調査報告書第 46 集）では「新田遺跡」となっているが、遺跡の位置を適切に表現していないので、小字名をとって改称したものである。
5. 一般開発関係に収録した糠塚遺跡は、昭和 47 年度宮城県教育庁文化財保護室が発掘調査した遺跡である。今回、資料の正式公開という趣旨で掲載した。本遺跡の発掘調査にあたっては、栗原郡瀬峯町佐藤信行氏の協力を得た。
6. また、兜塚古墳の発掘調査および報告書作成にあたっては、上記伊東信雄氏、氏家和典氏、東北大学大学院生渡辺伸行氏の御教示を得た。
7. 本書収録の図面、写真等は最少限にとどめた。なお、一般開発関係遺跡に掲載した地形図は建設省国土地理院発行のものを複製したものである（承認番号昭（53）東複・第 22 号）。
8. 本書の編集、図版等の作成・内容の検討については、宮城県文化財保護課調査係関係職員が全員で担当した。

目 次

昭和 52 年度発掘調査遺跡分布図

昭和 52 年度発掘届（通知）一覧

．東北自動車道関係遺跡

- (1) 木戸遺跡（第 2 次） 6
- (2) 佐内屋敷遺跡 10
- (3) 鶴ノ丸遺跡 16

．東北新幹線関係遺跡

- (1) 安久東遺跡（第 3 次） 24
- (2) 観音沢遺跡（第 2 次） 28
- (3) 熊谷遺跡 34
- (4) 大門遺跡 38

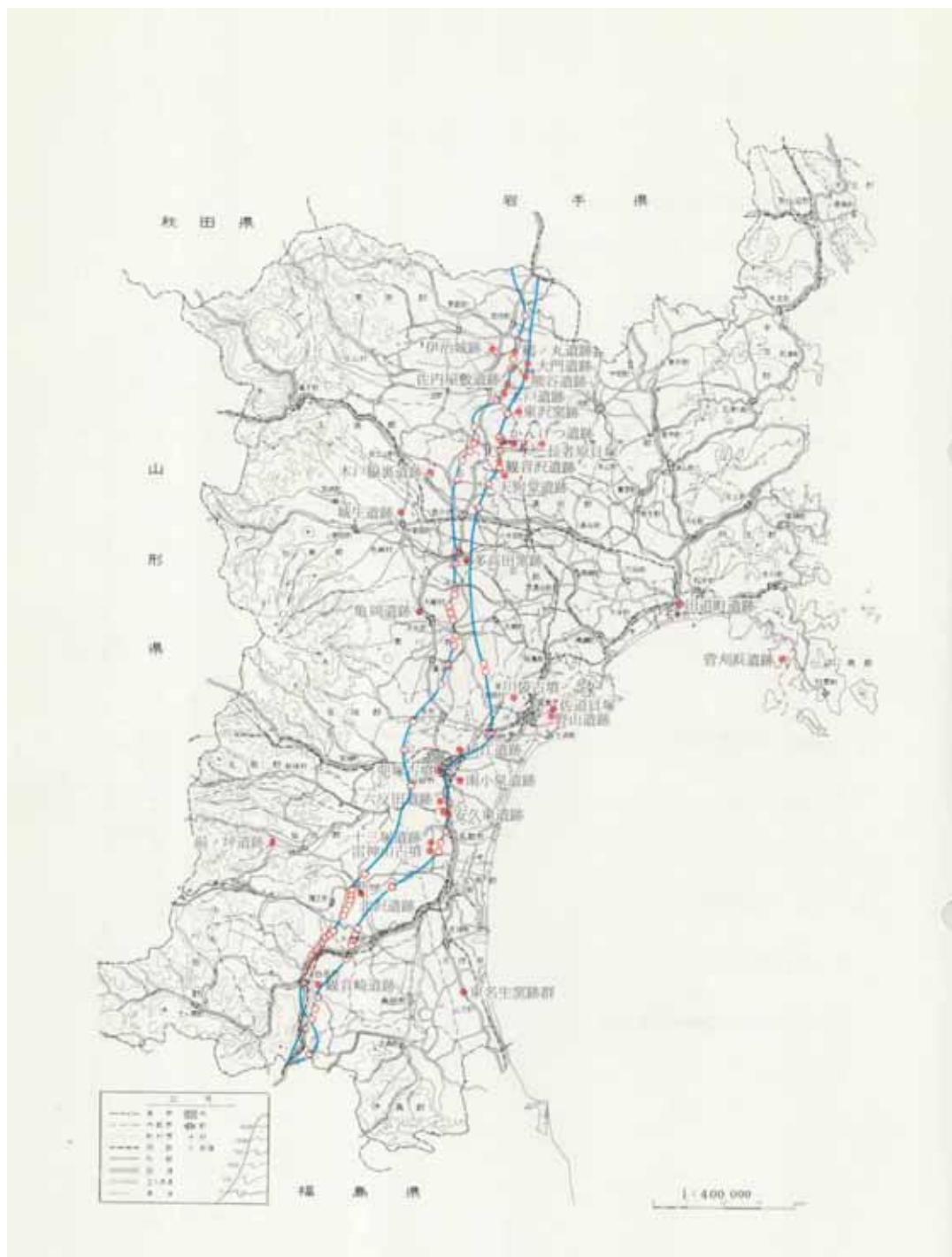
．一般開発関係遺跡

- (1) 糠塚遺跡 44
- (2) 兜塚古墳 200

．古墳（測量調査）

- (1) 古墳実測図収録について 218

宮城県文化財調査報告書一覧



1977 (昭和 52) 年度発掘調査遺跡分布図

1977 (昭和52) 年度発掘届 (通知) 一覧

整理番号	遺跡名	所在地	原因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
52 ₁	木戸遺跡	築館町	上水道布設工事			
2	木戸脇裏遺跡	岩出山町	学術調査	早稲田大学文学部考古学資料室 佐井清彦	桜井清彦	縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物包含地
3	玉萩台遺跡	築館町	宅地造成			縄文時代の集落跡
4	保呂羽館跡	登米町	公営住宅建設			中世の館跡
5	網場貝塚	米山町	道路改良工事			縄文後一前期の貝塚
6	蛇沼山遺跡	三本木町	体育館建設			奈良・平安時代の遺物包含地
7	郡山遺跡	角田市	農村総合整備事業			奈良～平安時代の官衙関係遺跡
8	猿水貝塚	石巻市	開田			縄文時代の貝塚
9	舟場遺跡	三本木町	鳴瀬川改修三本木左岸上流高水敷整地事業			奈良～平安時代の遺物包含地
10	保呂羽館跡	登米町	汚泥処理施設事業			中世の館跡
11	北沢遺跡	村田町	工業団地造成			弥生時代後期の遺物包含地
12	玉萩台遺跡	築館町	宅地造成			縄文時代の集落跡
13	①誓王寺跡 ②吉田遺跡	米山町	農道整備			①寺院跡 ②奈良・平安時代の城郭跡(推定地)
14	安久東遺跡	仙台市	電柱仮設工事			古墳時代～中世までの集落跡
15	横倉古墳群	角田市	宅地造成			古墳時代後期の古墳
16	菅刈浜遺跡	石巻市	板碑群の精査	石巻市教育委員会	石巻市教育委員会 板碑群	
17	田道町遺跡	石巻市	土地区画整理事業	石巻市教育委員会	石巻市文化財保護委員会 古墳～平安時代の遺物包含地	
18	木戸遺跡	築館町	東北自動車道建設	宮城県教育委員会	宮城県教育委員会 縄文～平安時代の集落跡	
19	安久東遺跡	仙台市	東北幹線建設	宮城県教育委員会	宮城県教育委員会 古墳時代～中世までの集落跡	
20	耕江遺跡	仙台市	小学校建設	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 古墳跡	
21	燕沢遺跡	仙台市	倉庫建設			縄文～平安時代までの複合遺跡 瓦出土・寺院跡とも云われる
22	城生遺跡	中新田町	遺跡の範囲及び遺構の確認調査	中新田町教育委員会	宮城県教育委員会 古代城郭跡(推定地)	
23	東館遺跡	高清水町	工用仮設建物建設			縄文～鎌倉時代までの複合遺跡 方形周溝溝
24	宝領遺跡	一迫町	町道建設			縄文時代後～前期の遺物包含地
25	横倉古墳群	角田市	宅地造成			古墳後期(円墳・前方後円墳)
26	佐内屋敷遺跡	築館町	東北自動車道建設	宮城県教育委員会	宮城県教育委員会 縄文～平安時代の集落跡	
27	大橋館跡	丸森町	岩石採掘採取			中世の館跡
28	大沢沼前横穴古墳群	田尻町	畑地造成			横穴古墳
29	長根遺跡	築館町	水田改修工事			縄文・古墳・奈良・平安時代の遺物包含地
30	六反田遺跡	仙台市	社宅建設	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 弥生～奈良・平安時代に及ぶ複合遺跡	
31	北沢遺跡	村田町	工業団地造成	宮城県教育委員会	宮城県教育委員会 弥生時代後期の遺物包含地	
32	安久東遺跡	仙台市	宅地造成	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会 古墳時代～中世までの集落跡	
33	出部遺跡	小野田町	農道整備			縄文晩期の遺物包含地
34	龜岡遺跡	大衡村	学術調査	東北学院大学考古学研究所 加藤孝	加藤孝	奈良・平安時代の遺物包含地
35	小鶴城跡	仙台市	倉庫建設			中世の館跡
36	小鶴城跡	仙台市	住宅建設			中世の館跡
37	多高田窯跡	三本木町	開採保存調査	三本木町教育委員会	宮城県教育委員会 中世窯跡	
38	天狗堂遺跡	田尻町	遺跡の確認調査	田尻町教育委員会	宮城県教育委員会 奈良・平安時代の集落跡	
39	長者原貝塚	南方町	宅地造成	南方町教育委員会	宮城県教育委員会 縄文(前・中・後)貝塚	
40	東名生窯跡群	山元町	学術調査	坂元中学校長 藤部寛志 山下中学校長 志間泰治	志間泰治	東名生窯跡群の一基(須磨器)
41	内原遺跡	石巻市	テレビ設置工事			中世館跡の一部 奈良・平安時代の遺物包含地(近接)

廻り番号	遺跡名	所在地	原 因	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
42	左 道 員 塚	七ヶ浜町	油 槽 所 建 設			貝塚・縄文前期…土器・石器 自然遺物・魚骨など
43	観音崎遺跡	白石市	宅 地 的 造 成	白石市教育委員会	白石市教育委員会 社会教育課	奈良・平安時代の集落跡
44	十三塚遺跡	名取市	環境整備基礎資料	名取市教育委員会	名取市教育委員会 社会教育課	縄文～平安にかけての 複合遺跡
45	左 道 員 塚	七ヶ浜町	油 槽 所 建 設	七ヶ浜町教育委員会	高 橋 篤 雄 孝 宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	貝塚
46	東 塚 古 墳	仙台市	周 邊 の 地 理 研 究	宮城県教育委員会	宮城県教育庁 官文化財保護課	前方後円墳
47	伊 治 城 跡	釜淵町	遺跡の性格・規模 構造などの調査	宮城県多賀城跡 調査研究所	宮城県多賀城跡 調査研究所	古代城郭・伊治城跡擬定地
48	小 鷲 城 跡	仙台市	住 宅 新 築			中世館跡
49	小 鷲 城 跡	仙台市	住 宅 新 築			中世館跡
50	唐 坪 遺 跡	川崎町	送 電 線 敷 設 工 事	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	縄文時代中期の遺物包含地
51	野 山 遺 跡	七ヶ浜町	七ヶ浜ニュータウン建設 調査	七ヶ浜町教育委員会	三 宅 宗 謙	遺物包含地 貝塚
52	善王寺横穴古墳群	仙台市	住 宅 建 設			古墳時代後期の横穴古墳
53	大 門 遺 跡	志波町	東 北 新 幹 線 建 設 工 事	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	奈良・平安時代の集落跡
54	加賀坊山国家安楽寺 跡	田尻町	道 路 整 備 工 事			伝・古代寺院跡
55	錦ノ丸館跡	志波町	東 北 自 動 車 道 建 設 工 事	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	中・近世の館跡
56	長 帯 原 遺 跡	新藤町	土 取 り 工 事			奈良・平安時代の集落跡
57	伝・洞海上人墓跡	歌津町	森林火災用望遠の撤去			伝・洞海上人墓跡
58	観音沢遺跡	高冷町	東 北 新 幹 線 建 設 工 事	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	古墳時代～中世までの 集落跡
59	熊 谷 遺 跡	志波町	東 北 新 幹 線 建 設 工 事	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	縄文時代の集落跡
60	東 沢 遺 跡	釜淵町	学 術 調 査	東北歴史資料館	工 藤 雅 樹	中世館跡の窟跡
61	が ん げ つ 遺 跡	新藤町	道 路 新 築 工 事	新藤町教育委員会	依 藤 信 行	平安時代の集落跡
62	南 小 泉 遺 跡	仙台市	遺跡範囲確認調査	仙台市教育委員会	仙 台 市 教 育 委 員 会 社 会 教 育 課	弥生～古墳時代の集落跡
63	古 川 城 跡	古川市	校 舎 建 設			中近世の城跡跡
64	石 塚 古 墳	栗田町	宅 地 造 成			古墳後期の円墳
65	向山高麗遺跡	仙台市	体 育 館 建 設			縄文中期遺物包含地
66	東 光 寺 城 跡	仙台市	基 地 造 成			中世城跡跡
67	内 原 遺 跡	石巻市	地 地 造 成			奈良・平安時代の 遺物包含地
68	山 口 遺 跡	仙台市	土 地 区 画 整 理 事 業			遺物の包含地（土器器）
69	岩 出 山 城 跡	岩出山町	校 地 拡 張			中・近世の城跡跡
70	観 音 寺 跡	仙台市	整 地 工 及 び 排 水 管 布 設			伝・鎌倉時代の館跡
71	観 音 寺 跡	仙台市	庁 舎 建 設			伝・鎌倉時代の館跡
72	兜 塚 古 墳	仙台市	遺 構 面 積 認 査	宮城県教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	前方後円墳
73	根 切 遺 跡	丸森町	盛 土 工 事			遺物包含地（土器器）
74	松 島 館 跡	松島町	町 道 改 良 工 事			中世館跡
75	葛 岡 沢 遺 跡	仙台市	宅 地 造 成			縄文時代の遺物包含地
76	鹿 松 貝 塚	石巻市	土 地 区 画 整 理 事 業			貝塚
77	卯 の 崎 古 墳	角田市	宅 地 造 成			円墳
78	松 島 寺 跡	松島町	宅 地 造 成			松島寺跡（鎌倉）
79	①大 浜 遺 跡 ②観 音 寺 貝 塚	石巻市	林 道 開 設			①平安中期・加賀坊山 ②縄文中～晩期・貝塚
80	三十三間堂遺跡	亶理町	宅 地 造 成			中世城跡
81	沼 の 崎 B 遺 跡	川崎町	農 道 改 良 工 事			観音遺跡
82	沼 崎 遺 跡	仙台市				自然遺跡上の土器器包含地
83	小 鷲 城 跡	仙台市	住 宅 新 築			中世城跡跡
84	長 根 遺 跡	新藤町	水 道 改 修 工 事 及 水 道 用 路 開 設	新藤町教育委員会	宮 城 県 教 育 庁 官 文 化 財 保 護 課	縄文・古墳・奈良・平安 時代の遺物包含地

東北自動車道関係遺跡



東北自動車道関係遺跡位置図

(1) 木戸遺跡

第2次調査

高橋多吉・後藤 彪・小井川和夫・高橋守克
遊佐五郎・千葉宗久・手塚 均・中島 直

遺跡所在地：宮城県栗原郡築館町萩沢字木戸

調査期間：昭和52年4月18日～昭和52年5月14日

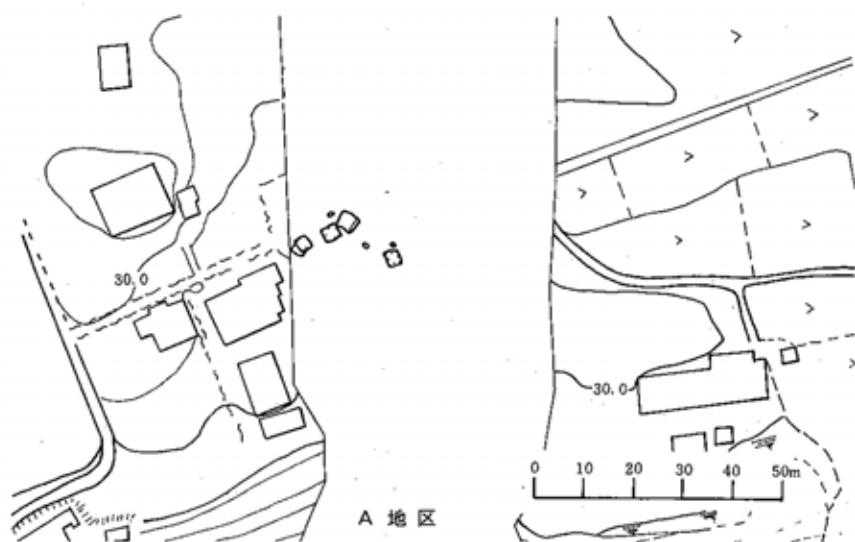
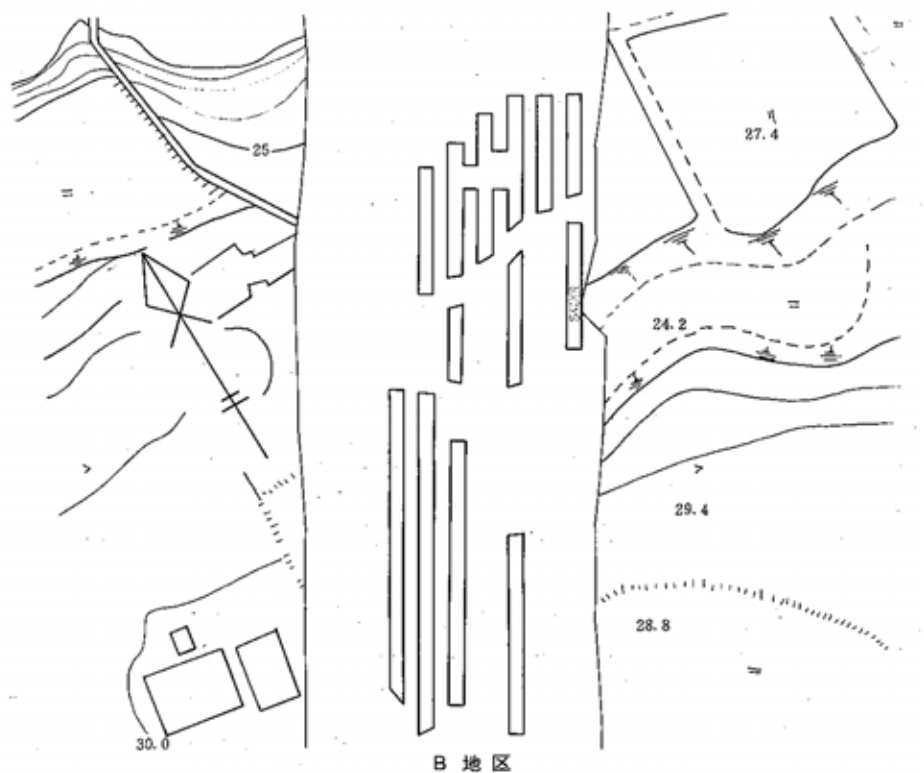
調査面積：8000 m²

発掘面積：2000 m²

遺跡記号：E F

遺跡番号：41051

調査協力期間：築館町教育委員会



木戸遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

木戸遺跡は、築館町役場の東約2kmに位置する。奥羽山脈から派生した築館丘陵は、一迫町柳ノ目付近から志波姫町横峯にかけて広い平坦面を形成し、東へ延びている。本遺跡は、この丘陵のひとつ、標高約30mの平坦面から南斜面にかけて立地している。丘陵平坦面と水田面との比高は約10mである。遺跡の存在する丘陵の縁辺には、縄文時代から中世までの遺跡が数多く分布している。

2. 調査の概要

今回は第2次発掘調査である。木戸A地区(第1次調査残部)と木戸B地区の約8000㎡を対象に行なった。その結果、A地区で竪穴遺構5基、土壇2基、焼土遺構1基を発見した。B地区北部南斜面で遺物包含層を確認した。

第4号竪穴遺構 一辺が約3.2mの方形の竪穴遺構である。壁の残存高は約10cmで、南西隅の部分は削平されている。床面はほぼ平坦であり、掘り方の底面がそのまま床面となっている。ピットは17個検出された。柱痕跡が確認されたものは8個である。竪穴遺構堆積土中からの出土遺物はない。

第5号・第6号竪穴遺構 両竪穴遺構は重複関係にある。5号竪穴遺構の堆積土の一部を切って、6号竪穴遺構が構築されている。したがって5号竪穴遺構より第6号竪穴遺構が新しい。5号竪穴遺構の平面形は一辺約3.5mの方形である。壁は保存がわるい。壁に沿って床面の一部に貼床が認められた。ピットは5個検出された。6号竪穴遺構の平面形は一辺約3mの方形である。北辺の壁は保存がよい。掘り方の底面を床面としている。ピットは壁沿いに7個検出されたが、位置、深さ等から柱穴は6個と考えられる。堆積土中から土師器、中世陶器片が出土している。

第7号・第9号竪穴遺構 9号竪穴遺構の堆積土の一部を切って7号竪穴遺構が構築されている。したがって9号より7号が新しい。両者とも平面形は方形である。掘り方の底面を床面としている。壁沿いに7号でピット10個のうち柱穴8個、9号で柱穴6個を検出した。7号竪穴遺構の堆積土中から土師器片が出土している。

遺物包含層 木戸B地区の沢に向かった南斜面の一部で確認された。縄文時代中期後半の土器、土師器、須恵器片が少量出土した。遺物の層序等から考えて二次堆積の可能性が強い。

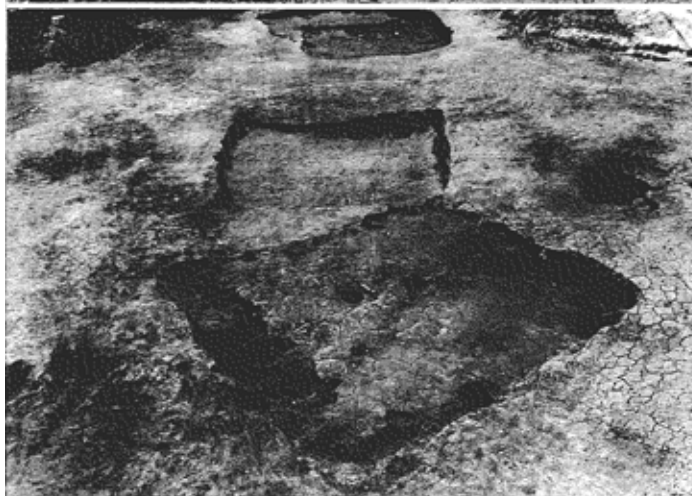
3. まとめ

木戸A地区の竪穴遺構は、一部の堆積土中から土師器や中世陶器が出土したが、時期、性格等は不明であり今後の検討課題である。木戸B地区の遺物包含層は二次堆積の可能性が強く、主体部は路線敷からはずれるものと考えられる。

(高橋多吉・中島 直)



木戸遺跡B地区全景



A地区竪穴遺構



A地区竪穴遺構

(2) 佐内屋敷遺跡

後藤勝彦・高橋多吉・後藤 彪・小井川和夫
高橋守克・斎藤吉弘・佐藤好一・遊佐五郎
千葉宗久・一条孝夫・阿部 恵・真山 悟
阿部博志・手塚 均・中島 直

遺跡所在地：宮城県栗原郡築館町萩沢字佐内屋敷

調査期間：昭和52年5月6日～昭和52年9月24日

調査面積：15200 m²

発掘面積：15200 m²

遺跡記号：BH

遺跡番号：41037

調査協力期間：築館町教育委員会

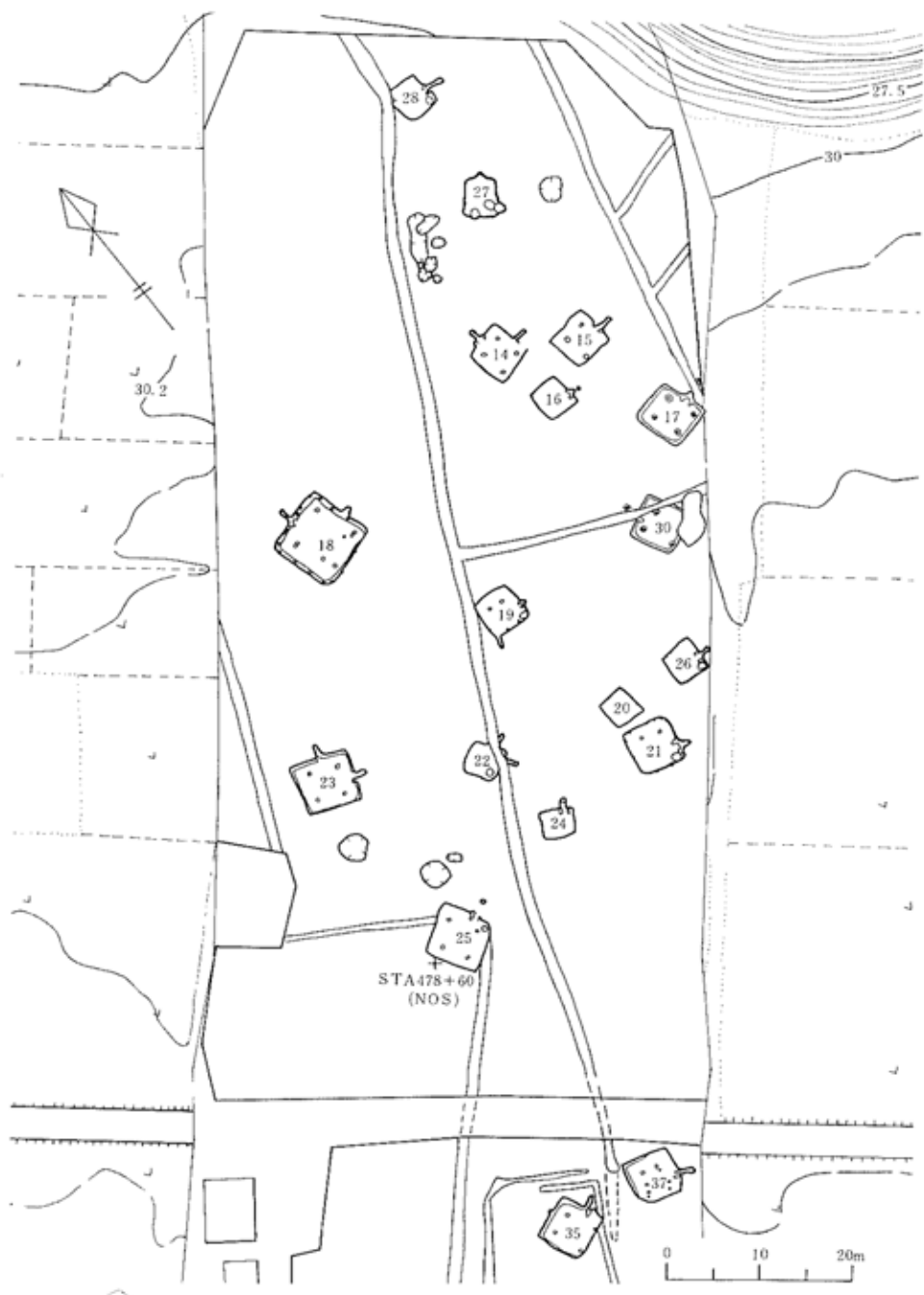
調査協力員：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

鈴木惣之助（多賀城市立多賀城小学校教諭）

土岐山 武（仙台市立北六番丁小学校教諭）

森 貢喜（河南町立前谷地小学校教諭）

小野寺祥一郎（石巻市立蛇田小学校教諭）



佐内屋敷遺跡遺構配置図 北区



南 区

1. 遺跡の立地

佐内屋敷遺跡は築館町役場の東約2km、県道築館～新田線の南側に位置している。奥羽山脈から派生する築館丘陵は、伊豆沼・長沼を中心とする湖沼地帯へ注ぐ河川によって開析され、樹枝状のなだらかな丘陵となる。本遺跡はこれら丘陵の1つ、標高約30mの畑地に立地している。遺跡の周辺には、木戸遺跡・原田遺跡・木戸平遺跡・鰻沢遺跡など数多くの遺跡が分布している。

2. 調査の概要

調査は東北自動車道にかかわる路線敷内の約15200m²を対象に行なった。その結果、竪穴住居跡37軒・土壇13基・鍛冶遺構1基・甕棺墓1基・溝6本および遺物包含層を発見した。

竪穴住居跡 調査区南部で縄文時代のもの2軒、調査区全域から奈良～平安時代のもの35軒、合計37軒が検出された。縄文時代のものは、平面形が円形である。保存の良好な第3号住の直径は約8.5mであり、床面から柱穴を確認している。奈良～平安時代のものは、平面形が方形で一辺5m前後のものが多い。住居跡内からは、カマド・柱穴が確認された。そのほか貯蔵穴・周溝をもつものもある。カマドの付設箇所としては、東・北壁に多く、南壁に付設したものもある。また、カマドの造り替えをしているものが12軒確認された。カマド側壁は、強化のため土師器の甕を倒立させて埋め込んだもの、凝灰岩の切石を埋め込んだものなどがある。燃焼部中央付近には支脚として、土師器の甕を伏せたもの、粘土塊を貼りつけたもの、自然石に坯をかぶせたもの、地山を柱状に削り出したものなどがある。住居跡内のピットのうち、掘り方と柱痕跡と識別できたものが多い。第21・25号住では支柱の基部が炭化して残っていた。残存壁高は深いもので約50cm、浅いもので約10cmである。火災を受けた住居跡は5軒確認されており、第21号住では壁沿いに板状の炭化材が数枚検出された。幅約30cm、厚さ約4cmである。出土状況から推して壁板の可能性はある。

土壇 発見された13基とも出土遺物はない。時期・性格等は不明である。

溝 調査区全域を縦横に走っている。確認面は第2層(黒色土)上面である。堆積土中から若干の土師器・須恵器片が出土している。第1号溝北端からは鉄滓も多量に出土している。竪穴住居跡との関係を見ると、すべての溝が住居跡を切っている。時期・性格等は不明である。

鍛冶遺構 残存する燃焼部の平面形は楕円形で、長軸約80cm、短軸約60cmである。燃焼部および周辺から鞆の羽口数点、多量の鉄滓が出土している。時期等については不明である。

出土遺物 調査区南端部東斜面の包含層から縄文中期前半(大木7_b・8_a)の土器・石鏃・石槍・石匙・磨石が出土した。奈良～平安時代の竪穴住居跡出土の遺物は、以下のものである。土師器は坯・甕が多く、その編年の位置から考えて国分寺下層式と表杉ノ入式期に属するものと考えられる。特に器内外面黒色処理、ミガキをほどこした短頸壺1点が出土している。須恵

器では坏・甕・壺が出土している。鉄製品では刀子・刀（第35号住から出土したもので、刀身の先端部が欠損している。柄部は細幅で目釘孔がない。銚元で棟区が認められる）、鉄鏃（平根鏃と雁股鏃）、手斧（柄袋に木質が残存）、釘・円盤状のもの・円筒状のものが出土している。木製品では第28号住から椀が2点出土している。ロクロ成形によるものである。石製品では砥石・土製品では土錘がある。自然遺物では炭化したクリ（第25号住）、炭化米（第33号住）などがある。

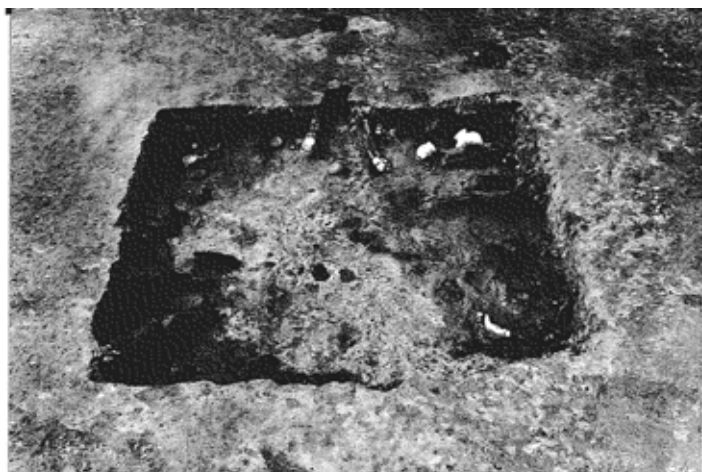
3. まとめ

1. 遺物包含層は、調査区南端部東斜面に形成されており、縄文時代中期前半の土器および石器が出土した。また周辺から縄文時代の竪穴住居跡2軒が発見された。調査区全域からは、奈良～平安時代の竪穴住居跡35軒が発見された。これら竪穴住居跡から出土した土器は、国分寺下層式と表杉ノ入式期に属するものである。
2. カマドの造り替えをしているもの、カマド側壁を土師器の甕などで強化しているもの、カマド燃焼部に支脚を取り付けたものなどが確認され、奈良～平安時代の竪穴住居跡を知る貴重な資料を得ることができた。
3. 火災を受けた竪穴住居跡の炭化材から、当時の上屋構造を知る手がかりを得ることができた。特に板材は壁板の可能性がある。
4. 出土遺物では土器・石器のほか、奈良～平安時代の鉄製品・木製品・炭化したクリ・炭化米などがあり、当時の生活を知る貴重な資料となった。
5. 今回発見された住居跡の分布と地形的立地条件から考えると、遺跡の範囲はさらに東・西の地域に広がるものと判断される。

（高橋多吉・中島 直）



佐内屋敷遺跡全景（航空写真）



第9号住 遺物出土状況



第28号住 土器出土状況



第21号住 板状炭化材
出土状況

(3) ^{つる}鶴ノ丸^{まる}遺跡

高橋多吉・後藤 彪・高橋守克・斉藤吉弘
千葉宗久・一条孝夫・中島 直

遺跡所在地：宮城県栗原郡志波姫町八樟字谷地

調査期間：昭和52年9月20日～昭和52年12月8日

調査面積：8180 m²

発掘面積：6000 m²

遺跡記号：B K

遺跡番号：49015

調査協力機関：志波姫町教育委員会

1. 遺跡の立地

鶴ノ丸遺跡は志波姫町役場から西方約 1.7 km、県道築館・若柳線貝ノ堀停留所より北 0.4 km に位置する。迫川の形成した沖積地の中に築館から若柳へかけて、標高 20m 前後のなだらかな台地が東へ延びている。本遺跡は、この台地の一部が北へ張り出した先端部に立地し、館中央部と水田との比高は約 5m である。付近には日良館・宇南館・刈敷館・西館などの館跡がある。

2. 鶴ノ丸館の歴史

鶴ノ丸館の創建年代、城主等を明らかにする文献は今のところ発見されていない。栗原郡誌志波姫町史によると規模は「東西 45 間・南北 50 間」。町史にはさらに「高さ 10m 余、濠は二通に廻され外濠の広さ 30 余間」とある。城主については「沼崎の日良館館主沼田四郎宗綱（東方約 1 km に所在）の別館、天正 18 年没落」とある。その後、元和 4 年より茂庭氏、元禄 16 年より西大條氏が居館としたとされているが、屋敷構えの地点については不明である。

3. 調査の概要

本館跡の全体プランを観察すると、上下 2 段の平場から構成されている。その規模は東西約 200m、南北約 220m で総面積 44000 m² におよぶものである。上段平場は東西約 70m、南北約 90m の長方形である。北・西辺縁に、長さ約 30m の土塁が見られる。また平場北寄りには東西約 45m、深さ約 1m の溝状の落ち込みがあった。下段平場は上段との比高が約 2m で、外縁部へゆるやかに傾斜しながら上段平場をとりまいている。下段平場の周縁は水田（旧低湿地）で、かつてはこの自然地形を外郭として利用していた可能性がある。

東北自動車道は館跡の西寄りを南北に縦断するので、路線敷にかかる 8180 m² を対象に発掘調査を進めている。その結果、堀・土塁・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸・土壌が発見された。

堀 堀は 5 本検出されている。このうち館に伴う堀は 3 本と考えられる。上段平場の北辺と西辺の内側に沿った堀を第 1 号堀とし、上段平場直下の北辺と西辺を端折に廻る堀を第 2 号堀とした。第 3・4 号堀は館には直接関連しない。第 5 号堀は上段平場の南直下にある。第 1 号堀は断面が逆台形で箱薬研堀と呼ばれるものであろう。約 30～40 度の傾斜角をもつ。幅は上端で約 4.5m、下端で約 0.5m、最深部までの比高は約 2m である。底面は北西隅で段をもち西辺が北辺より約 40 cm 低い。西辺は南端で第 5 号堀に接近し閉じていて、水戸違いとなる。第 2 号堀は断面・傾斜角・上端・下端・最深部までの比高等は第 1 号堀とほぼ同様である。北辺の西寄りに、堀に直交して地山を掘り残した堰状の施設がみられる。西辺は南端で第 5 号堀に接近し閉じていて、水戸違いとなる。第 5 号堀は断面が「U」字形で、幅は上端約 8m、下端約 5m、最深部までの比高は約 1.5m である。西へ延びる部分は水田地へ至り開く可能性がある。

土塁 土塁は 1 本検出されている。上段平場北・西辺縁に遺存していた。土塁の北西隅付近では旧表土（黒褐色土）を削り出して基底部を造り、この上に地山と表土を積み上げた土塁本

体がのる。最も保存のよい所で基底幅約 6.5m、残存高 1mを超える。積土には長さ約 3~5mの単位で積み手の違いを確認した。

掘立柱建物跡 上段平場第 1 号堀の内側で多数のピットを検出した。径 40~60cm 前後の掘り方で柱痕跡の確認できたものも多い。これらのピットの中には、掘立柱建物跡になる可能性をもつものもある。

出土遺物 館に関連する遺物の出土量は非常に少ない。中世陶器は、すべて甕の破片で、口縁部は明赤褐色で「く」字型に外反する。古銭は永楽通宝 3 点・寛永通宝 2 点・仙台通宝 1 点、その他明治以後の補助貨幣が出土している。懸仏は土壘崩壊土第 3 層中で検出された。阿弥陀如来座像で、中央部から縦に破損している。木製椀は第 2 号堀北辺の東端でスクモ中から検出された。外面に朱色・内面に黒色を施した漆器である。

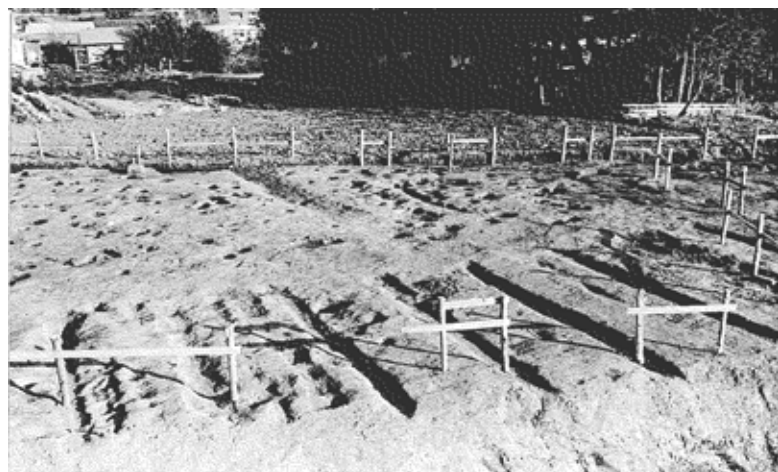
その他、築城以前の遺物に、縄文土器・土師器・須恵器片が平坦部を中心に出土している。

4. まとめ

1. 本館跡の創建年代については館の構造、出土遺物等から中世（鎌倉時代末期以後）の可能性がある。近世に至り茂庭氏、西大條氏の居館と伝えられているが、その地点は明らかではない。
2. 本館跡は自然地形を巧みに利用した占地、縄張りが認められる。上段平場と下段平場とからなる平城である。
3. 館に関連するもので堀 3 本・土壘 1 本・ピット群等が検出され、館の構造・機能等を知るための資料を得ることができた。
(高橋多吉・中島 直)



鶴ノ丸遺跡上段平場をとりまく土壘



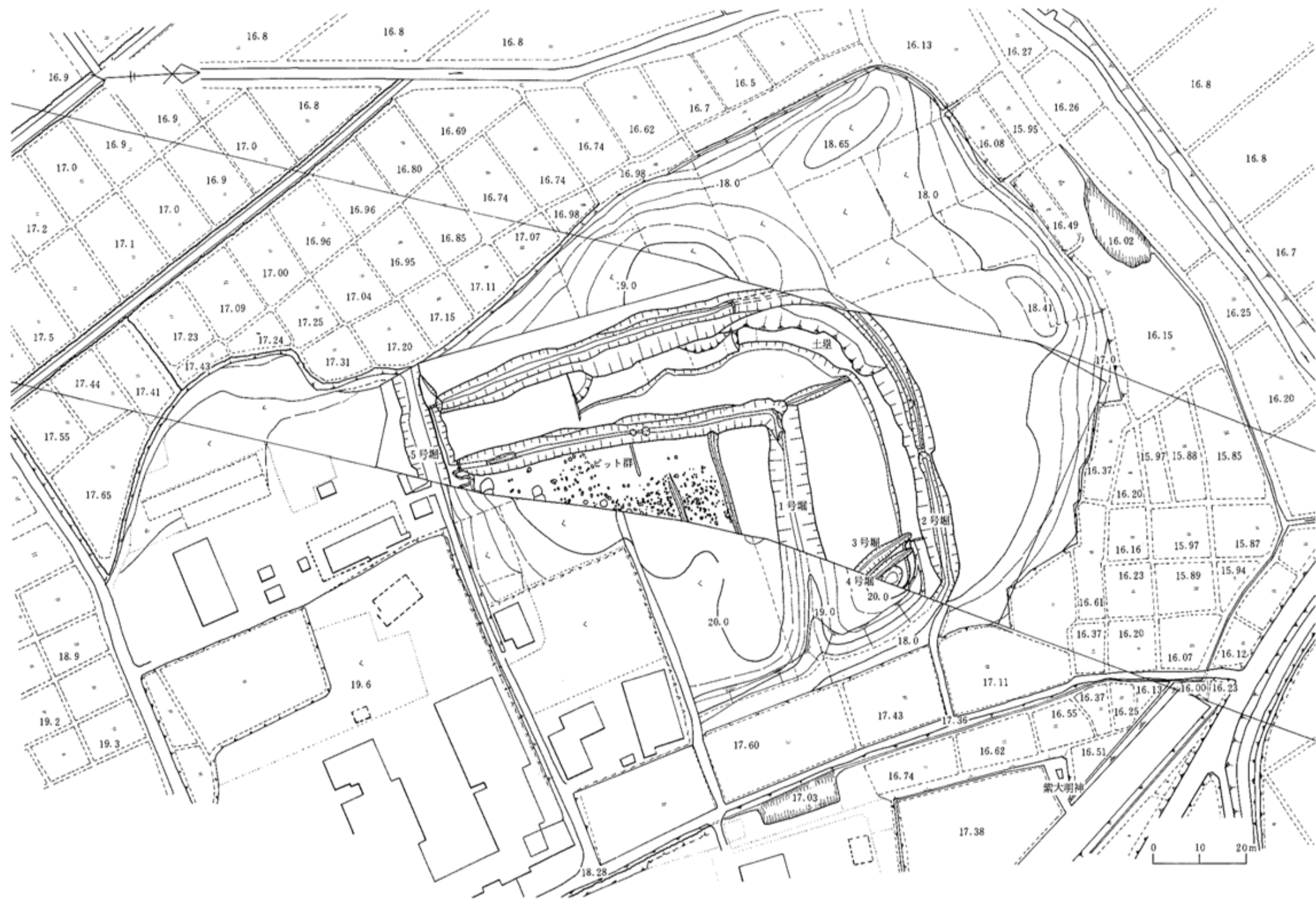
上段平場ビット群



第1号堀北辺



第2号堀西辺南端
(水戸違い)



鶴ノ丸遺跡遺構配置図

東北新幹線關係遺跡



東北新幹線関係遺跡位置図

(1) 安久東遺跡

第3次調査

早坂春一・佐々木安彦・加藤道男・佐藤好一
真山 悟・中島 直

遺跡所在地：仙台中田町字安久東

調査期間：昭和52年4月17日～昭和52年8月30日

調査面積：約4000 m²

発掘面積：約1500 m²

遺跡記号：A T

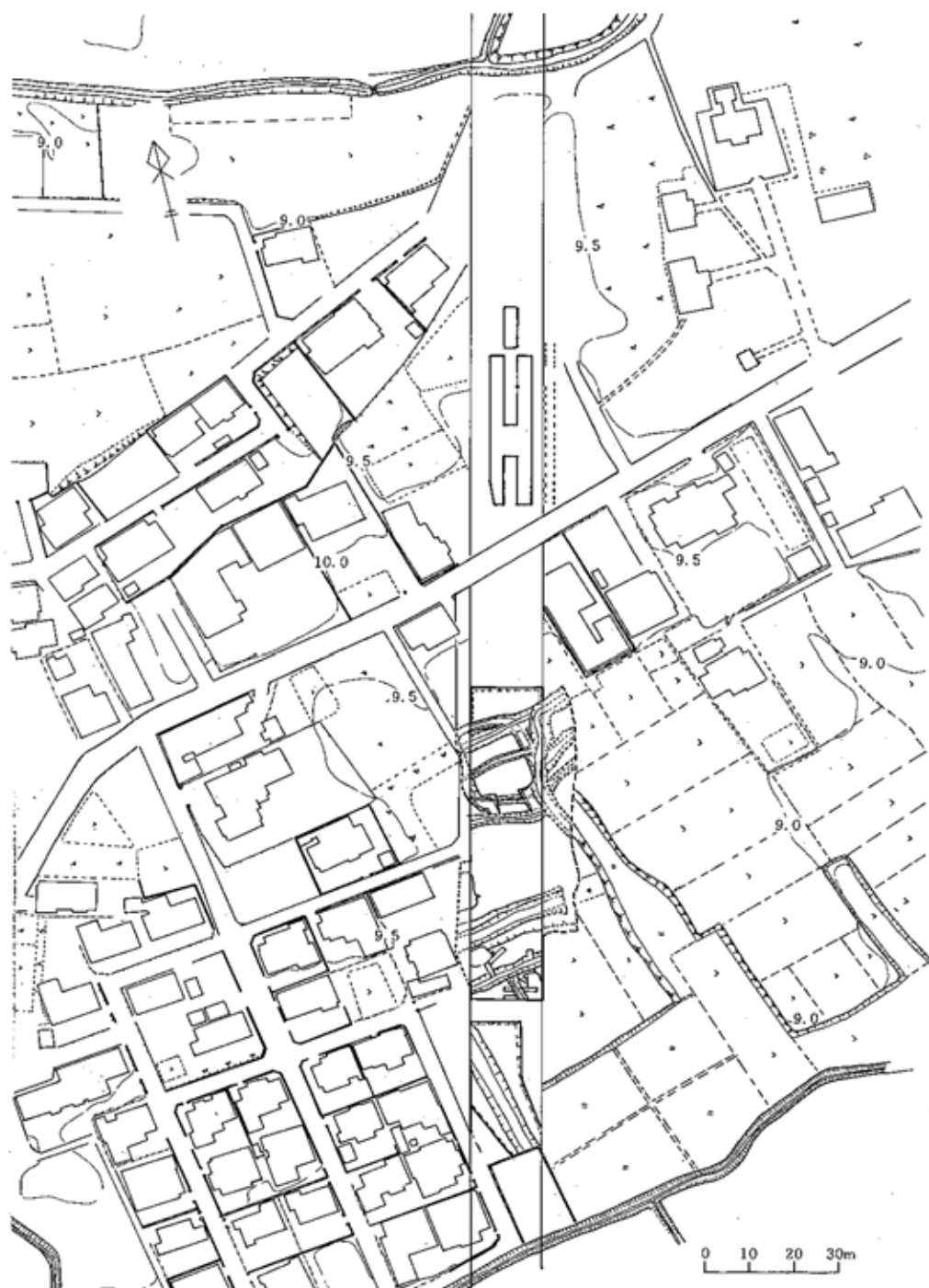
遺跡番号：01037

調査協力機関：仙台市教育委員会

調査協力員：佐藤戌（仙台市立上杉通小学校教諭）

佐藤隆（仙台市立七郷中学校教諭）

太田昭夫（仙台市立金剛沢小学校教諭）



安久東遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

安久東遺跡は東北本線南仙台駅の西約0.1 kmに位置し、名取川が形成した沖積平野の自然堤防上に立地している。標高は9~10mである。遺跡の現状は宅地や畑地となっている。遺跡の周辺には安久諏訪古墳、伊豆野権現古墳をはじめ安久遺跡、六反田遺跡、大野田遺跡、清水遺跡、栗遺跡など、多くの遺跡が分布している。

2. 調査の概要

安久東遺跡の調査は昭和47年の第1次、昭和51年の第2次調査を経て、今回が第3次調査である。調査は路線敷にかかる約4000 m²を対象にし、そのうち約1700 m²の発掘調査を実施した。

その結果、方形周溝墓1基、竪穴住居跡3軒、溝10本、弥生時代の遺物包含層が発見された。

方形周溝墓 溝部と台状部からなっている。その規模は東西約18m、南北約25mである。周溝は北と東・西各辺を連続してめぐり、東・西両辺の溝は、さらに南端部で約3.5m程内側にくびれて、漸次浅くなりながら南方へ扇状に開く。東・西両辺の溝の規模は幅約3m、深さ約1mである。北辺の溝は幅約2.5m、深さ0.4~0.9mで、底面が西寄りで約15cmの段を有し、浅くなっている。しかし、これらの周溝は、後世の溝によって切られ、整然とした形はとどめていない。台状部には、積み土や主体部の施設は認められなかった。遺物は、周溝内堆積土、および底面と周溝墓南縁上端と考えられる付近から、供献用の土師器壺（底部穿孔）が完形に近いもので5個、破片で2個体分、高坏（脚部に円窓を有する）片が出土している。これらの遺物の編年的位置から、方形周溝墓の時期は古墳時代前期（塩釜式期）と考えられる。

竪穴住居跡 3軒検出された。いずれも溝によって切られ、あるいは路線外にのびて、その全体プランは不明である。規模は1辺が4.5~6mと考えられる。各住居跡のカマド右脇には大きなピットがあり、なかから土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器などが多量に出土した。

溝 10本検出された。3本の溝は幅3~7m、深さ1~2mと大きいものである。堆積上中からは、押印のある中世陶器や高台付漆器椀などが出土した。その他の溝は規模も小さく、出土遺物もない。時期、性格については不明である。

遺物包含層 上記の各遺構の下層（第4層）は弥生時代の土器を含む包含層となっている。

3. まとめ

安久東遺跡は弥生時代から中世まで営まれた複合遺跡と考えられる。なかでも方形周溝墓の発見は、昨年の東館遺跡や今年の高賀城跡五万崎地区の発見に続くもので、県内では4番目である。これまでの発見例は、すべて台地上からであったが、本遺跡の場合は沖積地の自然堤防上に立地しており、東北最初の発見例として注目に値する。

これらの各遺構は、周辺一帯にのび、広大な遺跡を構成しているものと考えられる。

（早坂春一）



安久東遺跡北側
発掘区遠景



南側発掘区遠景
(方形周溝墓)



供献用土師器壺出土状況

(2) ^{かん}観 ^{のん}音 ^{ざわ}沢 遺跡

第2時調査

早坂春一・遊佐五郎・真山 悟・阿部博志
加藤道男・後藤 彪・手塚 均・佐藤好一

遺跡所在地：栗原郡高清水町観音沢

調査期間：昭和52年10月26日～昭和52年12月5日

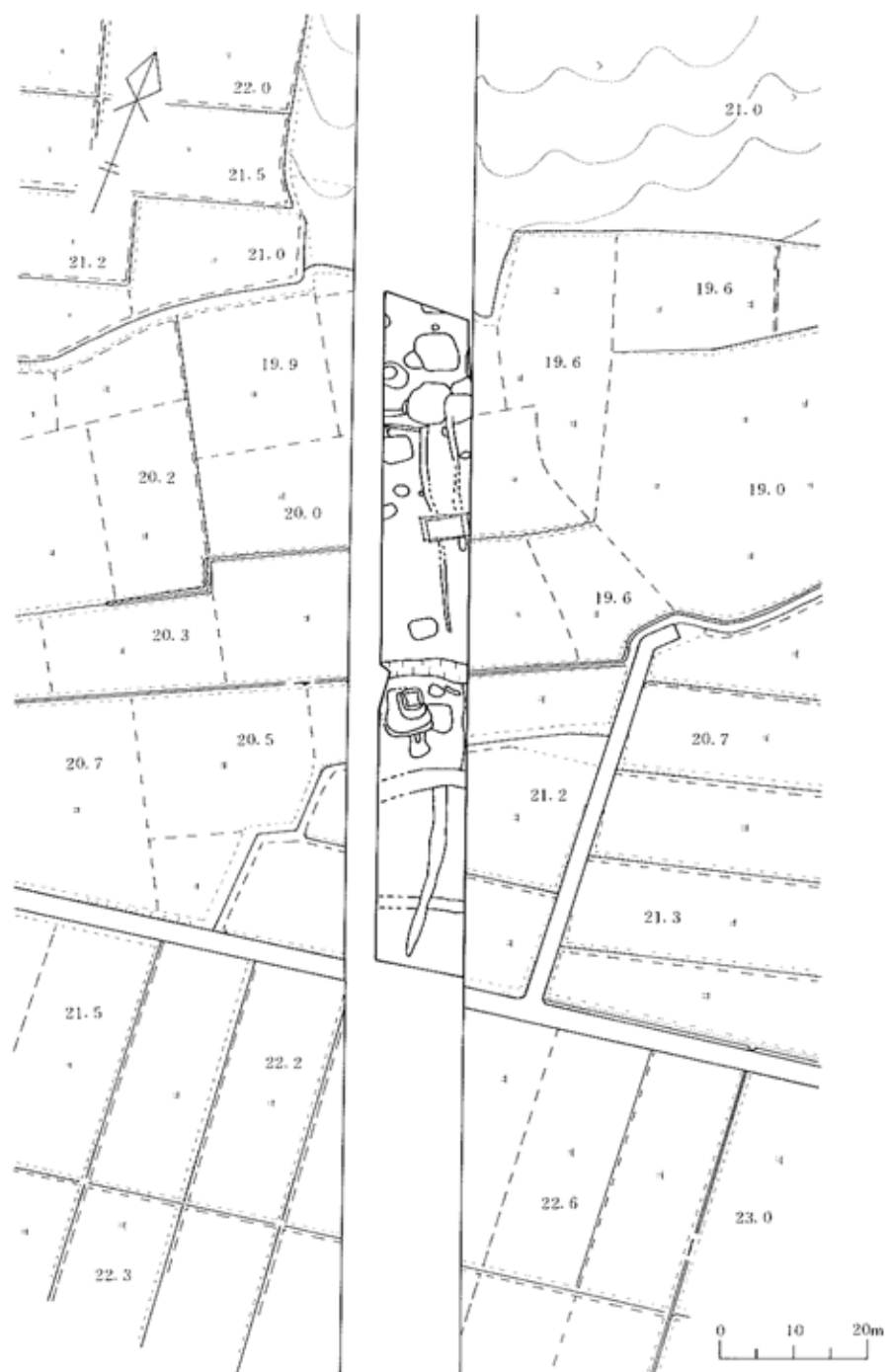
調査面積：約600 m²

発掘面積：約200 m²

遺跡記号：C F

遺跡番号：44019

調査協力機関：高清水町教育委員会



観音沢遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

観音沢遺跡は陸前高清水駅の南東約 1.5 km に位置している。奥羽山脈から派生した築館丘陵は高清水町南東部でなだらかな台地を形成している。それらの台地には開析された小さな沢が樹枝状に入り込んでいる。本遺跡は、それらの台地のひとつ、標高 23m の平坦面から南の沢にかけて立地している。遺跡の現状は、台地中央から斜面にかけては畑地、沢の部分は水田となっている。遺跡の周辺には中の茎遺跡、東館遺跡、新庄館跡、下折木遺跡をはじめ熊狩窯跡、山塚沢窯跡などが分布している。

2. 調査の概要

観音沢遺跡は今年の第 1 次調査で、台地中央部から南斜面にかけて古墳時代の集落跡や中世の土壌群が発見されている。この調査では、主として台地上にかかる部分を対象としたが検討の結果、遺構はさらに台地の南側の沢の部分におよぶことが推定されたため、今回の調査となった。調査の結果、土壌群、掘立柱建物跡、井戸跡が発見された。

土壌 18 基検出された。平面形は円形基調と方形基調の 2 つのタイプがあり、その規模はさまざまである。これらの堆積土中から中世陶器片、青磁片、曲物片、漆器椀、各種木製品や竹製品、骨片、種子などが出土している。

第 8 土壌：沢をへだてた南側丘陵の北斜面の末端で検出された。平面形はほぼ方形の竪穴式土壌で、東西約 3.3m、南北約 2.9m、深さ約 1.8m の規模をもつ。南辺をとり囲む状態で 3 つの段を伴っている。最上段の上端から北辺までの長さは約 6.9m である。土壌内四隅には、柄孔を有する丸木柱が 2 本ずつ計 8 本立っている。これらの丸木柱は四隅の底面に据えられているだけで、柱の柄孔を通した横木で連結させ固定している。北辺の両隅の柱は対角線上に配され南辺両隅の柱は壁面に沿って並列に据えられている。東・西・北各辺の横木は内側の柱に 1 本外側に 1 本と段違いに 2 重にわたされている。南辺の横木は 1 本だけである。外側の横木はすべて面取りされている。南辺の横木も面取りされており、その東寄りでは分厚い 3 枚の壁板を支えた状態で遺存していた。さらに壁板は掘り方の埋め土で裏込めをし固定されていた。このことから、他の 3 辺にも壁板がめぐらされていたものと考えられる。遺物は床面から刀と北宋銭が出土している。

掘立柱建物跡 2 棟検出された。規模は東西桁行柱間 4 間 (6.4m) × 梁行柱間 2 間 (3.1m) のものと、東西桁行柱間 3 間 (4.8m) × 梁行柱間 2 間 (3.1m) のものである。

井戸跡 2 基検出された。いずれも円形の掘り方をもつ。規模は直径約 2.1m、深さ約 1.8m である。堆積土中から中世陶器片、櫛、曲物片、漆器椀、各種木製品が出土している。

溝 8 本検出された。大半が上端 0.5~1m、深さ 0.2~0.5m の小規模なものである。そのなかには、上端 2.5m、深さ 1m と大規模のものがある。底面に近い堆積土は多量の砂及び小礫が

らなっている。底面は下刻浸蝕をうけた痕跡があり甌穴が確認された。このことから本溝は、多量の水が長期にわたって流れていたものと考えられる。砂礫を含む堆積土及び底面からは多量の中世陶器片と唐銭、北宋銭が出土している。

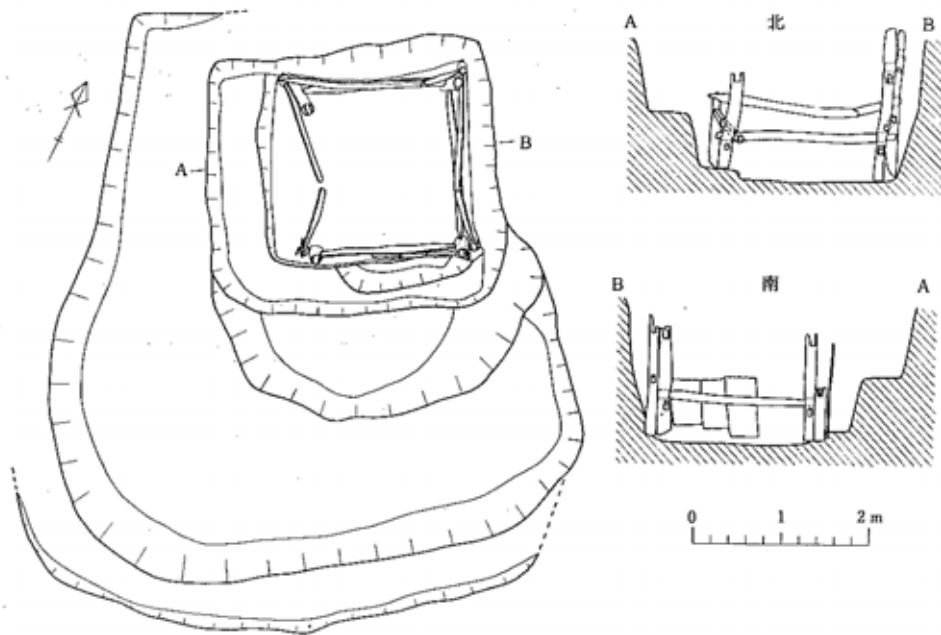
3. まとめ

観音沢遺跡は、検出された遺構と出土遺物から中世の集落跡と考えられる。

丸木柱の遺存する土壌の発見例は県内でははじめてのことであり、全国的にも類例は少なく、中世の建築史上貴重な資料の発見である。

発見された遺構の在り方や立地条件から、本遺跡は東西へさらに広がって大集落を構成するものと推定される。

(阿部博志)

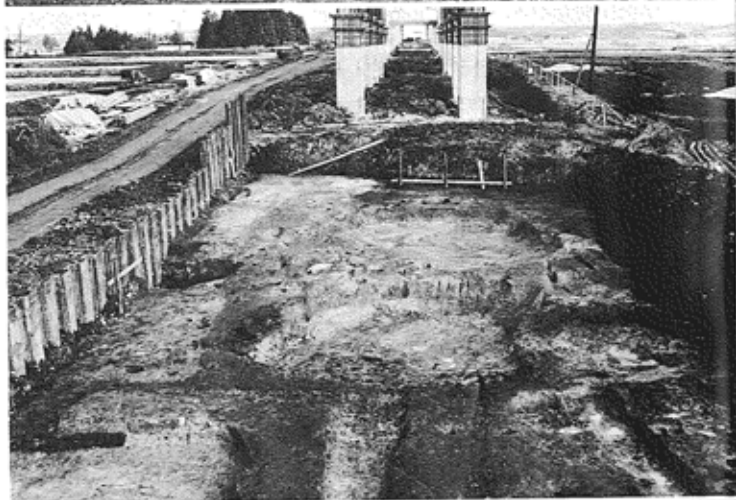


第8号土壌 平面図・側面図

観音沢遺跡発掘状況



遺構検出状況(土壇群)

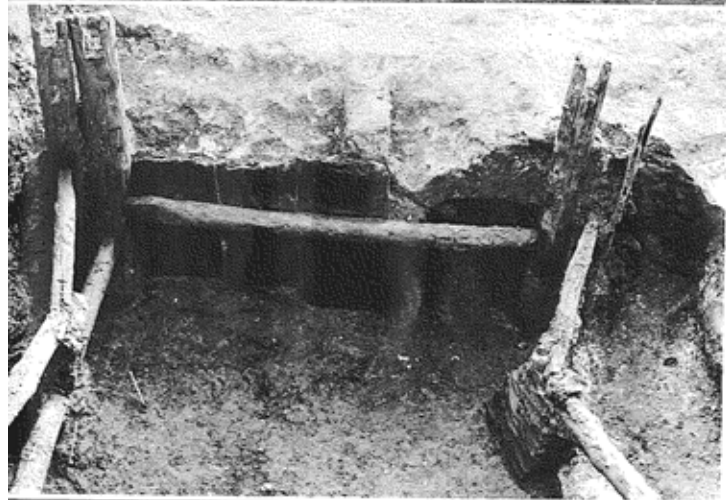


第6号土壇(東から)

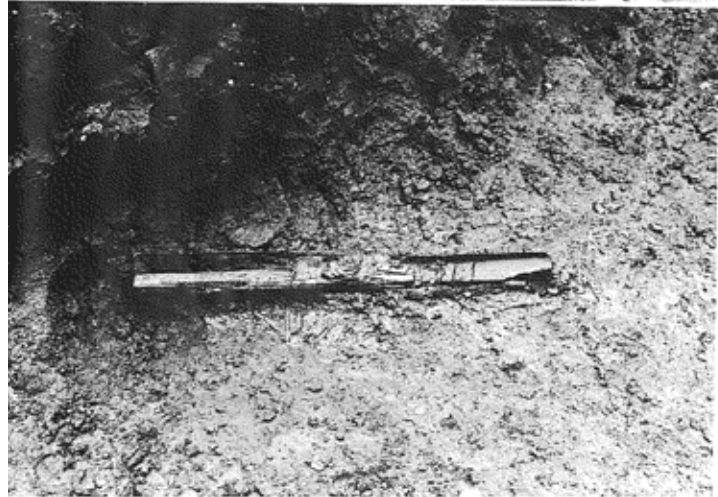




第8号土壇(南から)



第8号土壇南壁(北から)



第8号土壇遺物出土
状況(刀)

(3) 熊^{くま} 谷^や 遺跡

早坂春一・佐藤好一・真山 悟・阿部博志

遺跡所在地：栗原郡志波姫町熊谷

調査期間：昭和52年10月11日～昭和52年10月25日

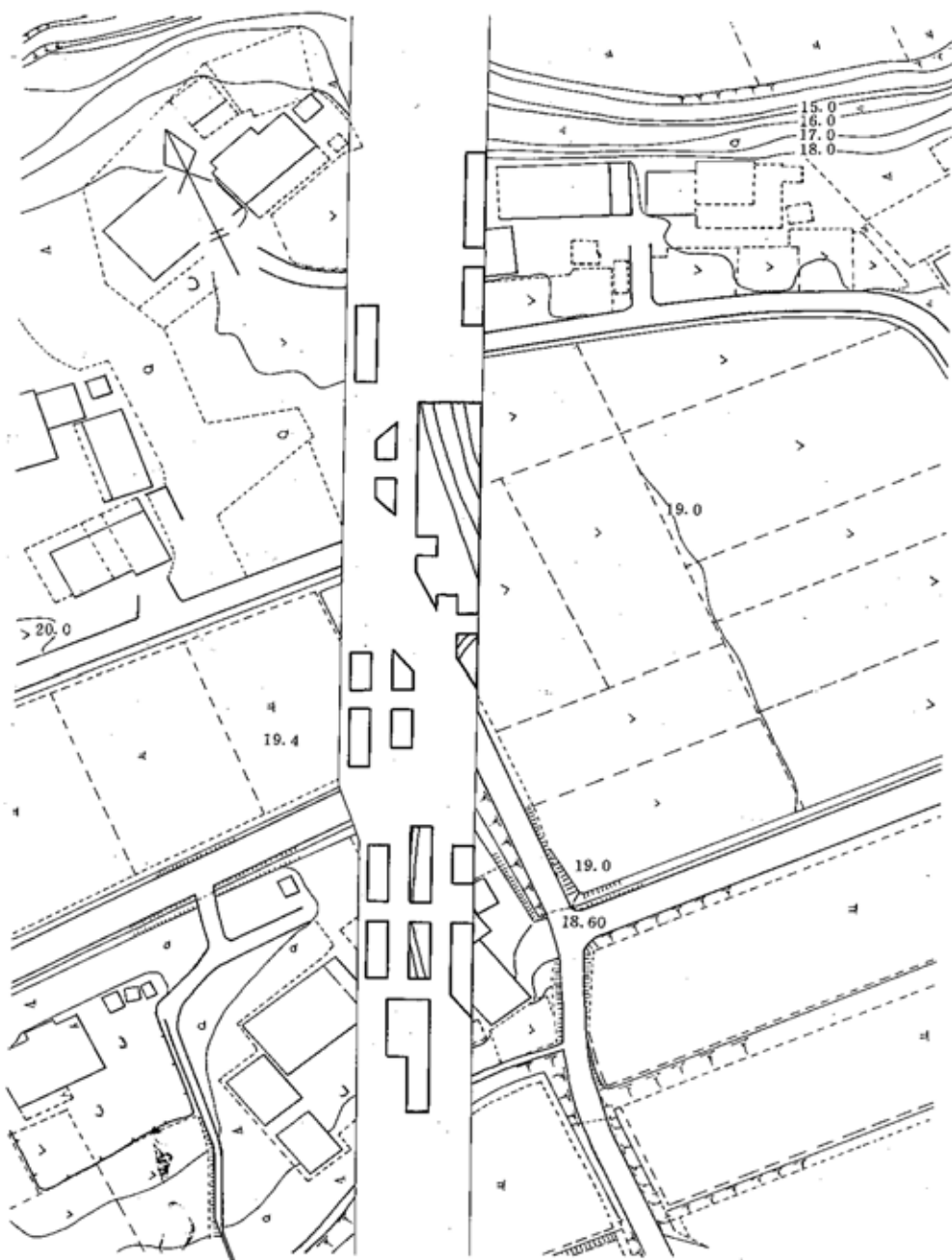
調査面積：約2700 m²

発掘面積：約750 m²

遺跡記号：C K

遺跡番号：49010

調査協力機関：志波姫町教育委員会



熊谷邊跨道構配置図

1. 遺跡の立地

熊谷遺跡は志波姫町役場から南へ約 1.1 km の地点にある。志波姫町の南部は標高 40m 前後の築館丘陵が東にのびており、北部は一迫川が東流し金成、若柳と境をなしている。丘陵と一迫川に囲まれた町の中央部一帯は標高 13～20m のなだらかな台地となって東へのびている。この台地上には、縄文時代から中世にかけて多くの遺跡が分布している。本遺跡はそのなかのひとつで台地の南よりに位置している。標高 19～20m で現在は水田や畑地になっており、付近から縄文土器の散布をみる。

2. 調査の概要

調査は新幹線路線敷にかかる畑地、水田、宅地など合わせて 2700 m² を対象にした。そのうち発掘面積は約 750 m² である。結果は次の通りである。

表土の下はすぐ地山となっており、表土から地山にかけて耕作による攪乱をうけていた。遺構は、調査区中央部で地山面から溝 2 本が検出された。ともに上端 1m、下端 0.3m、深さ 0.4 m の規模をもち、並行して南北に走る。堆積土中から土師器片数点出土しただけで、時期および性格は現在のところ不明である。遺物については土師器片少量のほか、縄文土器数点、石器数点がある。いずれも表土から出土したものである。

熊谷遺跡は、これまで縄文時代の遺跡として知られていたが、以上の調査結果および周囲の地形、遺物の散布状況などからみて、遺跡の主体は路線敷外にあるものと考えられる。

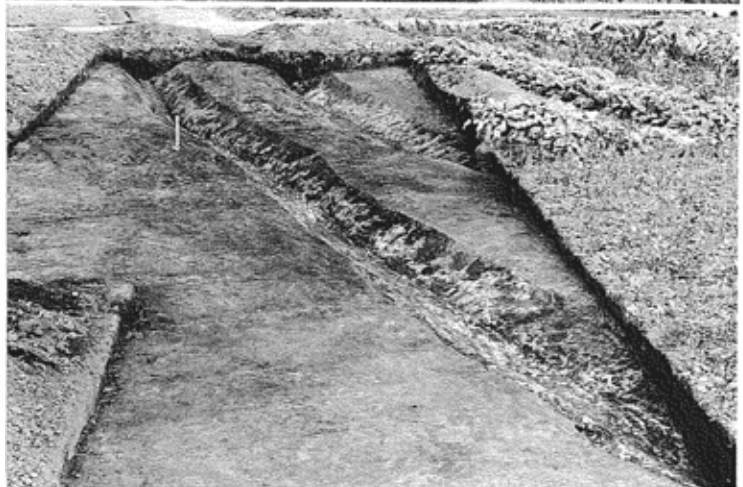
(真山 悟)



熊谷遺跡発掘状況
(南斜面)



発掘区南斜面
(北から)



発掘区中央部溝

(4) 大^{だい}門^{もん}遺跡

早坂春一・丹羽 茂・佐藤好一・真山 悟・阿部博志

遺跡所在地：栗原郡志波姫町大門

調査期間：昭和52年9月1日～昭和52年10月10日

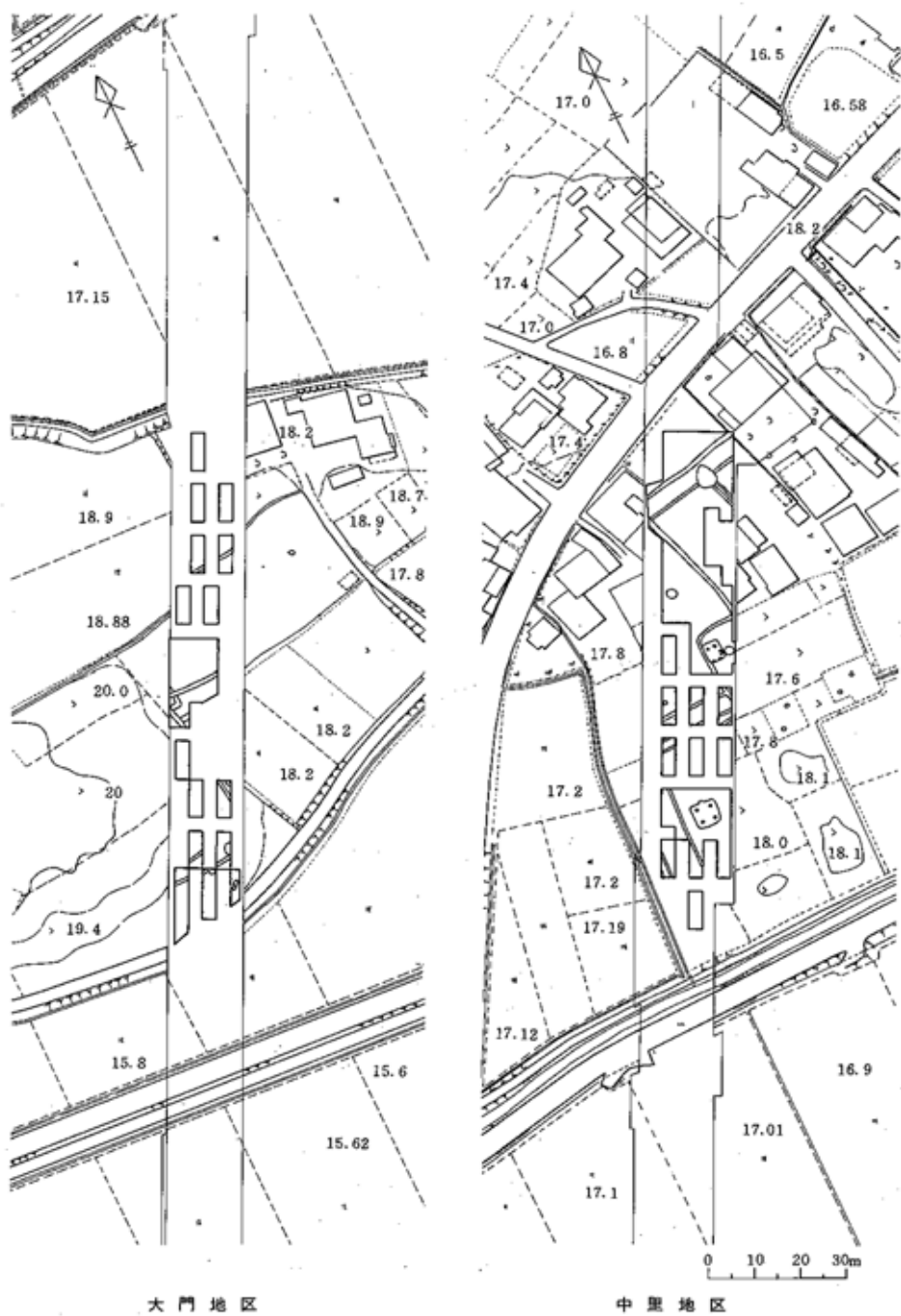
調査面積：約4500 m²

発掘面積：約2100 m²

遺跡記号：C L（大門地区） E Q（中里）

遺跡番号：49011

調査協力機関：志波姫町教育委員会



大門地区

中里地区

大門遺跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

大門遺跡は志波姫町役場から東へ約0.5km、県道志津川湯沢線の南側に位置している。築館から若柳にかけては東にのびるなだらかな台地となっている。遺跡はこの台地上に立地している。標高は約17～19mで一迫川が形成した沖積平野との比高は約5mである。現状は畑地、宅地になっている。

2. 調査の概要

調査区は中央部に水田をはさみ南の大門地区、北の中里地区に分かれている。調査は路線敷にかかる約4500㎡を対象とし、そのうち2100㎡を発掘した。その結果、中里地区で竪穴住居跡2軒、溝4本、井戸跡2基、大門地区で墓壇1基が発見された。

第1号住居跡 平面形は1辺約5.5mの方形である。柱穴は床面から4個検出された。周溝は伴わない。カマドは北壁中央部に付設されている。カマドの側壁は地山を削り出して構築されている。遺物は、堆積土中から土師器、須恵器が出土している。

第2号住居跡 平面形は長軸4.7m、短軸4mの南北にやや長い方形である。西壁が後世の溝によって切れ壁、床ともにこわされている。他の3辺はかなり保存がよく壁に沿って周溝が巡っている。柱穴は4個検出されたが、うち南側の2個が壁際によっているのが注目される。カマドは東壁にあり、壁に白色粘土をはりつけて側壁部を構築している。左側壁部の先端には強化のため須恵器が埋め込んである。燃焼部の奥壁から東にのびる煙道が確認されたが、後世の井戸によりその大半がこわされていた。遺物は、堆積土中および床面から土師器、須恵器、竹製品が出土している。

その他の遺構 北東から南西および北西から南東にのびる溝が4本検出された。上端約1m、下端約0.3m、深さ約0.3mの小規模なものである。いずれも平行あるいは直交するなどの規則性は認められるが、その時期や性格については不明である。井戸跡も時期については同様である。大門地区の墓壇は長軸1m、短軸0.7mの楕円形のプランをもち、深さは0.5mを測る。遺物は、堆積土中から人骨、キセル、六道銭が出土している。

3. まとめ

竪穴住居跡2軒が発見された。細部についてみると、カマドの構築方法や周溝の有無、柱穴の位置などの相違が認められるが、出土した遺物からみていずれも奈良時代に属するものと考えられる。溝および井戸跡については、ともに竪穴住居跡を切っており、それ以降のものと判明したが、時期や性格は不明である。墓壇の時期は出土遺物から近世に比定される。

以上のことから本遺跡は、奈良時代の集落跡が主体であると考えられる。また付近の地形や土器の散布状況から、遺跡の範囲はさらに東へ広がるものと推定される。

(真山 悟)



大門地区遠景(北から)



中里地区遠景(南から)



第2号住居跡(中里地区)

一般開發關係遺跡

(1) ^{ぬか}糠 ^{づか}塚 遺跡

志間泰治・小井川和夫・加藤道男

例 言

1. 本書は宮城県教育庁文化財保護室が担当して発掘調査を行った、宮城県栗原郡志波姫町所在：糠塚遺跡の調査内容とその成果を記したものである。
2. 発掘調査は昭和47年10月～同11月に実施し、また遺物整理作業は宮城県教育庁文化財保護課上愛子遺物収納所において昭和52年度に実施した。

発掘調査員ならびに発掘・整理作業に従事された方々は以下の通りである。

調査員

宮城県教育庁文化財保護室調査係 志間泰治 小井川和夫 加藤道男

発掘作業参加者（順不同、敬称略）

佐藤惣三 鈴木八郎 清和九十五 高橋文助 千葉繁 千葉徳男 中島勲 三浦隆男
佐々木かずえ 清和うしの 中島志ん 三浦まさえ

整理作業参加者（順不同、敬称略）

加藤豊治 庄子明 西沢理 石川小夜里 伊藤淳子 太田育子 尾上幸子 劍持みどり
興梠知里 小松佐和子 佐藤幸子 佐藤良子 佐藤博美 佐藤美智子 庄子君代
庄子サカエ 庄子スジイ 庄子貞子 庄子友子 庄子久代 庄子裕子 高橋李恵
田副純子 西沢純子 西沢直子 畑山優子 明星宣子

3. 本書の作成にあたっては東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所の協力を得た。
4. 本書の執筆・編集は文化財保護課職員の協議を得て、小井川和夫、手塚均が担当した。
5. 本遺跡の調査に関する諸記録および出土遺物は宮城県教育委員会において保管している。

昭和47年度宮城県教育庁文化財保護室職員名簿

室長	大場恒一	嘱託	丹羽茂
室長補佐	村上正		斎藤吉弘
調査係長	志間泰治		三浦圭介
技術主査	氏家和典		熊谷幹男
技師	藤沼邦彦		田中則和
	白鳥良一		遊佐二郎
	小井川和夫		加藤貞子
	佐藤庄一		橋本幸子
嘱託	佐々木安彦	補助員	菊地修子
	加藤道男		

．調査に至る経過

志波姫町糠塚地区においては古くから長者伝説も伝えられており、また地元の人達の記憶によると、かつては土器等も出土したという。しかし、それもそれほど話題にのぼることはなかったとみえて、遺跡台帳に登載されるまでには至っていなかった。

しかし、昭和 47 年秋、県営圃場整備事業志波姫地区の区画整理工事施工に伴い、付近の微小丘陵畑地の削平が行なわれた際、数多くの土器類とともに地山面において竪穴住居跡と考えられる黒色土の落ちこみも見い出されたことによって、遺跡として再発見された。たまたま現地を訪れた地元の考古学研究者佐藤信行氏によってこれらの遺物、遺構が確認され、その報によって、志波姫町教育委員会、同文化財保護委員会、県教育庁文化財保護室等が現地調査を行なった結果、奈良・平安時代の集落跡であるとの結論が得られた。

このため、工事は一時中断し、遺跡の保存について、宮城県農政部耕地課・築館土地改良事務所・県教委・町教委等、関係各機関において再三に亘り協議が重ねられた。しかし、当該事業は、昭和 41 年度から着手し、昭和 48 年度完成の見込みという、事業計画の終末期を迎えており設計変更等による現状保存は極めて困難な段階であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査の要項は下記の通りである。

遺 跡 名 糠塚遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：49012）
遺 跡 記 号 NK
所 在 地 宮城県栗原郡志波姫町北郷字糠塚
調査対象面積 約 6000 m²（発掘面積 6000 m²）
調査主体者 宮城県教育委員会
宮城県農政部
調査担当者 宮城県教育庁文化財保護室
調 査 期 間 昭和 47 年 10 月 18 日～同 11 月 26 日（実働 32 日）
調査協力者 佐藤信行
志波姫町教育委員会
調査補助員 清水 毅（東北学院大学学生）
門間俊彦（ " " ）
橋本博幸（ " " ）

．遺跡の位置と環境

糠塚遺跡は志波姫町北郷字糠塚に所在し、志波姫町役場より北東約3kmの地点に位置する。

遺跡の所在する志波姫町は、宮城県の北部、栗原郡の東北部にあたり、東西約9km、南北約4kmの東西に長い区画を有している^{注1)}（志波姫町：1976）。

また、地形的には、県北西部の奥羽山脈と、北東部の北上山地とにはさまれた扇状地性低地（迫川低地）にある。

さらに細かに町内の地形をみると、北部・中央部・南部と南北に三区別することができる。

町の中央部には、町北端で標高38mを最高に1kmに約2mの割合で傾斜しながら東へゆるやかにのびたほぼ平坦な台地がみられる。この台地は伊豆野原とよばれ、かつては草原台地であったが、現在はかなりの部分が水田化している。

町北部は、町の北端を画して東流する迫川によって形成された沖積地が、西部で標高22m、東部では標高13mというおだやかな傾斜をもって広がっており、ほとんどが水田として利用されている。

南部は、奥羽山脈からのびた築館丘陵の一部で、比較的起伏量の大きい丘陵が横たわり町の南限を画している。

総じて町内の地勢をみると、町内はおおむね平坦地で占められ、山丘起伏地の占める割合は町南部を中心に約30%にすぎない。

さて、中央部台地は、北縁部において、北部沖積地に向かって各所で舌状に突出しているが糠塚遺跡はこれらの突出した台地の一つ、町北東部の伊豆野付近で北へ突き出た台地上に立地している。台地はなだらかで、面積は約3～40,000m²、標高15～16m、沖積地水田部との比高は約3mである。

本遺跡周辺の遺跡には、縄文時代のものとしては竹の内遺跡、刈敷治郎遺跡（以上志波姫町）など、本遺跡とほぼ同時代と思われる奈良・平安時代の遺跡としては山の上遺跡、御駒堂遺跡、大門遺跡、荒町遺跡、狐塚遺跡（窠跡）、城内古墳（以上志波姫町）、佐野遺跡、姉齒横穴古墳群（以上金成町）などの多くの遺跡があり、また西方約6kmには伊治城^{注2)}（築館町）が知られている。その他には山王館、八幡館（以上志波姫町）、若柳城（若柳町）などの中世以降の城館跡がある。

このように、奈良・平安時代のものが多くを占めており、縄文時代の遺跡は少ない。しかし町南側には、伊豆沼、内沼などの湖沼地帯を立地条件として展開する迫川流域貝塚群など多くの縄文時代遺跡が存在していることを考慮すると、本遺跡周辺は、縄文時代においては、前記の湖沼地帯などに比して生活環境は良好でなかったことがうかがわれ、糠塚遺跡の立地する

わゆる伊豆野原における本格的な生活の展開は、奈良、平安時代の農業生産およびそれに伴う農耕集落を基盤にしているとも考えることができる。その点において、時代的・距離的に極めて近接している「伊治城」と本遺跡との関連性については看過しがたい点があると思われる。

注1) 以下、町内の地理・地形については志波姫町：1976に負うところが大きい。

注2) 神護景雲元(767)年に設置された(続日本紀10月の条)古代東北経営のための城柵の一つ。



1. 榎塚遺跡
2. 姉齒松古墳
3. 佐野遺跡
4. 大林城跡
5. 刈敷治郎遺跡
6. 山王館跡
7. 城内古墳
8. 福岡城跡
9. 若柳城跡
10. 柴の脇遺跡
11. 荒町遺跡
12. 竹内遺跡
13. 大門遺跡
14. 八幡館跡
15. 狐塚遺跡
16. 熊谷遺跡
17. 藤田館跡
18. 大畑遺跡

第1図 遺跡の位置

・ 調査の概要

糠塚遺跡の立地する台地は 3~40000 m²という広大なものであるが、遺跡として確認された時点においては、大部分がすでに整地工事が完了しており、遺跡の範囲をとらえることは困難であった。

しかし、その後、分布調査等によって、土師器、須恵器などの遺物が台地一円に散布していること、造成された水田畦畔や道路断面に住居跡と思われる落ちこみが多数認められること、工事中焼土が各所で認められたという地元の人達の記憶を総合すると、遺跡は台地全域に及ぶものと考えられ、古代の大集落跡の存在が予想される。

調査は、当初、工事実施途中の中央部西側の水田 4 枚 (12,000 m²) 120×100mの範囲を対象とした。

調査の進行に伴って、調査区西半はやや傾斜をもって沖積地水田面へ向かっていることが明らかとなった。そして、この部分は工事計画によれば盛土される部分であり遺構は削平を免れるため、対象区から除外し、削平を受ける東半部約 6000 m²について調査を行なった。

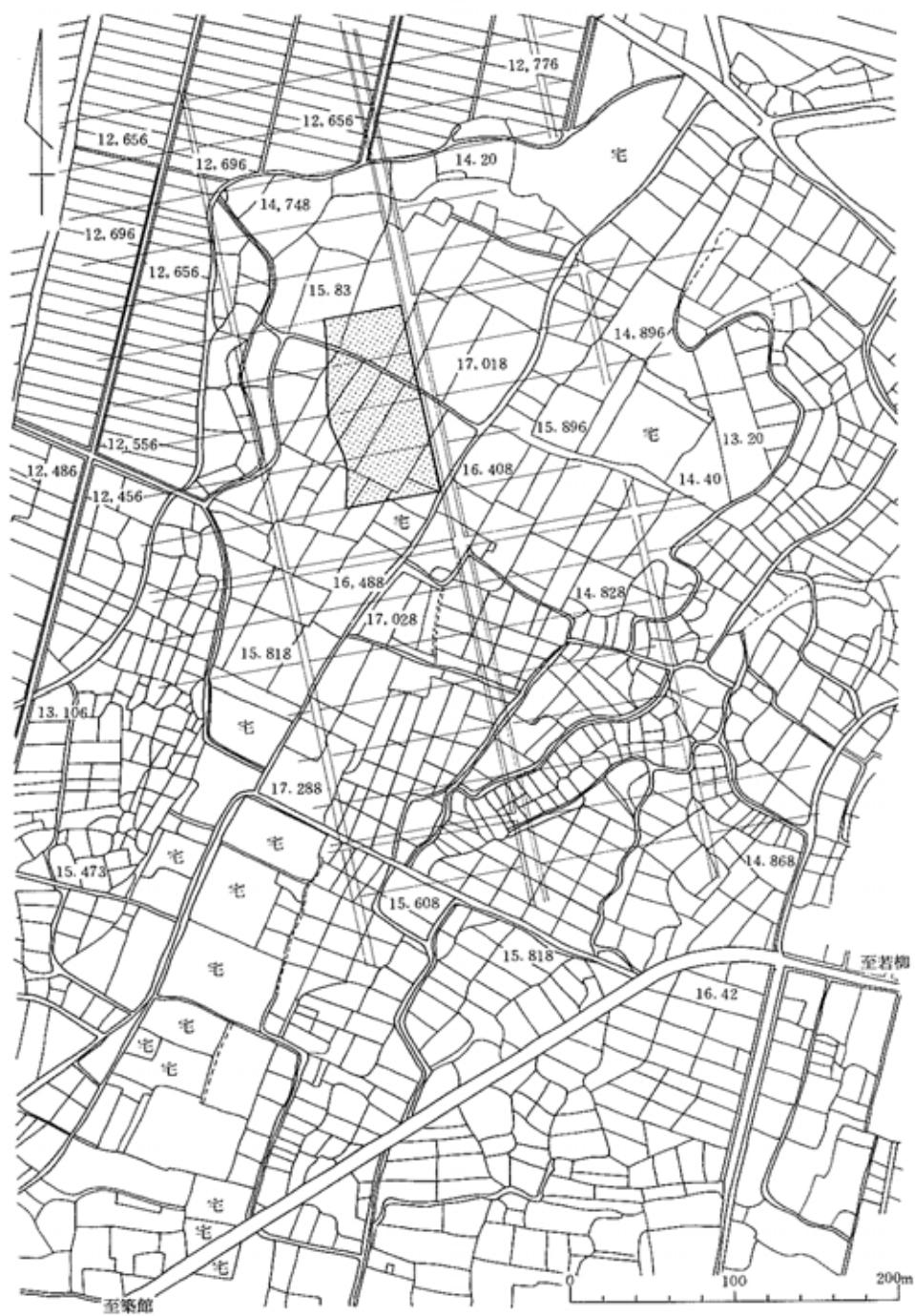
調査区の旧地形は北側へ向かってゆるく傾斜している。新水田の造成もその傾斜に合わせてつくられており南側水田が最も高く標高 16.1m、北部水田 2 枚が低く 15.6m、中央水田面が 15.9mである (第 2 図)。

工事によって覆土などはすべて移動されており、遺構はすべて地山面 (黄褐色粘土) において確認された。

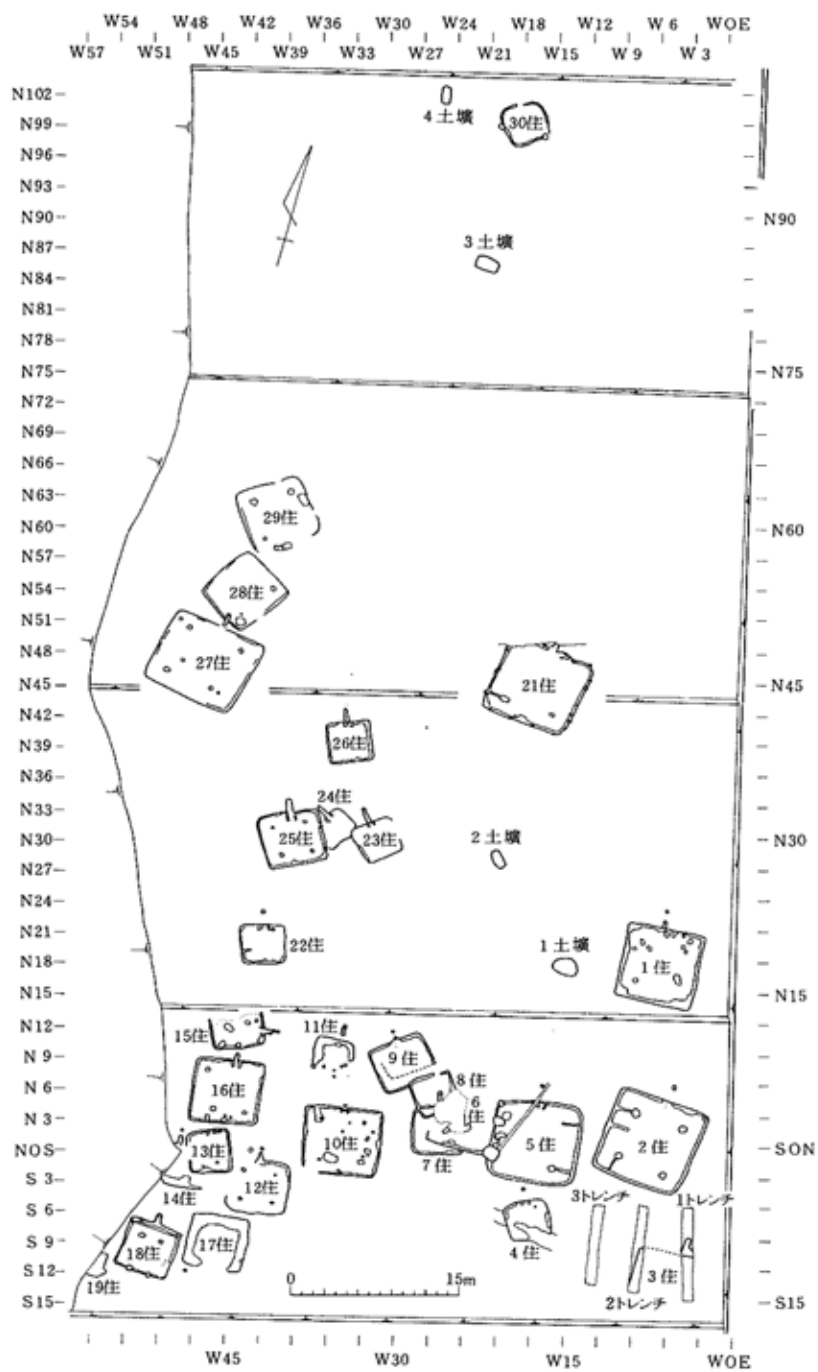
遺構の内訳は、竪穴住居跡 30・土塙 3・溝などである。それらは、調査区南部において密度が大きく (より削平が加えられていなかったことに起因すると思われる) またその数は、当初確認された数の 3 倍に達した (第 3 図)。

調査は昭和 47 年 10 月 18 日から同 11 月 26 日までの間、32 日間にわたって行なわれた。その間、南部の遺構精査が一応終了した 11 月 12 日には、町民・研究者などを対象に現地説明会が実施された。

なお、遺構が密集して検出された調査区南東部の一部は、調査終了後、町教委によって埋め戻しを行なって保存されており、今後、町の歴史資料として公開活用する計画がある。



第2図 周辺の地形 (区画整理工事施工以前の現況平面図)



第3図 遺構配置図

. 報告に際して

今回、糠塚遺跡発掘調査の報告を行なうにあたり、遺構、遺物の記述について前もって記しておく。

遺構についての前述にあたって最も障害となったのは、発掘調査と報告の間に5年余の空白があったことである。その間において、調査の精度、記録の方法は大きく向上し、それに伴って遺構に対する認識は、当時と比して格段のものがある。したがって現在の観点に立って本遺跡の遺構について考察を試みたとき、極めて不明確あるいは不正確な点が多い。

また、調査時において、調査遺構の保存の気運が生じたために、それに伴って遺構の現状をできるだけそこなわないという意図のもとに、住居床面下の掘り方や、カマドの構築方法、床面上で確認できなかった柱穴の追求などの点で、意識的に調査を行なわなかった部分もある。このことも、遺構に対する不明確さを増加させている。

次に、遺構と遺物の関係の記述についてであるが、これは調査時における遺物の取り上げに拠っている。遺物が、出土状況からみて、遺構の一部と考えられる場合は、その旨の記述を行なって取り上げた。また、遺構内堆積土と床面上の遺物はかなり厳密に区分して取り上げた。しかし、堆積土がほとんど失なわれていたもの、あるいは、薄くしか残存しなかつた遺構については不正確な部分がある。

堆積土出土の遺物は、冬期を控えた調査期間の関係から、一括して取り上げざるを得なかったが、このことによって、遺構廃絶後の状況の考察はほとんど行ない得なかった。

出土遺物については、洩れなく集録してある。最も量の多い、土器については、実測可能なものは本文中に図示し、その他の破片類は、器形、部位、器面調整などによって分類し、末尾に一括した。また、土器に関する記述のうち、器面調整技法の用語、定義は「岩切鴻ノ巣遺跡」発掘調査報告書（宮城県教委：1974）の際のものと同様である。

上記のように、本報告書の内容は、遺構と遺物に対する記録、観察に不均衡を生じており、殊に遺構について欠落が各所にみとめられるものになったことを反省している。

なお、本遺跡の調査内容に関しては、すでに若干の紹介が行なわれている（宮城県教委・志波姫町教委：1972、小井川：1974、宮城県教委：1973b）が、本報告書の記載内容がそれらに優先するものである。

．発見された遺構と遺物

1．竪穴住居跡とその出土遺物

第1号住居跡（第4図）

〔遺構の確認、重複〕 中位水田面東側部分において検出された。

〔平面形、規模〕 平面形はややゆがんだ方形で、長軸約7.2m、短軸約6.8mである。

〔壁〕 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁の高さは南辺部で約35cm、最も削平を加えられた北側でも10cmほどである。北辺中央から住居内部にのびる削平工事による溝によって住居の一部はこわされているが、比較的遺存状態の良好な住居跡である。

〔床〕 地山を床としている。ほぼ平坦で極めてかたく、床面上には厚さ1~4cmほどの生活層と考えられる黒褐色土がうすく堆積している。

〔柱穴〕 床面上にはいくつかのピットが検出されたが、そのうち配置の規則性、深さ等からみてほぼ対角線上の位置にあたるピット5・6・9・10の4個が柱穴と考えられる。

〔周溝〕 周溝はカマドのとりつく北辺中央部を除き認められる。断面はU字形で各辺においては住居壁に沿い、底面幅約10~15cm、床面からの深さ20cm前後とほぼ一定している。しかし各隅においては住居壁よりも丸味をおびて連続するため幅が広がっている。この部分が後に述べる住居掘り方の部分にあたるのか、周溝そのものであるのかは調査時点において確認することはできなかった。また、第2カマド部分では途切れるが、第1カマド部分には及んでいる。さらに、第1カマド燃焼部と考えられる焼面を切っていることから第1カマドの使用を中止したのち、周溝を延長した可能性がある。

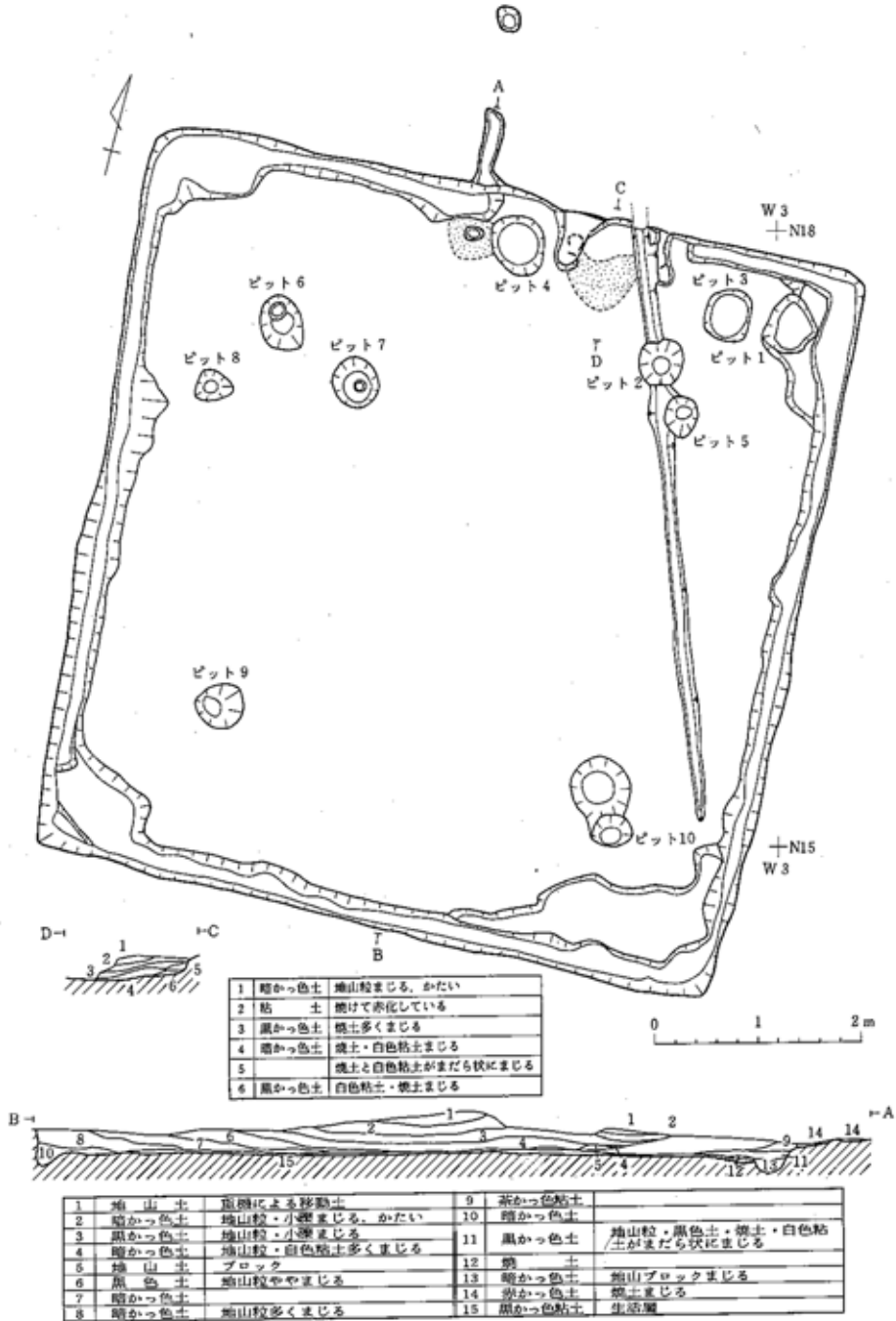
〔カマド〕 北辺にとりつけられて2基発見された。

第1カマド 北辺ほぼ中央に位置し燃焼部・煙道部、煙出し部が認められた。燃焼部底面は径約50cmの範囲で焼けている。中央部が凹んでおり、床面から最深部で約5cm低い。中央部には支脚をすえるためと思われる小ピットがある。焼面は住居周溝およびピット4により切られている。煙道、煙出し部はかなり削平を加えられており、煙道部は深さ2~3cm、長さ約70cmほどが残存しているにすぎない。煙道、煙出し部を基本とした軸の方向はN-3°-Wである。

第2カマド 第1カマドの東側にある。煙道、煙出し部は削平のため失なわれており、燃焼部のみが残存している。側壁は右側壁に2個、左側壁に3個の土師器甕形土器を芯として使用

第1号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ (cm)	12	24	18	15	62	56	39	11	51	37



第4図 第1号住居跡

し粘土によって構築されている。天井部は崩れておりそれと思われる粘土が燃焼部内に堆積していた。なお、右側壁は削平工事に伴う溝により一部破壊されている。底面には 50×60 cmほどの範囲で焼面がみられ、この焼面はややくぼんでおり最深部において床面より約 8 cm 低い。第 1 カマドと第 2 カマドの関係については、第 1 カマドには側壁が残存せず、また燃焼部底面が周溝や他のピットによって切られていることから、第 1 カマドから第 2 カマドへとカマドのつくりかえが行なわれたものと考えられる。

【その他の施設】 第 2 カマド周辺に 3 個のピットが認められる（ピット 2・3・4）。

いずれも堆積土中には、焼土、木炭等が多量に認められ、カマドに関係する施設とも考えられる。また、ピット 4 は第 1 カマド底面を切っていることから、第 2 カマドに伴うものと思われる。床面上において認められた他のピットには性格が明らかでない。

【出土遺物】 本住居に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用していた土器、及びカマド内、周溝内、住居に伴うピット内、床面上出土の土器などがある。正しくは、カマド側壁に使用していた土器は住居使用時、その他のものは住居使用時若しくは廃絶時を示すものと考えられるが、極めて近接した時期と考えられるので一括して住居に伴う遺物として取り扱う。このことは以下に述べる各住居跡においても同様である。

土師器

坏（第 6 図 1） 製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切手法である。体部下端は回転ヘラケズリ技法によって再調整が加えられている。

高台付坏（第 6 図 2・3） いずれもロクロ使用で内黒である。底部の切り離しは台部接合の際の調整によって消されており不明である。第 6 図 3 は体部下端に回転ヘラケズリによる再調整が施されている。台部は欠損しており、台部接合のための沈線状の切りこみがみられる。

甕 製作の際ロクロを使用するもの（第 5 図）と、使用しないもの（第 6 図 12、第 7 図）との二者がある。

ロクロ使用のものには口径が器高よりも大きいもの（第 5 図 2・3）と、器高が口径よりも大きいもの（第 5 図 1）がある。いずれも口縁部は外傾し、3 では口縁帯はシャープにつくりだされている。頸部には体部と区画する段落などはみられない。底部については明らかでないが底部のみの破片では底面に回転糸切痕のみられるものがある（第 5 図 4）。内外面ともロクロ調整であるが、2・3 では外面体下半部に、ロクロ調整のちヘラケズリが加えられている。なお、1 には体部外面に二次的になでつけたと思われる粘土の付着が認められる。

ロクロ不使用のものはいずれも器高が口径よりも大きい長胴形のものである。頸部に段がみられ体部と区画されている。口縁部は外傾ないし外反し、端部は丸くおさまるものと平坦なも

のがある。第6図12では端部が幾分外方に折れ曲がっている。底部は資料が少ないが、第7図1では外縁は張り出し底面には木葉痕がみられる。

器面調整は、口縁部は内外面ともヨコナデが施され、ヨコナデの下に刷毛目のみられるものもある。体部外面は最終調整がヘラケズリのもの(第7図2)、軽いケズリ^{注1)}のもの(第6図12・第7図1・3)とがあり、そのいづれにも前段階の刷毛目が残っている。体部内面は刷毛目のもの(第6図12・第7図2)とヘラナデ(第7図1・3・4)のものとのがある。

須恵器

坏 底部に回転系切痕を残し、再調整は加えられていない(第6図4)。他に小片のため図化できなかったがカマド内からヘラ切り痕を有する底部が出土している。

高台付坏 底部のみの破片である。底部にはヘラ切り痕がみられ、その後回転ヘラケズリが加えられている(第6図5)。

蓋 低い宝珠形のつまみを有するものである。天井部には回転ヘラケズリが加えられている。なお、内面には研磨痕がみとめられ、硯に転用している(第6図6)。

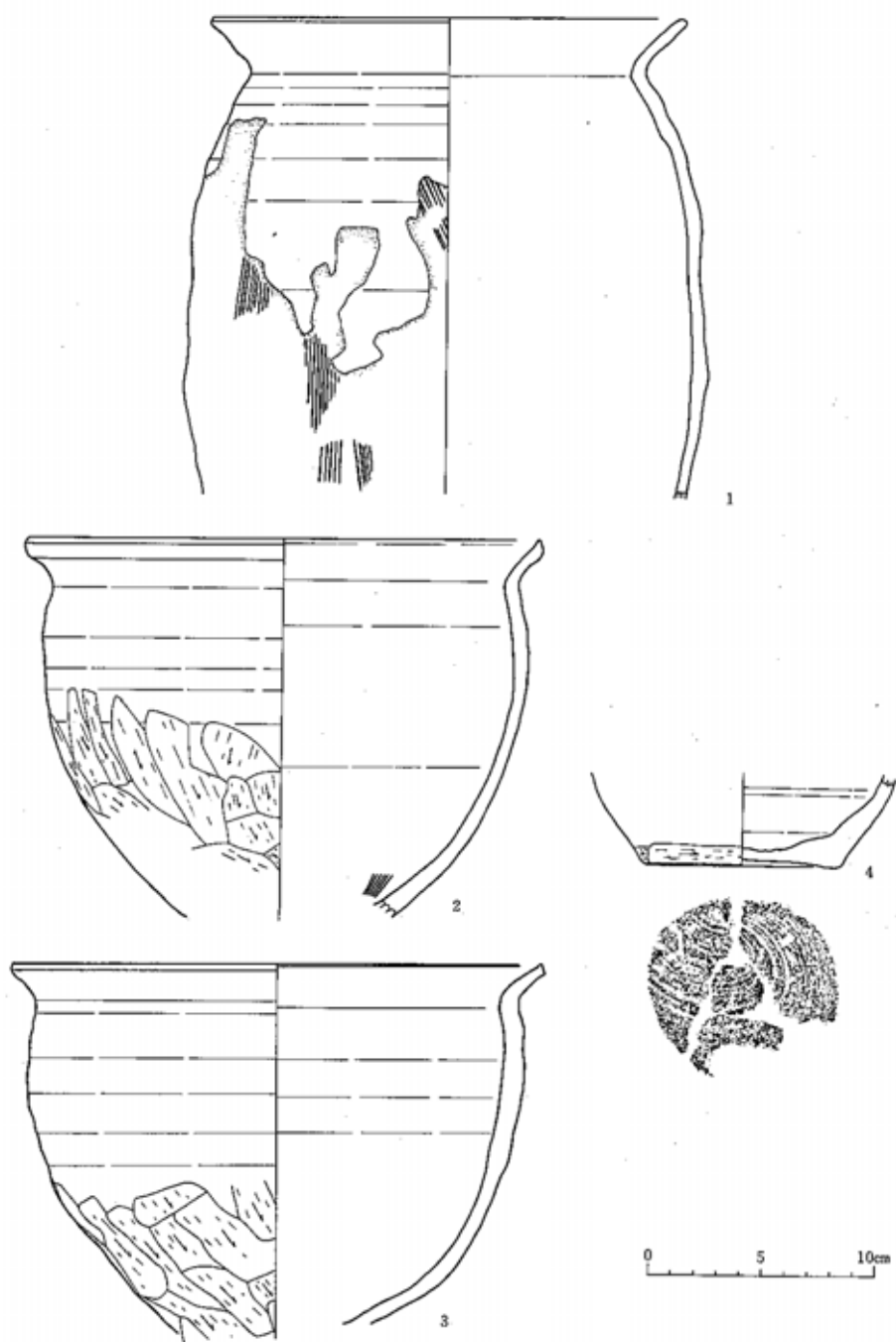
赤焼土器

坏 (第6図7~10) 体部から直線的に外傾するものと口縁部でやや外反するものとのがある。いずれも回転系切り手法による切り離しで再調整はない。色調は赤褐色で火ダスキ、黒斑などはみとめられない。底部に焼きひづみのあるものもある。胎土には径2~3mmほどの大形砂粒を多く含み、須恵器坏の胎土とは明らかに異なっている。

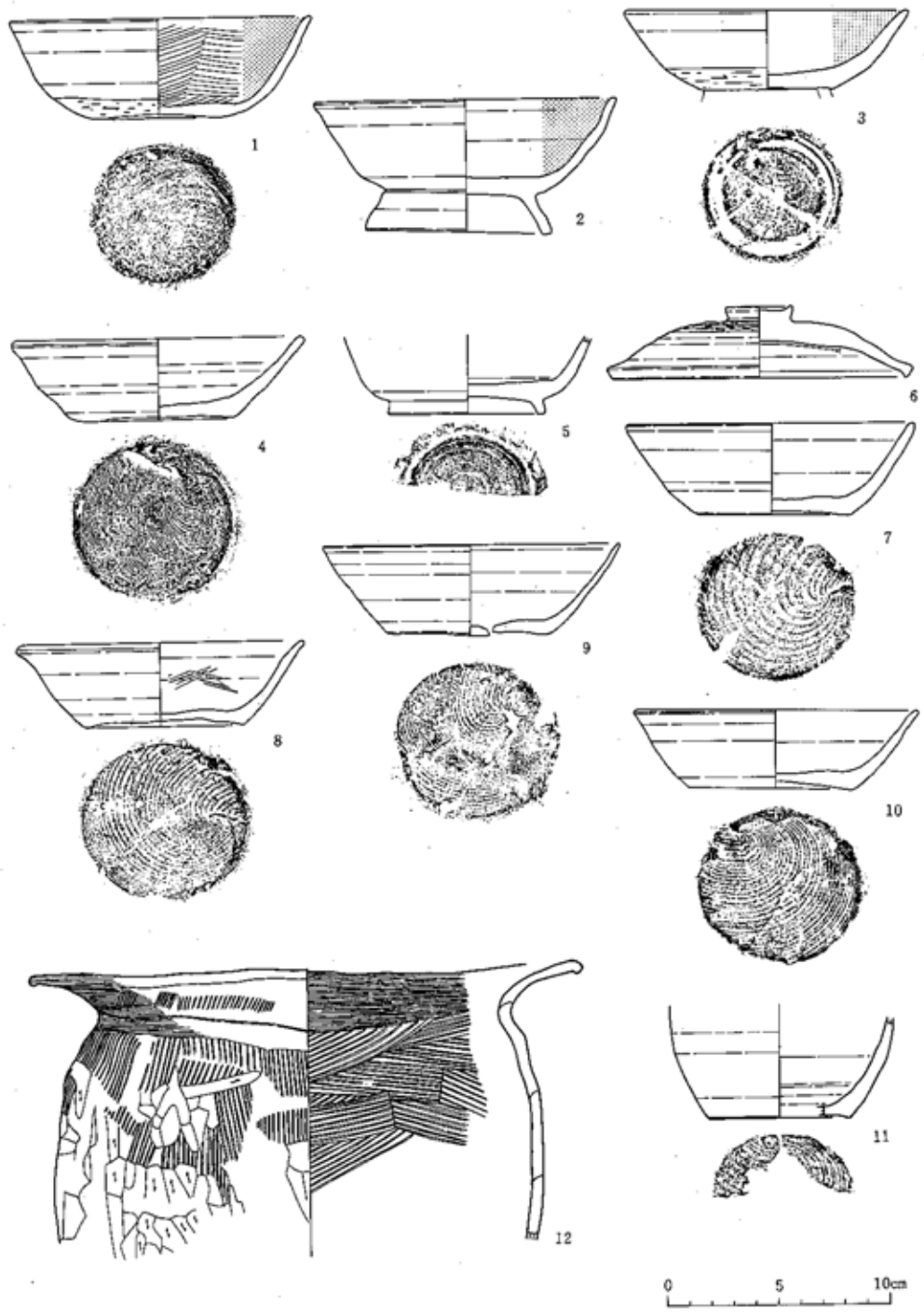
甕 (第6図11) 底部のみが出土している。回転系切りによる切り離しで再調整はない。

注)「軽いケズリ」

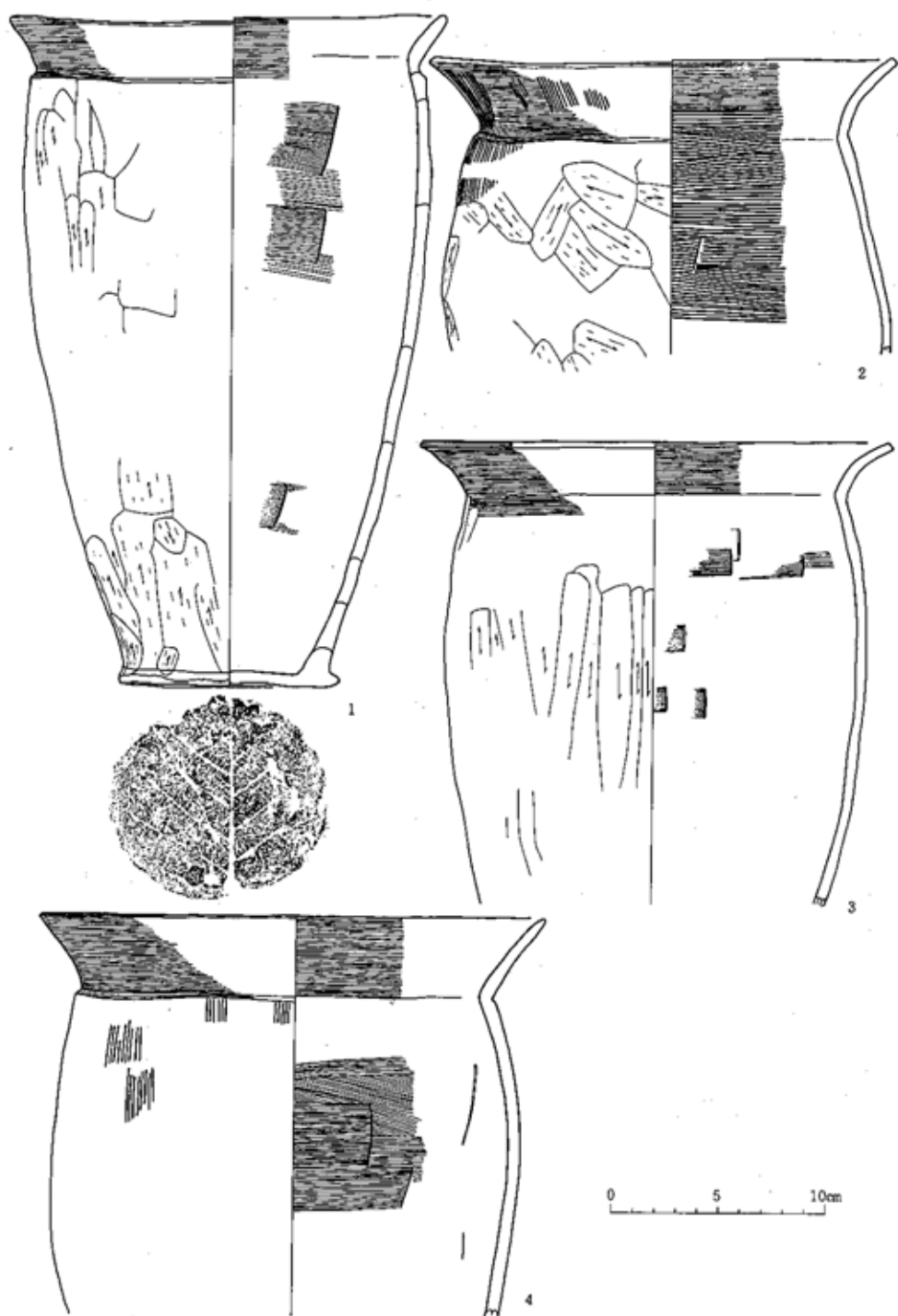
主に土師器甕体部外面に施される調整技法である。痕跡は細長い平滑面として認められ、上下方向に長いものが大多数である。ヘラケズリや刷毛目と重複する部分ではそれらをおおって施されており、ヘラミガキと同様仕上げ段階の器面調整技法と考えられる。しかし、ヘラミガキに比べると、痕跡は巾広で長く、またヘラミガキほど丁寧なものでないため細かいスジや砂粒の移動が若干認められる。なお同一土器においてもヘラミガキおよびヘラケズリに近似した部分を生ずることがあるが、これは胎土の乾燥度の違いによるものと考えられる。(図版26-9)



第5図 第1号住居跡出土遺物



第6图 第1号住居跡出土遺物



第7图 第1号住居跡出土遺物

第2住居跡（第9図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面東側において確認された。

【平面形、規模】 長軸8.3m、短軸8.1mの隅丸方形である。

【壁】 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、かたくてしっかりしている。残存壁高は6～30cmで南西隅が最も削られており低い。

【床】 全体的には地山を床としているが、低い部分には幾分よごれたところもみられ、他の土を貼っている部分もあると思われる。カマド部分を除いてかたく、部分的に凹凸があるが、ほぼ平坦である。

【柱穴】 住居内に数個のピットがみとめられたが、対角線上に位置するピット1・2・8・9が柱穴と考えられる。堆積土上部には柱の一部と思われる炭化材片が遺存しているものもあった。

【周溝】 カマド部分を除き全周している。底面はややU字形で幅10～20cm、床からの深さ10～20cmほどである。また、底面には大・小のピットがみられ、南辺において特に多い。

【カマド】 北辺中央部にみとめられた。燃烧部側壁は削平及び崩壊のために残っていないが左側壁にあたる部分に土師器甕口縁部が倒位の状態で検出された。床面に接する部分では粘土が固められたように付着しており、側壁の芯、または前端のオサエとして使用されていたものと考えられる。燃烧部底面には70×70cmの範囲で焼け面がみとめられた。煙道部は残存していない。住居跡より約1.5m離れて煙出し部と思われるピットが検出された。軸方向はN-14°-Eと考えられる。

【その他の施設】 柱穴と考えられるピット1から西辺周溝へ、ピット8から南辺周溝へ幅10cmほどの溝がのびている。底面はほぼ水平で床面からの深さは前者が約10cm、後者が約5cmである。また、同様の溝は西辺周溝中央から住居内部へ約1.1mの長さでのびている。底面は周溝側へ幾分傾斜している。深さは4～10cmである。

【出土遺物】 本住居に伴うと考えられる遺物は、カマド側壁に使用したと思われる土師器甕及び、カマド内、床面上出土の土器などである。

土師器

坏 底部が丸底のもの（第8図1）と平底のもの（第8図2・3）とがある。体下部外面に微かな段がみとめられるもの（第8図1・2）と沈線のめぐるもの（第8図3）とがある。器面調整は第8図1は段以上がヘラミガキ、以下がヘラケズリであり、第8図2は段以上がヘラミガキ、段以下はヘラケズリののちヘラミガキが加えられている。第8図3では底外面を含めて全

第2号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
深さ (cm)	51	53	24	28	18	51	12	50	17	9	30	15	3	15	35

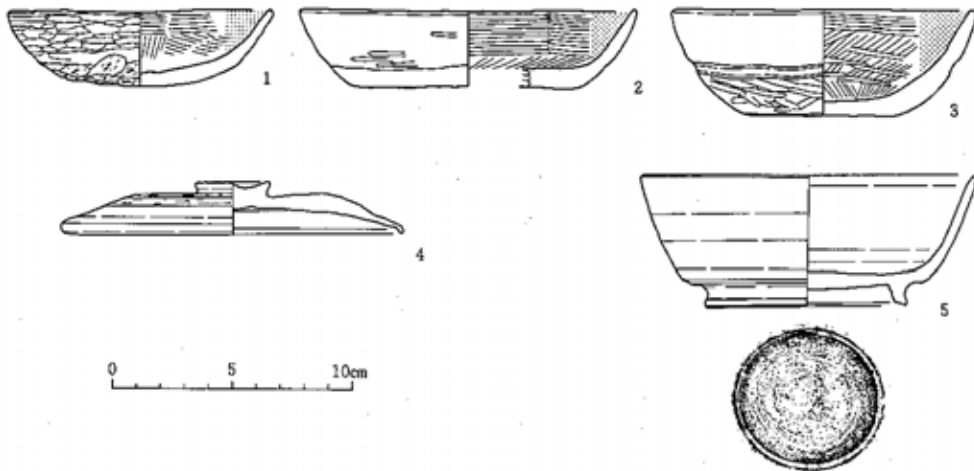
面にヘラミガキが施されている。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が加えられている。

甕 器高が口径よりも大きい長胴形のもの(第10図1・2・5)と、口径の方が大きいもの(第10図3)とがある。後者は小形のものである。いずれも頸部に段又は沈線が巡らされ体部と区画されており、口縁部は外反ないし外傾する。器面調整は口縁部内外面にヨコナデがみられ、体部は第10図1・5は外面が軽いケズリ、内面ヘラナデ、第10図1・2は内外面とも刷毛目である。第10図3では外面に横方向のヘラケズリが加えられている。第10図4は小片のため全体の器形は明らかでない。頸部には指でおさえたかのような凹帯がめぐっている。また、頸部内面にはヘラミガキ(?)が施されている。

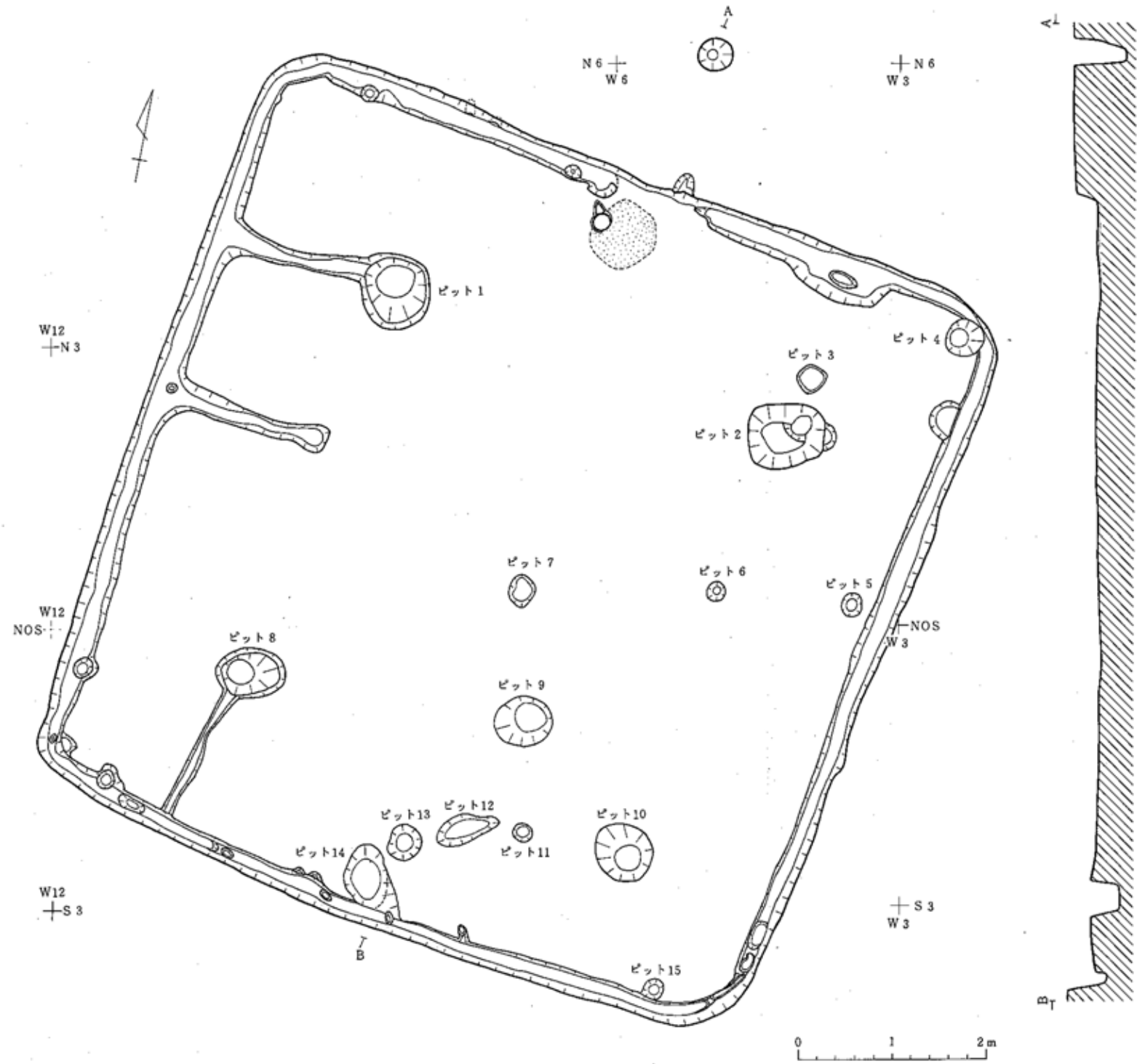
須恵器

高台付坏(第8図5) 短い台部がつけられており、端部は削がれたように内側に傾斜している。底部にヘラ切り痕がみられる。

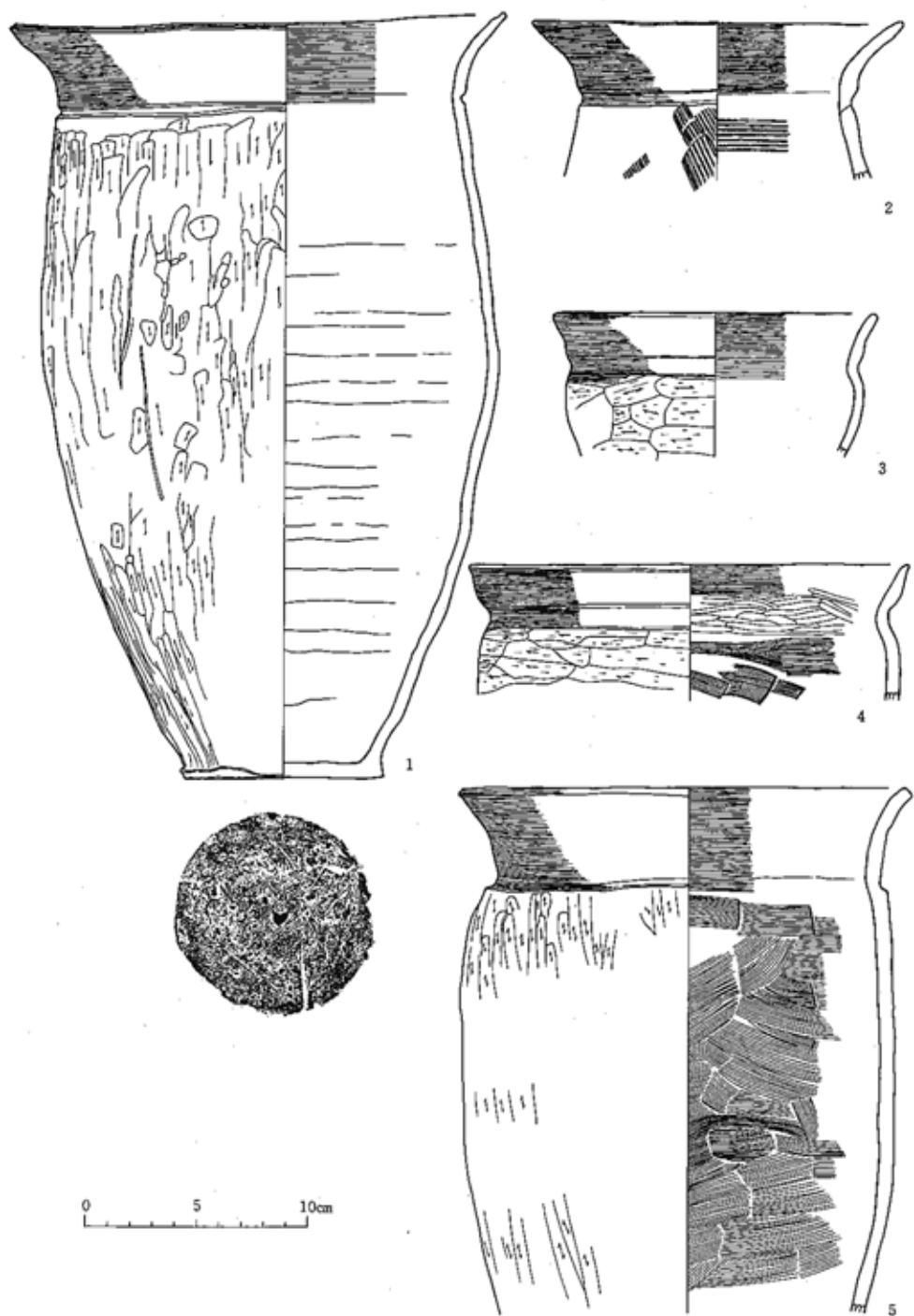
蓋(第8図4) 低平な器形であり、つまみも低い。天井部に回転ヘラケズリが加えられている。



第8図 第2号住居跡出土遺物



第9図 第2号住居跡



第10图 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡（第11図）

【遺構の確認、重複】 上位水田部南東隅において検出された。この部分は覆土が厚く残っており、このため小トレンチを設定して遺構確認を行なった結果明らかとなった住居跡である。開田工事による削平は住居跡まで及ばないため、遺構確認後埋め戻した。このため、その内容については明らかでない部分が多い。西辺・北辺の一部及びカマドが検出された。

【平面形、規模】 ほぼ方形を示すと思われる。規模は明らかでない。

【壁】 壁は西辺部分のみの観察によると地山を壁とし、しっかりしており残存壁高 30～60 cmと保存状態はよい。

【床】 地山を床としており平坦である。たたきしめられたようにかたい。住居中央部では、床面上に厚さ 1～2 cmの生活層と考えられる粘土層がみとめられた。

【周溝】 西辺に沿い、また北辺のカマドを除いた部分にみとめられる。北西隅においても途切れる。底面幅 5～10 cm、床面からの深さ 10 cm程度であった。

【カマド】 北辺においてみとめられた。調査を行なったのは、煙道・煙出し部と燃焼部右側のみである。煙道の一部及び右壁部分は、後世の攪乱により乱されており、攪乱は燃焼部底面まで及んでいる。燃焼部の痕跡は、焼面として観察されたのみである。燃焼部から煙出し部への移行部分には、高さ約 4 cmほどの段がある。煙道部は底面幅約 20 cmで、煙出し部までの長さは約 80 cmである。煙出し部には径 25 cmのピットが掘りこまれており、煙道底面より 30 cmほど深い。なお、煙道部、煙出し部とも使用壁面の外側に厚さ約 5～10 cmで白色粘土を貼りつけて構築されている。軸方向は N - 3° - E である。

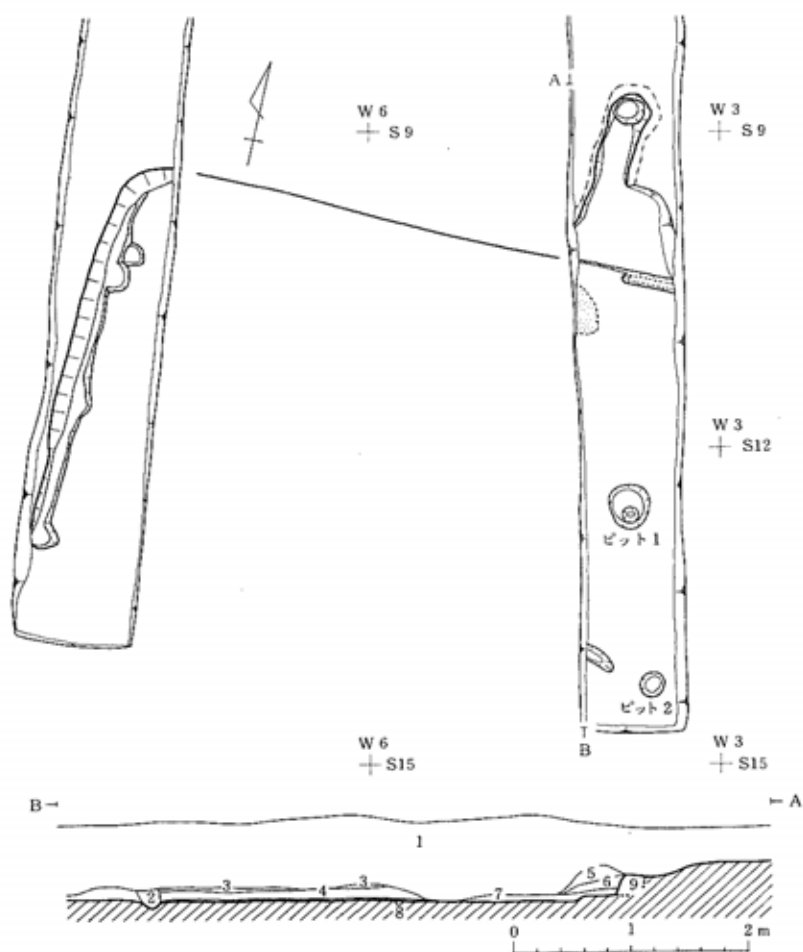
【出土遺物】 出土遺物の量は極めて少なく、本住居に伴うと考えられる遺物は、床面上出土の土師器甕のみである。

土師器

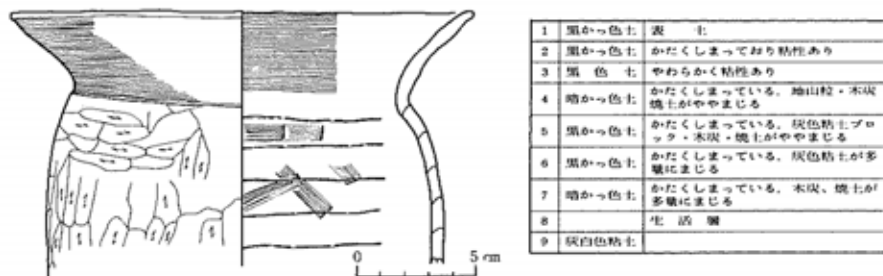
甕（第12図） 長胴形の甕で頸部に沈線状の幅広いくぼみが巡り、口縁部はやや外反する。器面調整は口縁部内外ともヨコナデである。体部外面は軽いケズリが加えられており、上部は横方向、下部は縦方向である。内面はヘラナデである。また、体部には 1.5 cmほどの積上痕跡が明瞭にみとめられる。

第3号住居跡ピット

No	1	2
深さ (cm)	10	17



第11図 第3号住居跡



1	黒っぽい色土	表土
2	黒っぽい色土	かたくしまっており粘性あり
3	黒色土	やわらかく粘性あり
4	暗っぽい色土	かたくしまっている。地山粒・木炭・焼土がややまじる
5	黒っぽい色土	かたくしまっている。灰色粘土ブロック・木炭・焼土がややまじる
6	黒っぽい色土	かたくしまっている。灰色粘土が多量にまじる
7	暗っぽい色土	かたくしまっている。木炭、焼土が多量にまじる
8		生活層
9	灰白色粘土	

第12図 第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡（第13図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面南側で確認された。住居跡を西から東へ横切る第1号溝によって切られており、溝底面は一部住居床面下へ及んでいる。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形で長軸3.7m、短軸3.5mの規模である。

【壁】 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、しっかりしている。残存壁高は北西部で最も高く37cm、南西部では26cmである。

【床】 地山をそのまま床としており、固くしっかりしている。ほぼ平坦で、周縁部が幾分高い。中央部には厚さ1~3cmの生活層がみとめられた。

【柱穴】 床面上において柱穴と考えられるピットは発見されなかった。

【周溝】 北西隅、東辺、南辺の一部にみとめられた。幅10~20cm、深さ7~10cmのものであるが、かなり部分的なものであり、形態も一定していないため周溝といえるかどうかは疑問である。

【カマド】 北辺中央部にとりつけられている。燃烧部は左右側壁が残存していた。粘土構築である。天井部は崩落してカマド内に堆積していた。底面には30×30cmほどの範囲の焼面がみとめられた。燃烧部から煙道部へは、2~3cmの段をもって移行している。煙道部は地山掘り抜きのもので長さ約60cmほどあり、煙道底面は煙出し部へ向って傾斜している。煙出し部には煙道底面より約30cm深いピットがほりこまれている。軸方向はN-22°-Wである。

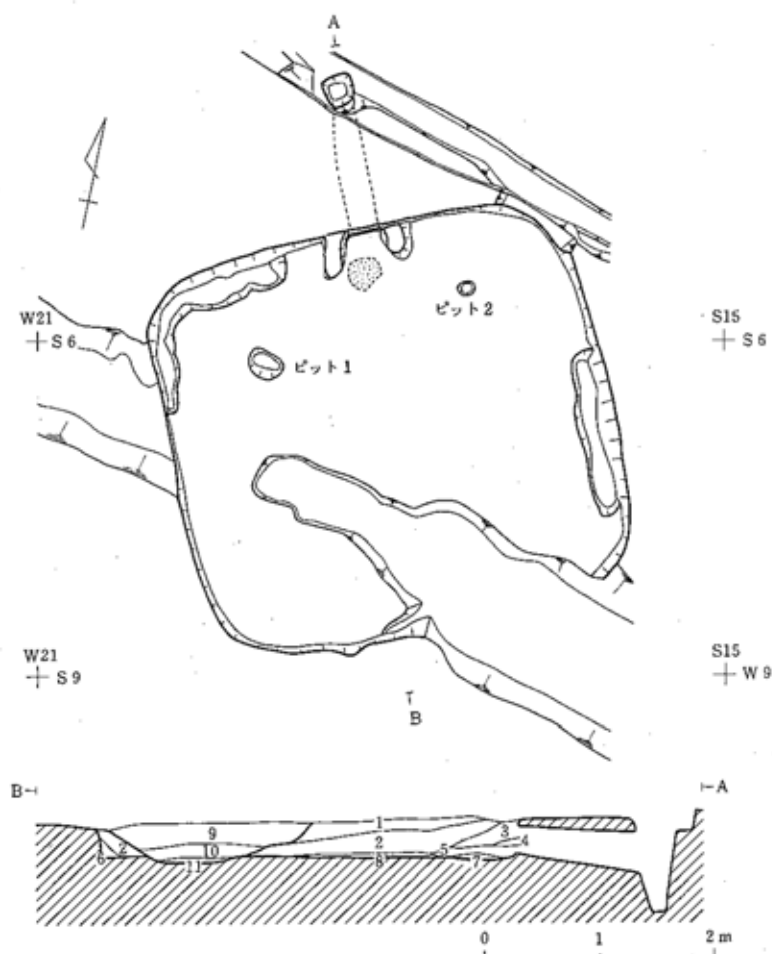
【出土遺物】 住居に伴う遺物としては、床面上、カマド出土の遺物があるが、小破片が多く図示できるのは、土師器小形甕のみである。

土師器

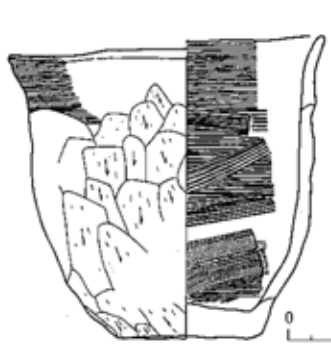
甕（第14図） 器高が口径よりも大きいもので、口縁部は体部との明瞭な区別なく、やや外傾する器形である。口縁部内外にはヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ調整がみられる。体部内面は上部に刷毛目、下部にはヘラナデの痕跡がみとめられる。底面はヘラケズリである。また、床面上から小片であるがロク口使用内黒土師器坏が出土している。

第4号住居跡ピット

No	1	2
深さ (cm)	27	



第13図 第4号住居跡



第4号住居跡

1	黒かっ色土	かたい、地山粒・灰白色粘土粒ややまじる
2	黒かっ色土	やわらかい、地山粒・灰白色粘土粒、木炭ややまじる
3	黒かっ色土	やわらかい、地山粒多量にまじる
4	白かっ色土	灰白色粘土多量にまじる、カマド天井部崩落か？
5	暗かっ色土	地山粒が多く、灰色粘土粒がややまじる
6	黒かっ色土	地山ブロック多くまじる
7	黒かっ色土	焼土、木炭が多量にまじる
8	かっ色粘土	灰白色粘土・焼土・木炭ややまじる、生活層

第1溝

9	黒かっ色土	かたい、混入物はあまりない
10	黒かっ色土	かたい、やや地山粒まじる
11	黒灰色土	粘性あり、上面に褐色帯(酸化鉄)あり

第14図 第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡（第15図）

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面東部、第2号住居跡のすぐ西側に検出された。住居西部が6号住居跡により切られ、また、北辺から西辺にかけて斜めにごく最近の溝が走っている。他に西壁を切って2個のピットがみられる。

【**平面形、規模**】 平面形は長軸7.9m、短軸7.8mの隅丸方形である。

【**壁**】 地山を壁としており、しっかりとしている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は約20cmであるが、6号住居跡と切り合う西壁部分や攪乱の多くみとめられる南西部での壁高は5~6cmである。なお、南辺では壁にくいこんだピット3個がみとめられた。

【**床**】 床面は北西部がやや高いがほぼ平坦である。中央部は地山面を直接床としており、かたくしまっている。床面上には3~4cmほどの厚さで生活層がみとめられ、南西部では殊に顕著であった。周囲（壁より1~2m幅）では中央部より20cmほど深くほりこみ、その部分に他の土を置き、その上面を床として使用している。この部分では軟かい。なお、南東部に径30cm前後の床の焼けている部分が2ヶ所ある。

【**柱穴**】 住居東側に径20cmほどのピットが2個みとめられた。床面からの深さは40~50cmである。形態や深さからみて柱穴と考えられるが、他に組み合わせと思われるものは発見されなかった。

【**周溝**】 カマド部分を除き全周する。底面は平坦で幅10~20cm、床面からの深さは7~15cmほどである。

【**カマド**】 カマドは北辺中央部にとりつけられている。白色粘土により側壁を構築し、側壁前端には土師器甕をオサエとして使用している。天井部はないが、天井部崩落と考えられる白色粘土がカマド内に堆積していた。煙道部は削平のため残存しない。燃焼部奥壁より約1.5cm北側に煙出しのピットがみとめられた。軸方向はN-6°-Wである。

【**その他の施設**】 柱穴と考えられるピットと東辺周溝を結ぶように底面幅10cmほどの浅い溝が2歩みられた。いずれも床面からの深さ約5~7cmであり、周溝底面より高い。溝底面にはほとんど高低差はない。

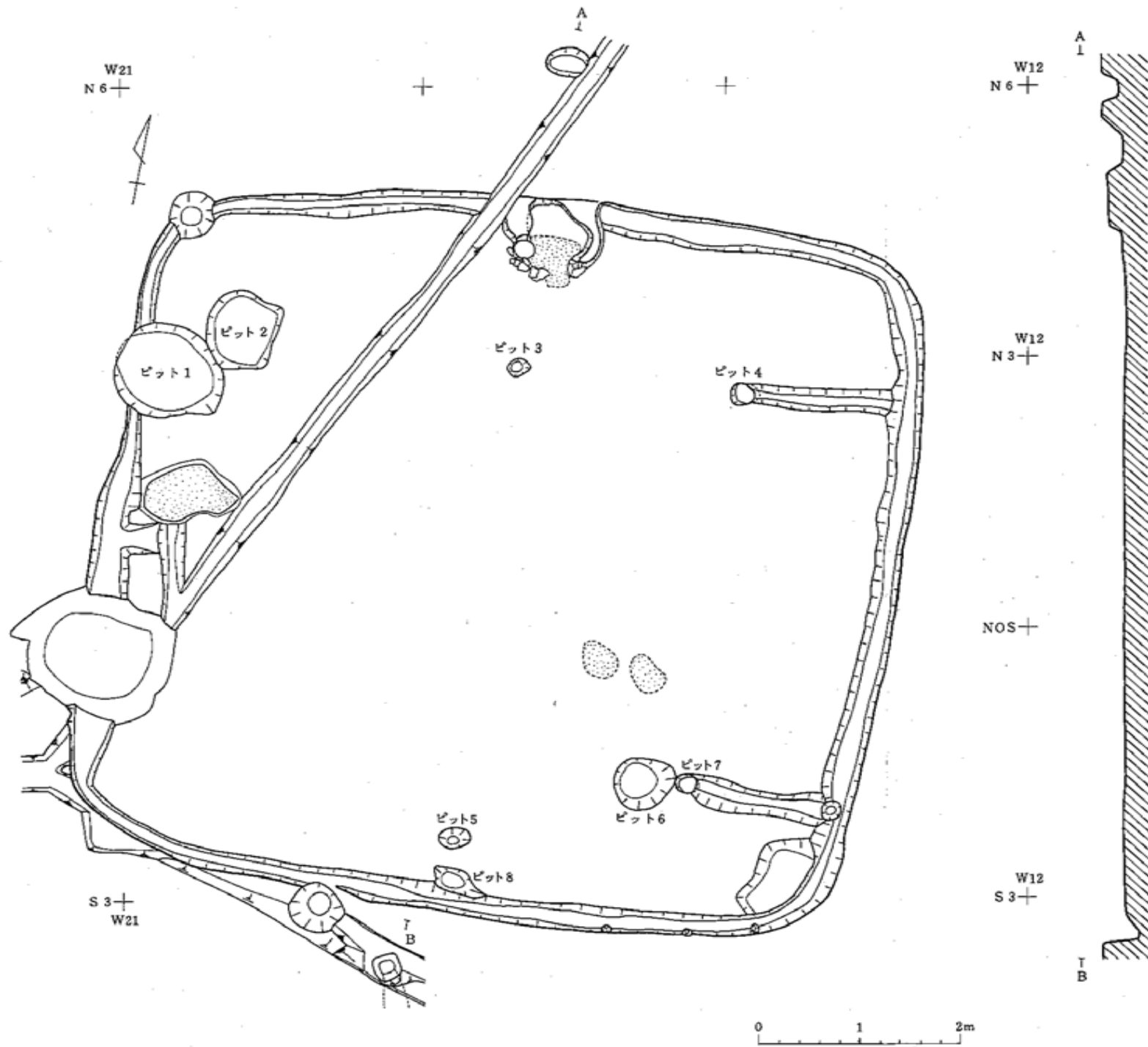
【**出土遺物**】 住居に伴う遺物としては、カマド側壁の前端にオサエとして使用した土師器甕、床面上（生活上）カマド内から出土した遺物がある。

土師器

環 平底のもの（第16図2~4）と丸底に近いもの（第16図1）とがある。また、体下部に段

第5号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ (cm)	21	13	27	41	16	24	50	22



第15図 第5号住居跡

の施されるもの(第16図2・3)とそうでないもの(第16図1・4)とがある。外面器面調整についても、底面を含めて全面にヘラミガキが施されるもの(第16図1・2)、体部上半から口縁部にかけてヘラミガキが施され、以下はヘラケズリのもの(第16図3・4)、口縁部のみわづかにヘラミガキが施され、以下はヘラケズリのもの種々である。内面はいづれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。なお、第16図4は外面も黒色処理されている。また、第16図2の体部にみられる段(又は沈線)は極めてわづかのものであり、成形時の積上痕か、とくに意識して加えられたものかは不明である。

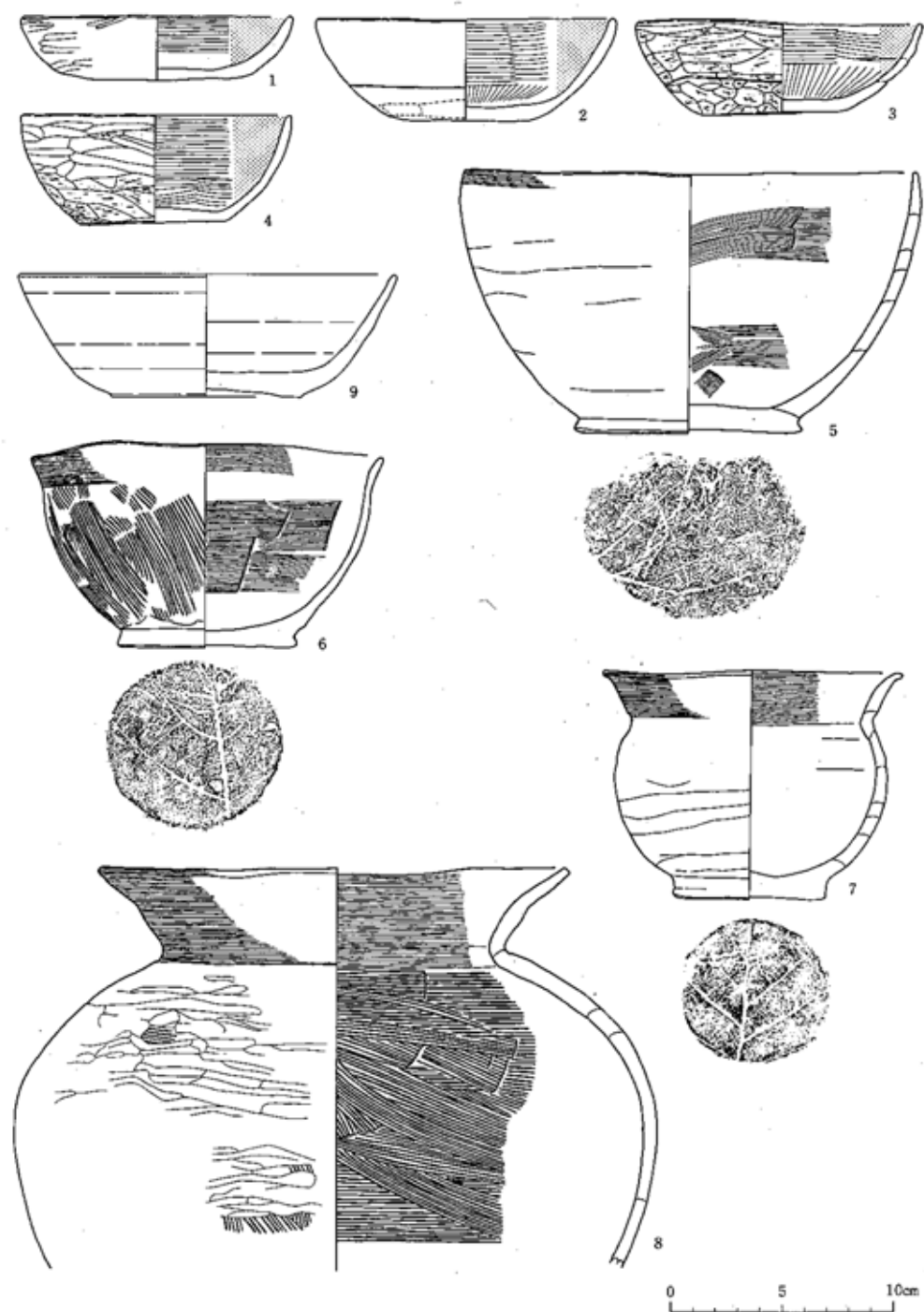
甕 口径が器高よりも大きいものと、器高の方が大きいものの二者がある。前者(第16図5~7)は小形のもので、さらに口頸部の形態により、イ、体部からそのまま口縁部に至り、口縁部が直立ないしやや内傾するもの(第16図5)、ロ、頸部でわづかにくびれ、口縁部が外傾するもの(第16図6)、ハ、頸部で「く」字にくびれ、口縁部が外傾ないし外反するもの(第16図7)がある。但しロ、ハの違いは体部が球形に張り出すかどうかという体部の形態の反映の結果ともみられる。底部はいづれも底縁が張り出し、底面には木葉痕がみとめられる。器面調整は口縁内外面ともヨコナデが施され、体部外面は第16図6では刷毛目が施されている。他の第16図5,7は、成形時のナデ(?)がそのままみられるような感があり、特に調整はみとめられない。いづれも積上痕跡が明瞭に観察される。体部内面の調整はヘラナデが第16図5,6にみられるが、第16図7では不明である。

後者(第16図8、第17図1~3)にも最大径が口縁部にあり、長胴形のもの(第17図1~3)と体部中央にあり壺形のもの(第16図8)との別がある。長胴形のものでは頸部に段をもって体部と明瞭に区画する第17図2とナデ肩状になる第17図1,3の二者がみとめられるが、器面調整は同一で口縁部内外面横ナデ、体部外面は軽いケズリが施されている。壺形のもの(第16図8)では口縁部内外面はヨコナデであるが、体部外面は刷毛目のちヘラミガキが加えられている。

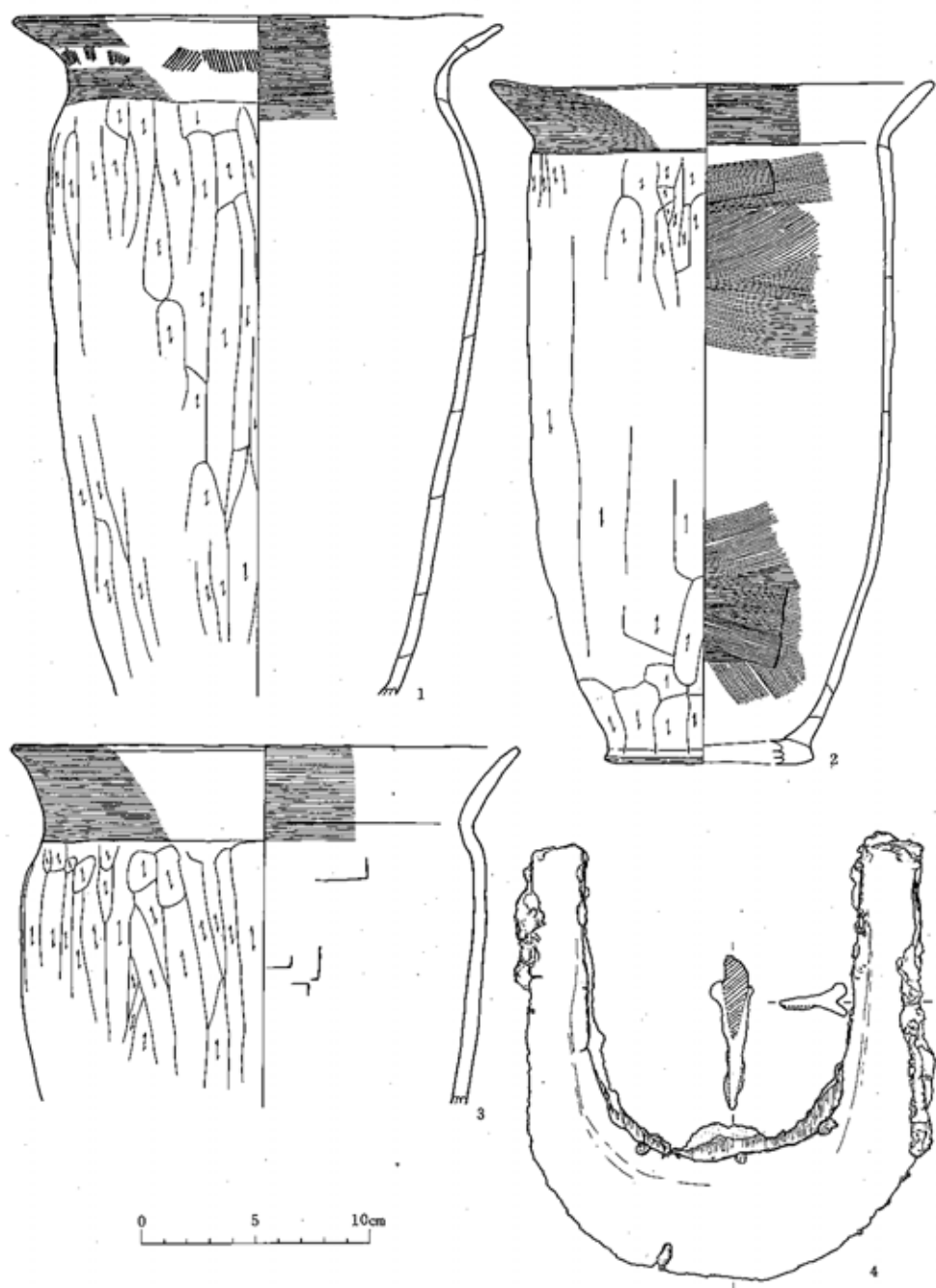
須恵器

坏 口径に比べて器高がかなり大きい坏である。底面は手持ヘラケズリが加えられており、切り離し手法は不明である(第16図9)。

鉄製鋤先 最大長約21cm、刃部幅約6cmの大形のものである。側縁部が若干錆化しているが、保存状態は良好であり、内溝には木質が残存している(第17図4)。



第16图 第5号住居跡出土遺物



第17图 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第18図）

【遺構の確認、重複】 上位水田中央部において確認された。なお、この部分は地山面が高く、そのため遺構に対し削平がより著しく加えられている地域である。

第5号住居跡、第7号住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。また、8号住居跡とも重複関係にあると考えられるが、削平及び攪乱によりその新旧関係は不明である。

【平面形、規模】 既に述べたように著しい削平が加えられているため、南辺、南西隅などが残存しているにすぎない。このため平面形、規模は明らかでないが、南辺は6.1m前後と推定され、また、南西隅の状態からみて方形を基調とする住居跡と想定される。

【壁】 南辺及び西辺の一部が遺存している。地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで残存高は10cm前後である。南辺東半では壁直下に周溝がみられる。

【床】 堆積土の残っていた部分にのみみとめられ、他は削平のために明確な面をとらえることができなかった。また、5号住居跡と重複する部分において床面は確認できなかった。床面の検出された部分では地山を床としている。

【柱穴】 柱穴と考えられるピットは検出されなかった。南東部にみられたピット（ピット1）は床面からの深さが約70cmほどあり、柱穴と考えられるが他に組み合うものがなく不明である。

【周溝】 南辺に沿い、南西隅から約1mのところから南東隅の貯蔵穴状ピットまで約3.5mの長さで続いている。底幅10～30cmで底面は南東へ向かって傾斜しており、貯蔵穴状ピットと交わる部分で床面からの深さ約30cmである。

【カマド】 貯蔵穴状ピットの北側約2mの部分に焼面がみとめられた。この焼面は位置関係から考えて本住居跡のカマド燃焼部底面の可能性がある。なお、この焼面の下から5号住居跡の床面が検出された。

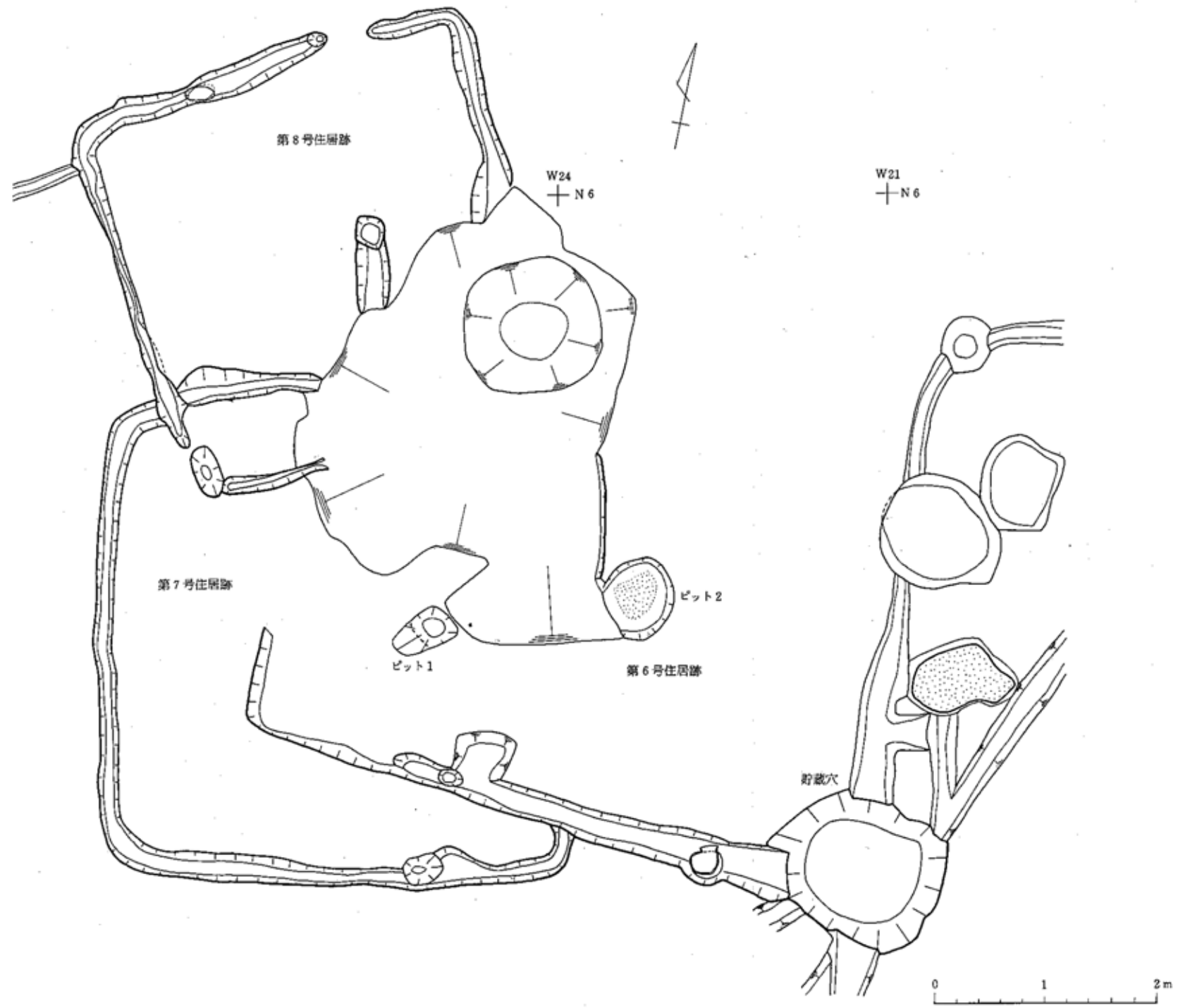
【貯蔵穴】 南東隅にみとめられた。長軸1.5m、短軸1.3cmほどの楕円形のピットで床面からの深さは約40cmである。底面に接して多くの土器が出土した。

【その他の施設】 南辺中央から2mほど北側に径75cmほど、深さ10cmほどの底面が焼けた浅いピットが検出された。なお、この部分は削平を受けている部分であり、このピットが本住居に伴うものかどうかは不明である。

【出土遺物】 住居に伴う遺物としては貯蔵穴状ピット内出土遺物、周溝内出土遺物がある。他に床面上出土遺物がある。しかし削平が床面近くまで及んでおり、堆積土がほとんど残っていないことに加えて他住居との重複があり、床面上出土遺物が正しく床面上と認定され得るか

第6号住居跡ピット

No	1	2
深さ (cm)	63	5



第18図 第6、7、8号住居跡

どうか疑問が残る。したがってここでは参考資料の意を含めて提示することとする。

土師器

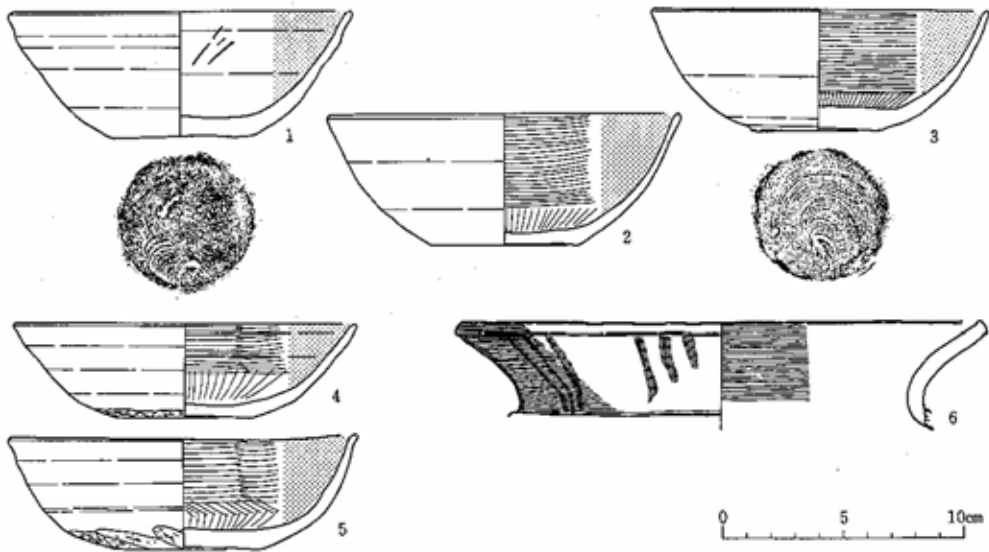
坏 貯蔵穴状ピットから一括して出土している。いずれも成形の際、ロク口を使用している。底部切り離しは回転糸切手法のもので、体部下端に手持ヘラケズリによる再調整を加えているもの（第19図4・5）もある。器面調整はいずれも外面はロク口調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甗 床面上より出土している。口縁部のみである。頸部に段が巡っている。口縁部はやや外反し端部は平坦である。器面調整は内外面ともヨコナデである。口縁部外面には丹によって3本1組の直線が文様状に描かれている。丹は焼成前に塗られている（第19図6）。

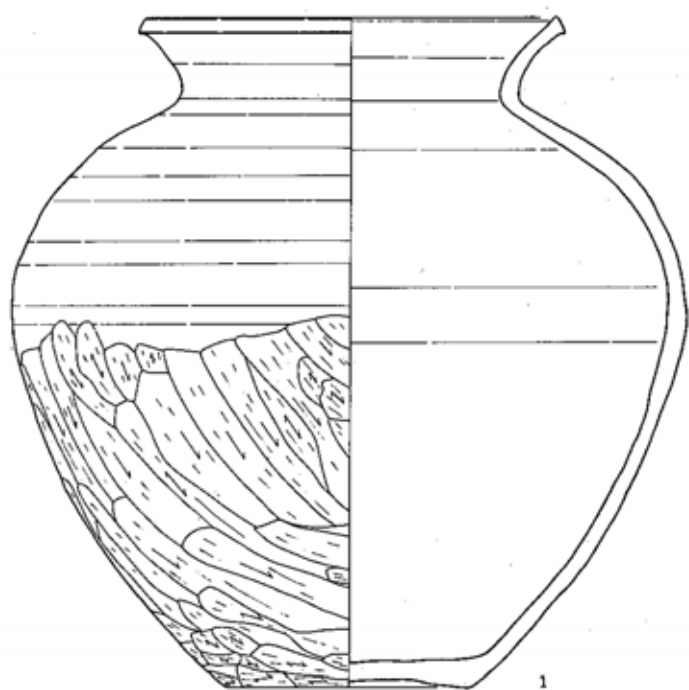
須恵器

甗 頸部から口縁部へかけてゆるやかに外反し、端部は幾分上下にのびており狭い緑帯がある。体部は中央よりやや上部に最大径を有し倒卵形の器形で、底部は上げ底気味となる。体部上半、口縁部にかけてロク口調整、体下半から底部にはヘラケズリが施されている（第20図1）。

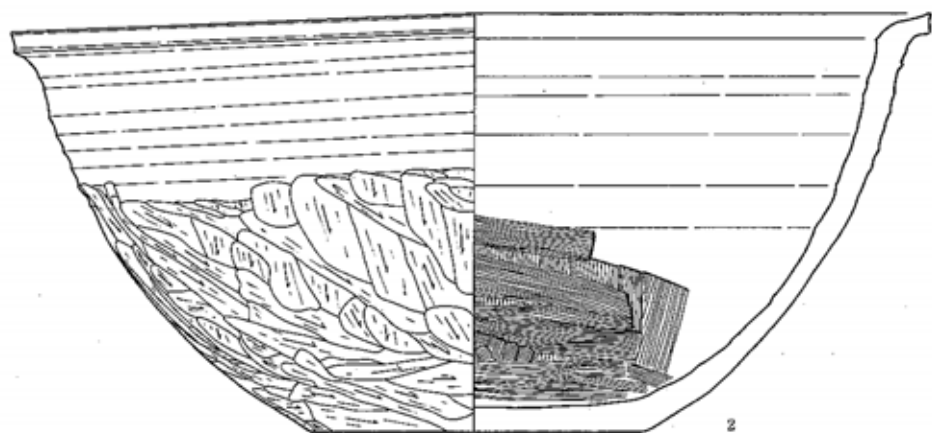
鉢 体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部はやや外方に折り曲げたような器形である。体部上半内外面にはシャープなロク口調整痕がみられる。外面体下部は底部方向へ向かってヘラケズリが加えられ、内面は各方向にナデ調整が施されている。底面には特に再調整は加えられず、指紋が明瞭にみとめられる（第20図2）。



第19図 第6号住居跡出土遺物



1



2

0 10cm

第20図 第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡（第18図）

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面中央部において確認された。住居東部で第6号住居跡と、北西部で第8号住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。また、北東部は後世の攪乱によりこわされている。

【**平面形、規模**】 後世の攪乱などにより不明な部分もあるが、ほぼ隅丸方形でその規模は長軸4.6m、短軸4.1mである。

【**壁**】 かなり削平をうけている。地山を壁とし残存壁高は南辺で10cm前後、北辺では1cmほどである。

【**床**】 中央部では地山を床とし、ほぼ平坦である。

【**柱穴**】 不明

【**周溝**】 東辺、北辺の東側を除いて検出された。底面はほぼ平坦で底面幅は10cmほど、床面からの深さは5~10cmである。

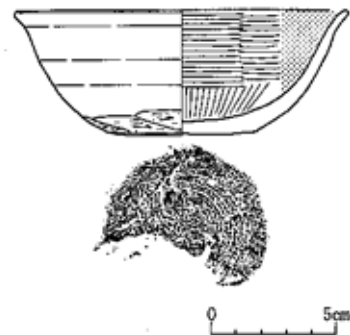
【**カマド**】 北辺ほぼ中央部において確認された。燃烧部は攪乱により失なわれており、残存するのは煙道の一部及び煙出し部のみである。煙道底面は、煙出し部に向かって傾斜しており煙出し部には煙道底面より25cmほど低いピットが掘りこまれている。軸方向はN-16°-Wである。

【**出土遺物**】 床面上から土師器坏が出土している。ただし、6号住居跡と同様、床面近くまで削平、攪乱が及び、また、他住居との重複も多くみとめられるため、床面上出土であっても参考資料として取り扱う。

土師器

坏 口縁部が外方に折れ曲がり外傾する坏である。整作に際しロクロを使用し外面にロクロ目が観察される。外面体下部には手持ヘラケズリの調整が加えられている。底面には回転糸切痕がみとめられる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている（第21図）。

なお、床面上からは外に、ロクロを使用しないと思われる内黒土師器坏片なども出土している。



第21図 第7号住居跡出土遺物

第8号住居跡（第18図）

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面中央部で確認された。住居南西部で第7号住居跡と、北西部で第9号住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。また、東南部は攪乱により失なわれている。

【**平面形、規模**】 平面形は隅丸方形でその規模は軸長約3.6mである。

【**壁**】 削平のためほとんど残っていない。西辺、北東隅付近で残存高1～3cm程度である。

【**床**】 北東隅がわずかに高いがほぼ平坦である。第7号住居跡と重複する部分を除き地山を床としている。なお、第7号住居跡と重複する部分においては貼り床などの痕跡はみとめられなかった。

【**柱穴**】 不明

【**周溝**】 途切れる部分があるが、確認された住居範囲部分ではほぼ全周する。床面からの深さ10～20cm、底面幅は5～10cmほどである。

【**カマド**】 確認された住居範囲内ではカマドは検出されなかった。

【**出土遺物**】 遺物は出土していない。

第9号住居跡（第22図）

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面中央部で確認された。住居南東部が第8号住居跡と重複し同住居より古い。また、住居内で第20号住居跡の輪郭の一部が確認され、同住居よりは新しい。かなりの削平を受けており、壁及び床面はほとんど残存しない。

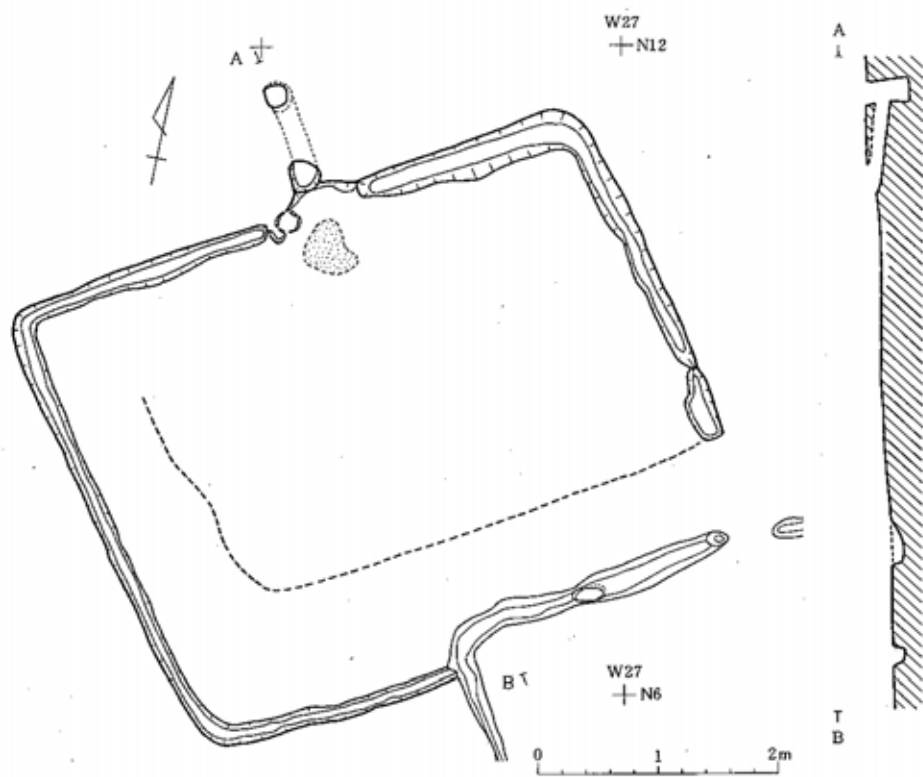
【**平面形、規模**】 平面形は東西方向にやや長い隅丸方形で、長軸5.1m、短軸4.4mである。

【**柱穴**】 検出されず不明

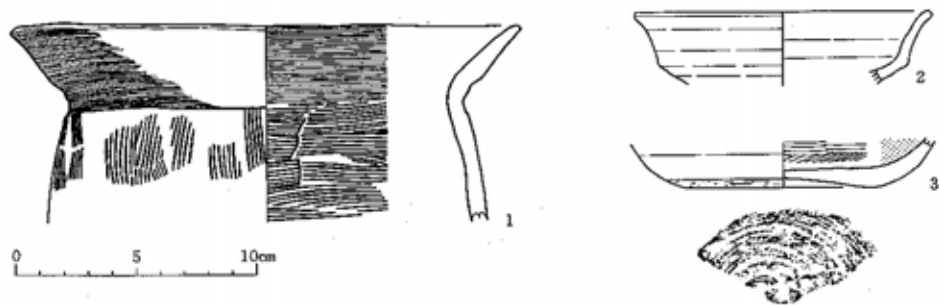
【**周溝**】 カマド部分を除いて巡る。なお、第8号住居跡と重複する部分（南東隅）では不明である。底面幅5～10cmである。床面が削平されているため深さは不明であるが、確認面からの深さは5～10cmほどである。

【**カマド**】 北辺のほぼ中央部にとりつけられている。削平のため側壁はほとんど失なわれている。左側壁の基底部分がわずかに残存し、側壁のオサエ、または芯として使用していたと思われる白色粘土の付着した土師器の破片が若干遺存していた。このことから粘土構築のカマドであったと推定される。燃焼部は低くなっており、底面に50×30cmの範囲で焼面がみとめられる。燃焼部奥壁には高さ3～5cmの段がみられ、住居壁より幾分張り出している。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、長さ80cmほどで煙出し部のピットへつながっている。底面は煙出し部へ向かって傾斜している。煙出し部ピットと煙道底面との比高は10cmほどである。軸方向はN-40°-Wである。

【**出土遺物**】 住居跡に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用した土師器甕及びカマ



第22图 第9号、第20号住居跡



第23图 第9号住居跡出土遺物

ド内出土の須恵器坏である。

土師器

甕 カマド左側壁の芯またはオサエとして使用されたと思われるものである。体部上半以上が現存している。口径が器高より小さく、長胴形のものと思われる。口縁部は外傾し、頸部には体部と区画する段がみとめられる。器面調整は口縁部内外にヨコナデ、体部内外には刷毛目が施されている（第23図1）。

須恵器

高台付坏 口縁部がやや外反し、体下部に明瞭な稜がみとめられる。底部は現存しないが高台が付せられたものと思われる。

以上の他に床面から若干の遺物が出土している。ただし、壁・床がかなり削平され、堆積土がほとんど残存しないため、正しく床面上の遺物であるかどうかは不明確であるが、それらの中にはロクロ不使用、内黒土師器坏体部片、ロクロ使用、回転糸切、内黒土師器坏底部片（第23図3）などがみとめられる。

第20号住居跡（第22図）

【遺構の確認、重複】 第9号住居跡内において、住居掘り方の輪郭の一部のみが確認された。第9号住居跡と直接の重複関係はなかったが、第20号住居跡の推定範囲内において第9号住居跡の周溝その他の乱れがみとめられないことにより、第9号住居跡よりは古いものと考えられる。遺物は出土していない。

第10号住居跡（第24図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面中央部で確認された。削平その他による攪乱が床面下まで及んでいる部分もある。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形で、その規模は長軸6.7m、短軸6.5mである。

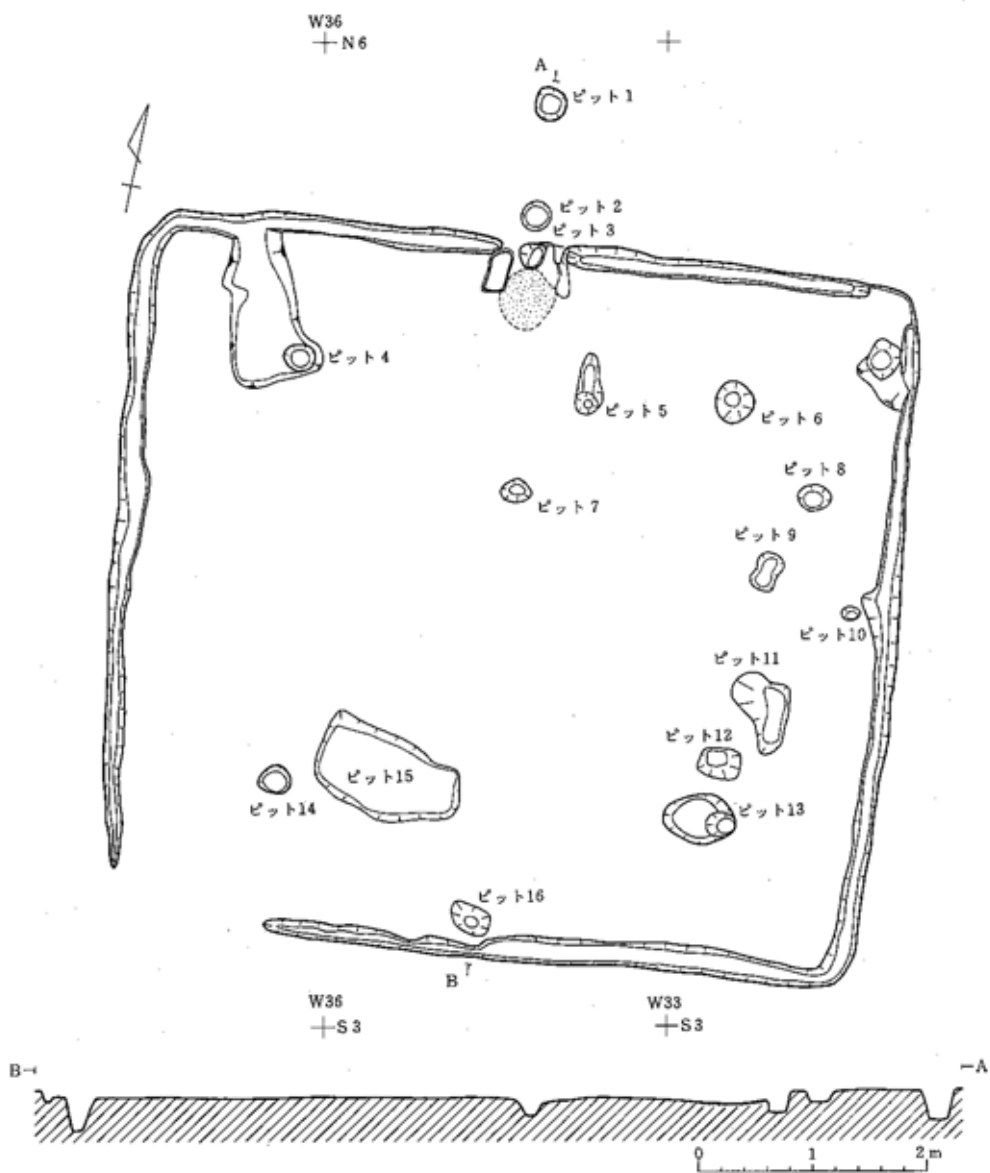
【壁】 削平のためほとんど残存しない。地山を壁とし残存壁高は3～7cm程度である。

【床】 地山を床としている。ほぼ平坦で、床面上には部分的ではあるが生活層と考えられるかたくしまった粘土層がみとめられた。

【柱穴】 床面上から数個のピットが確認されたが、配置の規則性、深さなどからほぼ対角線上に位置するピット4・6・13・14の4個が柱穴と考えられる。

【周溝】 カマド部分及び北東、南西隅を除き巡る。断面はU字形である。底面幅は5～10cmと狭く床面からの深さは4～15cmである。西辺部が幾分深い。

【カマド】 北辺中央部にとりつけられている。燃焼部側壁は白色粘土で構築されており、底



第10号住居跡ピット

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
深さ (cm)	26	10	16	61	25	53	13	33	25	12	15	35	40	38	10	29

第24図 第10号住居跡

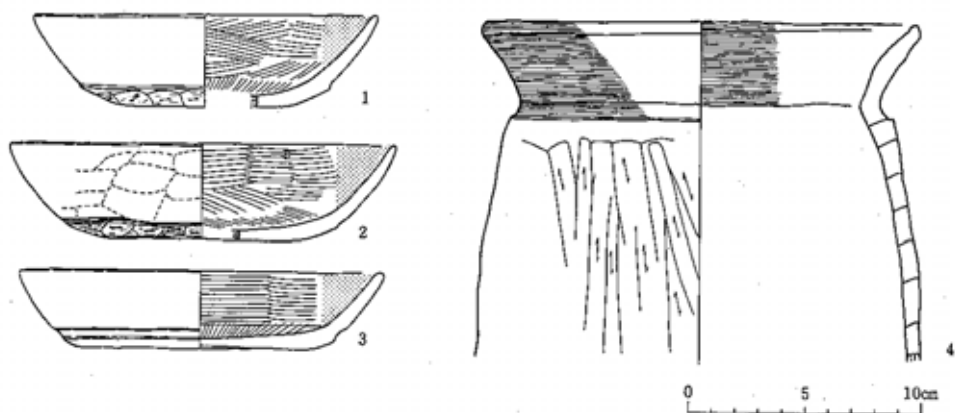
面には径 50 cm ほどの焼面がみられる。また、奥壁近くには支脚を据えるためと思われる径 20 cm 深さ 30 cm ほどのピットが検出された。煙道部は残存せず不明である。位置関係から推して燃烧部奥壁から約 60 cm 北側にあるピット 1 が煙出し部と考えられる。

〔出土遺物〕 住居に伴う遺物としては床面上出土の遺物がある。

土師器

坏 底部形態は平底のもの（第 25 図 3）と丸底に近いもの（第 25 図 1・2）とがある。体外面下部に、前者においては沈線が巡り、後者においては段が巡っている。器面調整は、外面が段沈線を境としていずれも上部にヘラミガキ、下部にヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ黒色処理が施されている。

甕 口径が器高より小さく、体部は最大径が口縁部とほぼ一致してやや外張り気味の器形である。頸部に段がみとめられ体部と口縁部が区画される。口縁部は外傾し、端部は外方に削がれたような形で平坦である。器面調整は、口縁部内外はヨコナデ、体部外面には軽いケズリが施されている。体部内面は磨滅のため不明である。



第25図 第10号住居跡出土遺物

第 11 号住居跡 (第 26 図)

【遺構の確認、重複】 上位水田面において確認された。削平のため壁・床面は失なわれている。住居掘り方の確認により西、北、東辺の一部が明らかになった。

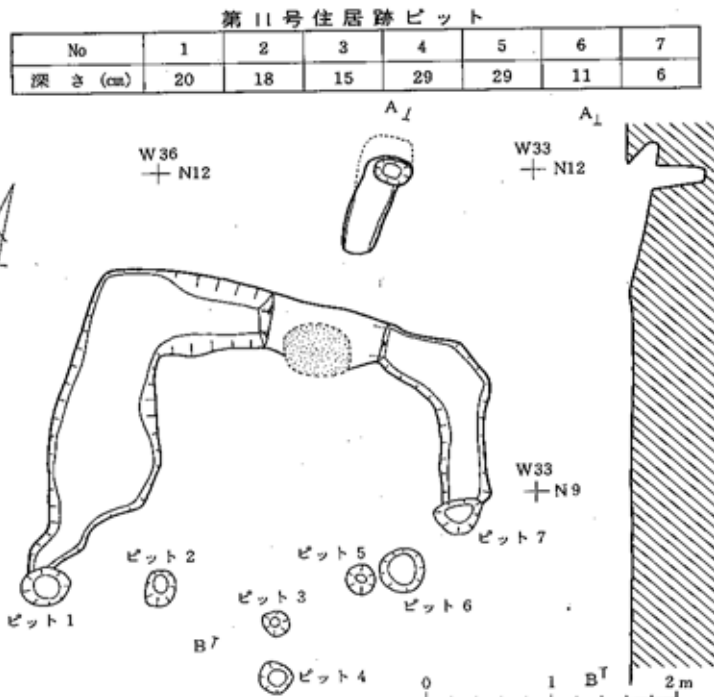
【平面形、規模】 掘り方による確認のため平面形、規模は明らかでないが、北西隅の輪郭により隅丸方形と考えられる。

【床】 床面は失なわれているが、住居周縁部床面下に住居構築の際の掘り方と思われる浅い落ち込みが確認された。幅 25~50 cm で確認面からの深さは 4~9 cm である。

【柱穴】 住居推定範囲内に数個のピットがみとめられるが、各々の形態及び配置などに規則性はみとめられず、柱穴は不明である。

【カマド】 北辺にみとめられる。燃焼部はほとんど削平されており、底面と考えられる径 50 cm ほどの焼面が検出されたにすぎない。焼面は住居掘り方埋土の上で確認されている。煙道部は燃焼部に近い部分は削平されており、先端部のみが残存している。底面は煙出し部の側へ傾斜しており、煙出し部には径 25~30 cm ほど、煙道底面より約 40 cm 低いピットが掘り込まれている。なお、煙道は煙出しピットよりさらに 20 cm ほど奥へのびている。軸方向は N - 6° - E である。

【出土遺物】 遺物は出土していない。



第26図 第11号住居跡

第12号住居跡（第27図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面西側において確認された。住居北西部は削平により失なわれており、また、後世の溝や掘り込みにより床面はかなり攪乱をうけている。

【平面形、規模】 軸長5.2m前後の隅丸方形と考えられる。

【壁】 地山を壁としている。北西部は削平により失なわれている。また、南辺東側は攪乱のため幾分乱れている。残存壁高は4~13cmほどで、東辺南部が最もよく残存している。

【床】 地山を床としほぼ平坦であるが、床中央部がほとんど乱れており不明な点が多い。

【柱穴】 ほぼ対角線上に位置するピット1・2・3・4が深さも近似し柱穴と考えられる。

【周溝】 北辺カマド右側から東辺中央部までの住居北東部にみられる。底面幅は5~10cm、床面からの深さは5~10cmほどである。

【カマド】 北辺ほぼ中央部にとりつけられている。カマドの部分にも後世の攪乱が及んでおり、燃烧部は特に破壊が著しい。粘土構築による右側壁前端部がわずかに遺存していた。燃烧部底面には径40cmほどの焼面がみとめられた。燃烧部には、土師器甕体下半部がまとまってみられ、出土状態から推して支脚として使用したと思われる。煙道部も燃烧部に近い部分で破壊が著しい。長さ約1mほどで煙出し部につながる。底面は煙出し部に向かって傾斜している。煙出し部には煙道底面より約20cm深いピットが掘られている。軸方向はN-3°-Wである。

【出土遺物】 住居に伴う遺物としては、カマドの支脚として使用したと思われる土師器甕と床面上出土の遺物がある。

土師器

坏 底部形態が丸底のもの（第28図1）と平底のもの（第28図2~8）の二者がある。

前者では、外面体下部に沈線が巡っているが、沈線は浅く、途切れる部分もみとめられる。沈線を境として上部はヘラミガキ、下部にはヘラケズリが施されている。

後者においてはさらに、外面体下部に段が巡るもの（第28図2）、沈線が巡るもの（第28図3・4）、段・沈線などがみとめられないもの（第28図5~8）がある。

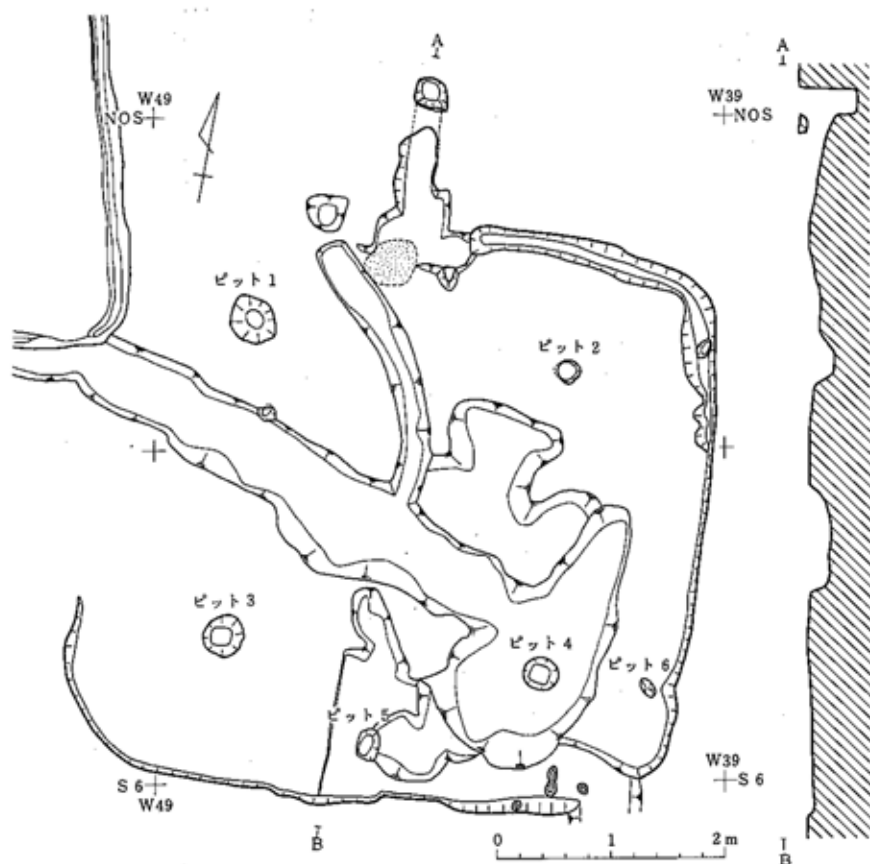
口縁部形態や器形などにおいて幾分差異のみとめられるものもあるが、器面調整を観察すると底面を含めて外全面にヘラミガキが施されるもの（第28図3~8）と、沈線・段を境として上部にヘラミガキ、下部にヘラケズリが施されるもの（第28図1・2）とに分かれる。

内面調整はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

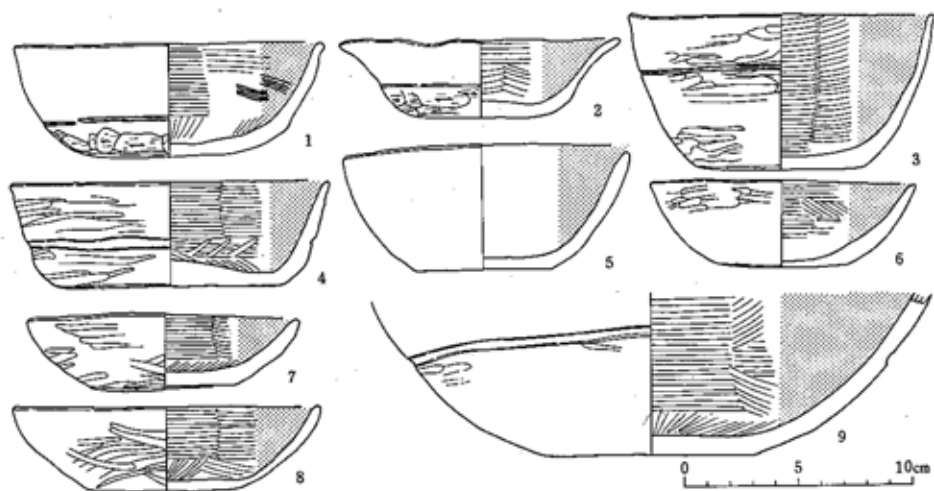
第28図9は口縁部が欠損しているため器形が不明であり、また、他の坏に比してかなり大形

第12号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6
深さ (cm)	81	60	74	46	18	14



第27図 第12号住居跡



第28図 第12号住居跡出土遺物

であるため、坏として扱うことは正しくないかもしれないが、浅い器形と考えられる事と沈線が巡る事により一応本項で述べる。調整は底面を含め内外面ともヘラミガキであり、内面には黒色処理がなされている。

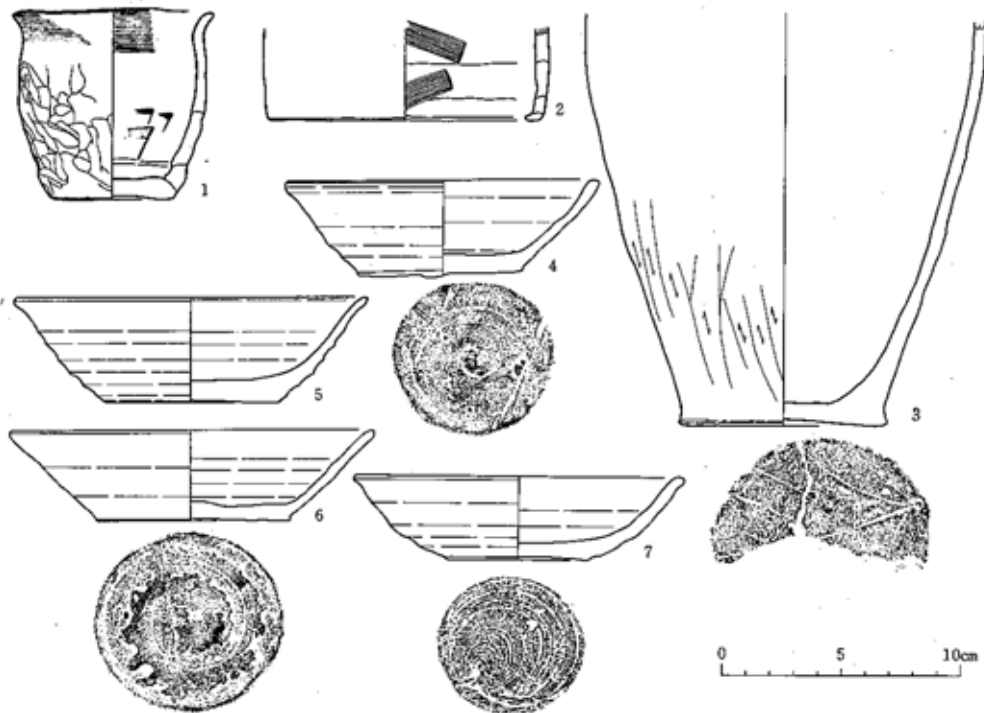
甕 支脚として使用されたと思われる甕(第29図3)は、上半部が欠損しており口縁部など細部形態は不明である。また、内外面の器面調整も再加熱などにより剥落・摩滅しほとんど不明であるが外面体下部に軽いケズリの調整がわずかに観察される。底面には木葉痕がみとめられる。

第29図1は、小形の甕である。体部から口縁部へは特に区画はなくゆるく外反しながら移行し口縁部は短い。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、体部内面はヘラナデが施される。底面は摩滅のため不明である。また、体部内面には粘土積上痕がみとめられ、積上痕は右回りらせん状に上っている。

甗 底部のみの小片のため全体の器形は不明である。体部下端がわずかに内側へおり曲げられてせまい底部がつくられている。外面はヘラケズリ、内面にはヘラナデの調整が施される。

須恵器

坏 底部にヘラ切り痕のみられるもの(第29図4・6)と回転糸切り痕のみられるもの(第29



第29図 第12号住居跡出土遺物

図7)及び切り離し後手持ヘラケズリが加えられているため切り離し技法の不明のもの(第29図5)とがある。ヘラ切り及び糸切りのものには再調整は行なわれていない。両者には、体部において前者がほぼ直線的に外方に立ち上がり、後者がやや丸味をおびて立ち上がるという若干の器形的な差異も感じられる。手持ヘラケズリ調整のものは器形的にはヘラ切りのものに近い。

第13号住居跡(第30図)

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面西側において確認された。北側で煙道部が第16号住居と重複し、同住居より古い。また、西側に第14号住居跡があり直接の切り合い関係はなかったが、重複が想定される部分において乱れがみられなかった点からみて本住居が新しいと思われる。その他に、西辺中央から南東隅にかけて後世の溝のため、壁及び床面の一部がこわされている。

【**平面形、規模**】 平面形は隅丸方形で長軸4.0m、短軸3.5mである。

【**壁**】 地山を壁とし、しっかりしている。ほぼ垂直に立ち上がり残存壁高は9~30cmほどである。南西部は削平のため遺存状態が悪い。

【**床**】 地山を床とし、ほぼ平坦である。床面上には生活層と考えられる木炭の混じる粘質土が1~3cmほどの厚さでみられた。

【**柱穴**】 柱穴と考えられるピットは検出されず不明である。

【**周溝**】 カマド部分及び後世の溝による攪乱部分を除きほぼ全周する。断面はU字形で、底面幅は約5cm、床面からの深さは5~10cmである。

【**カマド**】 北辺ほぼ中央部にとりつけられている。燃烧部は側壁が粘土によって構築され、カマド内には天井部が崩落したと思われる白色粘土の堆積がみられた。底面には50×30cmの範囲で焼面がみとめられた。燃烧部奥壁は高さ8cmほどの段であり、この部分から煙道部へ移行する。煙道部は地山を掘り抜いてつくられており、長さは約1.5mほどである。煙出し部にはピットなどの施設はない。煙道部底面は先端に向かって傾斜しており、先端部底面と燃烧部に接する部分の底面との比高は約20cmである。軸方向はN-18°-Wである。

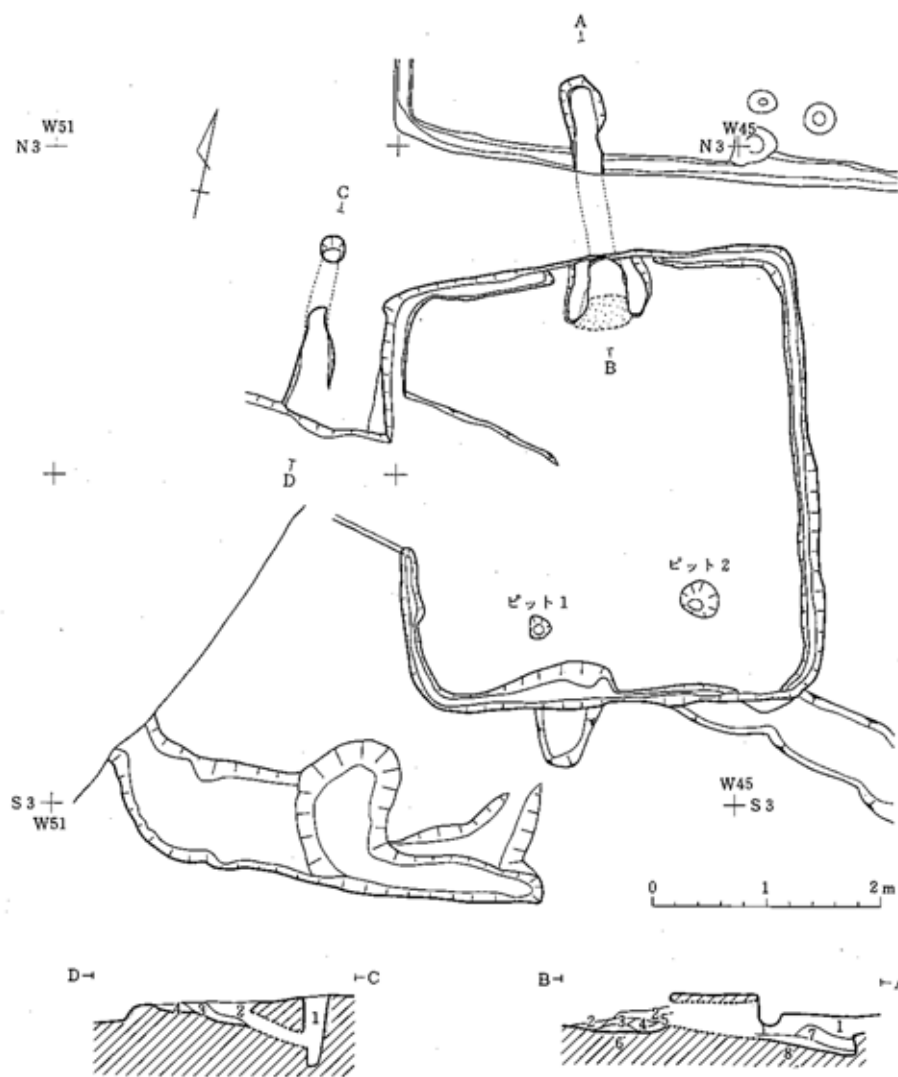
【**出土遺物**】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の土器がある。

土師器

壺(第31図1) 体部は球形に立ち上がり口縁部は直立またはやや内弯気味である。内外面ともにヘラミガキが施され、内面はさらに異色処理がなされている。底部は欠損しており、高

第13号住居跡ピット

No	1	2
深さ (cm)	10	10



14号住居跡カマド断面

1	暗かっ色土	木炭、焼土ブロックを含む
2	暗かっ色土	かたい焼土ブロックを含む
3		焼土、白色粘土ブロック
4	暗かっ色土	焼土をややくむ

13号住居跡カマド断面

1		よごれた地山土 (16号住居跡)
2	茶かっ色土	やわらかい
3	灰白色粘土	
4	黒かっ色土	粘土強い
5		地山土と木炭がまだら状にまじる
6		焼土、焼けた色粘土ブロック、木炭がまじりあう
7	灰白色粘土	ブロック
8	炭化物層	

第30図 第13、14号住居跡

台が付せられるのか、単に底縁が張り出すのかは明らかでない。

甕 口径が器高より小さいもの(第31図3・4、第32図1)と、器高よりも大きいもの(第31図2)とがある。

前者にはさらに、最大径が口縁にあり長胴形をなすもの(第31図3・4)と体部中央にあり壺形に近いもの(第32図1)とがある。長胴形のものでは、頸部に体部の上限を画す段がみられる。器面調整はいずれも口縁部内外はヨコナデ、体部外面はヘラケズリののちナデ状の軽いケズリが施されているが、全体に摩滅しており不明な部分が多い。底面には木葉痕がみとめられる。体部内面は第31図3では刷毛目であり第31図4は摩滅のため不明である。壺形のものも、頸部に段を有し、口縁部と体部が区画されている。口縁部内外はヨコナデ、体部外面にはヘラミガキに近似する軽いケズリが縦方向に施されている。内面は下部に若干刷毛目がみられるが全体に整形時のまともと思われる雑なナデ調整がみとめられる。底面は摩滅のため不明である。

口径が器高より大きい甕は小形のもの(第31図2)で口縁部に対称に一对の孔がみられる。懸垂用とも考えられる。体部は球形に近く口縁部は外傾する。頸部には段・沈線などはみられない。底部は欠損しており不明であるが、底縁が外方に張り出すものと思われる。器面調整は口縁部内外はヨコナデ、体部外面には、縦方向に軽いケズリが施されている。体部内面はヘラナデである。

須恵器

高台付坏(第32図3) 体下部に明瞭な稜をもつ大形のものである。高台部は比較的高く外方に張り出す。底面にはヘラ切り痕がみとめられる。

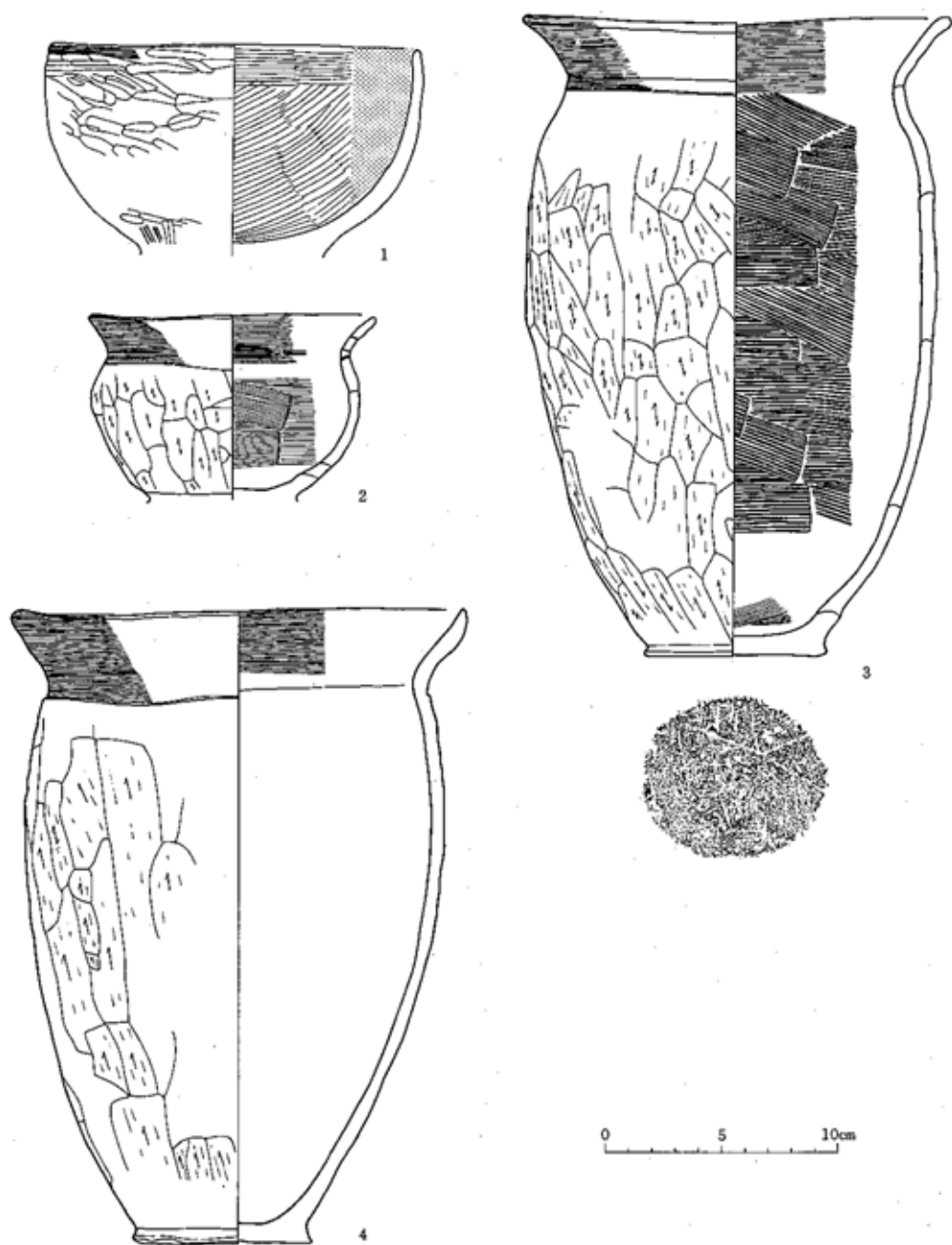
蓋(第32図2) 口縁部はやや内方に折り曲げられてつくり出されている。天井部には回転ヘラケズリが施される。つまみは宝珠形で丈が高い。前記の高台付坏と組み合わせるものと考えられる。

第14号住居跡(第30図)

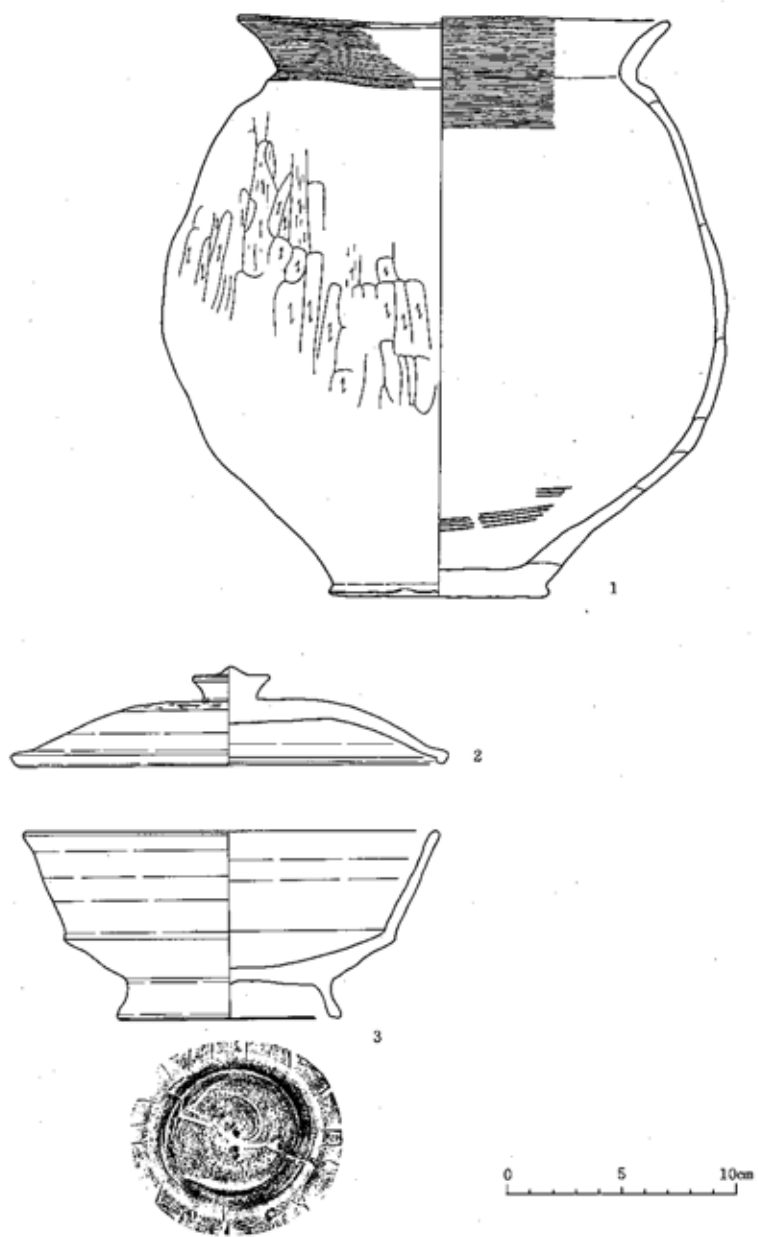
【遺構の確認、重複】 上位水田面西側、第13号住居跡の西側において確認された。カマド煙道部と南辺の掘り方のみが残存しているにすぎない。ただし、南辺の掘り方部分はカマドの位置からみるとかなりずれており、また掘り方自体の形態も幾分不安定であることから、本住居の掘り方であるのか、あるいは溝などの他の遺構であるのかは明らかでない。

【カマド】 煙道部、煙出し部及びカマド奥壁の一部が残存している。煙道部は長さ1.3mほどの地山掘り抜きのもので、先端部で天井が残っている。底面は先端に向かって大きく傾斜し燃焼部に接する部分と煙出し部に接する部分の比高は約35cmである。煙出し部には、煙道部底面との比高20cmのピットがもうけられている。軸方向はN-1°-Wである。

【出土遺物】 遺物は出土していない。



第31图 第13号住居跡出土遺物



第32図 第13号住居跡出土遺物

第 15 号住居跡（第 33 図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面西側において確認された。南辺で第 16 号住居跡煙り出し部と重複し同居より新しい。また、北半部は削平のため失なわれている。

【平面形、規模】 北半部が失なわれているため不明であるが残存部からみると、方形を基調とすると思われる。南辺長は約 4.6m である。

【壁】 地山を壁としている。立ち上がり角度はややゆるやかである。残存壁高は、東南部で最も高く約 20 cm である。

【床】 地山を床とし、ほぼ平坦である。16 号住居跡の煙出し部と重複する部分においては、特に貼り床などは行わず、煙出し部堆積土をそのまま床面として使用している。

【柱穴】 床面上及び南壁沿いに数個のピットがみとめられたが、柱穴と考えられるピットは抽出することができなかった。

【周溝】 カマド部分、南東隅、南辺中央部を除きみとめられる。底面幅は 5～20 cm で一定せず、床面からの深さは 3～9 cm である。断面形は U 字形である。

【カマド】 東辺南部にとりつけられている。燃烧部は、側壁が粘土によって構築されており内部には天井部崩落土と思われる粘土の堆積がみとめられた。底面には、径 20 cm ほどの焼面がみられ焼面より幾分奥の部分に支脚として使用したと思われる土師器小形甕が倒位の状態で検出された。燃烧部から煙道部へは約 10cm の段をもって移行している。煙道部は長さ約 1m で底面はほぼ水平に煙出し部に至る。煙出し部には煙道底面より 8 cm ほど低いピットが掘られている。軸方向は N - 75° - E である。

【貯蔵穴】 南東隅に径 50cm、床面からの深さ 30 cm の貯蔵穴状のピットが検出された。遺物は出土していない。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物としては、カマド支脚として使用していた土器、カマド内、床面上出土の土器がある。

土師器

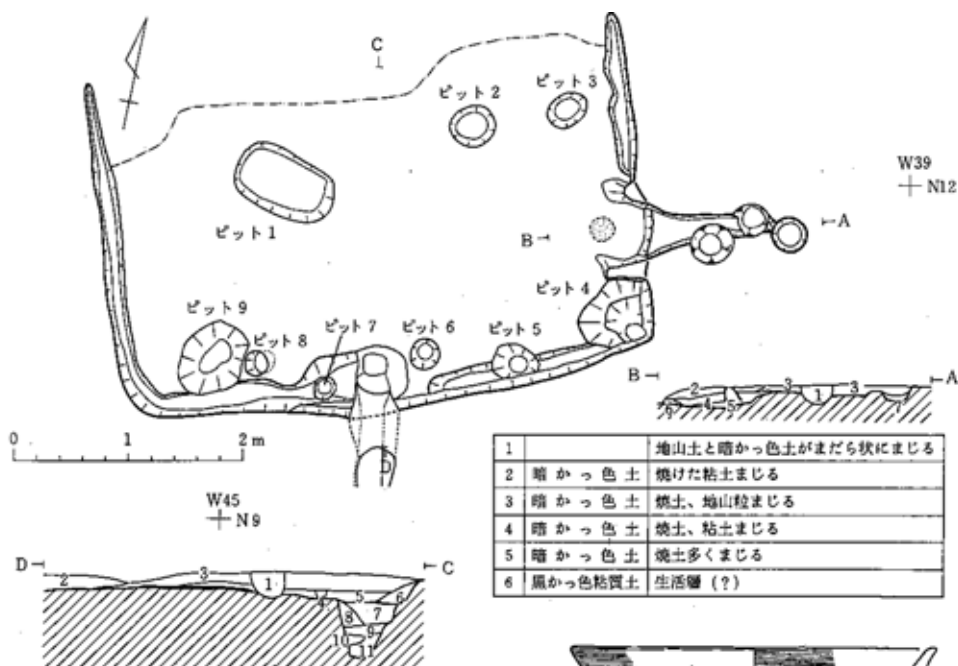
坏（第 34 図 1） 平底のもので、体部が外傾するものである。体部に段、沈線などはみられない。口縁・体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ、異色処理が施されている。外面はヘラミガキの前段階のヘラケズリ、ヨコナデが明瞭でヘラミガキは痕跡的に観察される。底面はヘラケズリである。

甕 口径が器高より大きいもの（第 34 図 2）と、小さいもの（第 34 図 4）とがある。頸部に

第 15 号住居跡ピット

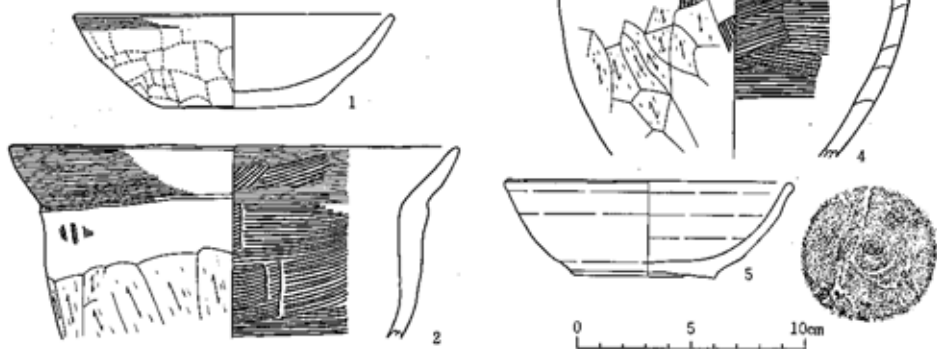
No	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ (cm)	20	19	7	31	20	12	43	40	29

段のみられるもの（第34図2, 4）とそうでないもの（第34図3）とがある。器面調整は、口縁部内外ヨコナデ、体外面ヘラケズリ、内面は刷毛目が施されている。第34図2では、体外面に前段階の刷毛目が施されている。第34図2では、体外面に前段階の刷毛目もわずかに残存しており、またヘラケズリは部分的に口縁部中位まで及んでいるため頸部の段が消されている部分



1	暗かっ色土	かたい、地山粒まじる	7	暗かっ色土	地山ブロックまじる
2		雷轟による横風土	8	暗黄かっ色	よごれた地山土
3	暗かっ色土	地山粒、焼土、木炭やまじる	9		炭化物層
4	暗かっ色土		10	灰白色粘土	ややよごれている
5	暗かっ色土	地山粒、焼土、木炭やまじる	11		よごれた地山土
6	暗かっ色土	地山ブロック多くまじる			

第33図 第15号住居跡



第34図 第15号住居跡出土遺物

もある。

須恵器

坏(第34図4) 体部がやや丸味をおびて立ち上がる器形で、底面にはヘラ切り痕ののち周縁に手持ヘラケズリが加えられている。なお、他に回転糸切り痕を有す底部片が床面上より出土している。

第16号住居跡(第35図)

【遺構の確認、重複】 上位水田面西側で確認された。南辺で第13号住居跡煙道部と重複し同住居より新しく、本住居跡煙出し部が第15号住居跡と重複し同住居より古い。

【平面形、規模】 平面形はやや歪んだ隅丸方形で、その規模は長軸6.1m、短軸6.0mである。

【壁】 地山を壁としている。立上がりはほぼ垂直である。遺存状態は比較的良好で残存壁高は10~25cmほどである。

【床】 極めてかたく、しっかりしておりほぼ平坦である。床中央部には1~2cmの厚さの生活層と考えられるかたい暗褐色土の堆積がみとめられた。なお、13号住居煙出し部分と重複する部分の観察によると、煙出し部堆積土上部には住居掘り方埋土と思われるやや汚れた地山土がみられることから周縁部には掘り方が存在するものと考えられる。

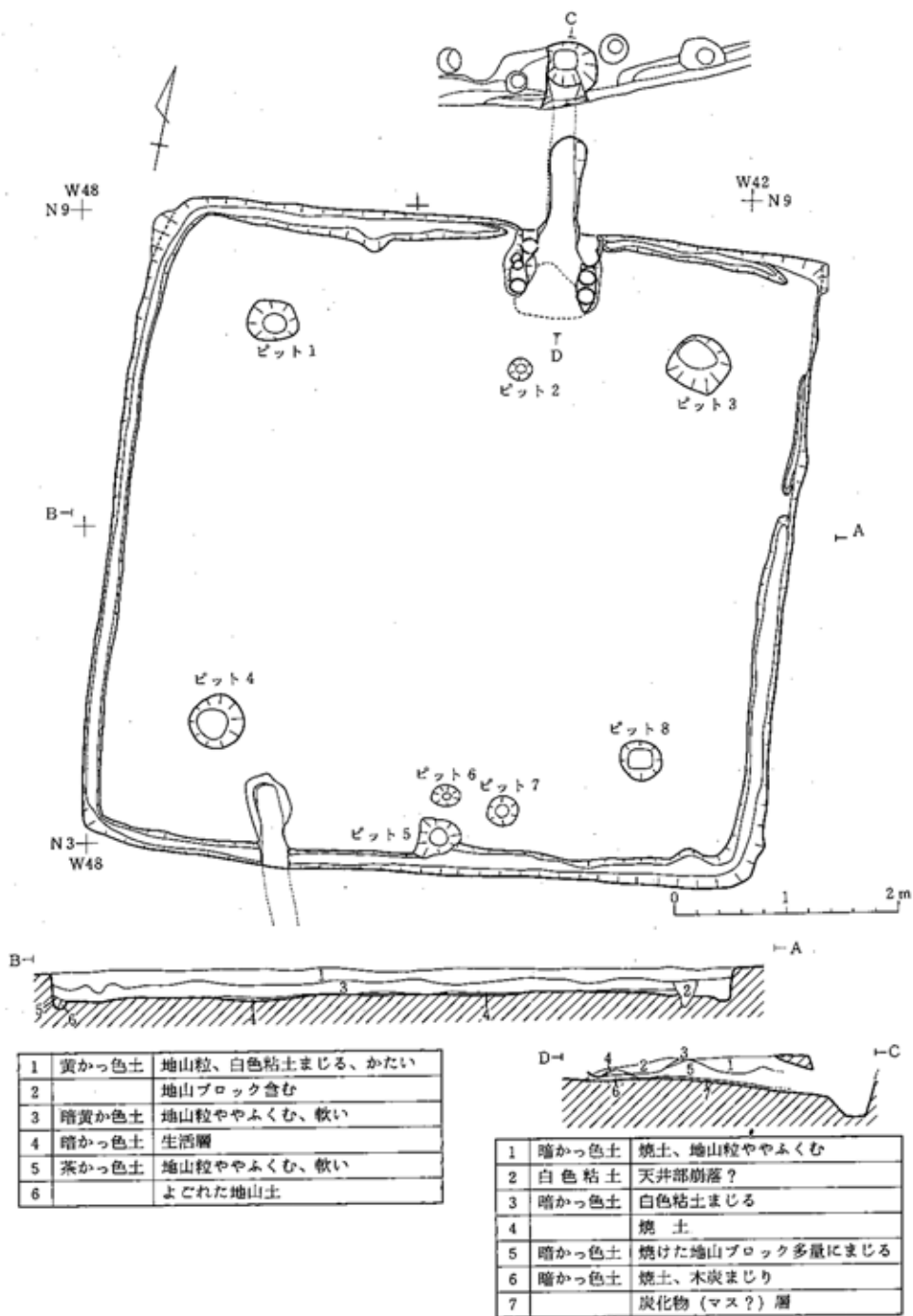
【柱穴】 柱穴と考えられるピットはほぼ対角線上に4個検出された。

【周溝】 カマド部分を除いてほぼ全周するが、北東隅付近で幾分途切れる部分がある。底面はほぼ平坦で幅は5~15cm、床面からの深さは5~15cmである。周溝内の状態についてみると部分的ではあるが床面側の壁に沿って汚れた地山土が埋め込まれたようにみられる部分がある。このことは周溝が排水などのためだけではなく、竪穴壁をおさえるための施設である可能性もあり得ることを示していると考えられる。

【カマド】 北辺中央よりやや東側にとりつけられている。燃烧部両側壁はそれぞれ4個体前後の土師器甕を芯及びオサエとして使用し、粘土によって構築されている。また、内部には天井部崩落と思われる白色粘土の堆積がみとめられた。底面は床面より若干凹んでおり60×50cmの範囲で焼面が検出された。燃烧部から煙道部へは特に段落がなく移行している。煙道部は地山掘り抜きで煙出し部へ向かって若干傾斜しており、煙出し部には燃烧部底面との比高20cmほどのピットが掘りこまれている。カマドの軸方向はN-7°-Wである。

第16号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ(cm)	75	20	86	79	10	30	23	60



第35図 第16号住居跡

〔出土遺物〕 住居に伴うと考えられる遺物としてはカマド側壁に使用されていた土器、カマド内・床面上出土の土器がある。

土師器

坏（第36図1～4） 平底のものと丸底のものがある。

平底のもの（第36図3）は体部外面中央に細い沈線が巡っており、沈線を境として上部にはヘラミガキ、下部は底部までヘラケズリが施されている。なお、沈線は途切れる部分があり全周しない。また、第36図4は丸底に近いものである。体下部から底部にかけてヘラケズリが施されている。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

丸底のもの（第36図1・2）には体部に段が巡るもの（第36図1）、沈線が巡るもの（第36図2）がある。第36図2では沈線は幅広く彫りの深いもので二条みとめられる。器面調整は外面はヘラミガキが施されており、段・沈線以下ではヘラミガキの前段階のヘラケズリの面がみとめられる。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

甕 口径が器高より小さいもの（第36図5～9、第37図1～3）と大きいもの（第37図4・6）とがある。前者はさらに口径がすなわち最大径で長胴形をなすもの（第36図5～9）と体部に最大径をもつもの（第37図1～3）とがある。

長胴形をなすものには器形に大小の別がある。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデであるが、体部外面は軽いケズリ、刷毛目、ケズリ、内面は刷毛目、ヘラナデと各種である。

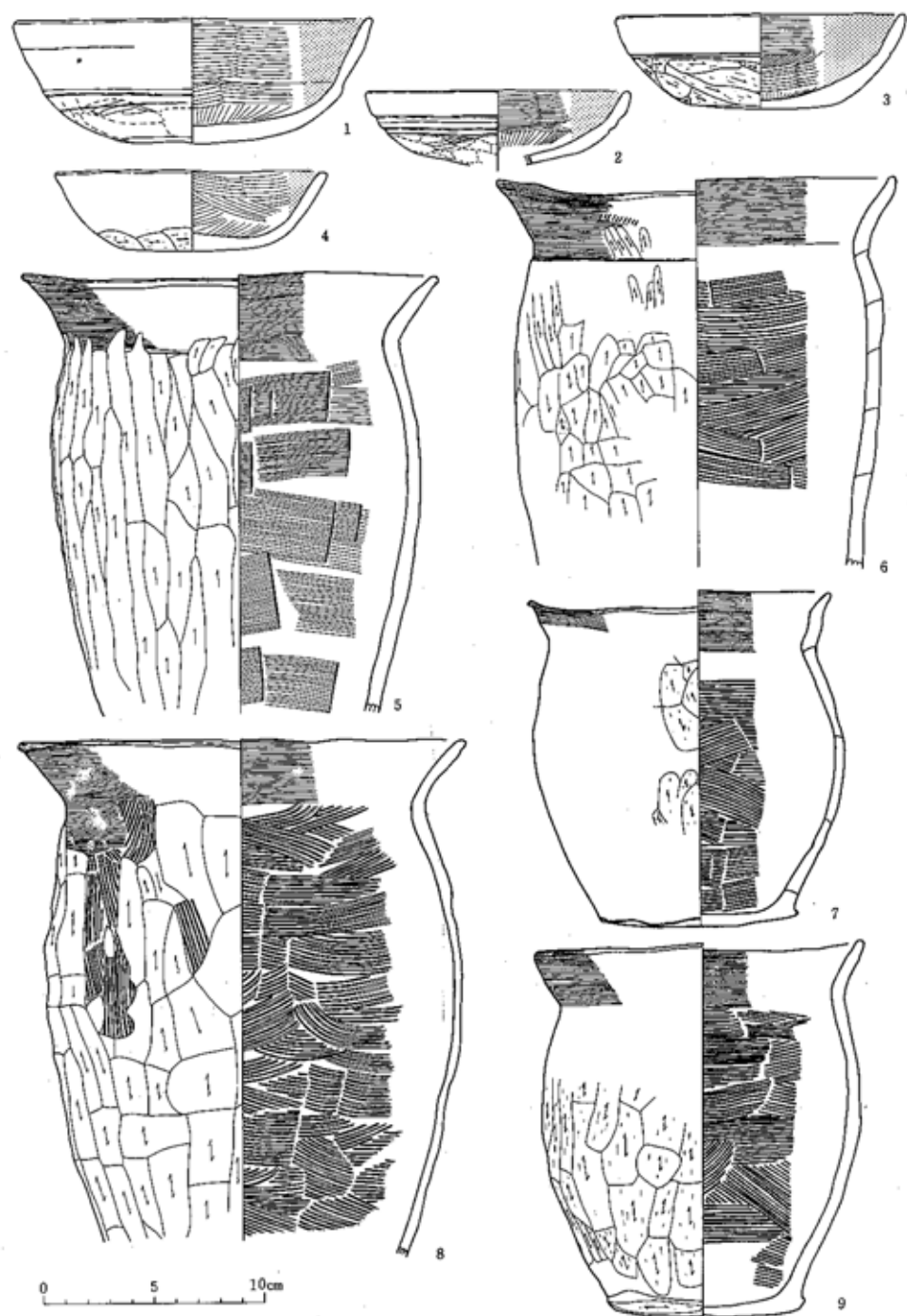
体部に最大径をもつものはその位置がほぼ中央にあり壺形をなすもので、いずれも頸部に段がみられ強く屈曲する。器面調整は口縁部内外面はヨコナデで第37図2では体部外面上部まで及んでいる。体部外面は第37図2・3では横方向のヘラミガキ、第37図1は刷毛目である。内面は第37図3は摩滅のため不明であり、第37図1・2では刷毛目が施されている。なお、外面にヘラミガキの施されている第37図2・3ではその上に丹が塗られており、第37図3ではさらに、口縁部に縦に4本単位の線文が描かれている。

口径が器高より大きいものは、いずれも小型のもので頸部に段があり、口縁部が外傾するもの（第37図4、第38図6）と内傾するもの（第37図6）とがある。前者については摩滅がはげしく、器面調整は不明な点が多いが、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は第37図4は刷毛目、第38図6はケズリで、内面はいずれもヘラナデと思われる。

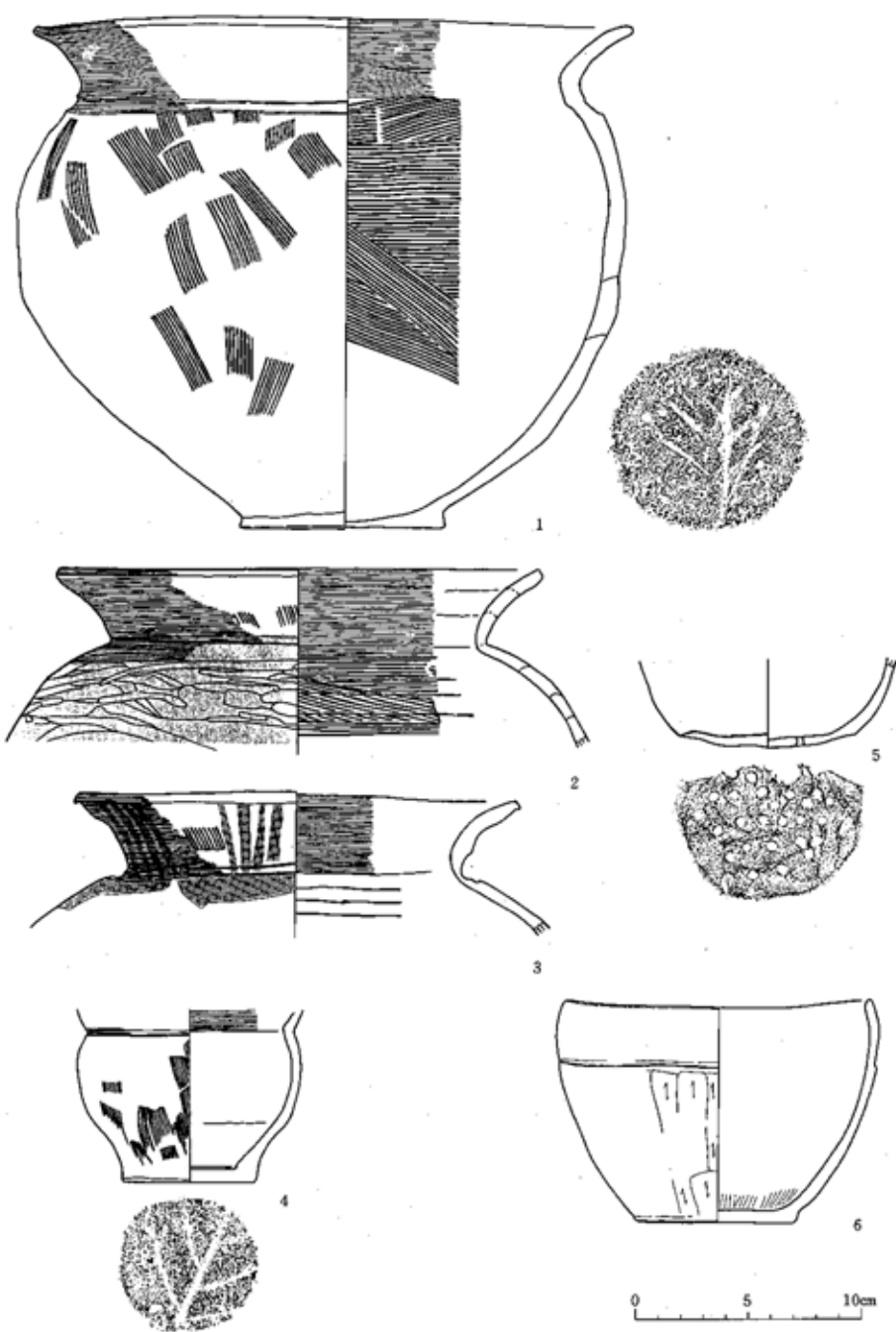
後者（第37図6）は坏または埴に近い器形である。外面は段以上がヘラミガキ、段以下は軽いケズリ、内面はヘラミガキが施されている。底面にはヘラケズリがみとめられる。

甗（第37図5） 底部のみであり器形は不明である。多孔式のもので穿孔は外側からなされている。器面調整は摩滅のため明らかでないが底部外面にはヘラケズリが施されている。

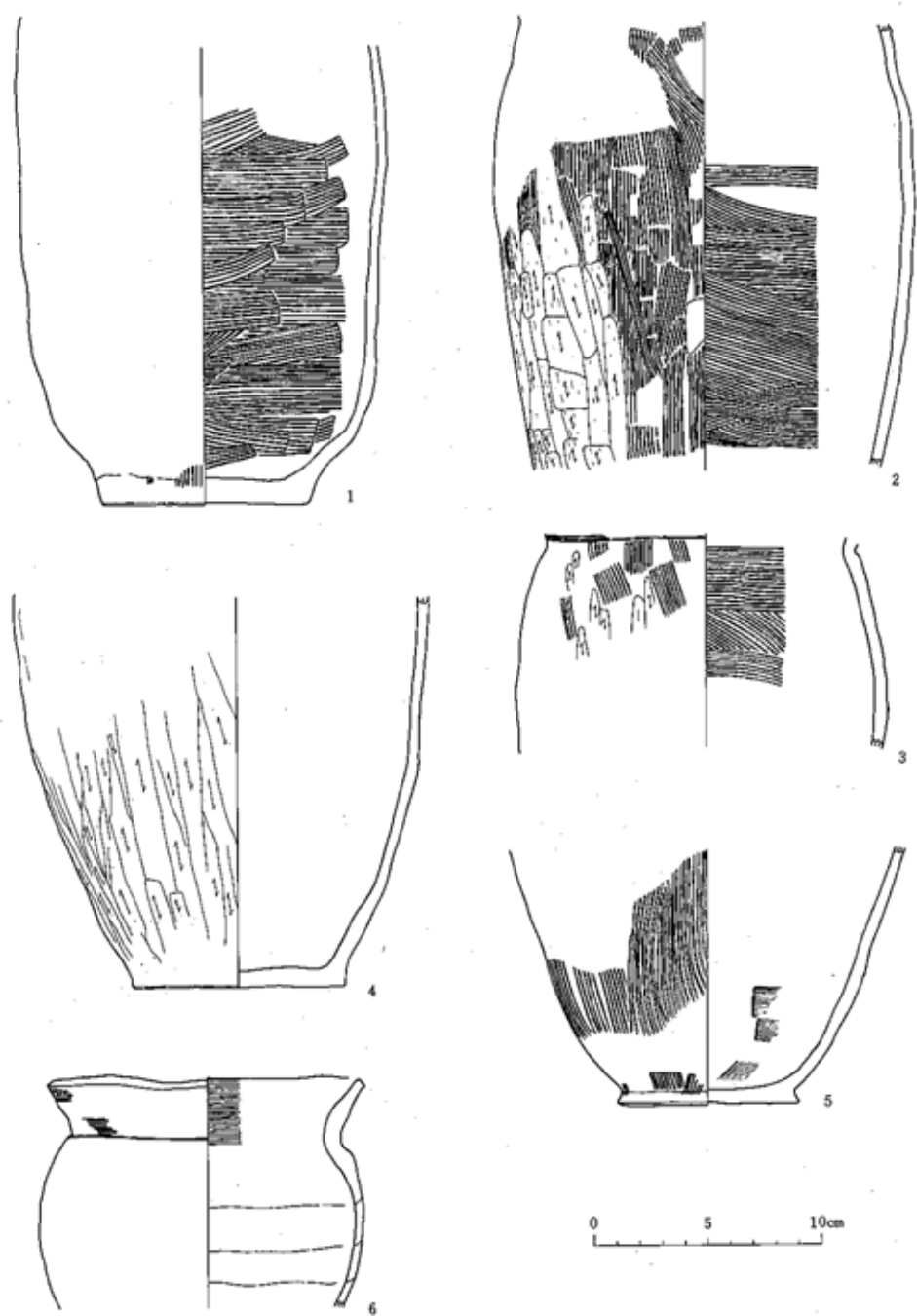
須恵器



第36图 第16号住居跡出土遺物



第37图 第16号住居跡出土遺物



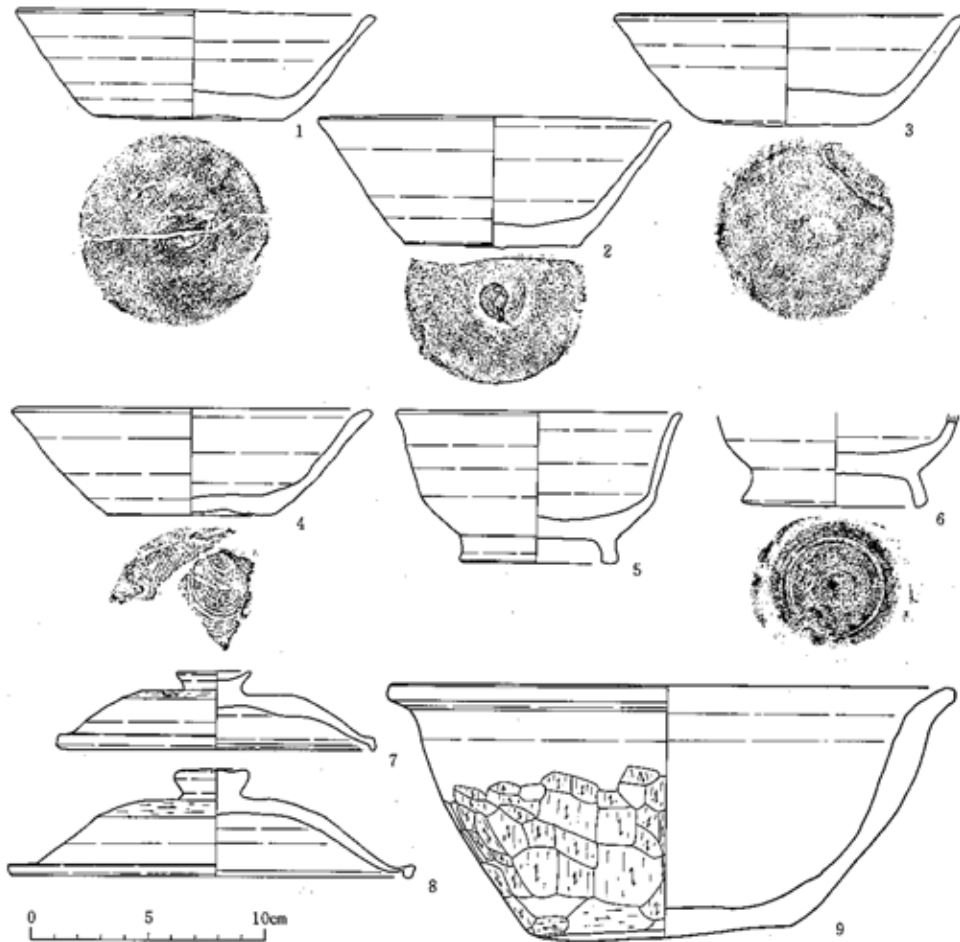
第38图 第16号住居跡出土遺物

坏（第 39 図 1～4） 口縁部、体部がほぼ直線的に外傾する。底部切り離し技法がヘラ切りのもの（第 39 図 1～3）と回転糸切のもの（第 39 図 4）とがあり、第 39 図 1 はヘラ切りののち底部全面に手持ヘラケズリが加えられている。

高台付坏（第 39 図 5・6） 体下部で屈曲するものであるが、稜はあまり顕著なものではない。高台もさほど外方へ張り出さず第 39 図 5 では垂直に近い。底面にはヘラ切り痕がみとめられる。

蓋（第 39 図 7・8） 口縁部は垂直またはやや内方に折り曲げられてつくられている。天井部外面には回転ヘラケズリ痕がみられる。つまみは宝珠形のものであるが第 39 図 8 では中央部が周縁部とほぼ同じ高さであり、第 39 図 7 では周縁部より低くつくられている。

鉢（第 39 図 9） 幾分焼けひづみがみられる。口縁部はやや外方に折り曲げられてつくられて



第39図 第16号住居跡出土遺物

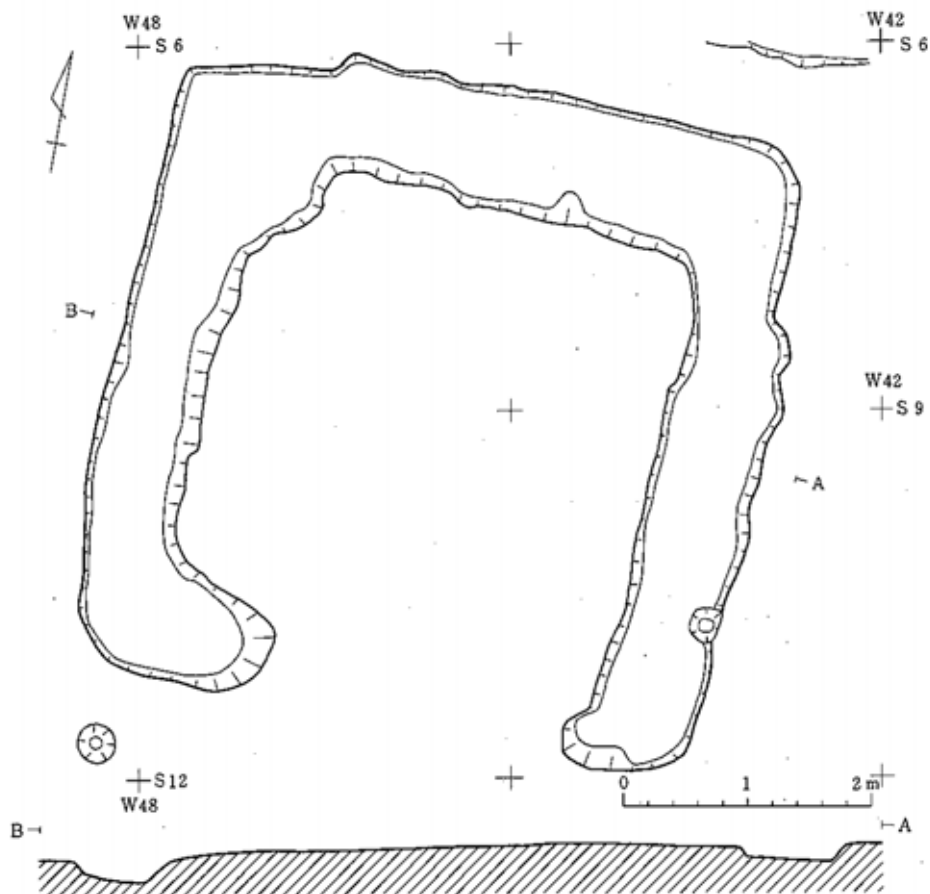
おり端部は丸くおさめられている。体部はやや丸味をもって底部へ至る。体部外面下部にはヘラケズリが施されている。底面は摩滅のため不明である。

第17号住居跡(第40図)

【遺構の確認、重複】 上位水田面西側において確認された。壁・床面・カマドなどは削平により失われており、住居掘り方のみによる確認である。柱穴と考えられるピットも検出されなかった。掘り方は幅70~80cm、確認面からの深さ約30cmほどで帯状に巡っているが南辺にはみとめられなかった。

【平面形、規模】 平面形は掘り方によると軸長5.1m前後の隅丸方形と推定される。

【出土遺物】 遺物は出土していない。



第40図 第17号住居跡

第 18 号住居跡（第 41 図）

【遺構の確認、重複】 上位水田面西側で確認された。拡張が行なわれたと考えられる住居跡である。

【平面形、規模】 当初の平面形は長軸 4.8m、短軸 4.4mのほぼ方形であるが、それを北側へ 50 cmほど拡張している。

【壁】 かなり削平を受けており、残存壁高は 2～10 cmである。南辺部が比較的残存している。

【床】 住居中央部では地山を床としている。拡張前の住居では南・北辺に住居掘り方がみとめられ、その部分では掘り方埋土を床面としている。床面上には生活層と考えられるかたい黒褐色土が薄くみとめられた。拡張部の床面は地山をそのまま床としている。

【柱穴】 配置の規則性や深さから柱穴と考えられるピットは、住居北半床面上の 2 個（ピット 3・4）と南壁を掘り込んでいる 2 個である。また、拡張部に伴うと考えられるピットも北壁両端北壁西部に計 3 個検出された。なお、床面上の 2 個のピットが住居拡張後も柱穴として機能していたかどうかは不明である。

【周溝】 拡張後の住居において、東辺南部を除いてほぼ全周する。底面幅 5～10cm、床面からの深さは 6～15cm ほどである。この周溝は拡張前住居の北壁にはみとめられず、また拡張後住居のカマドと考えられる部分で途切れることから、拡張に伴い新たに掘り込まれたものと考えられる。

【カマド】 拡張前のカマドは北壁中央部にみとめられる。燃焼部は拡張の際にとり払われたものと思われ、煙道部と煙り出し部のみが残存する。煙道部は底幅が 40 cmと広く内部に白色粘土の堆積がみとめられる。第 3 号住居跡の煙道と同じく内壁に粘土を貼って構築されていたものと考えられる。煙り出し部には煙道底面との比高約 50cm のピットが掘り込まれている。軸方向は N - 9° - E である。拡張後のカマドは東辺南側にとりつけられている。削平のため燃焼部はほとんど残っていない。わずかに左側壁前端部にオサエとして使用されたと思われる粘土の付着した土師器甕の口縁部が遺存していた。底面には 70×60 cmの範囲で焼面がみとめられる。煙道は確認されず住居壁から 1.5m離れて煙出し部と考えられるピット（ピット 9）が検出された。

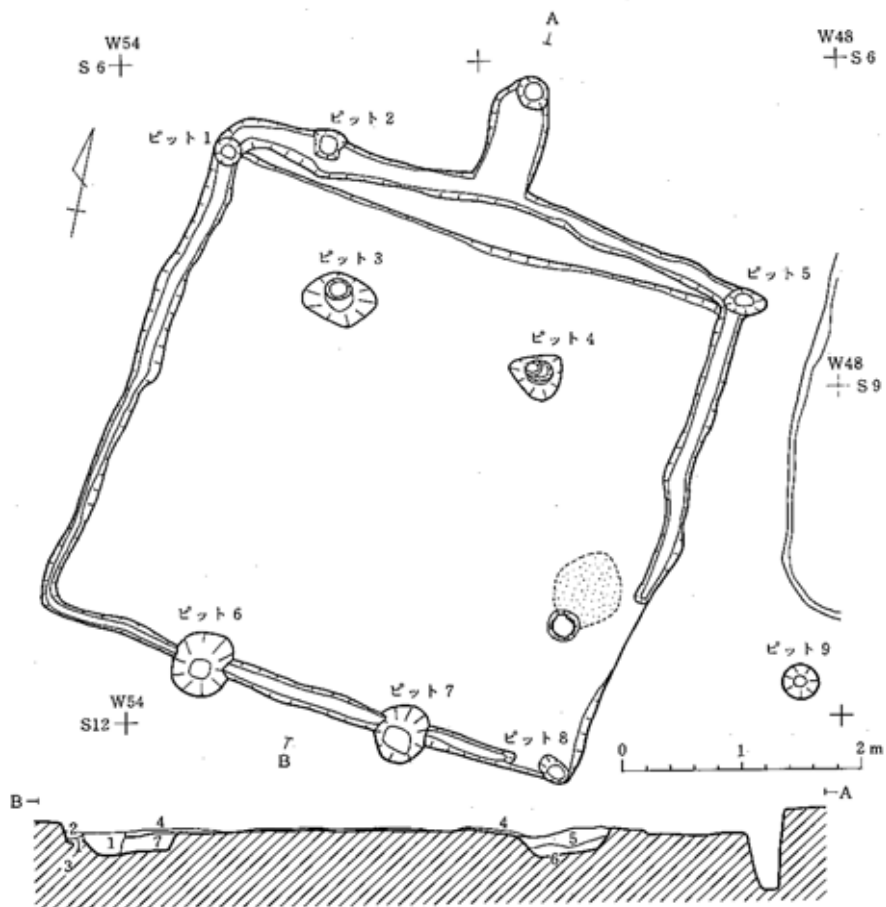
軸方向は N - 99° - S である。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物には、カマド側壁に使用したと思われる土器、床面上出土の土器がある。

土師器

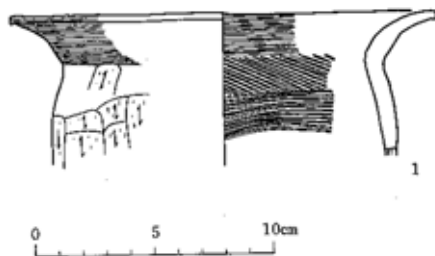
第 18 号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ (cm)	16	28	52	54	28	85	88	8	13



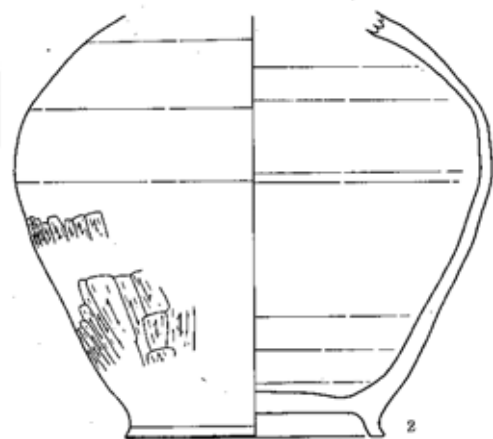
1	黒っぽい色土	焼土、木炭、地山粒をややふくむ、攪乱土
2	黒っぽい色土	かたくしまっている
3	茶っぽい色土	かたくしまっている
4	黒っぽい色土	生活層
5	暗っぽい色土	かたい、地山粒をややふくむ、住居掘方埋土
6	黒っぽい色土	やわらかい、地山ブロックを多くふくむ、住居掘方埋土
7		よごれた地山土

第41図 第18号住居跡



0 5 10cm

第42図 第18号住居跡出土遺物



甗(第42図1) 現存するのは体部上半以上のみであるが、口径が器高より小さい長胴形のものと思われる。頸部に段・沈線などはみられない。口縁部は外反し端部は平坦である。口縁部内外にヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、体部内面には刷毛目調整が施されている。

須恵器

壺(第42図2) 体部以下のみ現存している。倒卵形の体部で高台が付せられている。内外とも口縁調整ののち外面体下部にヘラケズリが施されている。

第19号住居跡(第43図)

【**遺構の確認、重複**】 上位水田面西端において確認された。住居西半部は後世の開田により失われている。

【**平面形、規模**】 東辺、北・南辺の一部が残存するのみで、平面形、規模ともに明らかでない。東辺の長さは2.2mほどであり小形の住居と推定される。

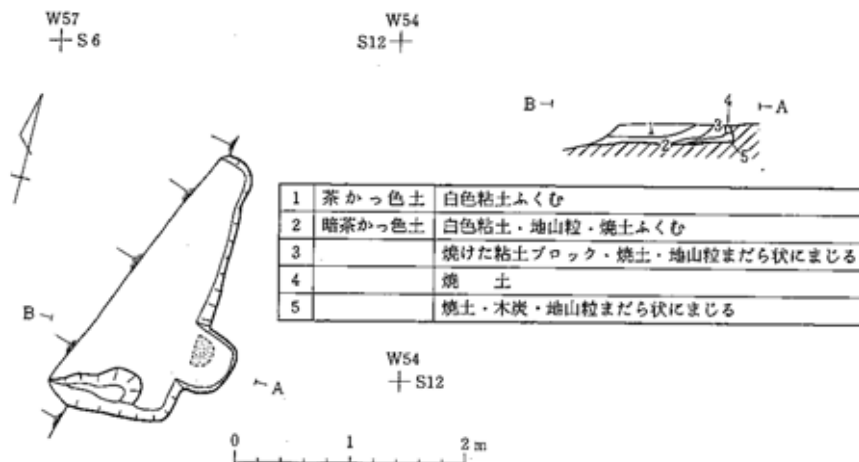
【**壁**】 地山を壁とし、立ち上がり角度はややゆるやかである。

【**床**】 地山を床としている。極めてかたい。

【**柱穴**】 柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

【**カマド**】 東辺南部にみとめられる。住居壁を約0.5mほどの幅で約0.4m掘り込みカマドとしている。煙道と考えられる施設は確認されなかった。燃烧部底面には15×25cmほどの焼面がみとめられ側壁・奥壁は火熱のため赤化している。なお、燃烧部内部には白色粘土の堆積がみられ、天井部は粘土によって構築されていたと考えられる。

【**出土遺物**】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の遺物がある。しかし、床面上より出土したのは須恵器甗底部(台付)1点のみで、それも小片のため図示できない。



第43図 第19号住居跡

第21号住居跡（第47図）

【遺構の確認、重複】 中位水田面東端において確認された。開田に伴う削平工事のため住居北西部は失われている。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形で、規模は長軸7.8m、短軸7.2mほどである。

【壁】 地山を壁としている。立ち上がりは垂直に近く、壁には多数のピットが掘りこまれている。

【床】 開田工事などによる攪乱が床面下までかなり及んでいる。このため、住居周縁部において住居掘り方埋土と攪乱土を区別することが困難であった。確実に床面を認定できた部分はわずかである。地山を床としており非常にかたい。床面はほぼ平坦である。

【柱穴】 住居内部で柱穴と考えられるピットは発見されなかったが、壁に20個以上のピットが掘り込まれており、これらが柱穴と考えられる。

【周溝】 カマド部分を除いてほぼ全周する。底面幅は5~10cm、床面からの深さは10cmほどである。

【カマド】 北辺中央部にみとめられる。削平、攪乱のため燃焼部はほとんど残存しない。底面と考えられる部分に30×50cmの範囲の焼面だけが検出された。煙道部も先端部が削平されており、80cmほどの長さで確認されたにすぎない。軸方向はN-15°-Eと考えられる。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物は床面上出土の土器である。

土師器

坏（第44図1） 丸底のものと思われる。体部ほぼ中央に沈線が二条巡っている。内外面ともヘラミガキが施されており、外面沈線以下には前段階のヘラケズリの面がみとめられる。

須恵器

坏（第44図2） 体部、口縁部はほぼ直線的に外傾している。全体にかなり摩滅しているが底面にはわずかにヘラ切痕が観察される。



第44図 第21号住居跡出土遺物

第22号住居跡（第45図）

【遺構の確認、重複】 中位水田面西側で確認された。住居北東部の一部がごく最近の攪乱層によって乱されている。

【平面形、規模】 長軸3.9cm、短軸3.6cmほどである。平面形は北辺が南辺より幾分長い

やや台形に近い隅丸方形である。

【壁】 地山を壁としている。残存壁高は10 cm前後である。

【床】 地山を床としている。床面はほぼ平坦で、中央部に2 cmほどの厚さで生活層と考えられる黒色土の堆積がみとめられた。

【柱穴】 住居内において柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

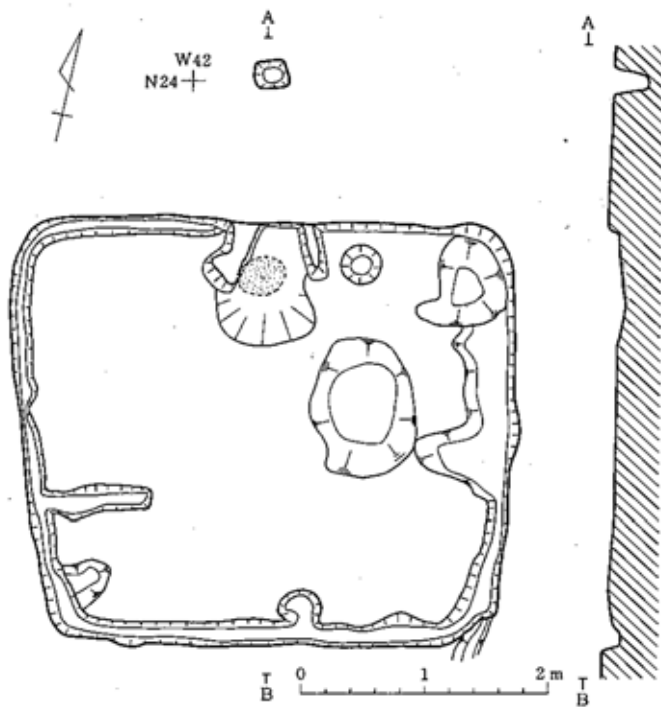
【周溝】 カマド部分及び北壁カマド右側を除いて巡っている。東辺北部は攪乱のため不明である。断面はU字形で底面幅は5~10 cm、床面からの深さは3~6 cmと浅い。

【カマド】 北辺中央にとりつけられている。燃焼部側壁は粘土によって構築されている。底面は床面よりわずかに低く、最深部に40×30 cmの範囲で焼面がみとめられた。奥壁には7 cmほどの段が遺存している。煙道部は削平のため失われており、奥壁より1.2 m離れて煙出し部のピットのみが検出された。軸方向はN - 15° - Wである。

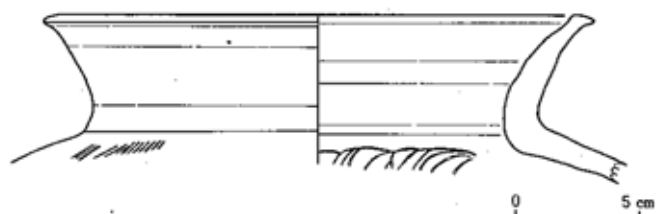
【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の土器がある。

須恵器

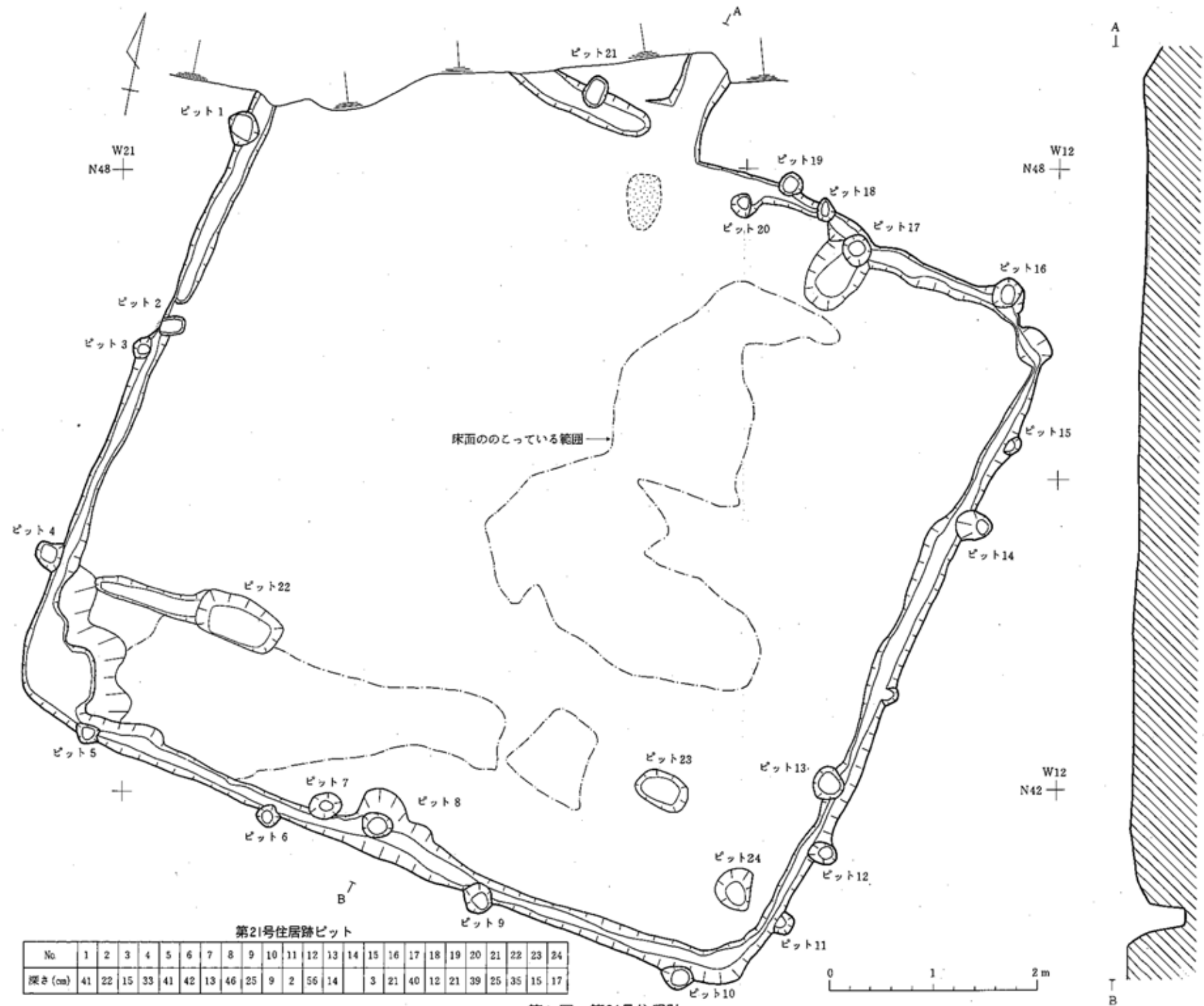
甕(第46図) 肩部以上の破片である。口縁部はほぼまっすぐに外傾し、端部外面がやや外方にのびてやや広い平坦面がつくられている。体部は外面に平行タタキ目、内面には青海波文がみとめられる。



第45図 第22号住居跡



第46図 第22号住居跡出土遺物



第47図 第21号住居跡

第 23 号住居跡（第 49 図）

【遺構の確認、重複】 中位水田面中央部において確認された。北西隅において第 24 号住居跡と重複するが、接する程度の重複関係のため、新旧関係は明らかにできなかった。また、東辺中央部は攪乱のため失われている。

【平面形、規模】 軸長 3.5m ほどの隅丸方形である。

【壁】 地山を壁としている。残存壁高は 10 cm ほどである。

【床】 地山を床としている。床面はかたく平坦である。

【柱穴】 住居内において柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

【周溝】 西壁南半部にのみみとめられる。底面幅 5 cm、床面からの深さは 8 cm ほどである。かなり部分的にみられるものであり、周溝といえるかどうか疑問である。

【カマド】 北辺ほぼ中央部にとりつけられている。燃焼部側壁は粘土によって構築されており、底面には 40×30 cm の範囲の焼面がみとめられた。燃焼部奥壁は高さ約 6 cm であり、この部分で煙道部へ移行する。煙道部は長さ約 1.3m ほどで、底面は燃焼部へ向かって傾斜している。煙出し部には煙道部底面との比高約 15 cm のピットがある。軸方向は N - 35° - W である。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の土器がある。

土師器

坏（第 48 図 1） 平底の坏である。体部外面ほぼ中央に明瞭な段が巡っている。段を境として上部にはヘラミガキ、下部は底面までヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理である。

蓋（第 48 図 2） つまみ部は欠損している。天井部から明確な区切りはないが角度をもって口縁部へ移行している。外面にはヘラミガキが施され、つまみ基部には前段階の調整に伴うと思われるヘラあたりの痕跡がかすかにみとめられる。内面は口縁部はヨコナデ、天井部には雑なナデが施されている。また、内面は黒色を呈している。

甕 口径が器高より小さいもの（第 50 図 1~4）と、大きいもの（第 50 図 5・6）とがある。前者には大形の長胴形をなすものと、小型のものがある。長胴形をなすものは頸部に段が巡り口縁部はやや外反している。器面調整はいずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は軽いケズリ、内面は刷毛目が施されている。また、体部外面には前段階の刷毛目やヘラケズリが観察される。小形のものには頸部に段・沈線などはなく、なだらかに口縁部へ移行している。摩滅・剥落が著しく、器面調整はほとんど不明であるが、内面口縁部にヨコナデ、体部下端に刷毛目がわずかにみとめられる。

口径が器高より大きいものも、いずれも頸部に段がみとめられ口縁部と体部が区画されている。体部は上端に最大径があり、ほとんど屈曲なく底部へ至る。器面調整の違いにより二者が

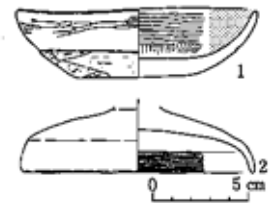
ある。第50図6は口縁・体部内外面ともヘラミガキが施され、内面にはさらに黒色処理がなされ、外面体部下端及び底面にはヘラケズリがみとめられる。他のもの(第50図5)は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリまたは体部上半刷毛目、下半ヘラケズリ、内面刷毛目のものでヘラミガキは施されない。

甑(第50図8) 無底式のもので体部は屈曲なく外傾している。口縁部と体部には器形上の区切りはみとめられず、器面調整による違いがある。口縁部内外面はヨコナデが施され、体部外面は主に口縁部へ向かってのヘラケズリ、内面には刷毛目が施されている。

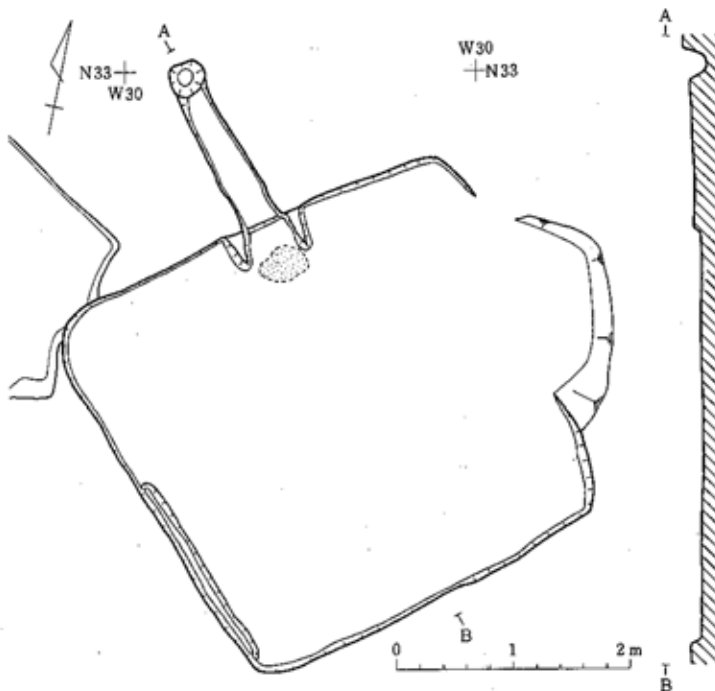
第50図7は小片のため全体の形は不明であるが、口縁部形態よりみて甑と考えられるものである。

須恵器

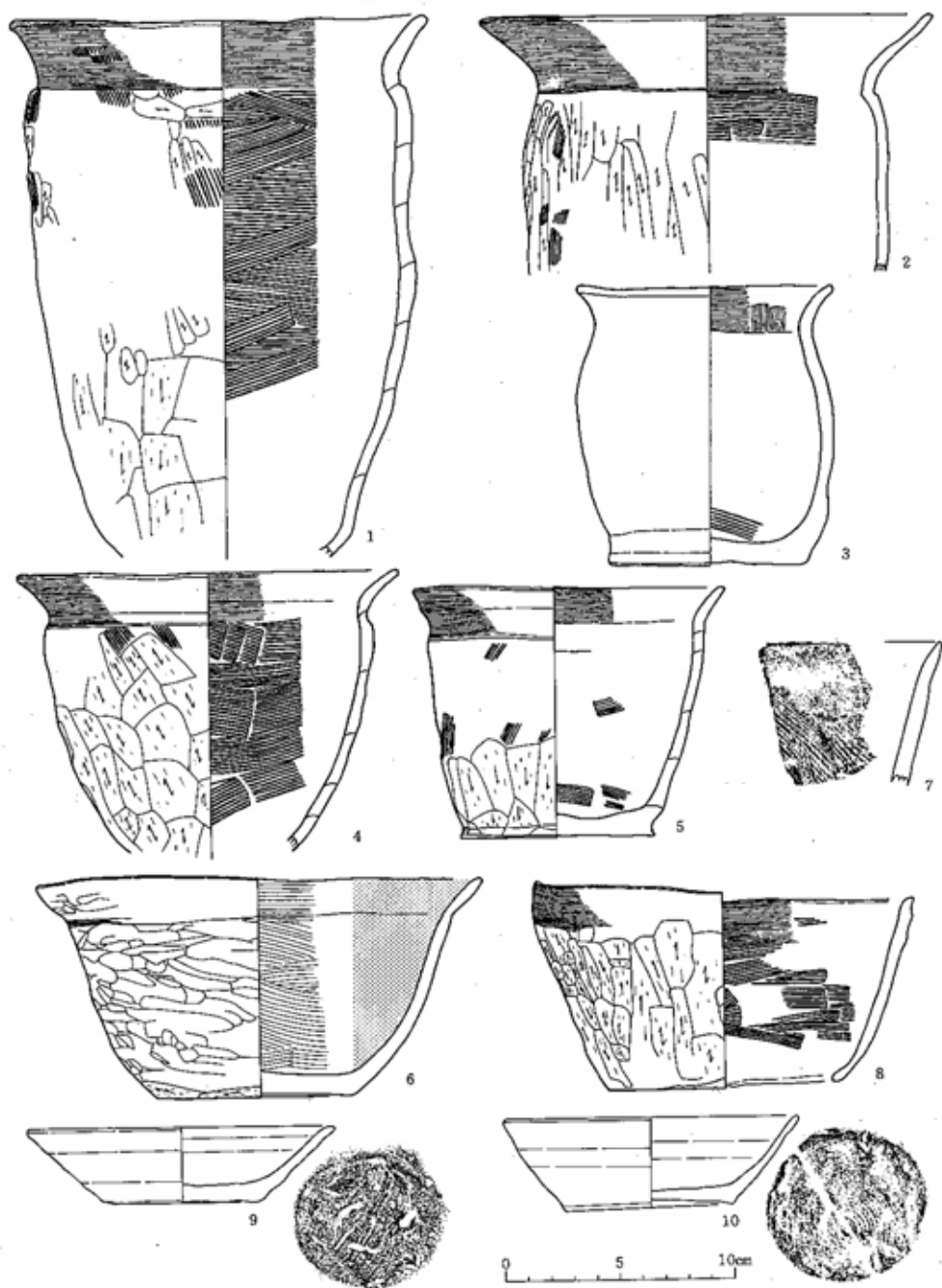
坏(第50図9・10) 体部から口縁部へかけて直線的に外傾する器形である。底部切り離し技法が、口転系切りのもの(第5住10)と、ヘラ切りのものでその後底全面に手持ヘラケズリが加えられているもの(第50図9)とがある。



第48図 第23号住居跡
出土遺物



第49図 第23号住居跡



第50图 第23号住居跡出土遺物

第24号住居跡（第51図）

【遺構の確認、重複】 中位水田面中央部において確認された。南辺東部において第23号住居跡と重複しているが新旧関係は不明である。また、北西部で第25号住居跡と重複することは明らかであるが削平のため新旧関係は不明である。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形である。規模は西辺が失われており不明である。東辺長は約2.6mであり、小形の住居跡である。

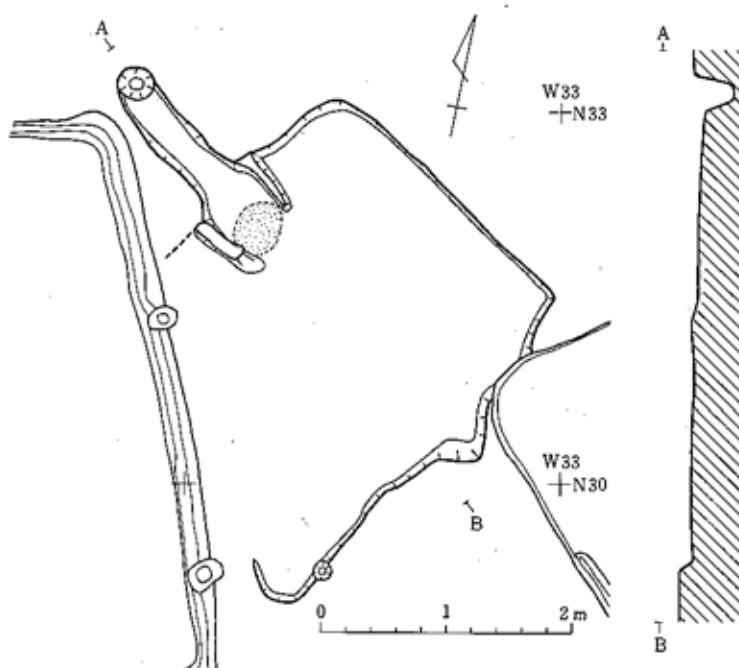
【壁】 地山を壁としている。残存壁高は4～10cmである。

【床】 地山を床としている。ほぼ平坦である。

【柱穴】 住居内において柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

【カマド】 北辺にとりつけられている。燃烧部側壁は粘土によって構築されている。底面は床面よりいく分凹んでおり、50×40cmの範囲で焼け面が認められた。燃烧部底面から煙道部へは特に区画なく移行しており、煙道部底面は煙出し部へ向って傾斜している。煙出し部には煙道底面より約20cm低いピットが掘りこまれている。軸方向はN-51°-Wである。

【出土遺物】 遺物は全く出土していない。



第51図 第24号住居跡

第 25 号住居跡（第 52 図）

【**遺構の確認、重複**】 中位水田面中央部で確認された。カマド部分が攪乱のため一部失われている。

【**平面形、規模**】 平面形は隅丸方形で、その規模は長軸 5.3m・短軸 5.1mほどである。

【**壁**】 地山を壁としており、立ち上がりはゆるやかである。東辺に数個のピットがみとめられる。残存壁高は 10～25 cmほどである。

【**床**】 地山を床としている。ほぼ平坦であり、かたい。

【**柱穴**】 住居内においてほぼ対角線状に位置するピット 1・4・5・7 の 4 個が発見された。これらは床面からの深さも 50 cm前後と近似しており、本住居の柱穴と考えられる。また、この他に東辺に 2 個、南辺東部に 1 個小ピットが検出されたが、このピットが 21 号住居跡同様壁柱穴となり得るかどうかは不明である。

【**周溝**】 カマド部分を除き全周している。底面はほぼ平坦で底面幅は約 10 cm、床面からの深さは 5～10 cmである。

【**カマド**】 北辺ほぼ中央にとりつけられている。燃焼部側壁は粘土によって構築されており底面には 50×50 cmの範囲で焼面がみとめられた。燃焼部内部には天井部崩落によると思われる白色粘土の堆積がみられた。燃焼部底面から煙道部へは、特に区画なく移行しており、煙道部底面は先端部へ向かって傾斜している。煙道部内にも白色粘土の堆積がみられた。煙出し部には煙道部底面との比高約 20 cmのピットが掘りこまれている。軸方向は N - 19° - Wである。

【**出土遺物**】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の遺物がある。

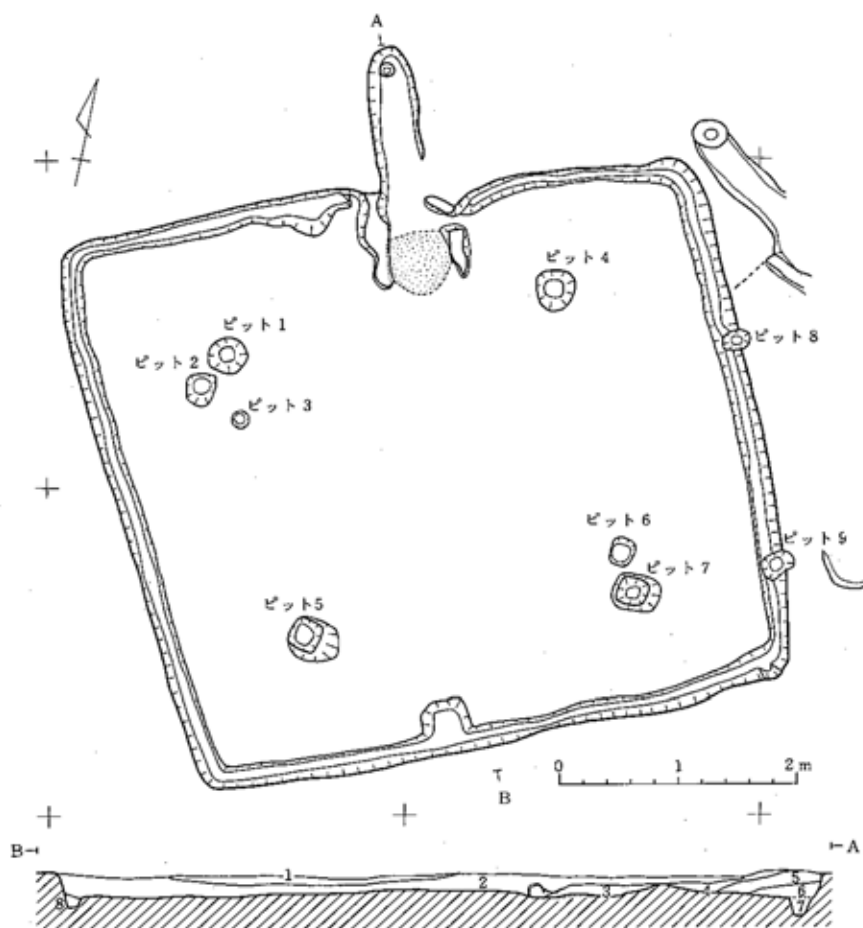
土師器

坏 丸底のもの（第 53 図 1・2・4）と平底のもの（第 53 図 3）とがある。丸底のものには体下部に段の巡るもの（第 53 図 1・4）と沈線の巡るもの（第 53 図 2）とがある。沈線は全周していない。外面の調整は、段の巡るものでは段を境として以上がヘラミガキ、以下にはヘラケズリが施され、沈線の巡るものでは、全面ヘラミガキである。なお第 53 図 4 は摩滅のため明らかでない。

平底のものでは、段・沈線はみとめられず全面ヘラミガキが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

第 53 図 5 は体部下半以下が欠損しているが、器高が高く口縁部が内弯気味で壺形のものである。器面調整は摩滅のため不明な部分もあるが、内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色処理が加えられている。

高坏（第 53 図 6） 丈が低く外方へ開いた脚部を有するものである。坏部体下部には埴段が巡っており、坏部外面の段以上にはヘラミガキが施されている。坏部外面体下部および脚部附属は

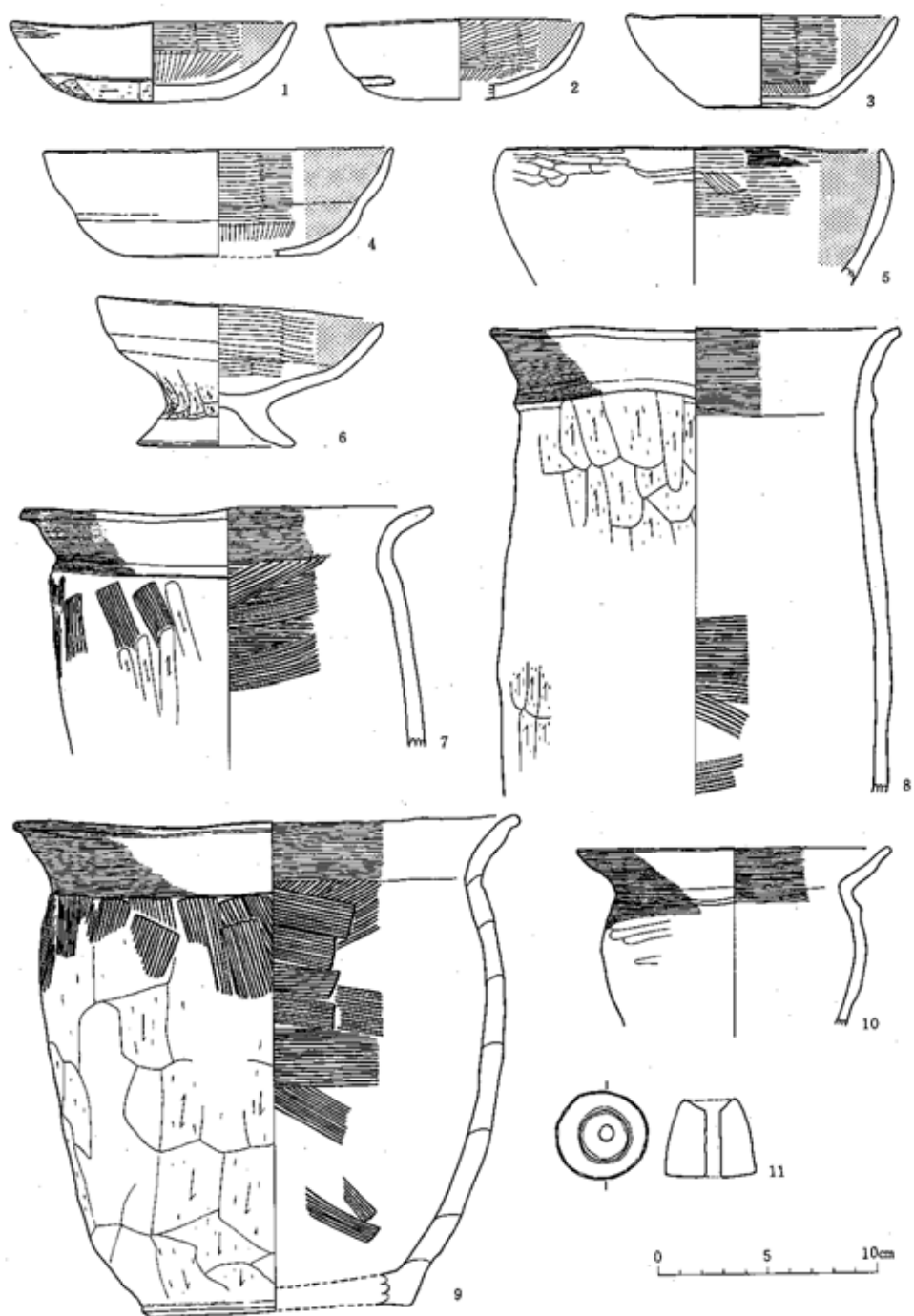


1	茶かっ色土	地山粒・白色粘土・焼土粒点在
2	茶かっ色土	
3	暗かっ色土	白色粘土ブロック多くまじる
4	暗かっ色土	焼土が多量に、木炭・白色粘土が若干まじる
5		白色粘ブロックにやや暗かっ色土まじる
6	黒かっ色土	炭化物多い、やわらかい
7	暗かっ色土	地山粒点在
8	黒色土	やわらかい

第25号住居跡ビット

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
深さ (cm)	66	15	14	73	64	15	66		26

第52図 第25号住居跡



第53圖 第25号住居跡出土遺物

摩滅のため調整は不明である。坏部と脚部の接合部には脚部から坏部へ方向へヘラケズリがみられる。内面の調整は、坏部ではヘラミガキ・黒色処理であるが、脚部は不明である。

甕 口径が器高より小さいもの（第53図7~9）と大きいもの（第53図10、第54図1・2）とがある。

前者は長胴形をなすもので、頸部に段が巡っており口縁部が強く外反・外傾するもの（第53図7・9）と、体部からなだらかに移行し口縁端部がやや外反するもの（第53図8）とがある。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はケズリまたは軽いケズリ、内面には軽いケズリが施されている。第53図7・9では体部外面上部に前段階のハケ目が観察される。

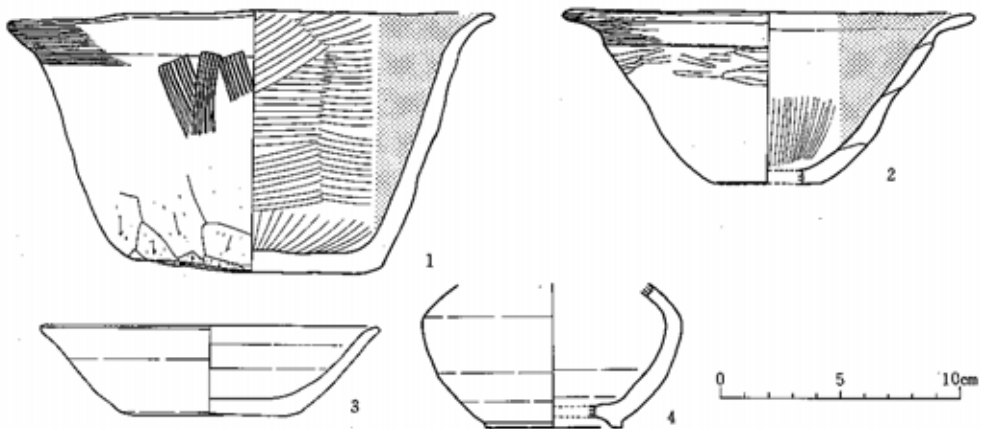
後者においても、頸部に段が巡っているが、体部が球形にはり出す壺形のもの（第53図10）と、ゆるやかに底部を移行する鉢形のもの（第54図1・2）との別がある。器面調整は壺形のものでは、口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は不明である。また、鉢形ものは、外面は口縁部ヨコナデ・体部刷毛目のちケズリのもので、全面ヘラミガキのものがあるが、内面はヘラミガキ・黒色処理と共通している。

須恵器

坏（第54図3） 体部が直線的に外傾し、口縁部が若干外方へ折れ曲がる器形である。底面は手持ヘラケズリ再調整が加えられており、切り離し技法は不明である。

壺（第54図4） 口縁部が欠損している小形壺である。低い高台がつけられ、内外面とも口縁調整である。

紡錘車（第53図11） 土製のものである。表面はかなり摩滅しているが、側面に部分的にヘラミガキが観察される。



第54図 第25号住居跡出土遺物

第26号住居跡（第55図）

〔遺構の確認、重複〕 中位水田面中央部で確認された。

〔平面形、規模〕 平面形は方形で軸長は3.7mほどである。

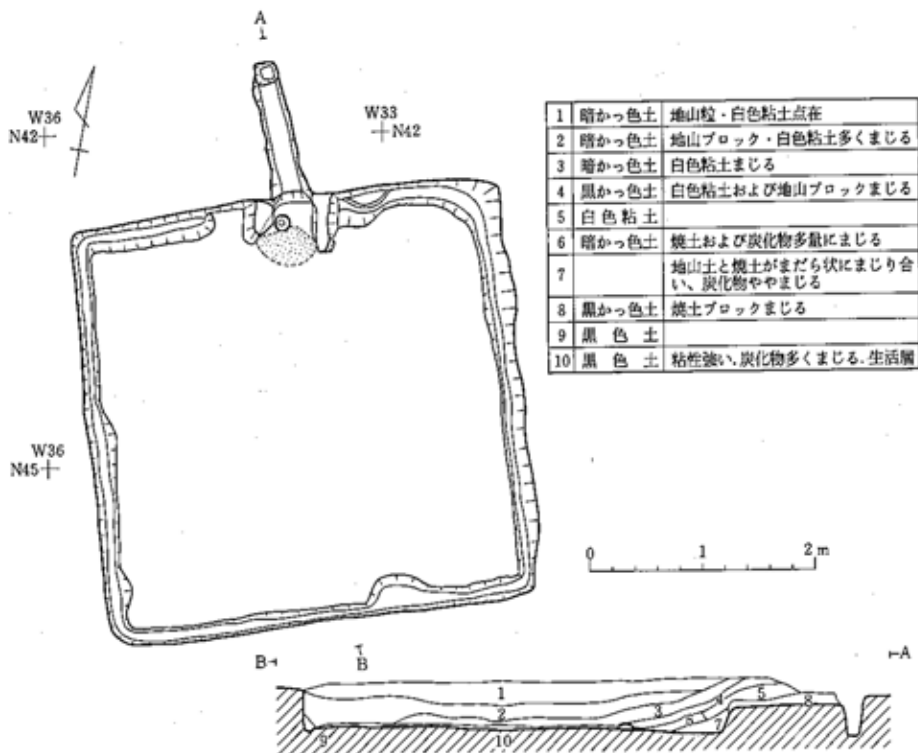
〔壁〕 地山を壁としている。東辺ではややゆるやかであるが、他はほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は30cmほどあり、遺存状態は比較的良好である。

〔床〕 地山を床としている。南東部が若干高いがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 住居内において柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

〔周溝〕 カマド部分を除き全周する。底面は平坦で幅は5~10cm、床面からの深さは5~10cmである。

〔カマド〕 北辺中央部にとりつけられている。燃烧部側壁は粘土によって構築されており、両側壁には芯や前端のオサエのために土師器甕が使用されている。底面には50×40cmの焼面が検出された。また、内部には天井部崩落によると思われる白色粘土の堆積がみとめられた。焼け面の奥の部分に接して支脚として使用したと思われる土師器甕体下半部が倒位の状態で発見された。燃烧部奥壁は20cmほどのかなり高い段となって煙道部へ移行している。煙出部には煙



第55図 第26号住居跡

道部底面より約20cm低いピットが掘りこまれている。軸方向はN - 33° - Wである。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物としては、カマド側壁に使用した土器、支脚として使用した土器、カマド内・床面上より出土した土器がある。

土師器

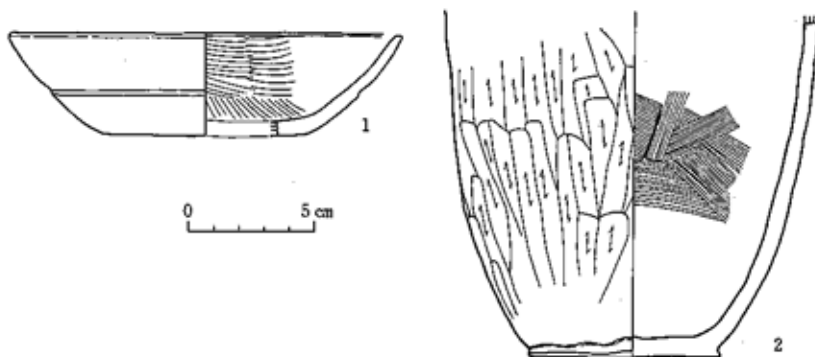
坏 (第56図1) 平底のもので、体部外面中央に段が巡っている。器面調整は内外面ともにヘラミガキが施されている。内面には黒色化は認められないが、カマド内出土のものであり、再酸化のため脱色したものととも考えられる。

甕 (第57図1~5) いずれも口径が器高より小さいか、ほぼ等しいもので、大形で長胴形をなすもの(第57図1~3)と、小形のもの(第57図4・5)とがある。長胴形のものには、頸部に段が巡るものとそうでないものがある。口縁部は外傾またはやや外反する。器面調整は、口縁部内外面ともヨコナデがみられ、体部外面は刷毛目のみ、刷毛目のち軽いケズリ、軽いケズリのみのものである。内面はいずれも刷毛目が施されている。第57図2の外底面にはヘラケズリが施されている。

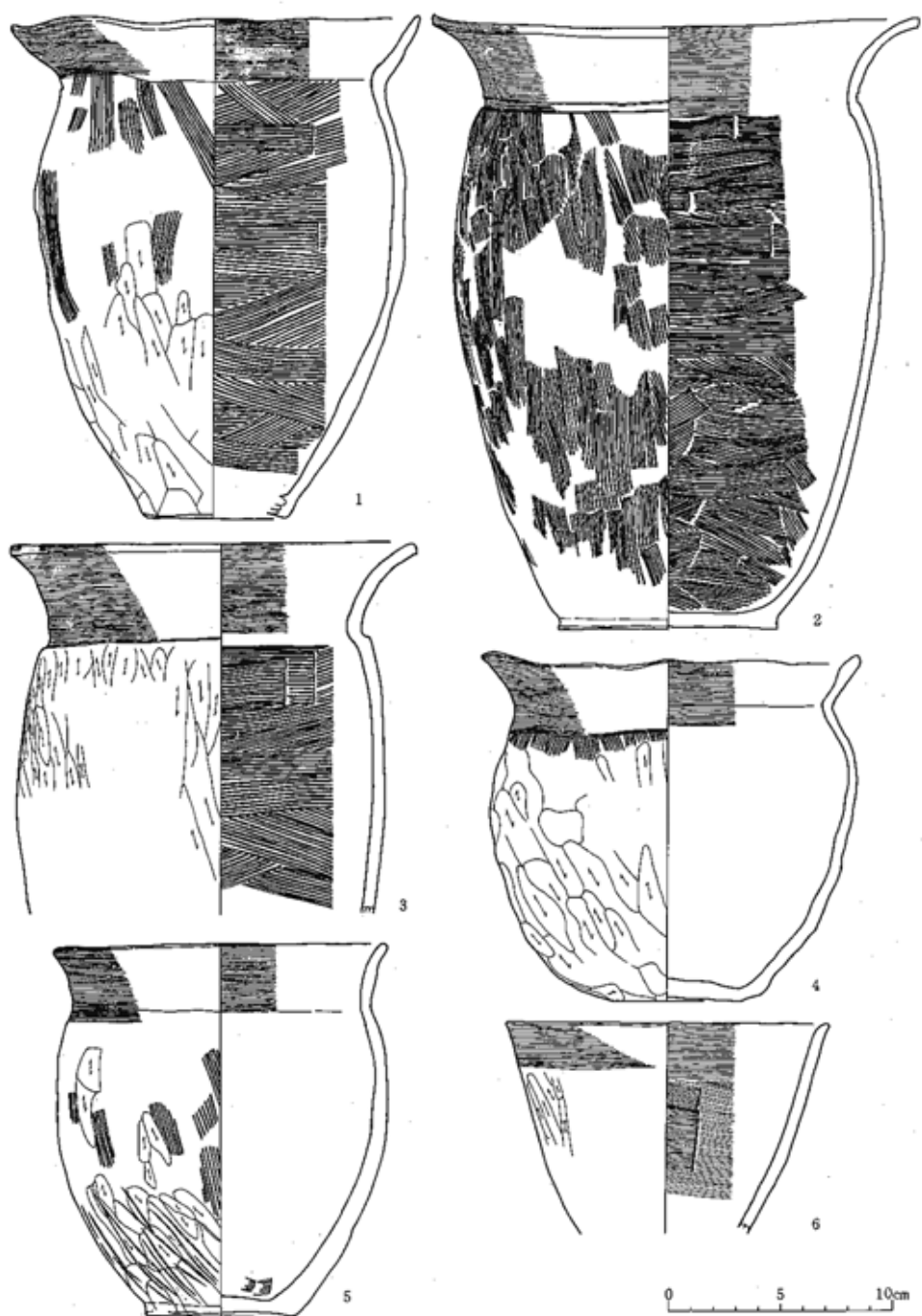
小形のものでは、頸部に明確な段はみとめられない。口縁部内外面にはヨコナデが施され、体部外面には軽いケズリがみとめられる。前段階の刷毛目も観察される。第57図5では体下部には条線が走っている。内面は摩滅のため不明であるが、第57図5ではヘラナデが施されており、下部には前段階の刷毛目が若干残っている。底外面についても第57図4は不明であるが第57図5ではヘラによるナデつけ状の痕跡がみとめられる。

第56図2は支脚として使用されていたものである。体部下半のみが現存する。体部外面には軽いケズリ、内面にはナデが施されている。底外面は火熱によるためと思われる剥落が著しく不明である。

甗 (第57図6) 底部が欠損しているが無底式のものと思われる。口縁部と体部間には器形状の区切りはなく、直線的に外傾し口縁端部がやや外方に折れ曲がる。器面調整は、口縁部内



第56図 第26号住居跡出土遺物



第57図 第26号住居跡出土遺物

外面ともヨコナデ、体部外面はナデ状の軽いケズリ、内面にはヘラナデが施されている。なお小片からの復元図であり、口径は正確でない。

第 27 号住居跡（第 58 図）

【**遺構の確認、重複**】 下位水田面西側において確認された。住居の北半部がかなりの削平を加えられている。煙道部が 28 号住居跡と重複しているが、第 28 号住居跡の堆積土がほとんど削平されており、新旧関係は明らかにできなかった。

【**平面形、規模**】 平面形はやや東西に長い隅丸方形で、規模は長軸 8.7m、短軸 7.2m である。

【**壁**】 地山を壁としている。残存壁高は南辺で 10～20 cm であるが、北半部は削平が著しく、ことに北西部では壁の残っていない部分もある。

【**床**】 地山を床としている。北西部がやや高いがほぼ平坦である。

【**柱穴**】 住居内からは数個のピットが検出されている。そのうち柱穴と考えられるものは、ほぼ対角線上に配置されるピット 2・5・8・11 の 4 個である。

【**周溝**】 住居の各辺に断続的にみとめられる。幅 5 cm 前後で床面からの深さは 3 cm 前後と浅いものである。

【**カマド**】 北辺中央部で検出された。燃烧部は削平のためほとんど残っていない。底面とみられる焼け面が小範囲にみとめられた。煙道部底面は先端へ向かって傾斜しており、煙り出し部には煙道底面との比高約 20 cm のピットが掘りこまれている。カマドの軸方向は N - 16° - E である。

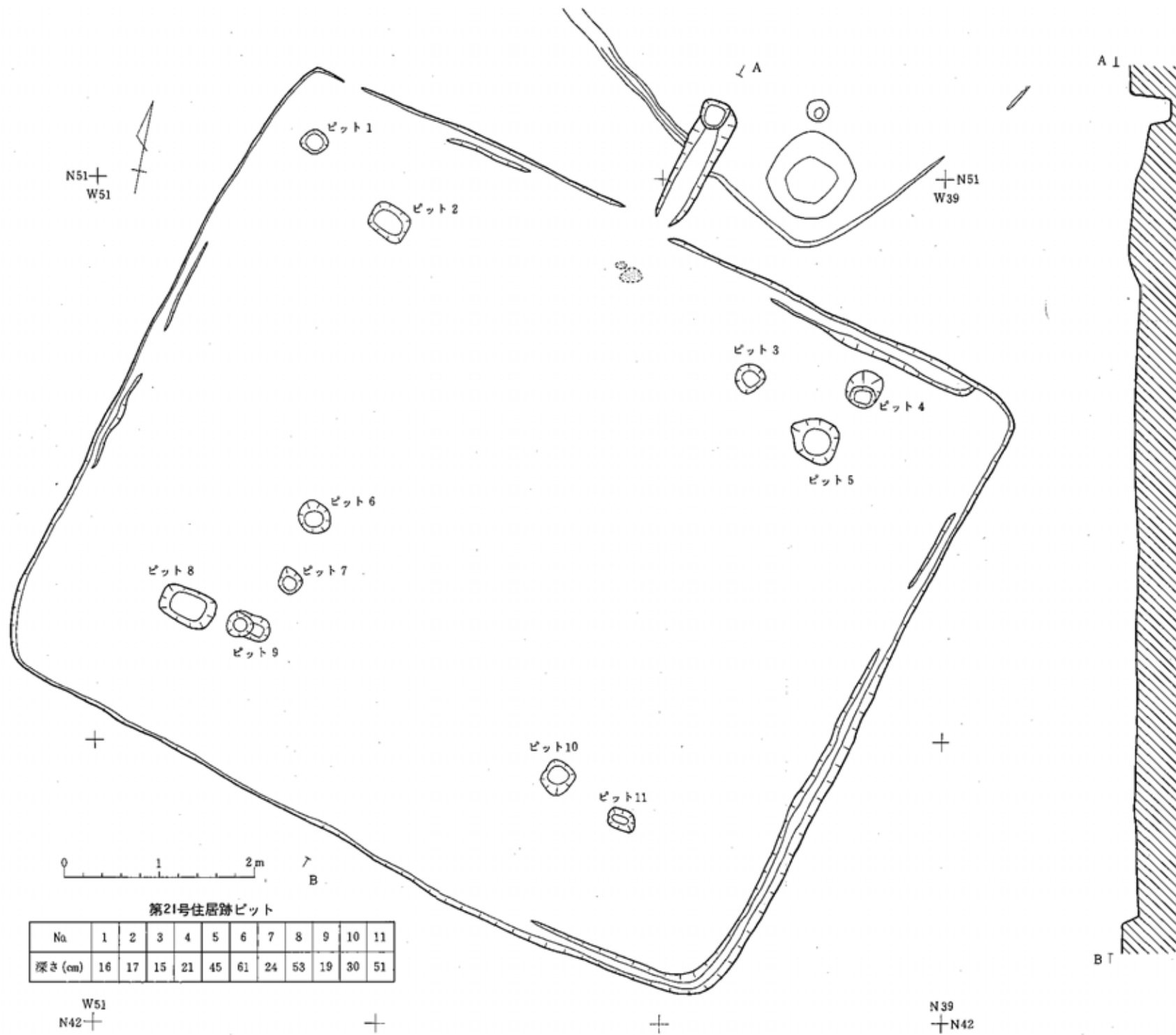
【**出土遺物**】 住居に伴うと考えられる遺物は床面上出土の遺物である。

土師器

坏（第 59 図 1） 平底のもので段・沈線はみとめられない。器外面上半にヘラミガキ、下半及び底部にはヘラケズリが施されている。また、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕 口径が器高より小さいもの（第 59 図 3・4）と、大きいもの（第 59 図 2）とがある。前者では頸部にわずかに段落がみとめられ、第 59 図 3 は体部がはり出す部分もあるが、ほぼ長胴形をなすものと思われる。第 59 図 4 は体部が強くはり出しており、あるいは球形に近い体部かとも思われるが、破片のため明らかでない。器形調整は口縁部内外面ともヨコナデ、第 59 図 3 は体部外面は軽いケズリ、第 59 図 4 はヘラケズリである。いずれも前段階に刷毛目が施されている。体部内面は刷毛目であるが、第 59 図 4 は摩滅のため不明である。

口径が器高より大きいもの（第 59 図 2）では頸部に明瞭な段が認められる。体部から口縁部へかけて強く外傾し鉢形のものである。内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色化が行な



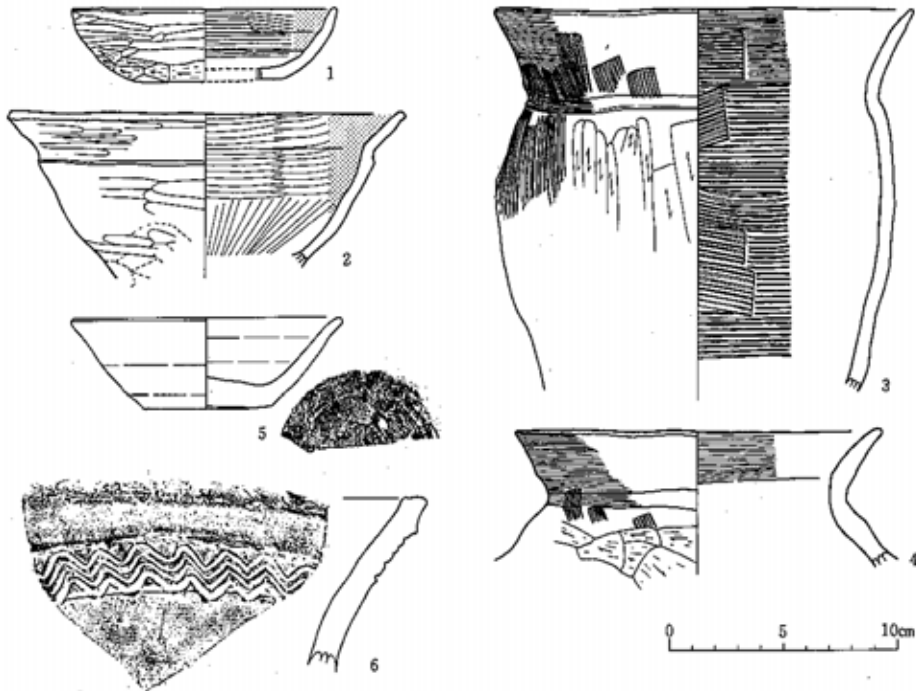
第58図 第27号住居跡

われている。

須恵器

坏 (第59図5) 底面にヘラ切り痕のみられるものである。

甗 (第59図6) 頸部以上の破片である。外反しながら立ち上がり、端部は平坦である。外



第59図 第27号住居跡出土遺物

面に波状文が施されている。

第28号住居跡 (第60図)

【遺構の確認、重複】 下位水田面西側、第27号住居跡の北側において確認された。第27号住居跡煙道部と重複している。第27号住居跡同様、削平が床面近くまで及んでおり壁の残存しない部分もある。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形で長軸5.8m、短軸5.5mである。

【壁】 地山を壁としている。残存壁高は4~8cm程であるが、東辺中央部は削平により残っていない。

【床】 地山を床としほぼ平坦である。なお、住居中央部西側に100×30cmの範囲で焼面が検出

された。

【柱穴】 柱穴と考えられるピットはほぼ対角線上に4個検出された。床面からの深さはいずれも50 cm程である。

【周溝】 各辺に断続的にみとめられる。底面幅は5~10 cm、床面からの深さは4~8 cm程である。

【カマド】 カマドと思われる施設は検出されなかった。

【貯蔵穴状ピット】 住居南東隅に径約80 cm、床面からの深さ50 cm程のピットが検出された。遺物が出土せず性格は不明である。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の土器がある。量は少ない。

土師器

甗(第61図) 破片のため全体の器形は十分明らかでない。頸部にわずかに段がみられ、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり端部が若干外方に折り曲げられている。器面調整は口縁部内外面はヨコナデ、体部外面にはヘラケズリが施されている。内面は摩滅のため不明である。

他に床面上からロクロ使用と思われる内黒土師器坏口縁部片が出土している。

第29号住居跡

【遺構の確認、重複】 下位水田面西側、28住居跡の北側において確認された。削平のため南辺はほとんど残っていない。

【平面形、規模】 平面形は隅丸方形で、軸長は5.9m前後と推定される。

【壁】 地山を壁としている。かなり削平されており残存する壁高は、2~4 cm程である。

【床】 地山を床としている。ほぼ平坦で中央部がやや低い。壁の残存しない部分では床面も削平されていると思われる。

【柱穴】 住居内においていくつかのピットが検出されたが、配置関係・深さ等にあまり規則性はみとめられなく、柱穴と考えられるピットは抽出できなかった。

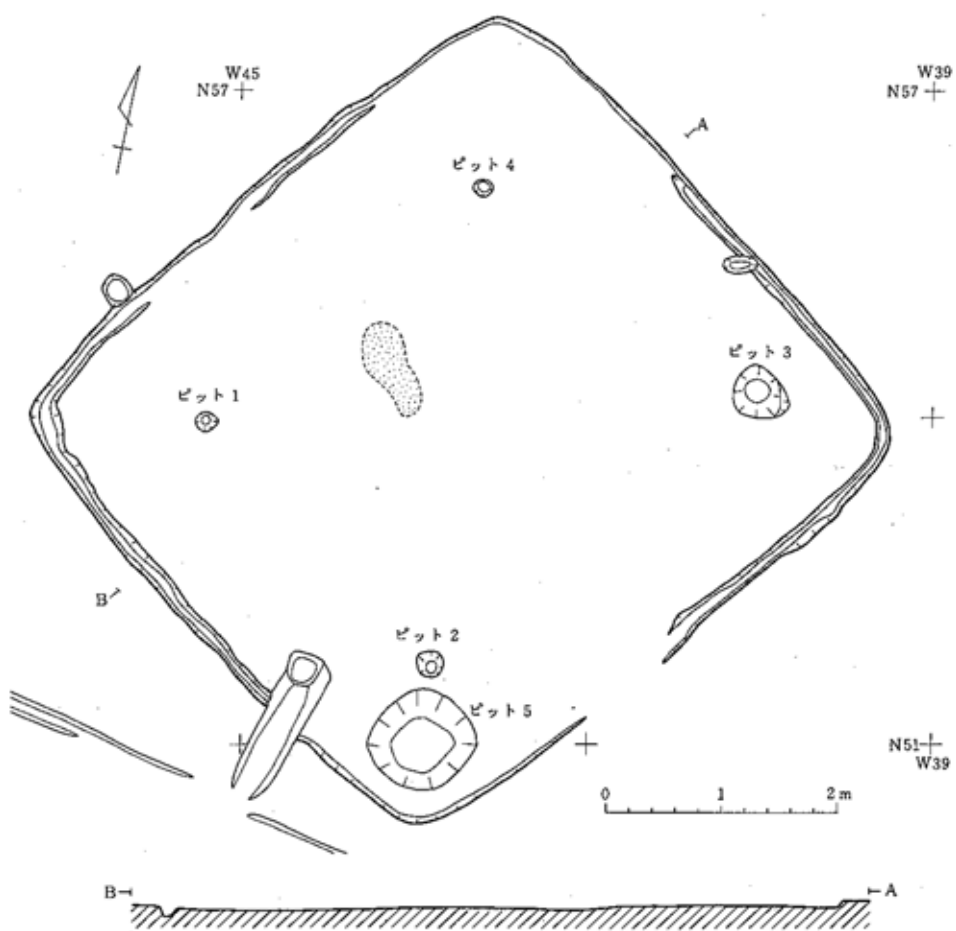
【周溝】 西壁部にのみ認められる。底面幅は、約5~10 cm床面からの深さは、約5 cmである。

【カマド】 カマドと考えられる施設は検出されなかった。北辺中央部に近い床面に70×50 cmの範囲で焼がみとめられ、あるいは、この部分が燃焼部底面かとも考えられる。

【出土遺物】 住居に伴うと考えられる遺物には床面上出土の遺物がある。しかし、すでに述べたように、著しい削平のために遺構内堆積土がほとんど残存しておらず、床面出土とした遺物の中には、遺構との供伴関係において不正確なものも含まれている。

土師器

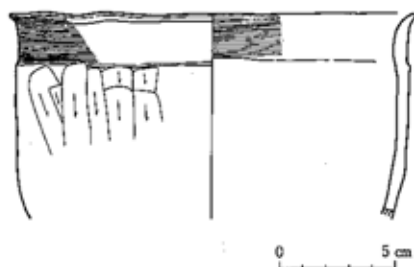
坏 整作に際しロクロを使用したもの(第63図2・3)と使用していないもの(第63図1)



第60図 第28号住居跡

第28号住居跡ピット

No.	1	2	3	4	5
深さ (cm)	43	50	50	50	48



第61図 第28号住居跡出土遺物

とがある。前者は底部のみの破片で、底部に回転系切り痕がみられる。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

ロクロを使用しないものは、平底のもので外面に段・沈線などはみとめられない。口縁部・体部上半外面にはヘラミガキ、体下部・底面にはヘラケズリののちヘラミガキが施されている。口縁部外面にはヘラミガキの前段階のヨコナデも観察される。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甗(第63図4) 体部がほぼ直立に立ち上がり、頸部で外方に屈折して短い口縁部がつくり出されている。頸部に段等はみられない。器面調整は口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は刷毛目が施されている。

砥石(第63図5)

破片のため全体の形状は明らかでない。自然礫の側縁をいくぶん敲打して形を整えている。上下二面を使用しており、現存部分は扁平である。

第29号住居跡ピット

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ (cm)	50	17	51	51	26	16	13	15	53	7

第30号住居跡(第64図)

【遺構の確認、重複】 下位水田面において確認された。調査対象地区の北端にある。壁はかなり削平されている。南東隅・西壁中央部で後世のものと思われるピットと重複している。

【平面形、規模】 長軸4.0m、短軸3.8mで、やや不定形の隅丸方形と考えられる。

【壁】 地山を壁とし残存壁高は南東隅で最も高く7cmほどである。他の部分では削平のため1~2cm程度である。

【床】 地山を床としている。床面はほぼ平坦である。床面上にも攪乱の及んでいる部分のみとめられる。

【柱穴】 住居内には3個のピットがあるが、柱穴であるかどうかは不明である。

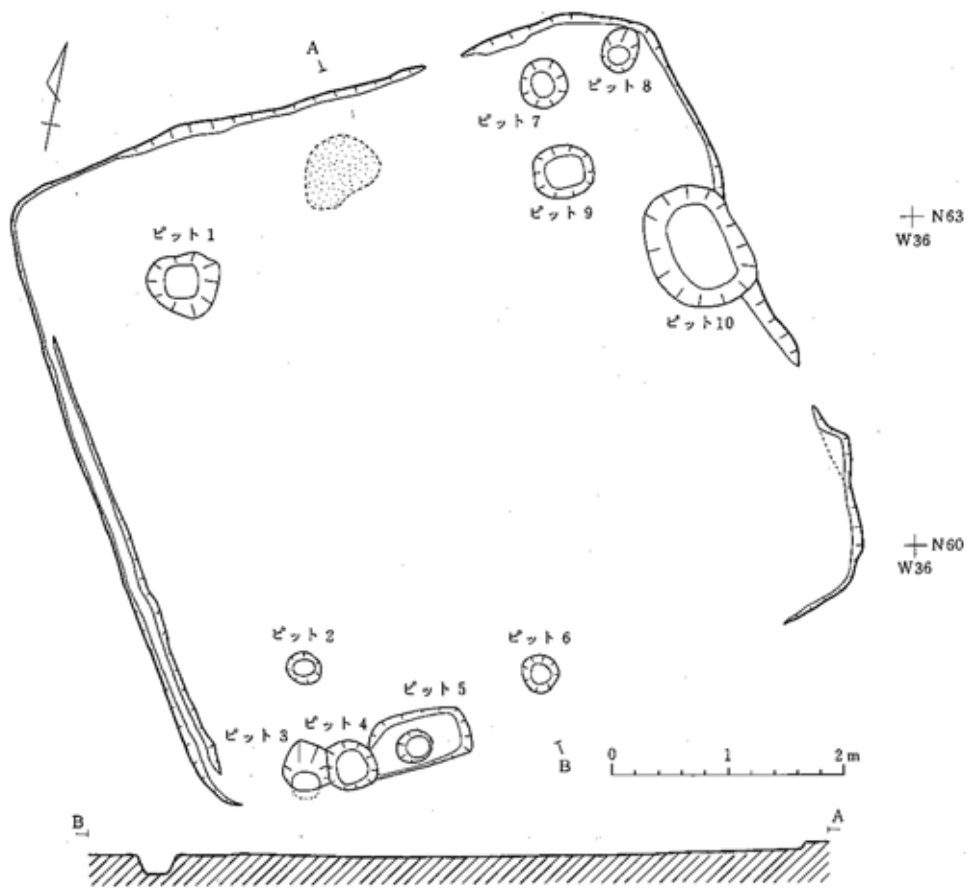
【周溝】 北辺中央、南東隅を除いてみとめられている。底面幅は5~20cm、床面からの深さは、5~10cmほどである。南辺では形態が一定しているが、他では不定形である。

【カマド】 カマドと考えられる施設はみとめられなかった。北辺中央部で周溝が途切れる部分があるが、あるいはこの部分がカマドの位置であったのかもしれない。

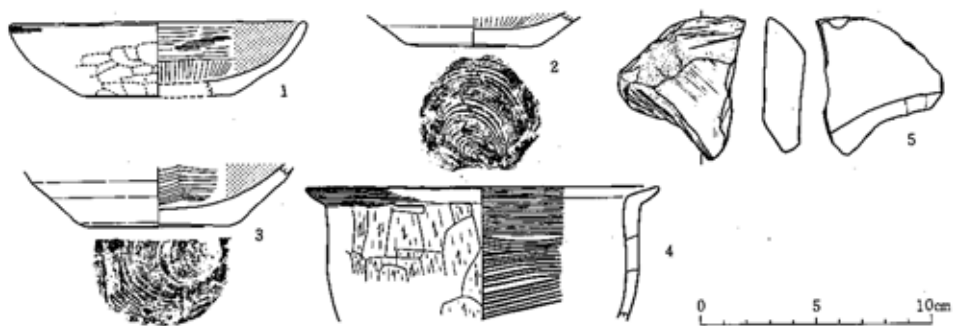
【出土遺物】 住居に伴う遺物としては、床面上出土の土器がある。

須恵器

高台付坏(第65図1) 体下部から丸味を帯びて立ち上がる器形である。体下部にやや稜の



第62図 第29号住居跡

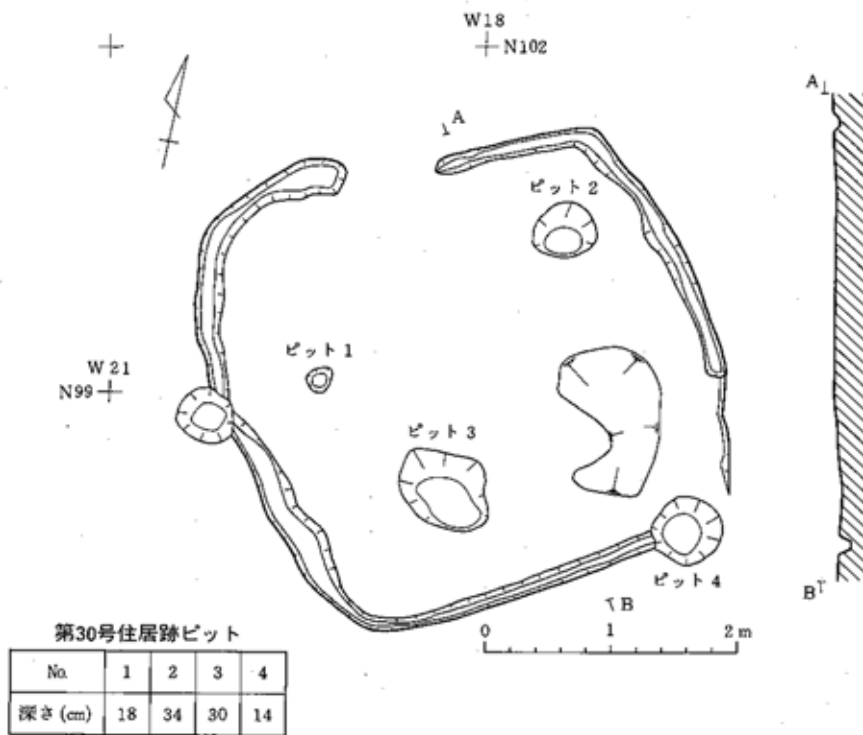


第63図 第29号住居跡出土遺物

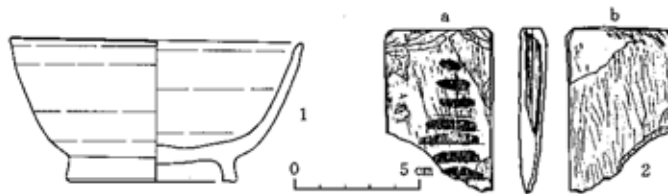
みられる感もあるが判然としない。高台は幾分外方にはり出している。底面にはヘラ切り痕がみとめられる。他に小片のため図示できないが、ロク口不使用の内黒土師器坏体部、回転糸切り須恵器坏底部片等が出土している。

砥石 (第65図2)

砥石のため全体の形状は不明であるが、平面形は長方形を呈すると思われるもので扁平である。側縁には加工痕跡と思われる擦痕がみとめられる。上下両面に使用面がみとめられるが、主としてa面を使用しておりb面は大部分が節理面である。a面の使用面には刃の当たりによると思われる凹凸がみとめられる。



第64図 第30号住居跡



第65図 第30号住居跡出土遺物

2. 土壌

第1号土壌 (第66図)

第1号住居跡の西側において確認された。平面形は上端では不整楕円形であるが底面では楕円形を呈す。規模は底面において長軸1.5m、短軸1.0mであり、長軸方向はW-3°-Sである。底面は中央部がやや凹むがほぼ平坦で、また壁も直線的に開くため断面形は逆台形である。

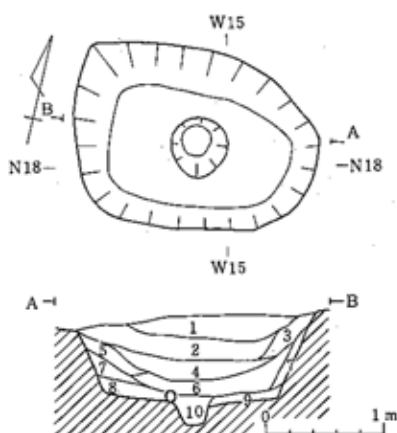
堆積土は自然堆積状態を示している。

なお、底面中央に小ピットがみられるが、これは最下層の堆積土の上面から掘り込まれたものであり、少なくとも構築時において本土壌に伴うものではない。

遺物は堆積土中から出土が多い。また、底面からも若干の土器が出土したが、土器の傾斜はいずれも不規則な状態を示しており土壌に伴うと考えられる出土状態のものはみられなかった。

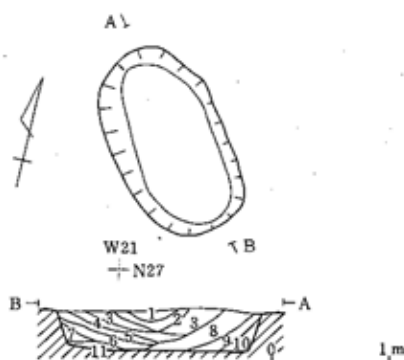
第2号土壌 (第67図)

第23号住居跡東側において確認された。平面形は楕円形で底面における規模は長軸1.5m、短



遺物 採取層	No		
1	1	暗かっ色土	地山土・白色粘土がブロックでまじる
	2	黒かっ色土	地山粒・焼土がやまじる
	3	黒かっ色土	地山粒ややまじる
	4	暗かっ色土	地山ブロック多くまじる
2	5	暗かっ色土	地山粒多くまじる
	6	黒かっ色土	焼土・木炭まじる
	7	暗かっ色土	地山粒ややまじる
	8	暗茶かっ色土	よごれた地山土多量にまじる
	9	暗かっ色土	地山粒ややまじる。粘性強い
ピット	10	暗かっ色土	地山ブロック多くまじる

第66図 第1号土壌



1	暗かっ色土	地山粒点在
2	暗かっ色土	地山ブロックまじる
3	暗かっ色土	地山粒点在
4	暗かっ色土	地山粒まじる
5		よごれた地山土
6	暗かっ色土	地山粒点在
7	暗かっ色土	地山粒まじる
8	暗かっ色土	地山粒まじる
9	暗かっ色土	黒色土まじる
10	暗かっ色土	地山粒まじる
11	暗かっ色土	地山粒点在

第67図 第2号土壌

軸0.7mである。長軸方向はN - 35° - Wである。底面はほぼ平坦で幾分北側へ傾斜している。堆積土は自然堆積状態を示している。遺物は出土しなかった。

第3号土壇（第68図）

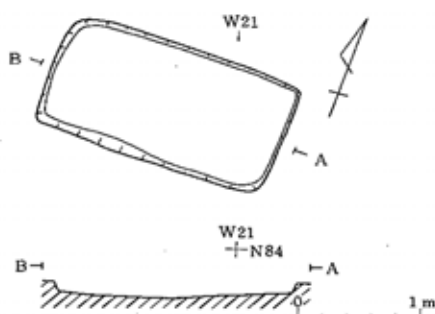
第30号住居跡南側において確認された。平面形はほぼ長方形で長軸1.9m、短軸1.0mで、長軸方向はN - 8° - Wである。底面は平坦で中央がわずかに低い。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は出土していない。

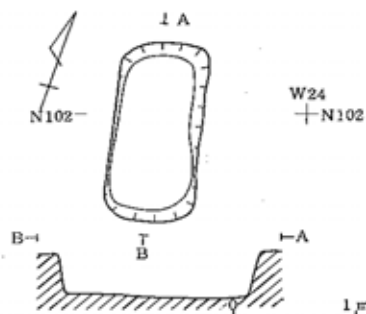
第4号土壇（第69図）

第30号住居跡西側において確認された。平面形は隅丸で長方形に近く、規模は長軸1.5m、短軸0.6mで長軸方向はN - 4° - Wである。底面はほぼ平坦である。短辺の壁がゆるく立ち上がり、長辺のそれはほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は出土していない。



第68図 第3号土壇



第69図 第4号土壇

3. 溝

第1号溝（第13図）

全掘していないため全体の規模は不明である。調査区南部を北西 - 南東方向に走り、第4号住居跡を切っている。上端の幅は1~1.5m、底面幅は0.6~0.9m前後である。壁はゆるく立ち上がり底面も丸味をおびている。堆積土下層には酸化鉄の面がみられる部分もあり、これは水路などに利用された痕跡を示していると思われる。

堆積土中から若干の遺物が出土した。

なお、他に調査区内からごく最近の耕作に伴うと思われる溝が数本検出された。

4. 遺構に伴わない遺物

本項において扱う遺物は、各遺構（住居跡、土壌、溝）内堆積土出土遺物、および表土出土の遺物である。その種類としては、弥生土器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品がある。

このうち、遺構内堆積土出土の遺物の中には、消極的ではあるが遺構の年代推定の資料となり得るものや、ブルドーザー等による攪乱によって、出土状態が明確でないために、本来遺構に伴うものではあっても、本項で取り扱わざるを得なくなった遺物も含まれている。したがって、以下の記述は、遺構毎に行なうこととするが、弥生式土器については、複数の遺構から微量ずつ出土しており、また、遺構とは直接関係するものではないと考えられるので、一括して述べる。

イ、遺構内堆積出土遺物

第1号住居跡堆積土出土遺物（第70図）

土師器

甕（第70図1） 製作に際しロクロが使用されている。体部がほぼ円筒形を呈する長胴形の甕で、頸部で強く外反して短い口縁部がつくり出されている。端部上端は、わずかに上方にのびている。器面調整は、口縁部内外面および体部外面上部はロクロ調整、外面体下部にはヘラケズリ、体部内面には、ヘラナデが施されている。

第2号住居跡堆積土出土遺物（第70図）

土師器

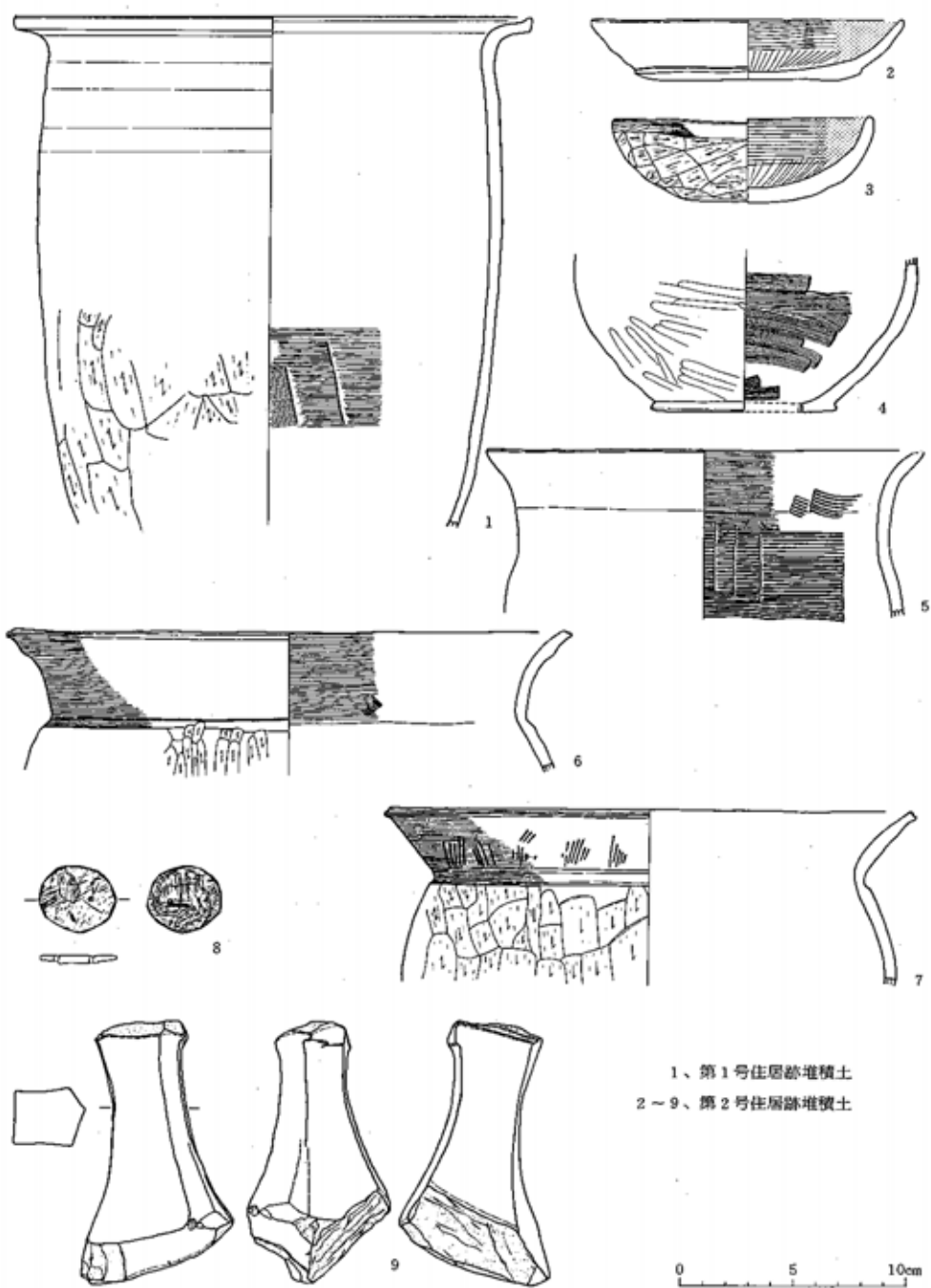
坏（第70図2・3） 平底のものと丸底のものがある。

平底のもの（第70図2）は、体・口縁部はほぼ外傾し、体下部に沈線が一条巡っている。器面調整は、内外面ともヘラミガキが施され、内面にはさらに黒色処理が施されている。

丸底のもの（第70図3）では、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部では直立に近い。体部に段・沈線等は認められない。器面調整は、口縁部外面はヨコナデのちヘラミガキ、以下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理である。

甕（第70図4~7） 破片のため全体の器形は十分明らかでないが、長胴形のもの、体部が球形をなすものがある。

長胴形と思われるもの（第70図5~7）は体部上半以上が残存している。口縁部は外反ないし外傾し、上端に沈線(?)が巡るもの（第70図6・7）がある。また頸部に段のみられるもの（第70図6）幅広い沈線が巡るもの（第70図7）体部から口縁部へ特に区画なしに移行するもの（第70図5）の三者がある。器面調整は、外面は、第70図5では不明であるが他の二者は、口縁部がいずれもヨコナデ、体部は第70図6が軽いケズリ、第70図7がヘラケズリ、内面は、口縁部がいずれもヨコナデ、体部は第70図5では刷毛目が施され、他は不明である。



第70图 遺構内堆積土出土遺物

球形をなすと思われるもの(第70図4)は体部下半から底部にかけて現存している。底縁が外方へはり出している。体部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラナデが施されている。底部外面にはヘラケズリが認められる。

砥石(第70図9) 外形は分銅形を呈しているが、周縁部には整形を加えた痕跡は認められず、基本的には不定形の原材を使用したものと思われる。砥面は長軸に沿って五面認められ、使用部分の横断形は五角形である。

石製模造品(第70図8) 有孔円板である。平面形はほぼ円形で、中央部に一對の孔が穿たれている。表裏面および周縁は磨かれており擦痕が明瞭に認められる。

第5号住居跡堆積土出土遺物(第71図)

土師器

坏(第71図1・2) いずれも平底のものである。体部から口縁部へかけて外傾して立ち上がるもの(第71図1)と、体中央部で一度屈折して立ち上がり口縁部はほぼ直立するもの(第71図2)とがある。前者では体下部に、幅の広い沈線状のくびれがある。器面調整はいずれも口縁・体部外面はヘラミガキ、底外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甗(第71図3・4) 製作に際し、ロクロを使用していないもの(第71図3)と、使用しているもの(第71図4)とがある。いずれも口径が器高より大きく長胴形をなすものである。ロクロを使用していないものは、頸部に段が巡らされて口縁部と体部が区画され、口縁部は外反し、端部上端がやや上方に立つ。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデであり、体部は内外面とも刷毛目が施されている。

ロクロを使用しているものは、体部中央がややふくらむ器形のもので、頸部で外反して短い口縁部がつくり出されている。口縁端部は上下にややのびて狭い縁帯状をなしている。器面調整は内外面ともロクロ調整で、体部外面にはその後ヘラケズリが加えられている。また体部外面にはさらに、補強とも考えられる二次的な粘土の貼りつけがみとめられる。

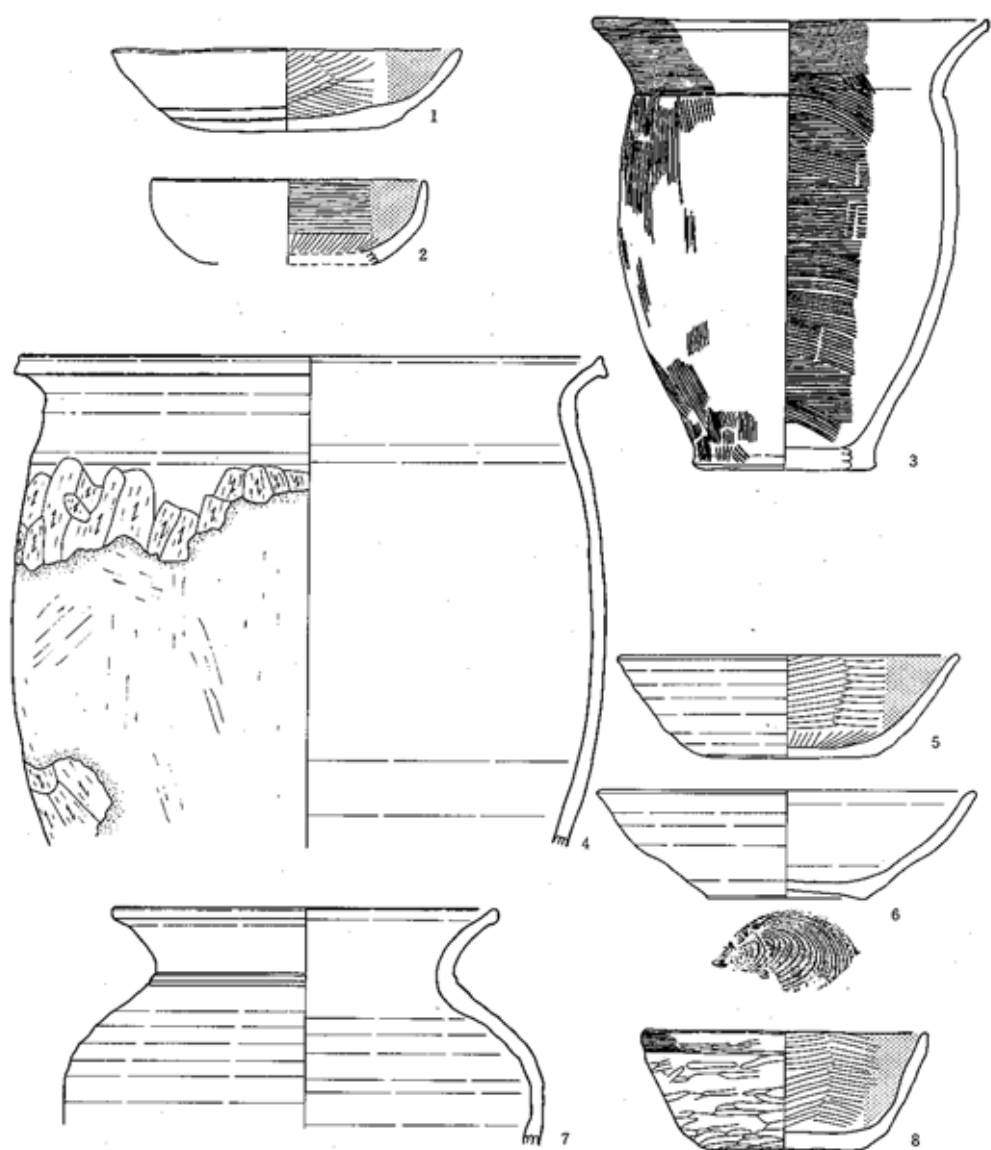
第10号住居跡堆積土出土遺物(第71図)

土師器

坏(第71図5) 製作に際しロクロを使用したもので、口縁・体部外面には明瞭なロクロ目がみとめられる。底面は全面が回転ヘラケズリ手法により再調整が加えられているため切離し技法は不明である。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

須恵器

坏(第71図6) 回転糸切り離し技法による坏である。底部からほぼ外傾して口縁部へ至る器形である。



- 1-4 第5号住居跡堆積土
 5-7 第10号住居跡堆積土
 8 第12号住居跡堆積土

第71圖 遺構内堆積土出土遺物

甗(第71図7) 比較的小形の甗である。頸部で大きく外反し、口縁部は外傾する。内外面ともロク口調整である。

第2号住居跡堆積土出土遺物(第71図)

土師器

坏(第71図8) 平底のもので、比較的器高の高い坏である。体部に段・沈線はみられない内外面ともにヘラミガキが施され、内面には黒色処理が加えられている。また口縁部外面にはヘラミガキの前段階のヨコナデもみとめられる。

第15号住居跡堆積土出土遺物(第72図)

土師器

甗(第72図1) 体部上半以上の破片のため全体の器形は明らかでないが、口径が器高より大きく長胴形をなすものと思われる。頸部で鋭く折れ曲がり、口縁部は外傾している。頸部に段・沈線等は認められない。器面調整は、口縁部内外ともヨコナデ、体部外面にはハケ目が施されている。内面は摩滅のため不明であるが、胎土積上痕が明瞭に観察される。

須恵器

壺(第72図2) 小形の壺である。下半部は欠損している。頸部で外反し短い口縁部がつくり出されており、内外面ともにロク口調整が施されている。

第16号住居堆積土出土遺物(第72図)

土師器

高坏(第72図3) 坏部に比して低く大きな脚部がつけられている。坏部はやや丸味をもって立ち上がり、外面体下部にかすかな段が巡っている。段を境として上部にはヘラミガキ、下部にはヘラケズリが施されている。また胎土積上痕も明瞭に認められる。内面はヘラミガキ・黒色処理である。脚部は、坏部との接合部外面に刷毛目がわずかにみとめられるが、裾部および同内面は摩滅しており器面調整は明らかでない。

須恵器

坏(第72図5) ヘラ切り技法によってロク口から切り離されており、再調整は加えられていない。口径・器高に比して、底径がかなり大きいため、低平な器形のものである。

蓋(第72図4) 天井部からなだらかに口縁部に至り、口縁部はわずかに下方へ折り曲げられている。宝珠形のつまみがつく。つまみは、中央部が周縁部よりも低く、正確には宝珠形としい得ないものである。天井部外面には回転ヘラケズリが加えられている。

第18号住居跡堆積土出土遺物(第72図)

坏(第72図6) ヘラ切り技法によってロク口から切り離されている坏である。体部から口縁部へかけてほぼ直線的に外傾する。再調整は加えられていない。

第 19 号住居跡堆積土出土遺物（第 72 図）

土師器

甕（第 72 図 7） 小形の土師器甕である。口径と器高がほぼ同じかいくぶん器高が大きい器形と思われるが、体下部が欠損しているため十分明らかでない。頸部でわずかに外反して短い口縁部がつく。器面調整は口縁部内外はヨコナデで、ヨコナデは体上部まで及んでいる。体部外面はヘラケズリ、内面はハケ目である。

第 21 号住居跡堆積土出土遺物（第 72・73・74 図）

土師器

坏（第 72 図 8・9） 丸底のもの（第 72 図 8）と、平底のもの（第 72 図 9）とがある。前者は極めて小形のものである。いずれにも体部外面には段・沈線等は認められない。器面調整は両者ともに、内外面ともヘラミガキであり、内面には黒色処理が加えられている。

甕（第 72 図 10・11・73 図 1・2） 口径よりも器高が大きいものであるが、最大径が口縁部にあり、長胴形をなすもの（第 72 図 10・11、第 73 図 1）と、体部にあり壺形に近いもの（第 73 図 2）とがある。両者ともに、頸部には段または沈線が巡っており、口縁部は外反ないし外傾する。長胴形をなすものには法量において違いがあるものもある。

器面調整は、長胴形のものでは、口縁部内外はヨコナデが施され体部外面は第 72 図 11・第 73 図 1 が刷毛目及びヘラケズリののち軽いケズリ、第 73 図 10 は刷毛目で、内面はいずれもヘラナデである。第 72 図 10 では内面体下部に刷毛目もみとめられる。底外面はいずれもヘラケズリである。

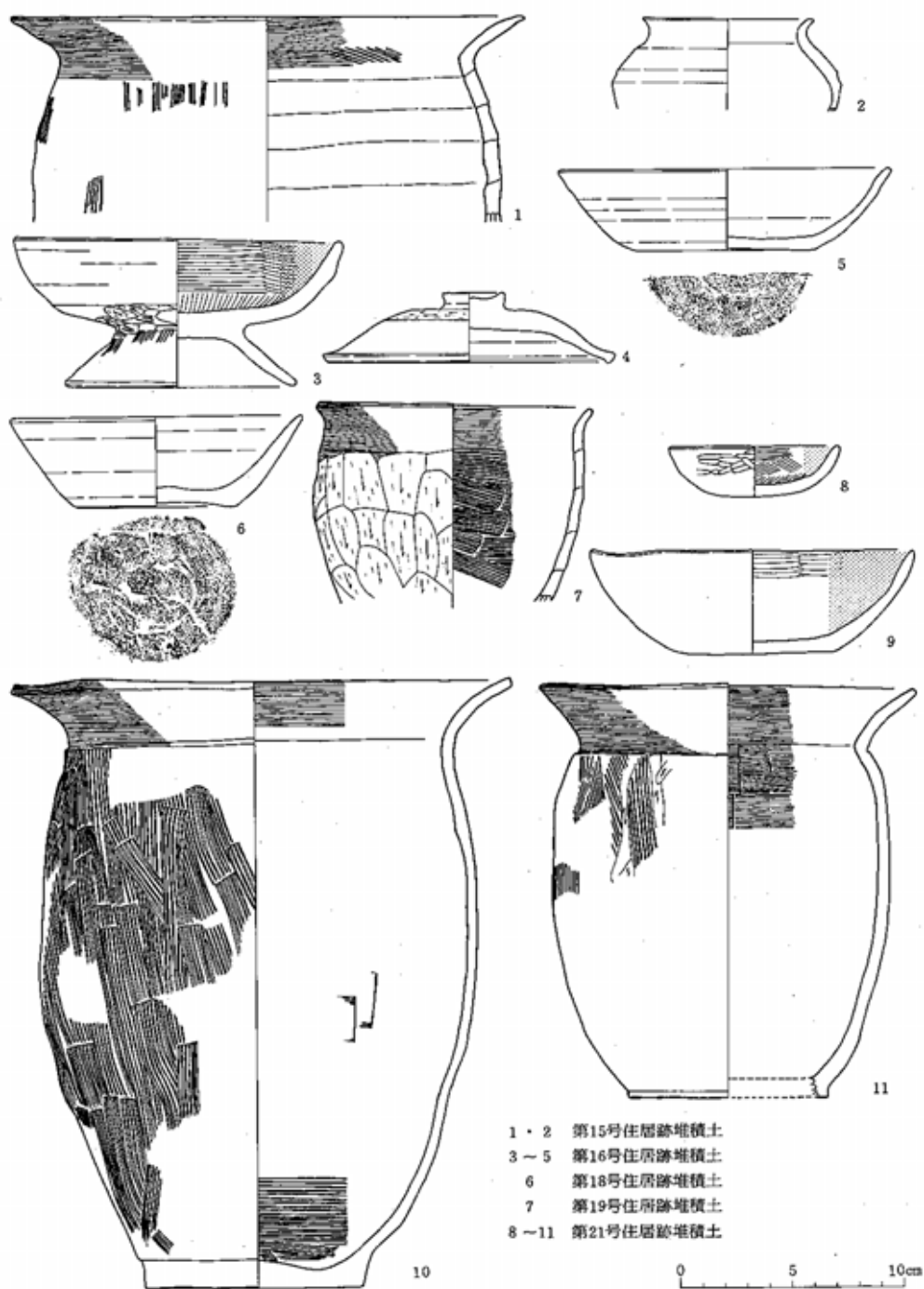
壺形のものでは、体部外面は全面にヘラミガキが施されてさらに焼成前に丹が塗られている。丹は口縁部にも縦に四条 1 単位で文様的に塗布されている。体部内面は摩滅が著しいがわずかにヘラナデの痕跡が認められる。底外面はヘラケズリである。

須恵器

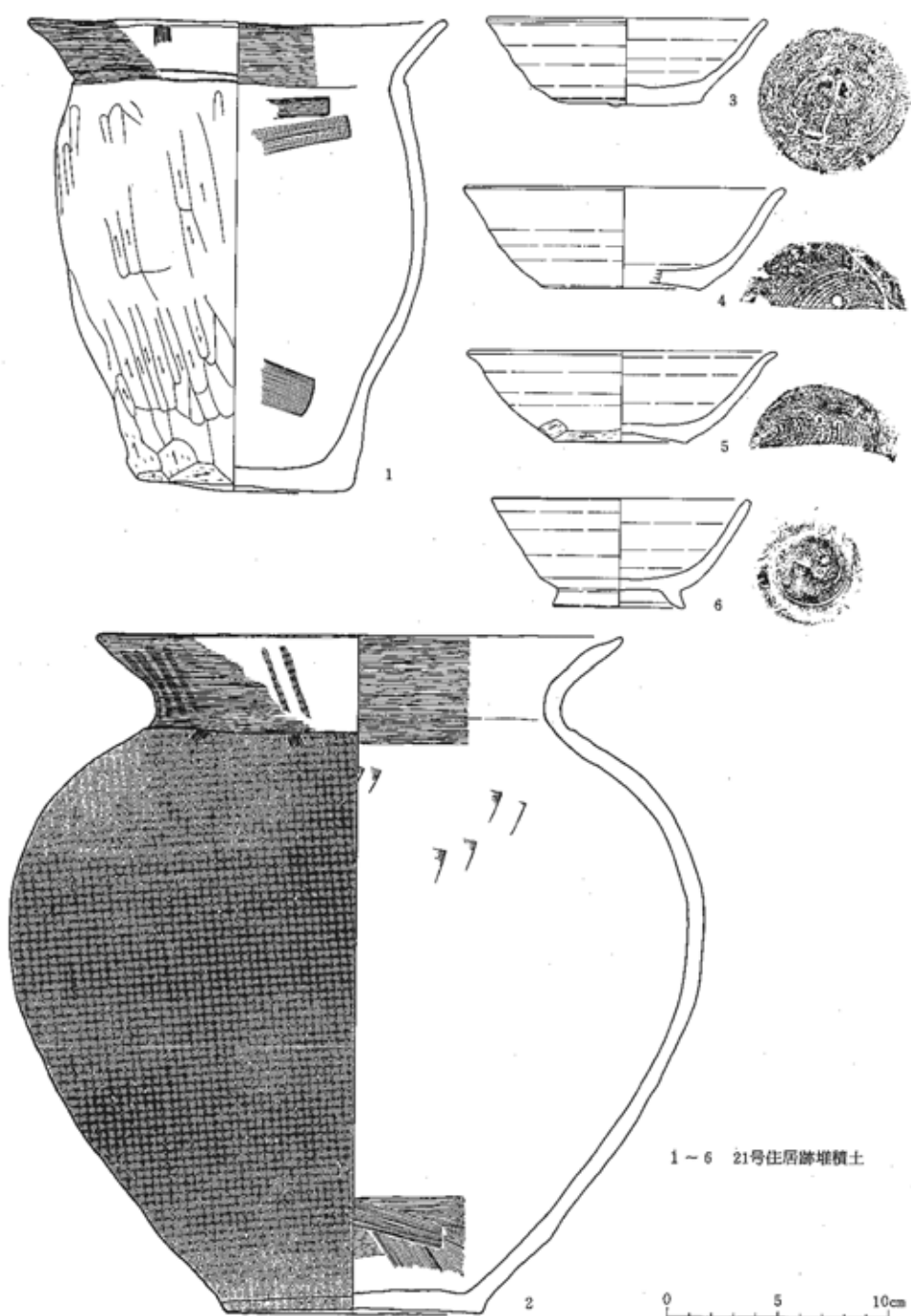
坏（第 73 図 3~5） ヘラ切り技法によるもの（第 73 図 3）と回転糸切り技法によるもの（第 73 図 4・5）とがある。器形的には、前者が体部から口縁部へかけてほぼ直線的に外傾するのに対し、後者では口縁部がいくぶん外反しており、若干の違いもみとめられる。なお、第 73 図 5 は、体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が加えられている。

高台付坏（第 73 図 6） 体下部にわずかに稜がみとめられるもので、体部・口縁部は外傾している。高台部は短く、いくぶん外方にのびており、端部内面は外方へ削がれたように薄くなっている。ヘラ切り技法によって切り離されている。

甕（第 74 図 1） 体部上端以上の破片である。大形の甕と思われる。頸部は長くやや外反しながら口縁端部に至っている。端部は上下にのびて幅広い縁帯状をなす。頸部には三段の波状



第72図 遺構内堆積土出土遺物



第73図 遺構内堆積土出土遺物

文が描かれている。体部はほとんど残存せず明らかでないが、外面に平行のたたき目がみとめられる。

第 22 号住居跡堆積土出土遺物（第 74 図）

土師器

坏（第 74 図 2） 平底のものである。底部はかなり丸味をもっているが、体部と底部を画す明瞭な稜がみとめられる。体部ほぼ中央に一条の沈線が巡っている。この沈線は途切れる部分もある。器面調整は内外面ともにヘラミガキが施され、内面には黒色処理が加えられている。なお、外面口縁部・底部ではそれぞれヘラミガキの後段階としてのヨコナデ・ヘラケズリが観察される部分もある。

第 23 号住居跡堆積土出土遺物（第 74 図）

土師器

甕（第 74 図 3） 口径よりも器高が大きい長胴形のものである。頸部に明瞭な段がみとめられ、口縁部は外傾する。器面調整は口縁部内外ともヨコナデ、体部外面では刷毛目・ヘラケズリののち軽いケズリ、内面には刷毛目が施されている。底外面はヘラケズリである。

第 25 号住居跡堆積土出土遺物（第 74 図）

土師器

坏（第 74 図 4・5） 丸底のもの（第 74 図 5）と、丸底風ではあるが平底のもの（第 74 図 4）とがある。いずれも体部外面に段を有し、段を境として段以上がヘラミガキ、段以下にはヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

第 1 土壇堆積土出土遺物（第 74 図）

土師器

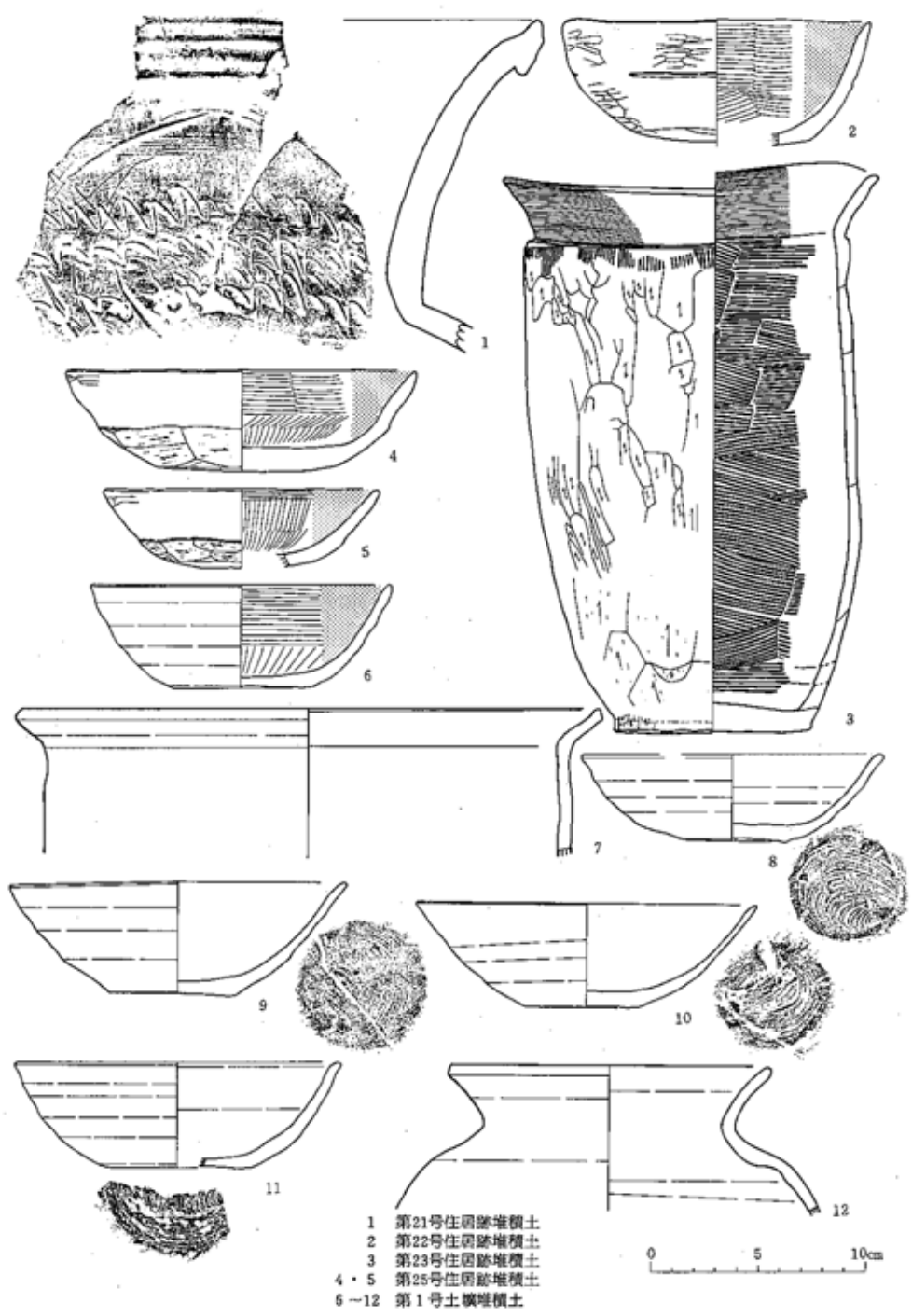
坏（第 74 図 6） 製作に際しロクロを使用したものである。体部はゆるやかに丸味をもって立ちあがる。手持ヘラケズリによる再調整が加えられており、このため切り離し技法は不明である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

須恵器

坏（第 74 図 8～11） 回転系切り技法によって切り離されたもので、再調整はない。器形に大小はみられるが、形態はいずれも体部がゆるく張り出しながら立ち上がるものである。

甕（第 74 図 7） 体部上半以上が現存している。体部はほぼ直立し頸部でゆるやかに外反して短い口縁部がつくり出されている。端部上端がやや上方に立つ。頸部に段等はみられない。

甕（第 74 図 12） やや小形の甕である。体部上半以上が現存している。頸部でゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさめられている。



- 1 第21号住居跡堆積土
- 2 第22号住居跡堆積土
- 3 第23号住居跡堆積土
- 4・5 第25号住居跡堆積土
- 6-12 第1号土壌堆積土

第74図 遺構内堆積土出土遺物

口、表土出土および出土地点不明の遺物（第75図）

土師器

坏（第75図1・2） 平底のもの（第75図1）と丸底のもの（第75図2）とがある。ロク口は使用していない。いずれも体部外面に段・沈線はみとめられない。器面調整は内外面ともヘラミガキで内面は黒色処理が加えられている。

甗（第75図5・6） 器高が口径よりも大きい長胴形のもの（第75図5）と、口径が器高より大きい鉢形のもの（第75図6）とがある。いずれもロク口は使用していない。前者は口縁部が欠損している。頸部に一条の沈線が巡っており、口縁部は外反すると思われる。体部内外ともに刷毛目が施され、底面には木葉痕がみとめられる。また体部内面には胎土積上痕が明瞭に観察される。鉢形をなすものは、頸部にかすかな段がみられ、口縁部は外反する。体部はやや丸味をもって底部へ至る。内外面ともにヘラミガキが施されているが体部外面下部には前段階のヘラケズリもみとめられる。内面は黒色化されている。

須恵器

坏（第75図3・4） ヘラ切り技法によって切り離されたものである。再調整はない。

蓋（第75図7） 口縁部はわずかに折り曲げられたもので低い宝珠形のつまみがつけられている。天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。

鉄製品（第75図9・10） 2点出土している。棒状のものである。いずれも破片であり全体の形状は明らかでない。横断形は四角形を呈し、釘とも考えられる。

砥石（第75図8） 端部だけの破片であり全体の形状については不明である。横断形は四角形で4側面すべてが使用されており、端面は自然面のまま残されている。

鞆口 破片が出土した。土製のものである。

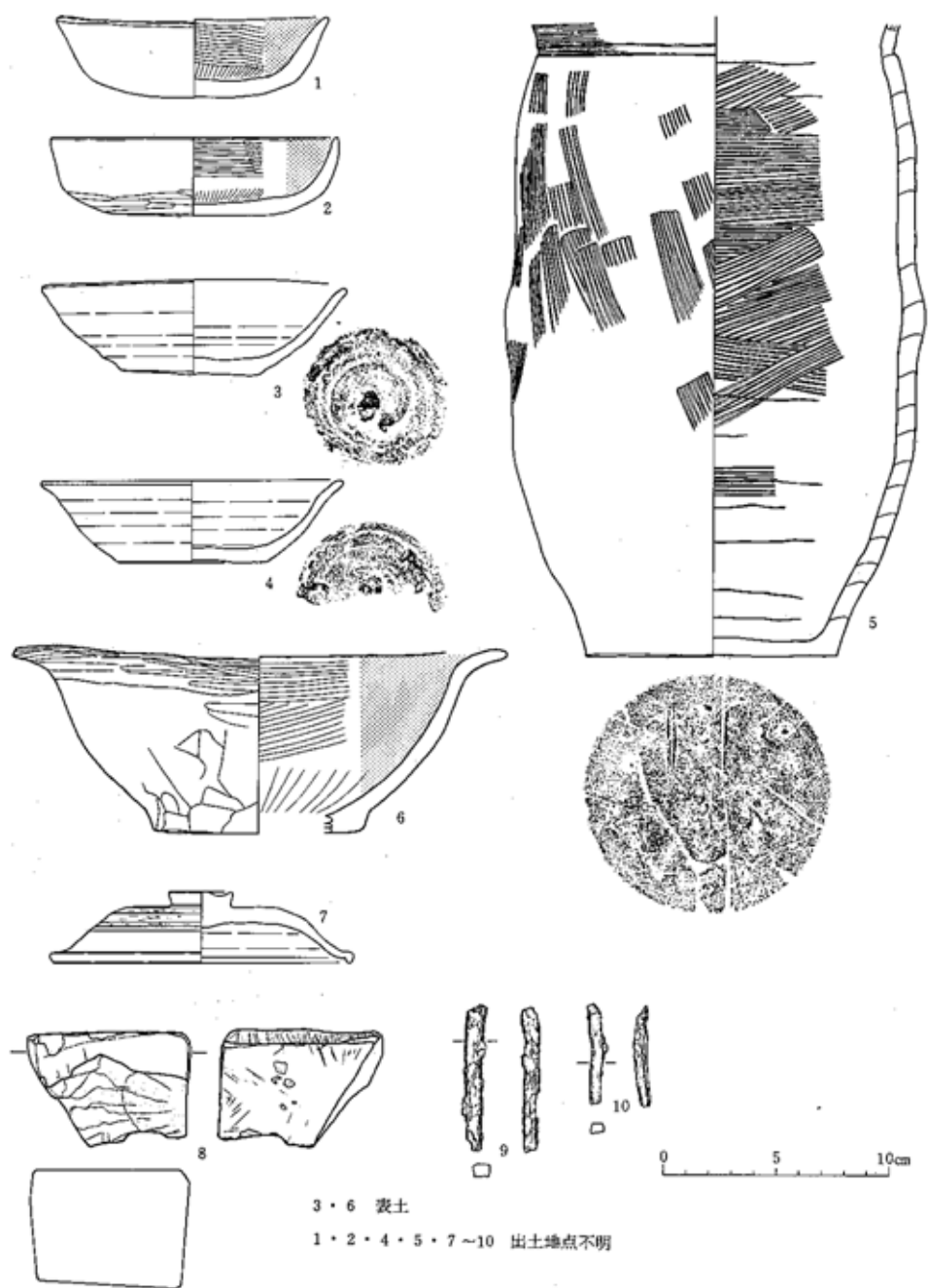
八、弥生土器（第76図）

第1号住居跡、第13号住居跡、第18号住居跡から出土している。口縁部3、体部3の計6点である。いずれも小片で、磨滅が著しい。

第76図1・2は、甗または壺形土器の口縁部と思われる。口縁部が外面に折りかえしたように肥厚し、下端に刺突が施されている。また口縁部には縄文が施されており、原体は1がLR、2がRLである。

第76図3は、撚糸文（r）が施されているもので、口縁の開き具合からみて比較的浅い器形のものであろう。

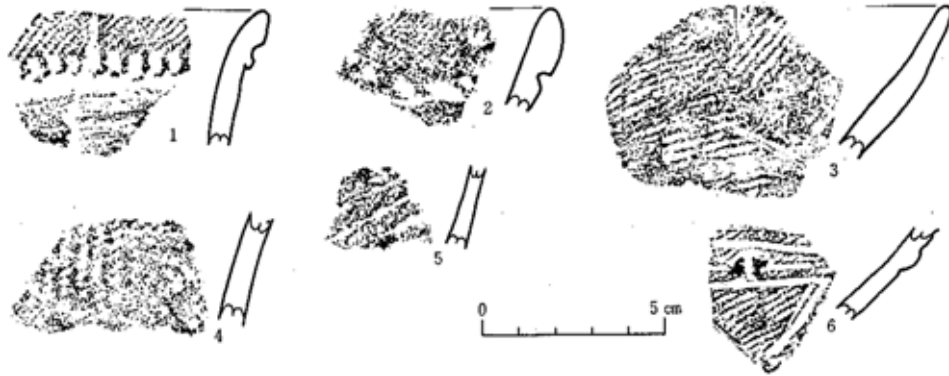
体部片は撚糸文（L）のみが認められるもの（第76図4・5）と文様の施されているもの（第76図6）とがある。6は鉢形土器と考えられるものであり、縄文（RL）を地文として、その



第75図 表土および出土地点不明の遺物

上に横位、斜位の平行沈線を施し、横位平行沈線の一部を断続させて一対の瘤状隆起を配し、一種の工字状文を表現している。

所属時期は1・2が口縁部の特徴によって弥生時代後期天王山式（坪井：1953）に比定することができるが他のものについては明らかでない。また6は縄文時代晩期に属する可能性もある。



第76図 弥生土器

・遺構・遺物に関する考察と問題点

1. 出土土器の分類

出土土器には土師器、須恵器、弥生土器があるが、弥生土器については前項で述べてあるので、ここでは前二者について述べる。

【土師器】 土師器には坏・甕・甑・高坏・埴・蓋・高台付坏がある。出土量の多い坏・甕などにおいては器形・技法によって分類作業を行なうことが可能である。なお、以下の分類は器形の比較的明らかな図示遺物を対象としている。

坏 坏には製作に際しロク口を使用していないものと、使用しているものがある。前者は器形の特徴により、後者は底部切り離し技法によりそれぞれ二類に分類される。

A類 ロク口を使用しないもので、丸底のもの。

B類 ロク口を使用しないもので、平底のもの。

C類 ロク口を使用しており、底部の切り離しが回転糸切り技法によるもの。

D類 ロク口を使用しており、底部に再調整が加えられているため切り離し技法の不明なもの。

以上の各類はさらに体部器形の特徴、器面調整の特徴などからいくつかに分けられる。

坏A類 製作に際しロク口を使用せず、底部形態が丸底のものである。体部に段が巡るものをA類、体部に沈線が巡るものをA類、体部に段・沈線をもたないものをA類とする。

A類 丸底で体部に段がつくものである。段の位置は体部中央がやや下部である。段から上の部分は口縁部に向かって内弯気味になるものと外傾するものがある。器面調整は外面は口縁部から底部までヘラミガキされているものと、口縁部から段の部分までがヘラミガキ、段から下の部分がヘラケズリされているものがある。段の部分にナデがみとめられるものもある。段から下のヘラミガキの部分では前段階の調整としてのヘラケズリが観察されるものもある。内面はヘラミガキされ黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上部が横方向、下部では放射状のものが多い。

A類 丸底で体部に沈線が巡るものである。沈線の位置は体部中央よりやや下で、二条巡るものもある。また、全周せずに途中で途切れるものもある。沈線から上の部分が口縁部に向かって丸味をもって外傾するものと、やや直線的に外傾するものがある。器面調整は外面は口縁部から底部までヘラミガキのもの、沈線部から上がヘラミガキ、下がヘラケズリされているものがある。口縁部にはヘラミガキの前段階の調整としてのヨコナデのみとめられるものもある。内面はヘラミガキされ黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上部が横方向、下

部では放射状のものが多い。

A 類 丸底で体部に段・沈線の巡らないものである。底部から口縁部にかけて丸味をもってゆるやかに外傾する。器面調整は外面は口縁部から底部までヘラミガキが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理である。内面のヘラミガキ方向は、体下部から底部では放射状、他の部分では横方向のものが多い。

坏B類 製作に際してロク口を使用せず、底部形態が平底のものである。体部外面に段がつくものをB 類、沈線が巡るものをB 類、段・沈線をもたないものをB 類とする。

B 類 平底で体部に段がつくものである。段の位置は体部中央よりやや下のものが多く、段から上が外反するものもあるが、多くは口縁部に向かってやや丸味をもって外傾する。器面調整は外面は口縁部から底部までヘラミガキのものと、口縁部から体部がヘラミガキ、底部がヘラケズリされているものがある。ヘラミガキの方向は横方向が多い、段から下の部分ではヘラミガキの前段階の調整としてのヘラケズリの残っているものもある。内面はヘラミガキされ黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上部が横、下部では放射状のものが多い。

B 類 平底で体部に沈線の巡るものである。沈線には途切れるものもある。沈線の位置は体部中央のものが多く、中央より上のものもある。底部から口縁部にかけて丸味をもって外傾するものと、直線的に外傾するものがある。器面調整は外面は全面がヘラミガキされるものと、沈線を境として以上がヘラミガキ、以下にヘラケズリが施されているものがある。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は体部以上が横方向、底部から体部下端では放射状のものが多い。

B 類 平底で体部に段・沈線の巡らないものである。底部から口縁部にかけて大きく開いて外傾するもの、あまり開かず直線的に外傾するもの、丸味をもって内弯気味に立ち上がるものなど器形的には各種がある。器面調整は外面は全面にヘラミガキが施されるものと、口縁部がヘラミガキ、体下部及び底部にヘラケズリが施されるものがある。前者が多い。ヘラミガキが施される部分において口縁部では前段階の調整としてのヨコナデが、体部・底部ではヘラケズリが観察されるものがある。内面はヘラミガキ・黒色処理である。ヘラミガキの方向は底部から体部下端までが放射状、体部中央で斜位、口縁部で横方向のものが多く、なお、外面にも黒色処理を施したものが少量ではあるがみとめられる。

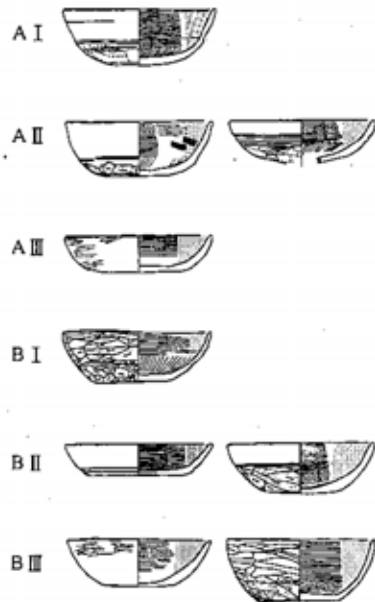
坏C類 製作に際してロク口を使用しているもので、底部の切り離し技法が回転糸切のものである。ロク口は右回転である。再調整の加えられているものをC 類、再調整の加えられていないものをC 類とする。

C 類 体部下端に再調整が加えられている。再調整には手持ヘラケズリ (a) と回転ヘラケズリ (b) の二種がある。底部から口縁部に向かって丸味をもって外傾する器形で、C a では口縁端部がやや外反するものが多い。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は体部下端から底部では放射状、他の部分では横方向のものが多い。

C 類 再調整の加えられていないものである。器形は底部から口縁部へ向かって丸味をもって外傾している。器面調整は外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は体部下端から底部では放射状、他の部分では斜位か横方向である。

坏D類 製作に際しロクロを使用している。再調整のために底部の切り離し技法が不明のものである。再調整は手持ヘラケズリで底面にのみ施されている。底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がる器形のもので、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理である。内面のヘラミガキの方向は体下部から底部では放射状、他では横方向である。

ロクロ未使用	A. 丸底		I. 段あり	
			II. 沈線あり	
			III. 段・沈線なし	
	B. 平底		I. 段あり	
			II. 沈線あり	
			III. 段・沈線なし	
ロクロ使用	平底	C. 回転糸切	I. 再調整あり	(a) 手持ヘラケズリ
				(b) 回転ヘラケズリ
		D. 不明	II. 再調整なし	
			再調整あり	



甕 甕においても、製作に際してロク口を使用したものと使用していないものがある。それらは口径と器高の比率、最大径の位置によって次のように大別される。

- A類** ロク口を使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。
- B類** ロク口を使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。
- C類** ロク口を使用しないもので、口径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。
- D類** ロク口を使用しないもので、口径より器高が小さく最大径の位置が体部にあるもの。
- E類** ロク口を使用しており、口径より器高が大きいもの。
- F類** ロク口を使用しており、口径より器高が小さいもの。

甕A類 器高が口径より大きく口縁部に最大径があるものである。出土数が最も多い。頸部に段・沈線等を有し口縁部と体部とを区画するもの（A1類）と、段・沈線が認められず体部から口縁部へなだらかに移行するもの（A2類）とに細分される。

A1類では、さらに口縁部が外傾するもの（ ）と直立するもの（ ）とがあるが、外傾するものが主体的である。A2類では口縁部はすべて外傾している。A1類とA2類を比較すると、概してA1類は大形のものが多く、A2類は小形のものである。

A類としたもののうち、特にA1類は形態的に長胴形の甕といわれるものに該当する。

体部外面の器面調整は、刷毛目（a）ヘラケズリ（b）軽いケズリ（c）ヘラミガキ（d）と、各種が施されているが、軽いケズリ（c）が最も多い。器形と調整の組み合わせと量比は以下の通りである。

量的に十分なものとはいえないが、今回出土のもので調整との関係を見ると、ヘラミガキ（d）はA1類にはなくA2類に認められる。またハケ目（a）はA2類には認められない。

なお、1列のみではあるが、A1 aの中には二次的に粘土を貼りつけた痕跡の認められるものがある。

	A 1 i a	7
	A 1 i b	7
	A 1 i c	21
	A 1 i 不明	1
	A 1 ii c	1
	A 2 i b	6
	A 2 i c	2
	A 2 i d	1
	A 2 i 不明	1



甕B類 器高が口径より大きく体部に最大径があるものである。最大径は体部のほぼ中央に位置しており、壺形を呈す。口縁部は外傾または外反し、頸部には段や沈線が巡っている。器形的には近似しており斉一性が認められる。

体部外面の器面調整にはハケ目（a）軽いケズリ（c）ヘラミガキ（d）があり、ヘラミガキのものが多く、またヘラミガキを施すものには丹塗りのものがあり、それは体部の他に口縁部

外面にも文様に描かれている。調整による量比は次の通りである。

B l i a	1
B l i c	1
B l i d	2
B l i d丹塗	3

甕C類 器高が口径より小さく最大径は口縁部にあるものであるが、体部の最大径の位置が体部上端にあるもの（C 類）と、体部ほぼ中央もしくは上半にあるもの（C 類）とに細分される。

C 類 頸部に段落を有するもの（C 1類）と段落のないもの（C 2類）とがある。また口縁部が外傾するもの（ ）と、直立（またはやや内傾）するもの（ ）とがある。

体部外面の器面調整には、刷毛目（a）、ヘラケズリ（b）、軽いケズリ（c）、ヘラミガキ（d）がある。内面にもヘラミガキ・黒色処理を施すもの（d'）がある。

C 類はいわゆる鉢形のものでありC 1類にみられる、内面ヘラミガキ・黒色処理のものが特徴的である。しかしながら、器形が小形であることから数値的比較のみによって必ずしも器形を適格に抽出できないものもある。たとえば、C 1 b類の中には甕A 2類と極めて近似しているものが含まれている。

C I 1		a	C I 1 b	2
		b	C I 1 b-d'	1
		d-d'	C I 1 c	1
		c	C I 1 d-d'	3
		d	C I 2 a	1
		d-d'	C I 2 b	2
C I 2			C I 2不明	1

C 類 小形の壺形のものである。頸部の段の有無など細部の器形に若干の違いはあるが、形態的には比較的まとまっている。体部外面の器面調整にはハケメ（a）、ヘラケズリ（b）、軽いケズリ（c）、ヘラミガキ（d）の各種がある。調整による量比は以下の通りである。

なお、C c類には、口縁部に懸垂用かと思われる一対の孔がみられるものがある。

C II a	1
C II b	1
C II c	2
C II d	1
C II不明	1

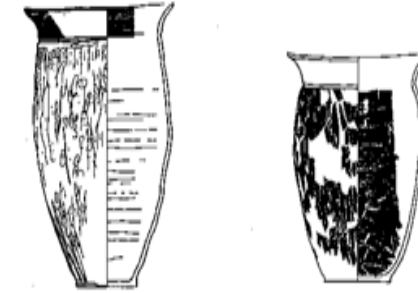
甕D類 口径が器高より大きく、体部に最大径を有するものであるが、この類は本遺跡においては認められない。第37図1の土器がこの類として分類される可能性があるが、この土器は歪みが著しいもので、口径は図示したよりは小さく、B類に含めて考えた。

甗E類 製作に際しロクロを使用したもので、口径よりも器高が大きいものである。頸部に段落は認められない。口縁部は外反しており短い。口縁端部がやや上方に立つものと、丸くおさまるものがある。体部外面の器面調整はロクロ調整ののち体下部にヘラケズリが施されている。また補強のためかと思われる二次的な粘土の貼り付けが行なわれているものが多い。

甗F類 ロクロを使用したもので、口径よりも器高が小さいものである。頸部に段落は認められず、頸部がなだらかに外反して短い口縁部がつく。口縁端部はやや上方に立つ。体部は半球形に底部へ向ってすぼむ。体部外面の器面調整はロクロ調整で、体下半部にはヘラケズリが施されている。

	口径と器高	最大径の位置	体部最大径の位置	頸部	口縁部	体部外面の器面調整
ロ ク ロ	口径 < 器高	A. 口縁部		1. 段あり	(i) 外傾	刷毛目 (a) ヘラケズリ (b) 軽いケズリ (c)
				2. 段なし	(ii) 直立	ヘラミガキ (d)
	口径 > 器高	B. 体部		(1) 段あり	(i) 外傾	刷毛目 (a) 軽いケズリ (b) ヘラミガキ (c) ヘラミガキ (d) 丹塗
				(2) 段なし	(ii) 直立	刷毛目 (a) ヘラケズリ (b) 軽いケズリ (c) ヘラミガキ (d) 内面ヘラミガキ・黒色処理 (d')
未 使 用	口径 > 器高	C. 口縁部	I. 体部上端	(1) 段あり	(i) 外傾	刷毛目 (a) ヘラケズリ (b) 軽いケズリ (c) ヘラミガキ (d)
			II. 体部中央 または上半	(1) 段あり (2) 段なし	(i) 外傾	刷毛目 (a) ヘラケズリ (b) 軽いケズリ (c) ヘラミガキ (d)
ロ ク ロ 用	E. 口径 < 器高					
	F. 口径 > 器高					

A1



A2



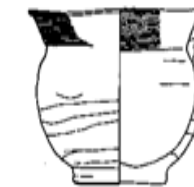
B



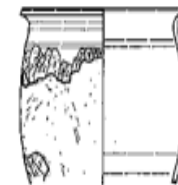
CI



CII



E



F



甑 底部のみの破片もあり、また出土量が少なく不明な点が多い。甑孔の形態により無底式のもの（A類）と多孔式（B類）とに分類される。いずれも製作に際しロク口は使用されていない。

A類ではさらに、体部下端が即ち孔端になるもの（A類）と、体部下端が内側にわずかに折れまがって孔端になるもの（A類）とがある。それぞれ1例ずつみられる。A類のものは、体部から口縁部へ直線的に外傾するものである。器面調整はA類では、口縁部は内外ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はハケメである。A類は体部下半のみが現存しており、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

B類については、底部のみの破片でありまた器面も摩滅しており詳細は不明である。

他に口縁部のみの破片も2例出土している。体部から口縁部へかけて直線的に外傾したものである。器面調整は、口縁部内外はいずれもヨコナデであり、体部は、外面 軽いケズリ・内面 ヘラナデ、内外面ともハケメのものである。ただしこれらは底部の形態が不明のため分類に加えることはできない。

高坏 器形の判明するものは2例である。いづれも坏部に比して大きな、低く開いた脚部をつく器形のもので、製作に際しロク口は使用せず、坏部外面体下部に軽い段を有する内面ヘラミガキ、黒色処理のもので、形態・調整共に近似している。他に脚部のみが1例出土しているが、その特徴は前2例と一致する。

壙 2例出土している。ロク口は使用していない。口縁部が直立するものと、やや内弯気味のもので、若干器形的違いはあるが器面調整は共通している。内外面ともヘラミガキ、内面には黒色処理が加えられている。

蓋 1例出土している。つまみ部は欠損している。ロク口は使用しておらず、外面はヘラミガキ、内面にはナデ状の調整が施されている。

高台付坏 製作に際しロク口を使用しているものである。2例のみの出土ではあるが、坏部外面体下部に再調整が施されているもの（A類）と施されないもの（B類）とに区分される。再調整は回転ヘラケズリ技法によるものである。なお、いずれも坏底部の切り離し技法は、高台部接合の際のロク口調整のため不明である。

【須恵器】 比較的出土量が多く図示できたものは約 50 個体である。坏が最も多く、次いで高台付坏（稜塊）蓋、甕、壺、鉢の順となる。甕、壺、鉢は破片数は多いが図化できるものは少ない。

坏 器形はいずれも体部から口縁部へかけて直線的あるいはやや丸味を帯びて外傾するもので、底部切り離し技法、再調整の有無等により分類することができる。

切り離し技法にはヘラ切り技法、回転糸切技法の二種がある。ロクロはすべて右回転である。

坏A類 ヘラ切り技法によって切り離されたものである。切り離し後再調整の加えられるものをA 類、再調整のみられないものをA 類とする。A 類は少ない。再調整は手持ヘラケズリによるもので、底全面に施されている。

坏B類 回転糸切技法によって切り離されたものである。A類同様、再調整のあるものをB 類、ないものをB 類とする。B 類は1点のみで、手持ヘラケズリが体部下端に施されている。

坏C類 再調整のために切り離し技法が不明のものである。再調整は手持ヘラケズリ技法で底全面に施されている。

以上の他に摩滅のため、切り離し技法・再調整の有無等の不明なものがある。

A ヘラ切り	I 再調整有(手持ヘラケズリ・底全面)
	II “ 無
B 回転糸切	I “ 有(手持ヘラケズリ・体下端)
	II “ 無
C 不明	I “ 有(手持ヘラケズリ・底全面)
(不明)	同上

高台付坏（稜塊） 図示可能のものは9例である。うち1例は底部が欠損し、また口縁が欠損しているものが2例ある。底部の現存するものでは、ヘラ切り痕が認められる。

いずれも体下部に稜をもって屈折しているものである。稜の形態により次の二種に分類される。

高台付坏A類 体下部に稜をもつが、稜の部分が外部に突出し、きわめて明瞭に屈折するものである。大形のもの和小形のものがある。器高は高い。高台部の明らかなものは1例のみであるがそれによると、高台部は高くやや外方にしっかりとふんばるものである。

高台付坏B類 稜がA類ほど明瞭なものではなく、なだらかに移行するものである。器高が高いものと、通常の坏に近似して低いものがある。

蓋 宝珠形つまみを有し、体部はなだらかにのびて端部が下方へ折りまげられて口縁部がつくり出されたものである。天井部外面には、回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。つまみの形態によって区分すると次の二種がある。

蓋A類 つまみ中央部が周縁部より高いもの。

蓋B類 つまみ中央部が周縁部とほぼ同じか、それより低いもの。

なお、A類の中には、硯に転用しているものも1例認められる。

甗・壺・鉢 いずれも破片の出土は多いが、図示できるものは少ない。また個々に様相を異にしており、共通した特徴を抽出することが困難である。したがって分類作業は行なわない。

〔赤焼土器〕

坏と甕がある。本書において「赤焼土器」としたものは、色調が赤褐色ないし明褐色を呈し成形・調整に際しロク口を使用し、底部切り離しが回転糸切技法によるもので、内外面とも再調整の施されないものである。

本遺跡出土の赤焼土器は量的に少なく、またカメは底部破片のみである。したがって、坏の口縁部形態等において若干違いの認められるものもあるが、上記の定義に包括し、さらに細かな類別は行なわなかった。

以上のように出土土器（土師器 坏・甗・高台付坏、須恵器 坏・高台付坏（稜碗）・蓋）の分類を行なった。図示した土器をこの分類にあてはめると第1表のようになる。

また、分類にしたがって図示した土器を出土地点・層位毎に配列すると第2・3表のようになる。

2. 出土土器の組み合わせとその年代

出土土器はそれぞれ前項のように分類され、それらは各住居跡単位において第2表のように共伴関係がみられた。次に各住居跡間に共通する土器をよりどころとして組み合わせ関係を検討することとする。

土師器坏には、製作に際しロク口を使用したものと使用しないものの二者がある。

ロク口を使用していないA・B類では、16号住居跡においてA₁、A₂、B₁、B₂類が共伴し、また12号住居跡においてA₁、B₁、B₂類が共伴している。さらに5号住居跡においてA₁、B₁、B₂類の共伴関係が認められ、これらを総合すると、A₁～A₂、B₁～B₂類はすべて組み合わせ関係が成立するとみることができる。

第1表 図示遺物分類表

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
5図1	1住 ビット1	土師器	甕	E	5	5住 床	土師器	甕	C I (2ii不明)
2	1住 床	土師器	甕	F	6	5住 床	土師器	甕	C I (2ia)
3	1住 カマド内	土師器	甕	F	7	5住 床	土師器	甕	C II (1i不明)
4	1住 床	土師器	甕	E	8	5住 床	土師器	甕	B (1id)
6図1	1住 ビット1	土師器	坏	C I (b)	9	5住 床	須恵器	坏	
2	1住 ビット1	土師器	高台付坏	B	17図1	5住 床	土師器	甕	A1 (ic)
3	1住 床	土師器	高台付坏	A	2	5住 床	土師器	甕	A1 (ic)
4	1住 床	須恵器	坏	B II	3	5住 床	土師器	甕	A1 (ic)
5	1住 床	須恵器	高台付坏	B	19図1	6住 貯蔵穴	土師器	坏	C II
6	1住 床	須恵器	蓋	B	2	6住 貯蔵穴	土師器	坏	C II
7	1住 カマド内	赤焼土器	坏		3	6住 貯蔵穴	土師器	坏	C II
8	1住 馬 溝	赤焼土器	坏		4	6住 貯蔵穴	土師器	坏	C I (a)
9	1住 カマド内	赤焼土器	坏		5	6住 貯蔵穴	土師器	坏	C I (b)
10	1住 ビット1	赤焼土器	坏		6	6住 床	土師器	甕	B (1i不明)
11	1住 ビット7	赤焼土器	甕		20図1	6住 馬 溝	須恵器	甕	
12	1住 カマド左側壁	土師器	甕	A1 (ic)	2	6住 貯蔵穴	須恵器	鉢	
7図1	1住 馬 溝	土師器	甕	A1 (ib)	21図	7住 床	土師器	坏	C I (a)
2	1住 カマド左側壁	土師器	甕	A1 (b)	23図1	9住 カマド側壁	土師器	甕	A1 (ia)
3	1住 カマド左側壁	土師器	甕	A1 (c)	2	9住 カマド内	須恵器	高台付坏	A
4	1住 カマド右側壁	土師器	甕	A1 (ia)	3	9住 床	土師器	坏	C II
8図1	2住 床	土師器	坏	A I	25図1	10住 床	土師器	坏	B I
2	2住 床	土師器	坏	B I	2	10住 床	土師器	坏	B II
3	2住 床	土師器	坏	B II	3	10住 床	土師器	坏	B II
4	2住 床	須恵器	蓋	B	4	10住 床	土師器	甕	A1 (ic)
5	2住 床	須恵器	高台付坏	B	28図1	12住 床	土師器	坏	A II
10図1	2住 床	土師器	甕	A1 (ic)	2	12住 床	土師器	坏	B I
2	2住 床	土師器	甕	A1 (ia)	3	12住 床	土師器	坏	B II
3	2住 ビット8	土師器	甕	C II (1ib)	4	12住 床	土師器	坏	B II
4	2住 床	土師器	甕		5	12住 床	土師器	坏	B III
5	2住 カマド側壁	土師器	甕	A1 (ic)	6	12住 床	土師器	坏	B III
12図	3住 床	土師器	甕	A1 (ic)	7	12住 床	土師器	坏	B III
14図	4住 床	土師器	甕	A2 (ib)	8	12住 床	土師器	坏	B III
16図1	5住 床	土師器	坏	A III	9	12住 床	土師器	坏	
2	5住 床	土師器	坏	B I	29図1	12住 床	土師器	甕	A2 (id)
3	5住 床	土師器	坏	B I	2	12住 床	土師器	甕	A
4	5住 床	土師器	坏	B III	3	12住 カマド支脚	土師器	甕	

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
4	12住 床	須恵器	坏	A II	39図1	16住 床	須恵器	坏	A I (a ₁)
5	12住 床	須恵器	坏	C I (a ₁)	2	16住 カマド	須恵器	坏	A II
6	12住 床	須恵器	坏	A II	3	16住 床	須恵器	坏	A II
7	12住 床	須恵器	坏	B II	4	16住 床	須恵器	坏	B II
31図1	13住 床	土師器	坑		5	16住 床	須恵器	高台付坏	B
2	13住 床	土師器	甕	C II (11c)	6	16住 床	須恵器	高台付坏	B
3	13住 床	土師器	甕	A1 (1b)	7	16住 床	須恵器	蓋	B
4	13住 床	土師器	甕	A1 (1b)	8	16住 床	須恵器	蓋	B
32図1	13住 床	土師器	甕	B (11c)	9	16住 床	須恵器	鉢	
2	13住 床	須恵器	蓋	A	42図1	18住 床	土師器	甕	A2 (1b)
3	13住 床	須恵器	高台付坏	A	2	18住 床	須恵器	蓋	
34図1	15住 カマド	土師器	坏	B III	44図1	21住 床	土師器	坏	A II
2	15住 床	土師器	甕		2	21住 床	須恵器	坏	A II
3	15住 カマド	土師器	甕	A2 (1b)	46図	22住 床	須恵器	甕	
4	15住 カマド	土師器	甕	C I (21b)	48図1	23住 床	土師器	坏	A I
5	15住 カマド	須恵器	坏	A I (a ₁)	2	23住 床	土師器	蓋	
36図1	16住 カマド	土師器	坏	A I	50図1	23住 床	土師器	甕	A1 (1c)
2	16住 カマド	土師器	坏	A II	2	23住 床	土師器	甕	A1 (1c)
3	16住 カマド	土師器	坏	B II	3	23住 床	土師器	甕	A2 (不明)
4	16住 床	土師器	坏	B III	4	23住 床	土師器	甕	C I (11b)
5	16住 カマド側壁	土師器	甕	A1 (1c)	5	23住 床	土師器	甕	C I (11b)
6	16住 カマド左側壁	土師器	甕	A1 (1c)	6	23住 床	土師器	甕	C I (11d)
7	16住 カマド左側壁	土師器	甕	A2 (1b)	7	23住 床	甕		
8	16住 カマド左側壁	土師器	甕	A2 (1c)	8	23住 床	土師器	甕	A
9	16住 カマド右側壁	土師器	甕	A2 (1b)	9	23住 床	須恵器	坏	A I (a ₁)
37図1	16住 床	土師器	甕	B (11a)	10	23住 床	須恵器	坏	B II
2	16住 床	土師器	甕	B (11d)	53図1	25住 床	土師器	坏	A I
3	16住 カマド右側壁	土師器	甕	B (11d)	2	25住 床	土師器	坏	A II
4	16住 床	土師器	甕	C II (11a)	3	25住 床	土師器	坏	B III
5	16住 床	土師器	甕	B	4	25住 床	土師器	坏	A I
6	16住 カマド	土師器	甕	C I (111c)	5	25住 床	土師器	坑	
38図1	16住 カマド左側壁	土師器	甕		6	25住 床	土師器	高坏	
2	16住 カマド右側壁	土師器	甕		7	25住 床	土師器	甕	A1 (1c)
3	16住 カマド右側壁	土師器	甕		8	25住 床	土師器	甕	A1 (1b)
4	16住 カマド右側壁	土師器	甕		9	25住 床	土師器	甕	A1 (1b)
5	16住 床	土師器	甕		10	25住 床	土師器	甕	C II (11d)
6	16住 カマド右側壁	土師器	甕		54図1	25住 床	土師器	甕	C I (11d)

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
	25住 床	土師器	甕	C I (11d)	8	10住 堆積土	土師器	坏	BⅡ
	25住 床	須恵器	坏	C	72図1	15住 堆積土	土師器	甕	A1 (ia)
	25住 床	須恵器	蓋		2	15住 堆積土	須恵器	蓋	
56図1	26住 カマド	土師器	坏	BⅡ	3	16住 堆積土	土師器	高台付坏	
	26住 カマド支脚	土師器	甕		4	16住 堆積土	須恵器	蓋	B
57図1	26住 床	土師器	甕	A1 (ic)	5	16住 堆積土	須恵器	坏	AⅡ
	26住 カマド右側壁	土師器	甕	A1 (ia)	6	18住 堆積土	須恵器	坏	AⅡ
	26住 床	土師器	甕	A1 (ic)	7	19住 堆積土	土師器	甕	A2 (ib)
	26住 カマド側壁	土師器	甕	CⅡ (11c)	8	21住 堆積土	土師器	坏	AⅢ
	26住 カマド右側壁	土師器	甕	A2 (ic)	9	21住 堆積土	土師器	坏	BⅡ
	26住 カマド内	土師器	甕		10	21住 堆積土	土師器	甕	A1 (ia)
59図1	27住 床	土師器	坏	BⅡ	11	21住 堆積土	土師器	甕	A1 (ic)
	27住 床	土師器	甕	C I (11d)	73図1	21住 堆積土	土師器	甕	A1 (ic)
	27住 床	土師器	甕	A1 (ic)	2	21住 堆積土	土師器	甕	B (11d)
	27住 床	土師器	甕		3	21住 堆積土	須恵器	坏	AⅡ
	27住 床	須恵器	坏	AⅡ	4	21住 堆積土	須恵器	坏	BⅡ
	27住 床	須恵器	甕		5	21住 堆積土	須恵器	坏	B I (a ₂)
61図	28住 床	土師器	甕	A1 (ic)	6	21住 堆積土	須恵器	高台付坏	B
63図1	29住 床	土師器	坏	BⅢ	74図1	21住 堆積土	須恵器	甕	
	29住 床	土師器	坏	CⅡ	2	22住 堆積土	土師器	坏	BⅡ
	29住 床	土師器	坏	CⅡ	3	23住 堆積土	土師器	甕	A1 (ic)
	29住 床	土師器	甕		4	25住 堆積土	土師器	坏	B I
65図1	30住 床	須恵器	高台付坏	B	5	29住 堆積土	土師器	坏	A I
70図1	1住 堆積土	土師器	甕	E	6	1土壌 2層	土師器	坏	D (Ia)
	2住 堆積土	土師器	坏	BⅡ	7	1土壌 ビット	須恵器	甕	E
	2住 堆積土	土師器	坏	AⅢ	8	1土壌 1層	須恵器	坏	BⅡ
	2住 堆積土	土師器	甕		9	1土壌 1層	須恵器	坏	BⅡ
	2住 堆積土	土師器	甕	A1 (不詳)	10	1土壌 1層	須恵器	坏	BⅡ
	2住 堆積土	土師器	甕	A1 (ic)	11	1土壌 2層	須恵器	坏	BⅡ
	2住 堆積土	土師器	甕	A1 (ib)	12	1土壌 2層	須恵器	甕	
71図1	5住 堆積土	土師器	坏	BⅡ	75図1	不明	土師器	坏	AⅢ
	5住 堆積土	土師器	坏	BⅡ	2	不明	土師器	坏	BⅡ
	5住 堆積土	土師器	甕	A1 (ia)	3	表 採	須恵器	坏	AⅡ
	5住 堆積土	土師器	甕	E	4	不明	須恵器	坏	AⅡ
	10住 堆積土	土師器	坏	D (Ia)	5	不明	土師器	甕	A1 (ia)
	10住 堆積土	須恵器	坏	BⅡ	6	表 採	土師器	甕	C I (11d)
	10住 堆積土	須恵器	甕		7	不明	須恵器	蓋	B

ロクロを使用しているC類では、6号住居跡においてC、C類が共伴している。D類は遺構に伴うような出土状態のものではなく共伴関係は不明である。

そして、ロクロ不使用のA・B類とロクロ使用のC類との間には共伴か関係はみられないことよって、土師器坏には大きく2群の組み合わせが成立すると考えられる。

土師器甕では、最も量の多いA類がほとんどの住居跡から出土している。A類を除いた他の類別のものについてみると、ロクロを使用したE、F類は1号住居跡において共伴しており、他の住居跡では出土していない。一方、他のA2、B、C、C類は16号住居跡にみられるようにすべて共伴関係にあり、E、F類の出土した1号住居跡にはみられない。

このように土師器甕では、ロクロ使用のE・F類とロクロ不使用のA2・B・C・C類はそれぞれ組み合わせとして成立すると思われ、A類は両者に共通して組み合わせると考えられる。

つまり、坏と甕の両者においてロクロ使用の有無が組み合わせ上の大きな要素とみられる。そして、高台付坏（ロクロ使用）は第1号住居跡においてロクロ使用の坏と伴い、高坏・壙・蓋（ロクロ不使用）は他の住居跡でロクロ不使用の坏と伴っている。

甌については、出土したものはすべてロクロ不使用のものであり、ロクロ不使用の坏と伴っている。しかし、甌は本来各住居において使用されたと考えられるにもかかわらず出土量が極めて少なく、詳細は明らかでない。

須恵器は、出土量が多いが共伴関係を検討できるような出土状態（遺構に伴うもの）のものは少なく不明な点が多い。しかし、分類された各種は第16号住居跡において明らかなようにほとんどが共伴関係にある。つまり土師器坏・甕等において認められた2大別に対応するような区分は須恵器においては認めることができない。このことは須恵器と土師器とでは異なった変遷過程が存在していることを示していると考えられる。

赤焼土器は第1・6号住居跡（第6表）から出土しており、ロクロ使用の土師器坏と伴う。

以上のように、組み合わせ関係を検討すると大別の可能な基準は土師器坏において認められ、それをもとに他の土器との関係をみると次表のような組み合わせが考えられる。

第4表 出土土器組み合わせ表

	土 師 器						須 恵 器						赤 焼 土 器	
	坏	甕	甌	高台 付坏	高 坏	壙 蓋	坏	高台 付坏	甕	甌	鉢	环		甕
第1群	A I, A II, A III, B I, B II, B III (ロクロ不使用)	A I, A 2, B, C I, C II	A・B		○	○	○	A I, A II, B II, C	A・B	B	○	○	○	
第2群	C I・C II, (ロクロ使用)	A I, (A 2) E, F		A・B				B II,	A・B	A・B	○		○	○
(第3群)	D							B I,						

なお、第3群としたものは、共伴関係が不明なため第1・2群のいずれにも位置づけること

ができないものである。このうち土師器坏D類はロク口を使用したものであり、第2群に含めて考えてさしつかえないものと思われる。

さて、現在東北地方南部における土師器の編年は主に坏形土器によってなされているが、それによると、第1群土器の土師器坏は国分寺下層式(氏家:1967)第2群土器は表杉の入式(氏家:1957)に比定される。またその他の土師器についても、これまで述べてきた共伴関係や組み合せ関係によって同形式に位置づけることができる。

一方、須恵器の編年は、近年窯跡出土のものを中心に、官衙跡等の瓦類との共伴や技法的な観点をもとにして研究が進められているが、いまだ確立されたものではない。したがって本遺跡出土の須恵器についても十分な位置づけを与えることは困難であるが、共伴関係によって、それぞれ土師器と同年代のものであることは明らかである。

3. 出土土器に関する問題点

〔第1群土器について〕

第1群土器の土師器は国分寺下層式と考えることができる。しかしながらそれには、これまで明らかにされた国分寺下層式とはいく分様相を異にするものを含んでいる。

坏についてみると、いわゆる国分寺下層式の特徴は、ロク口不使用・丸底・内黒のものであり外面にみられる段の位置等によって、**、**、**類**に細分されている(氏家:1967)。また技法的には、外面にヘラミガキ(段以上または全面)を施すものが主体をなし、まれに全面にヘラケズリを施すものがみられる(桑原:1976)という点などである。これに対し本遺跡出土のものは器形的には丸底・平底の両者があり、それぞれ外面に段のほかに沈線の巡るものもあり、さらに段・沈線のみられないものも含んでいる。技法上は、内面ヘラミガキ、黒色処理で外面はヘラミガキ(段・沈線以上または全面)であり特徴を同じくしている。このうちB類(平底無段・沈線)としたものは登米郡対馬遺跡出土のもの(加藤・伊藤:1955)に近似し、対馬式土器として理解されたもの(氏家:1957)である。たしかに、第1群土器としたものは遺構の重複関係に明らかなように、年代的に幅があることは明らかである。たとえば第13号第16号第15号の3住居跡の変遷間の土器が第1群土器として一括されている。そして15号住居跡からはB類(第34図)の出土がみられる。しかしながら前項において検討したように、B類は他の住居跡において他の分類の坏と共伴しており、すでにいわれているように(桑原:1976, 小井川・高橋:1977)第1群土器(国分寺下層式)の範ちゅうとして理解してさしつかえないと思われる。

また、国分寺下層式の細分(**、**、**類**)についてもそれは明確ではなかった。

結論的にいうならば、本遺跡における国分寺下層式の坏は、技法上統一された、各種の器形

のものが混然として一つの組み合わせを構成しているといえる。

なお、砂押川出土の土器の中にみられた外全面にヘラケズリの施された坏（桑原：1976）は本遺跡においては出土していない。このことが、地域差・年代差等を意味するものか、あるいはたまたま今回の出土がなかったのかについては明らかでない。しかし該土器は量的には極めて僅少であること^{注1)}から、この技法をもつ坏が国分寺下層式において普遍的に組み合わせを構成し得るものかということを含めて今後の検討が必要であろう。

甕については、これまでその内容はほとんど不明であった。今回の調査によってほぼその大略を得ることができたが、その内容はかなり多様である。

長胴形の甕が主体を占めているが、他に各種の器形が認められる。比較的小形のものも多く生活用具として、それぞれの目的に応じて(?)かなり分化して使用されていたことが想定される。また旧来の伝統的な壺形のものも依然として組成を構成する要素として存在している。それに伴う丹塗の技法についても同様である。

なお、量的に主体を占める長胴形の甕について、大小の別がみられることはすでに各項で触れた。これについて法量上の違いにおいて、それを明確に区分することはできなかったが、使用に際しては異なった用途の存在も考えられ、今後何らかの分類と考察が必要であると思われる。

須恵器との関係についてみると、坏ではヘラ切り技法と回転糸切り技法のものの両者ともに共伴している。須恵器の研究において技法上はヘラ切りのものが先行することが明らかになっており、本遺跡の状態はヘラ切りから回転糸切への移行期にあたりと考えられる。そして、量的にはヘラ切りのものが多いことから、回転糸切り技法導入の初期の段階と考えられる。

分類	A (ヘラ切り)		B (回転糸切り)	
	I	II	I	II
数量	2	7		3
	9		3	

高台付坏(稜碗)についてみると、A類としたものは日の山窯跡出土のもの(宮城県教委：1970)と近似しており、B類は形態上それより年代の下降すると考えられるものである。しかし両者は共伴関係にある。

このような須恵器の伴出状態は、すでに前項でも述べたように、土師器と須恵器との変遷過程の相違を示す^{注2)}とともに、生産の場である窯跡と実際にそれを使用・消費する場の一つである集落跡の間においては土器組成内容が大きく異なることを示している。

【第2群土器について】

第2群の土師器は表杉の入式に比定される。

第1群と第2群との大きな違いは、土師器の製作に際し第2群ではロクロ技術を導入していることである。そしてその結果、土器組成において器形の整理・統合の現象が進行したとみられる。すなわち、第1群の土師器においてかなりの比重を占めていた小形の甕類が第2群ではみ

られない。むしろ今回出土しなかったということが、全く途絶えたことを示し得るものではないが比率的にいちじるしく減少したことはうかがうことができる。この代りとして、あるいはロク口使用の小形甕の存在も推定されるが、その場合においても器形はかなり画一的になると想定され、組成関係はより単純化すると考えられる。

なお、第2群土器にあっても、長胴形の甕の一部にはロク口技術を導入しないもの(A類)が依然として存続しており、この器形について第1群土器との差異はない。つまり、土師器と須恵器の場合と同様に、土師器自体においても器形によってその変遷は一樣ではないと考えられる。

赤焼土器は量的に少なく不明な点が多いが、第1・6号住居跡から出土し、須恵器・土師器と共伴している。須恵器とは焼成法はもちろん胎土・器形を異にしており、土師器とも技法上区別される。いわゆる須恵系土器(岡田・桑原:1974、桑原:1976)とも器形を違えており、今後の類例の増加をまちたい。

須恵器坏にはヘラ切り技法・回転糸切技法の両者がみられる。

以上述べた事の他にも、たとえば土師器坏にも再調整の加えられるものと加えられないものがあるなど、第2群土器については問題となるべき点は多数認められる。また、赤焼土器の伴出にかたよりのことから推定されるように今後細分される可能性をも含んでいる。

しかし、全体に遺物量が少なくその検討は困難であるため、今回の報告では第2群土器は一括して表杉の入式とそれに伴う土器群として把握するにとどめる。

また、第1群、第2群土器ともにその絶対年代についてはそれを明らかにするような遺物は出土しておらず判然としない。したがって、これまでの研究成果によって、ごく大まかではあるが、第1群土器は奈良時代、第2群は平安時代に属するものと理解しておく。

なお、本遺跡出土の須恵器(特に坏)は、町内狐塚窯跡(第1図)出土品と^(注3)極めてよく近似しており、本遺跡への主なる供給は同窯跡からである可能性がある。

注1) 桑原滋郎氏教示

注2) たとえば、本遺跡の須恵器坏はヘラ切りと回転糸切技法のもののみであるが、三本木町山畑横穴古墳群の場合には、国分寺下層式の坏とともに静止糸切技法の坏が出土している(宮城県教委:1973a)。横穴古墳の場合には追葬の問題を考えなければならないために共伴関係を認定する場合困難を伴うが、同古墳の場合、両者に「朱描線による×印がのこっており」共伴関係とみてさしつかえないものと思われる。そして静止糸切技法の須恵器坏はヘラ切技法に先行する(岡田・桑原:1974)と考えられている。

注3) 志波姫町教育委員会蔵

4. 遺構の年代

出土土器と、遺構相互の重複関係をもとに遺構の年代を検討すると次のようになる。

国分寺下層式期	第2.5.10.12.13.15.16.18.21.23.25.26.27.28号住居跡（14軒）
表杉の入式期	第1.4.6.7.9号住居跡（5軒）
時期不明	第3.8.11.14.17.19.20.22.24.29.30号住居跡（10軒）第1.2.3.4号土壇、第1号溝

第4・18号住居跡については、遺物は小片のため図示できないが、第4号住居跡床面からはロクロ使用土師器坏片が、第18号住居跡床面からはロクロ未使用土師器坏片がそれぞれ出土しており（第6表）年代が推定できる。

時期不明としたもののうち第8、11、14、17、20、24号住居跡および第2、3、4号土壇については遺物が全く出土していないため不明である。また19号住居跡は堆積土からのみの出土で遺構に伴うものはない。しかし住居跡については形態からみて古代に属するものであることは明らかであり、第8、20号住居跡は、重複関係によって表杉の入式期以降と限定される。

第3・第22号住居跡は、土器は出土しているが土師器甕および須恵器甕のみの出土のため年代をきめかねるものである。

第29・30号住居跡では、ロクロ未使用の土師器坏片と、ロクロ使用の土師器坏片の両者が出土しているが、攪乱が底面近くまで及んでいることから遺構に伴う遺物が明確でないために年代を推定できない。

第1号土壇は、堆積土からロクロ使用の土師器坏片が出土しており、表杉の入式期またはそれ以前と考えられる。

第1号溝については、第4号住居跡を切っており、表杉の入式期またはそれ以降のものである。ただし、溝底に酸化鉄の層も認められ、積極的な根拠はないが後世の用・排水路と考えられる。

以上のように発見された遺構のうち、所属時期の明らかなものは国分寺下層式期と表杉の入式期に2大別された。しかしながら、特に住居跡についてみると、第5表に一括したようにその形態に時期差はほとんど認めることができなかった。逆にカマドの方向などでは時期を超えて強い斉一性がうかがわれる。一方、個々の住居跡については、規模の大小、柱穴、周溝の有無などの点で違いがみられるものもある。これらのことがどのような意味をもつのかについては、初めに述べたように調査時点における制約等もあり、現時点では考察を加えることは困難である。本稿においては資料の提示のみにとどめておきたい。

ま と め

1. 今回の調査によって発見された遺構は住居跡30、土壇4、溝1である。それらの大半は古代に属するものであり、国分寺下層式期および表杉の入式期に2大別される。

2. 出土遺物についても両時期のものが主体を占める。

他にわずかではあるが弥生土器も出土しており、同時期の遺構の存在も予想される。

3. 遺跡の範囲は、今回の発掘地区以外にものびておりその面積は遺跡ののる台地一円約 3 万㎡と考えられる。そして、台地縁辺部には良好な状態でなお多数の遺構・遺物が遺存していると考えられる。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会 (1974) 「中藤根遺跡」
(1976) 「下藤根遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第 39 集
- 阿部 義平 (1968) 「東国の土師器と須恵器 多賀城外の出土土器をめぐって」帝塚山考古学 1
- 氏家 和典 (1957) 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第 14 輯
(1961) 「土器」「陸奥国分寺跡」所収 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編
(1967) 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって 奈良・平安期土師器の諸問題」柏倉亮吉教授還暦記念論文集
- 岡田 茂弘 (1974) 「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究紀要
- 桑原 滋郎 (1976) 「須恵系土器について」東北考古学の諸問題
- 小笠原 好彦 (1976) 「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題
- 加藤 孝 (1954) 「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集
- 加藤 孝 (1955) 「宮城県登米郡新田村字対馬竪穴住居址群」登米郡新田村史
- 伊藤 玄三
- 北上市教育委員会 (1976) 「尻引遺跡調査報告書」
- 工藤 雅樹 (1972) 「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌第 57 巻 3 号
- 桑原 滋郎
- 桑原 滋郎 (1970) 「ロクロ土師器杯について」歴史第 38 輯
(1976) 「東北北部および北海道の所謂第一型式の土師器について」考古学雑誌第 61 巻 4 号
- 小井川 和夫 (1974) 「糠塚遺跡」日本考古学年報 25 (1972 年版)
- 小井川 和夫 (1977) 「宮城県対馬遺跡出土の土器」宮城史学 5 号
- 高橋 守克
- 志波 姫町 () 「志波姫町史」
- 鈴木 啓 (1975) 「東北自動車道遺跡調査報告書 出磐山遺跡」福島県文化財調査報告書第 47 集
- 木本 元治
- 宮城県瀬峰町教育委員会 (1977) 「がんげつ遺跡 平安時代の竪穴遺構」宮城県瀬峰町文化財調査報告書第 1 集
- 仙台市教育委員会 (1973) 「史跡陸奥国分寺跡昭和 48 年度環境整備予備調査概報」
- 坪井 清足 (1953) 「福島県天王山道跡の弥生式土器 東日本弥生式文化の性格」史林 36 巻 1 号
- 宮城県教育委員会 (1970) 「日の出山竪穴群」宮城県文化財調査報告書第 22 集
(1973 a) 「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報 宮城県文化財調査報告書第 32 集
(1973 b) 「糠塚遺跡」宮城県考古資料展解説
(1974) 「東北新幹線系列遺跡調査報告書 岩切嶋ノ巣跡」宮城県文化財調査報告書第 35 集
- 宮城県教育委員会 (1972) 「糠塚遺跡発掘調査現地説明会資料」
- 志波姫町教育委員会

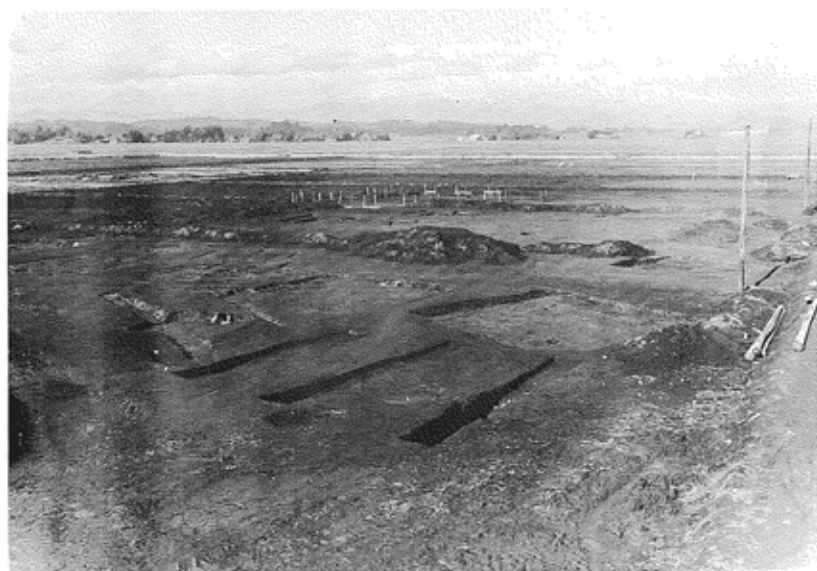
第5表 住居跡一覽

住居跡番号	平面形	規模(m)	周溝	柱穴	付家遺構	方向	構築素材	支脚	礎石の埋込	礎石の長さ	礎石の幅	時 期
1号住居跡	方形	7.2 × 6.8	有, ほぼ全周	4	東西中央 (南)北辺中央	N-7°-W	粘土・土版築		有	有	有	表形の入り堀
2号住居跡	隅丸方形	8.3 × 8.3	有, ほぼ全周	4	北辺中央	N-14°-E	粘土・土版築		有	有	有	段分寄下層式
3号住居跡	方形	2.7 × 3.5	一部有	4	北 辺	N-7°-E	粘土		有	有	不明	不明
4号住居跡	隅丸方形	7.5 × 7.8	有, ほぼ全周	4	北辺中央	N-27°-W	粘土		有	有	有	表形の入り堀
5号住居跡	隅丸方形	6.1 × 7	有		東 辺 ?		粘土・土版築					段分寄下層式
6号住居跡	隅丸方形	4.6 × 4.1	一部有		北辺中央	N-15°-W			有	有	有	表形の入り堀
7号住居跡	隅丸方形	5.6 × 3.6	有, ほぼ全周		北辺中央	N-40°-W	粘土・土版築		有	有	有	不明 (礎石の入り堀は不明)
8号住居跡	隅丸方形	5.1 × 4.4	有		北辺中央		粘土		有	有	有	表形の入り堀
9号住居跡	隅丸方形	6.7 × 6.5	一部有	4	北辺中央	N-5°-E	粘土		有	有	有	段分寄下層式
10号住居跡	隅丸方形	5.2 × 5.2	一部有	4	北辺中央	N-7°-W	粘土		有	有	有	段分寄下層式
11号住居跡	隅丸方形	4.9 × 3.5	有, ほぼ全周		北 辺	N-1°-W	粘土		有	有	有	不明
12号住居跡	方形	4.6 × 7	一部有		東 辺	N-75°-E	粘土		有	有	有	段分寄下層式
13号住居跡	隅丸方形	6.1 × 6.0	有, ほぼ全周	4	北辺中央	N-7°-W	粘土・土版築		有	有	有	段分寄下層式
14号住居跡	隅丸方形	5.1 × 5.3(7)		4	北 辺	N-9°-E			有	有	有	不明
15号住居跡	(北) 方形	4.8 × 4.4	有, ほぼ全周		東 辺	E-9°-S	粘土・土版築		有	有	有	段分寄下層式
16号住居跡	(南) 方形	4.8 × 4.9			東 辺	E-31°-S						不明
17号住居跡		3.2 × 7										不明 (表形の入り堀は不明)
18号住居跡	隅丸方形	7.8 × 7.2	有, ほぼ全周	柱穴	北 辺	N-15°-E						段分寄下層式
19号住居跡	隅丸方形	3.9 × 3.6	有		北 辺	N-15°-W						不明
20号住居跡	隅丸方形	3.5 × 3.5	一部有		北 辺	N-32°-W	粘土		有	有	有	段分寄下層式
21号住居跡	隅丸方形	2.8 × 7			北 辺	N-31°-W	粘土		有	有	有	不明
22号住居跡	隅丸方形	5.3 × 5.1	有, ほぼ全周	4	北 辺	N-15°-W	粘土		有	有	有	段分寄下層式
23号住居跡	方形	3.7 × 3.7	有, ほぼ全周	4	北 辺	N-37°-W	粘土・土版築		有	有	有	段分寄下層式
24号住居跡	隅丸方形	6.7 × 7.2	一部有	4	北 辺	N-16°-E			有	有	有	段分寄下層式
25号住居跡	隅丸方形	5.8 × 5.5	一部有	4	北 辺							不明
26号住居跡	隅丸方形	5.8 × 5.9	一部有		北 辺							不明
27号住居跡	隅丸方形	4.0 × 3.8	一部有									不明

図版 1



1. 遺跡遠景（発掘調査実施前）



2. 遺跡遠景（発掘調査実施中）

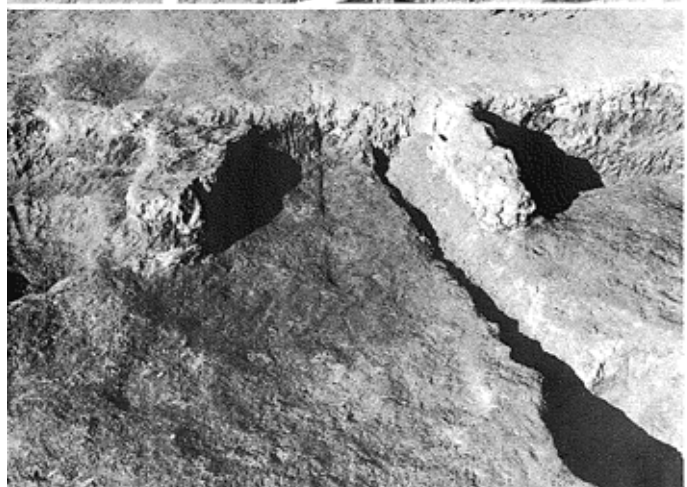


図版 2

1. 調査区南部の住居跡群



2. 第1号住居跡



3. 同第2カマド

图版 3

1. 第1号住居跡遺物出土
状況



2. 第1号住居跡遺物出土
状況



3. 第1号住居跡遺物出土
状況



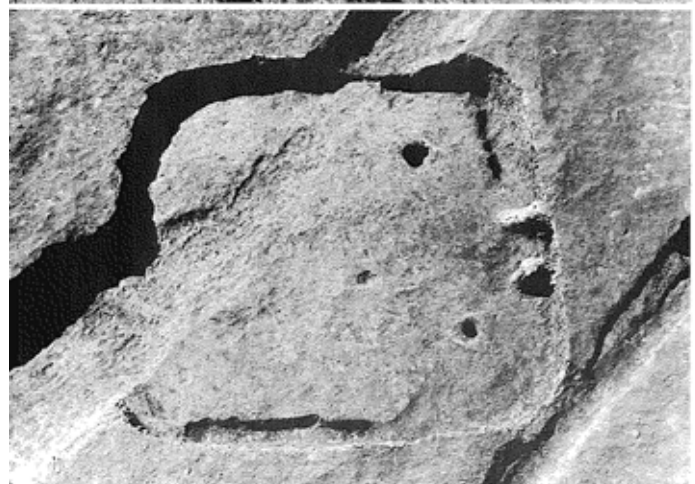


図版 4

1. 第 2 号住居跡



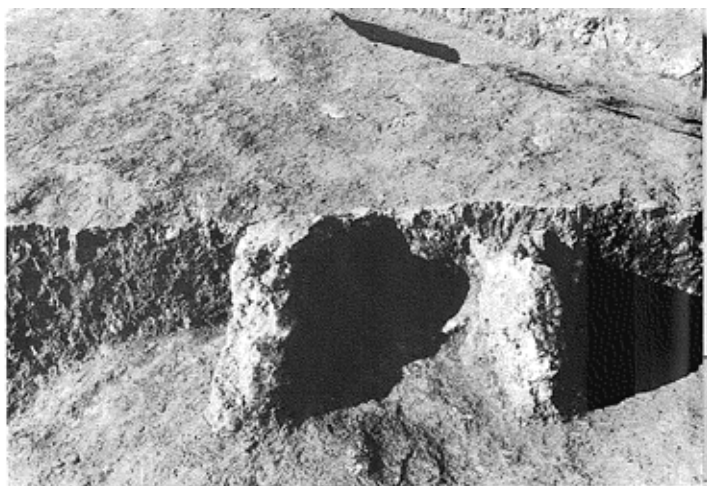
2. 同カマド



3. 第 4 号住居跡

図版 5

4. 第4号住居跡カマド



5. 第5号住居跡



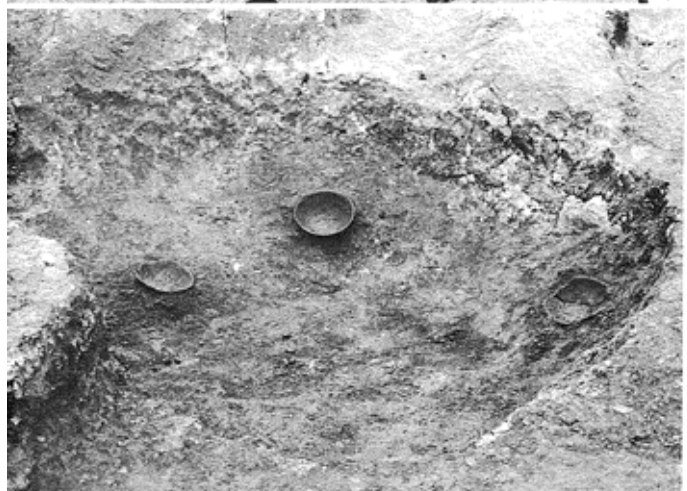
6. 同カマド



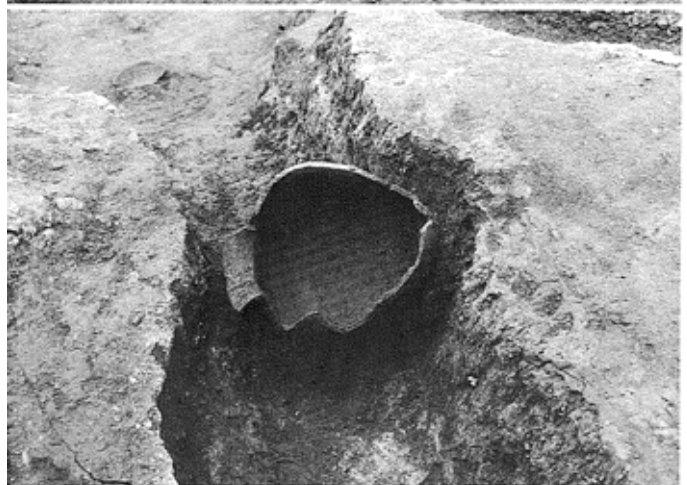
图版 6



1. 第 6, 7 号住居跡



2. 第 6 号住居跡遺物
出土状況(貯藏穴)



3. 第 6 号住居跡遺物
出土状況(周溝内)

図版 7

1. 第7号住居跡カマド



2. 第8, 9, 20号住居跡



3. 第9号住居跡カマド



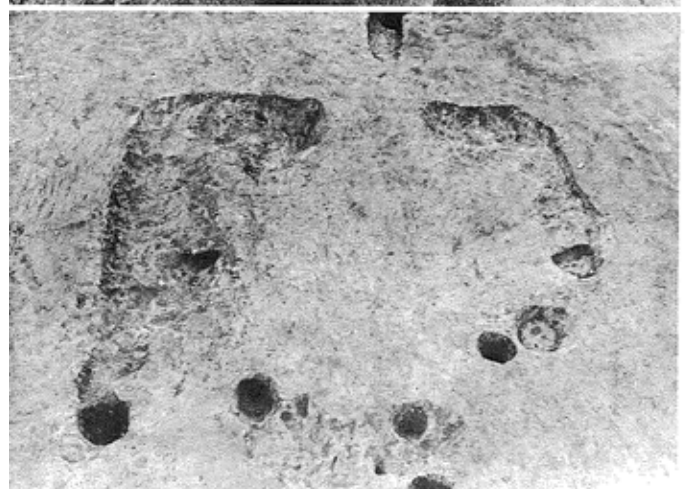
図版 8



1. 第10号住居跡



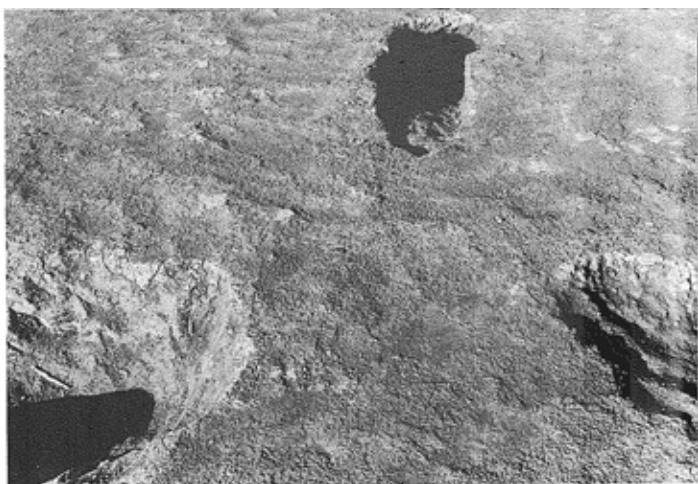
2. 同カマド



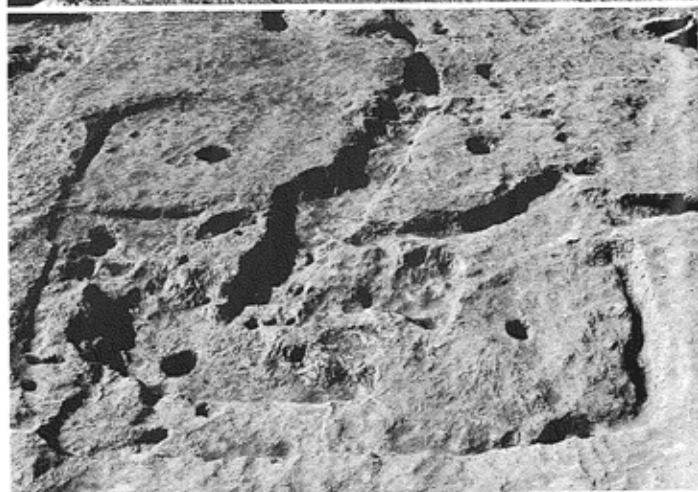
3. 第11号住居跡

図版 9

1. 第11号住居跡カマド



2. 第12号住居跡



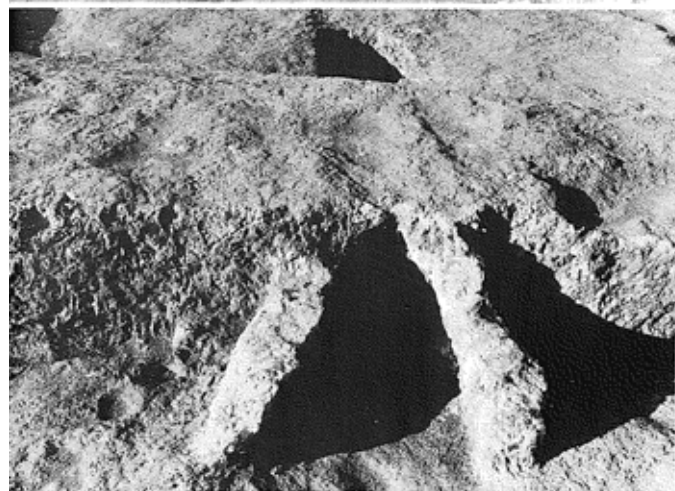
3. 同カマド





図版 10

1. 第13号住居跡



2. 同カマド



3. 同遺物出土状況(床面)

图版 11

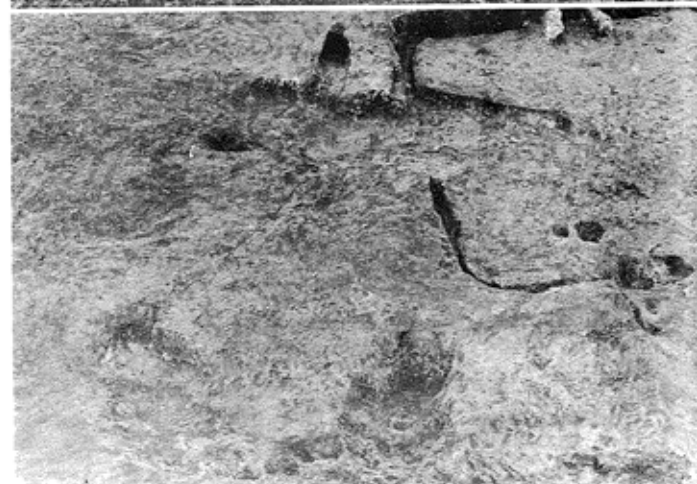
4. 第13号住居遗迹物
出土状况(床面)



5. 第13号住居遗迹物
出土状况(床面)



6. 第14号住居跡





図版 12

1. 第14号住居跡



2. 第15号住居跡



3. 同カマド

図版 13

1. 第16号住居跡遺物
出土状況(床面)



2. 同カマド



3. 第16号住居跡遺物
出土状況(床面)





图版 14

1. 第16号住居跡遺物
出土状況(床面)



2. 第16号住居跡遺物
出土状況(床面)



3. 第17号住居跡

図版 15

1. 第18号住居跡



2. 第21号住居跡



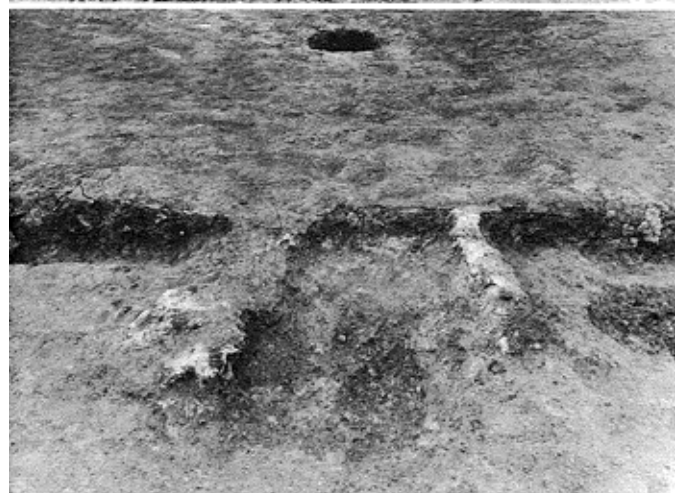
3. 同カマド



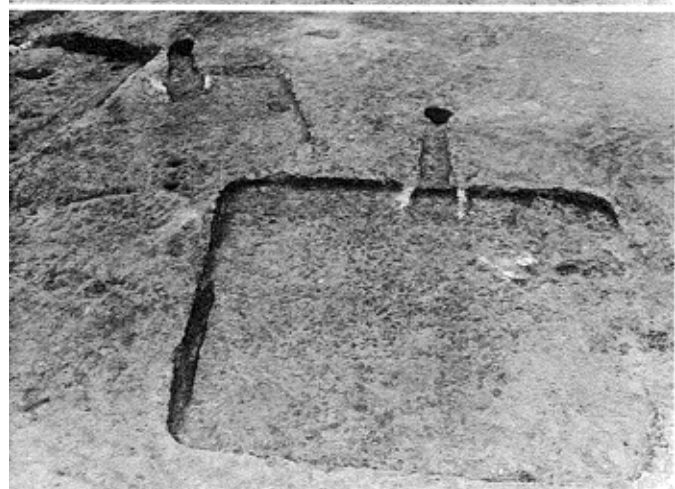
図版 16



1. 第22号住居跡



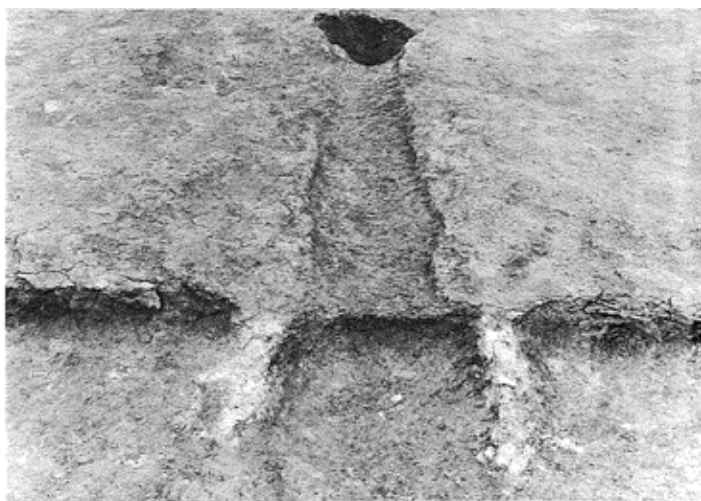
2. 同カマド



3. 第23, 24号住居跡

図版 17

1. 第23号住居跡カマド

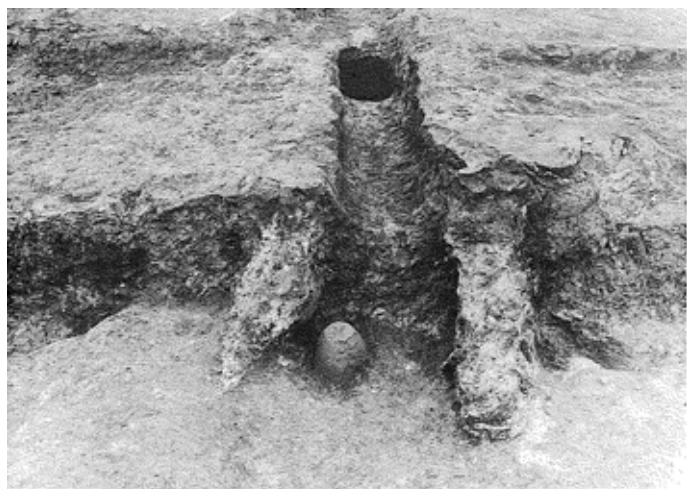


2. 第24号住居跡カマド



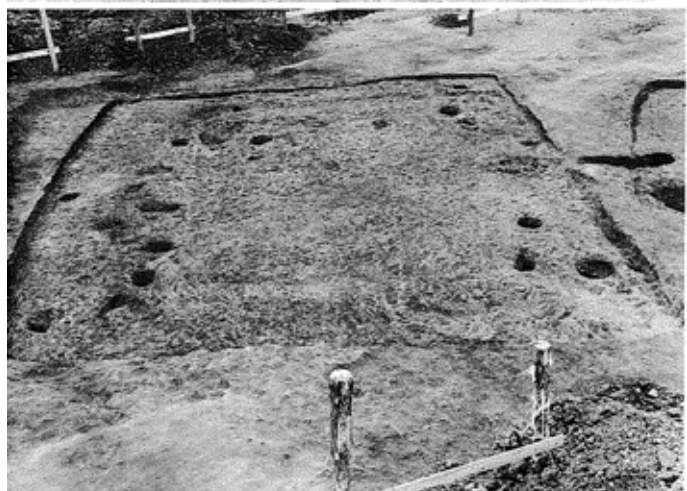
3. 第25号住居跡カマド



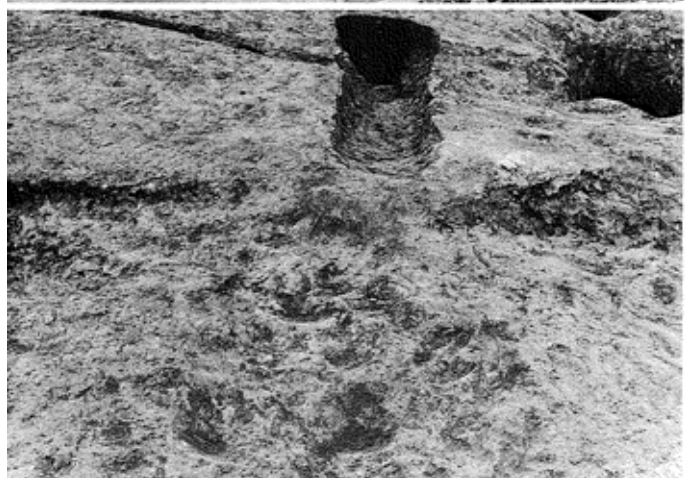


図版 18

1. 第26号住居跡カマド



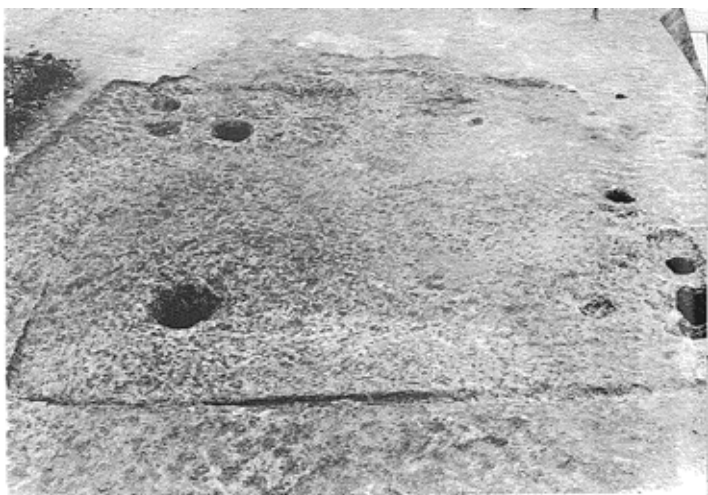
2. 第27号住居跡



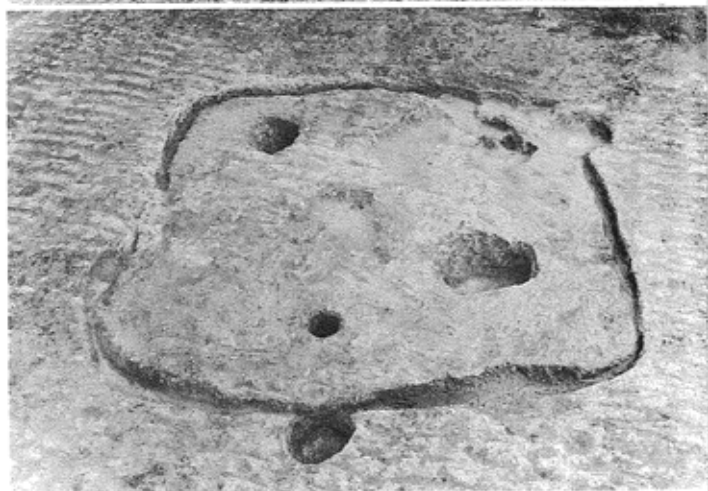
3. 同カマド

图版 19

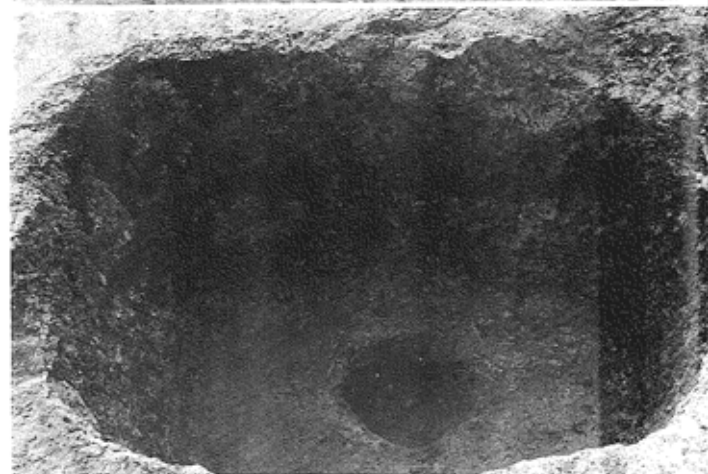
1. 第29号住居跡

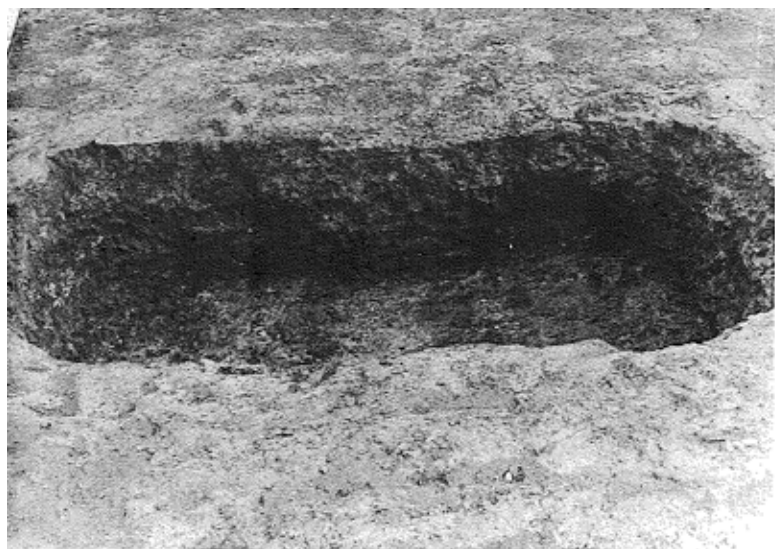


2. 第30号住居跡



3. 第1号土坑





图版 20

1. 第2号土城

圖版 21



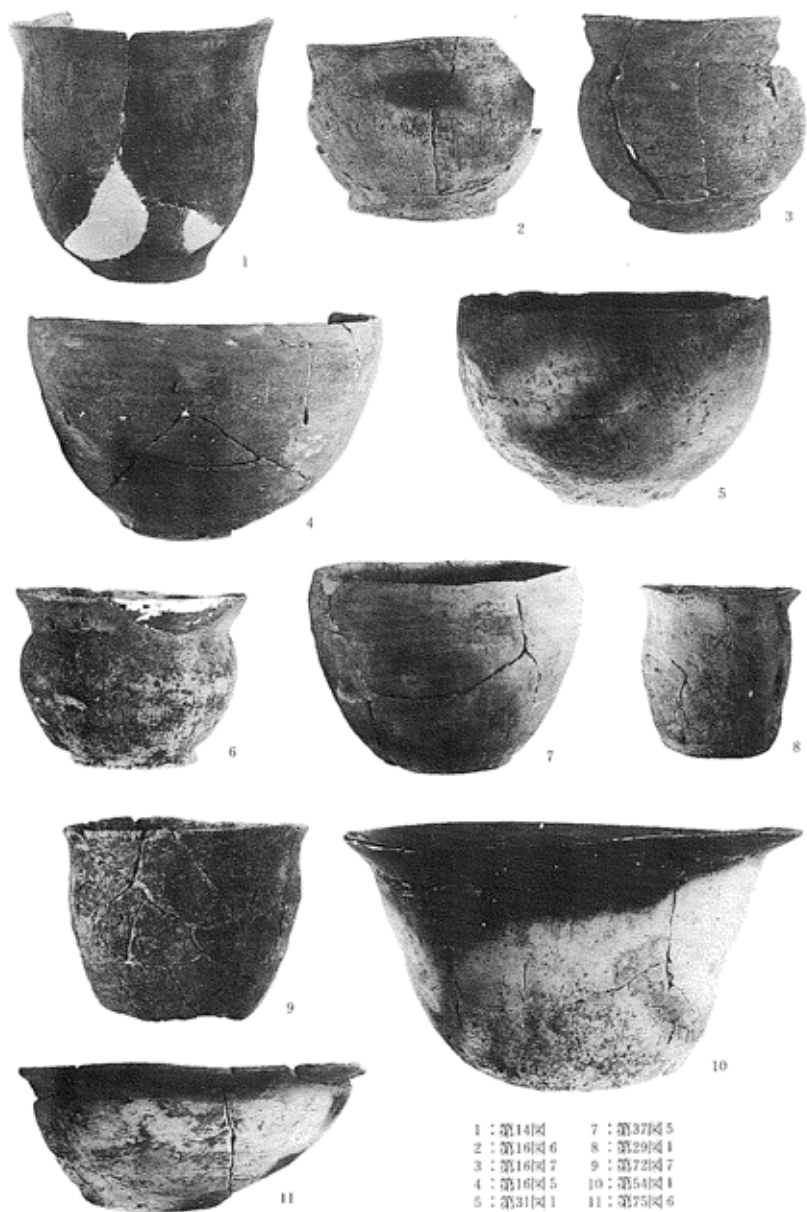


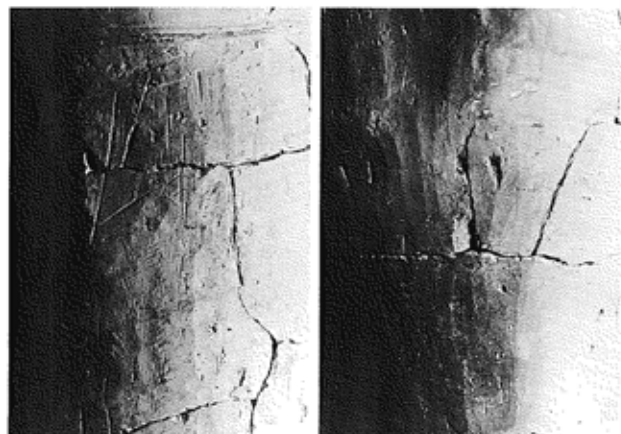




- 1 : 第321号
2 : 第731号
3 : 第371号
4 : 第371号
5 : 第371号
6 : 第341号
7 : 第711号

(单位: 厘米)





- 1 : 007400 8
 - 2 : 003900 4
 - 3 : 003200 3
 - 4 : 00 6 10 5
 - 5 : 00 8 10 4
 - 6 : 003200 2
 - 7 : 003900 8
 - 8 : 00 6 10 9
 - 9 : 001000 1
- (编年-450)



1 : 第 5 组 2
 2 : 第 7 组 4
 3 : 第 2 组 1
 4 : 第 2 组 2
 5
 6
 7
 8-1 : 第 7 组 2
 2 : 第 7 组 1
 3 : 第 7 组 3
 4 : 第 7 组 5
 (照尺 45/0)

(2) 兜塚古墳

丹羽 茂・一条孝夫・千葉宗久・阿部博志

遺跡所在地：仙台市根岸町 13 - 15 - 1

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：昭和 52 年 7 月 26 日～昭和 52 年 8 月 6 日

調査面積：約 2700 m²

発掘面積：約 2200 m²

遺跡記号：E N

遺跡番号：01014

協力機関：仙台市教育委員会

宮城県仙台南高等学校

1. 調査に至る経過

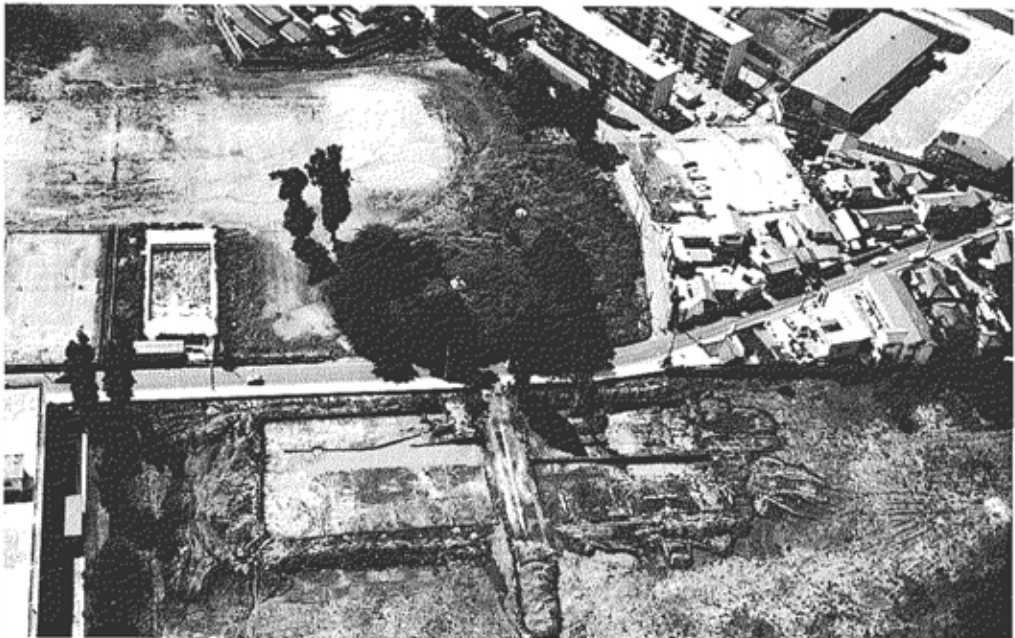
兜塚古墳は仙台市根岸町 13 15 1 に所在し、その存在は明治時代後半から知られている。古墳の現状は、市道根岸兜塚線によって墳丘東側の一部が削り取られているものの、市道の西側には直径約 50m の円墳状の墳丘が残っている。

兜塚古墳の一带の土地は、旧宮城県農業短期大学および旧宮城県農業高等学校の跡地であり、現在は宮城県仙台南高等学校の校地となっている。この学校は昭和 52 年 4 月に開校したばかりで、学校教育施設の整備計画の策定が 52 年度にあっていた。そこで古墳の範囲がどれ程のものなのか、早急に確認する必要があった。

これまで兜塚古墳の形態に関しては、墳丘を後円部分とみなす前方後円墳説（高野：1906、三原：1947）と円墳説（笠井：1918、松本：1930、伊東：1950、1957）と円墳としながらも帆立貝式前方後円墳の可能性を秘めているという説（氏家：1974）がある。

この古墳が仮に前方後円墳だとすると、その前方部は市道を含んでその東側一帯の校地部分にまで広がる可能性もあり、この地域の利用計画策定にあたっては、範囲確認が重要となった。こうして、今回の兜塚古墳の発掘調査は範囲確認を目的として行われることになった。

以上の経過を経て、昭和 52 年 7 月 26 日から、市道の東側の学校敷地内約 2700 m²を対象として発掘調査を実施した。8 月 5 日に、発掘調査成果および学術的価値と意義について報道関係者に発表し、翌 6 日に地元仙台南高等学校生徒および一般市民を対象として現地説明会を開催した。発掘調査は 8 月 6 日に終了した。



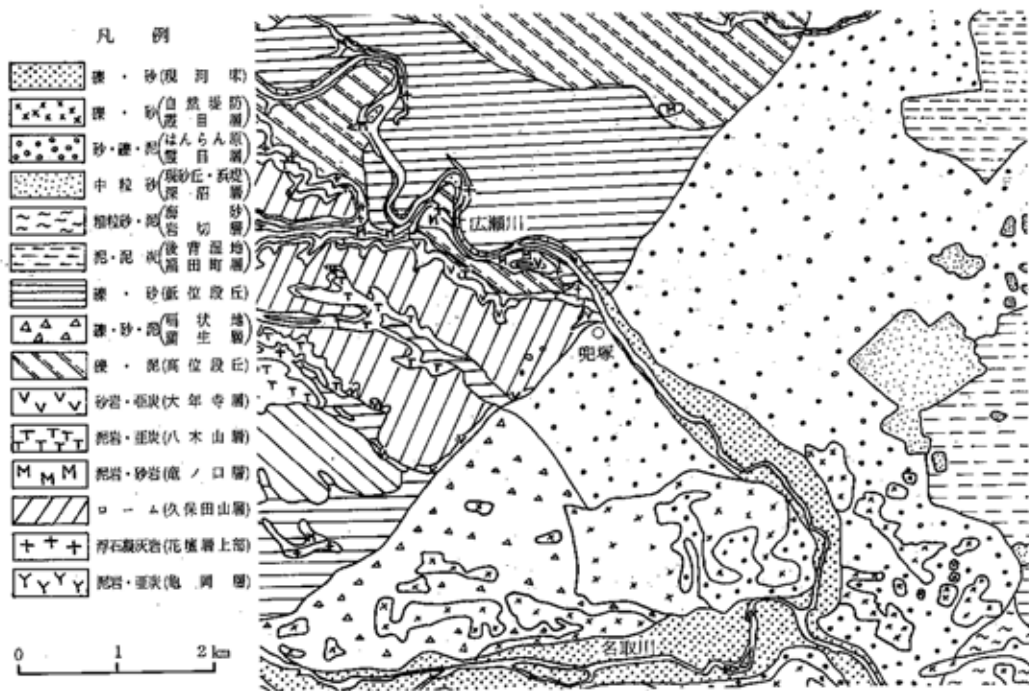
兜塚古墳遠景（東上空から）

2. 遺跡の位置と環境

兜塚古墳は仙台駅の南方約 2.5 km、仙台市根岸町 13 - 15 - 1 に位置している。本遺跡は市内を北西から南東へと蛇行しながら流れる広瀬側と大年寺山丘陵麓との接点付近にある沖積地に^{(注)1}立地する。遺跡の現状は宮城県仙台南高等学校（旧宮城県農業高等学校および宮城県農業短期大学）の敷地内にあり、一部東側を道路によって削られている。墳頂の標高は約 22m でグラウンド面との比高は約 5.5m である。墳丘の直径は残存部で約 50m である。墳丘形態は草木でおおわれているが、三段築成の可能性はある。

自然的環境 仙台市街地は北を七北田丘陵、西を国見丘陵、南西を青葉山丘陵に囲まれている。これらの丘陵の基盤は新第三紀層から構成されている。これらの丘陵を開析する七北田川、広瀬川、名取川は低地を形成しながら、ほぼ西から東へ流れ、太平洋にそそいでいる。市街地は広瀬川の北岸に形成された河岸段丘上から東方の低地に広がっている。兜塚古墳周辺を地質的にみれば、青葉山丘陵は新第三紀層（八木山層、大年寺山層）を基盤としており、その上に礫層や火山灰層などが堆積している。兜塚古墳は、広瀬川によって押し流された砂、礫、泥が堆積してできた沖積地に立地している。

注 1. 兜塚古墳は、沖積地に立地している点では見解の一致がみられる。地形分類上の細部については、河岸段丘（下位段丘）自然堤防、氾濫原の各説がある。



第 1 図 兜塚古墳周辺の表層地質図

歴史的環境 仙台市内には316ヶ所(昭和53年1月現在)の遺跡が分布している(宮城県教委:1976)。兜塚古墳周辺の遺跡を概観してみたい。

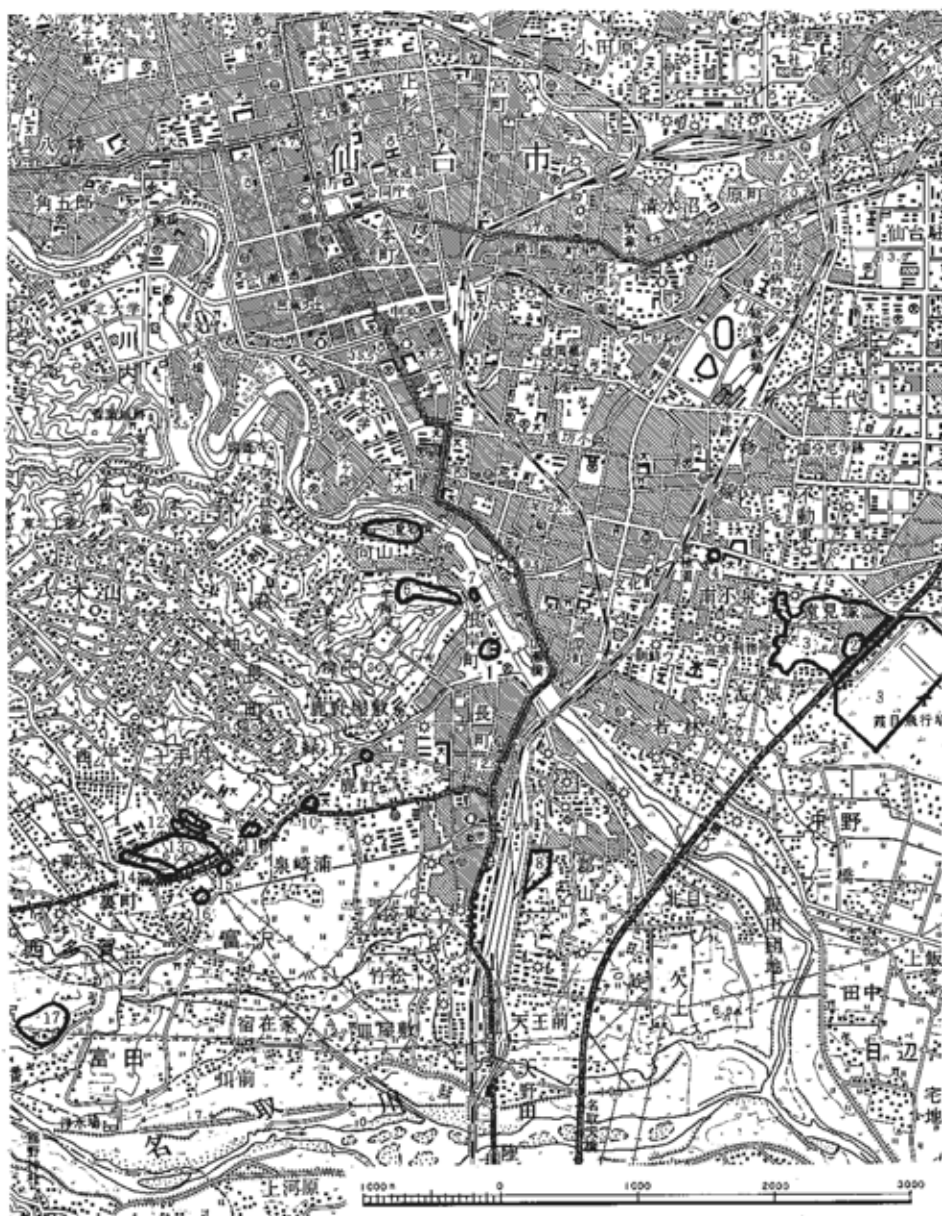
縄文時代の遺跡としては、三神峯遺跡(宮城教育大学日本史研究会:1968、白鳥:1974、仙台市教委:1973、1975)、上野遺跡(仙台市教委:1976)などがある。三神峯遺跡は前期~中期の遺跡で、古くから土器、石器を多量に出土することで知られていた。1973年、1975年の発掘調査により、竪穴住居跡が合計8軒発見された。また上野遺跡からも中期の竪穴住居跡が数軒発見されている。

弥生時代の遺跡としては、南小泉遺跡(伊東:1950、1957)、西台畑遺跡(伊藤:1958)などがある。南小泉遺跡からは刃痕を底部にもつ土器や石包丁などが出土している。

古墳時代の遺跡としては、高塚古墳、横穴古墳、窯跡、集落跡などがある。高塚古墳には遠見塚古墳(伊東:1954、仙台市教委:1976、1977)、一塚古墳(伊東:1950、仙台市教委:1974)、二塚古墳(高野:1906、仙台市教委:1974)、砂押古墳(宮城県教委:1976)、金洗沢古墳(伊東:1950)、裏町古墳(仙台市教委:1974)、法領塚古墳(仙台市教委:1972)などがある。遠見塚古墳は主軸長110mの前方後円墳で、東北で第3位の規模をもっており、造営年代は出土した土師器の特徴などから5世紀前半と考えられている。裏町古墳は主軸長約40mの前方後円墳で5世紀後半から6世紀初頭ころの造営と考えられている。二塚古墳は主軸長約30mの前方後円墳で家形石棺、埴輪をもっている。二塚古墳の東約0.5kmには一塚古墳がある。この古墳からは家形石棺、六乳鳥文鏡などが出土しており、6世紀初頭の造営と考えられている。遠見塚古墳の北西約1kmの所には法領塚古墳がある。これは仙台平野における横穴式石室をもつ古い時期の円墳で、その造営年代は7世紀初頭のものと考えられている。横穴古墳には愛宕山横穴古墳群(仙台市教委:1974)、大年寺山横穴古墳群(笠井:1918、伊東:1950)、宗禅寺横穴古墳群(仙台市教委:1976)、土手内横穴古墳群(伊東:1950)などがある。窯跡には富沢窯跡(渡辺:1974)がある。富沢窯跡出土の埴輪と裏町古墳出土の埴輪に類似したものがある(渡辺:1974)と渡辺泰伸氏は指摘している。集落跡には弥生から平安時代まで続く南小泉遺跡(伊東:1950、1957)がある。

奈良・平安時代の遺跡としては、南小泉遺跡(伊東:1950、1957)、郡山遺跡(伊東:1950)、鹿野屋敷遺跡(宮城教育大学考古学研究会:1974)、六反田遺跡(仙台市教委:1977)などがある。

中世の遺跡としては、茂ヶ崎城跡(宮城県:1970)などが知られている。



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 兜塚古墳 | 2. 遠見塚古墳 | 3. 南小泉遺跡 | 4. 法領塚古墳 |
| 5. 愛宕山横穴古墳群 | 6. 大年寺山横穴古墳群 | 7. 宗禅寺横穴古墳群 | 8. 西台畑遺跡 |
| 9. 一塚古墳 | 10. 二塚古墳 | 11. 砂押古墳 | 12. 土手内横穴古墳群 |
| 13. 三神峯遺跡 | 14. 富沢窯跡 | 15. 金洗沢古墳 | 16. 裏町古墳 |
| 17. 上野遺跡 | | | |

第2図 兜塚古墳と周辺の遺跡

3. 調査の方法と経過

兜塚古墳については、すでに述べたように、前方後円墳とする説と円墳とする説がある。

今回の調査目的は古墳の範囲を確認することにあった。調査は道路の東側地区（宮城県農業高等学校跡地）を対象に行なった。発掘面積は約2200 m²である。

発掘にあたっては、調査区のほぼ中央に原点（A・B）を定め、原点AとBを結んだ軸線を基準として、それに直交する線を設け、3m単位のグリッドを組んだ。原点Aの東側を101区・西側を100区・南側をB T区・北側をC A区として、それぞれ延長してグリッド名を付した。

トレンチ調査を行ない遺跡の層位を検討した。その結果、後世の盛土が厚く堆積していたのでバックホーを導入し、遺構確認面まで取り除いた。

その後、調査区に周湟の一部が検出されたため、調査区を拡張し周湟の範囲を確認した。調査区内における周湟の範囲確認後、周湟に直交するA・Bトレンチを設定して周湟の状態を観察した。

発掘区の周湟については^{3/20}の平面図を作成した。また、トレンチや周湟内堆積土について観察し、^{3/20}の断面図を作成した。

4. 調査の成果

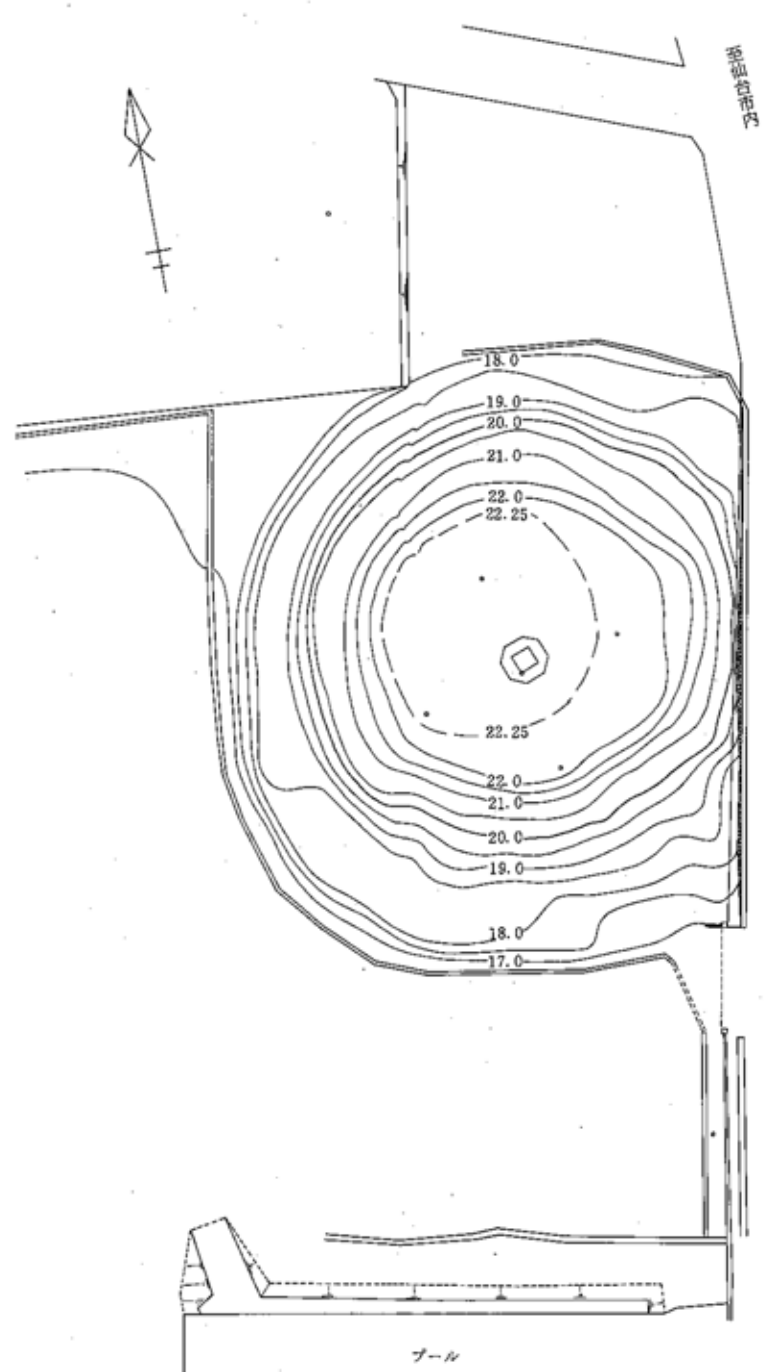
今回の調査において、発見された遺構は周湟である。発見された遺物としては円筒埴輪、須恵器、縄文土器、石器などである。

(1) 発見された遺構

周湟 地表観察によって、周湟の痕跡を確認することはできなかった。発掘調査によって、後世の厚い盛土を排除し、精査を行なった結果、地山面において、周湟外縁部を確認することができた。なお、発掘区のいたる所に後世の建物跡やごみ捨て穴があり周湟は攪乱を受けていた。周湟の内縁部は発掘区の西端に南北に走る後世の堀（木流し堀の跡）があったため攪乱を受けており確認することはできなかった。

確認された周湟の範囲は東西約23m、南北約60mである。周湟外縁部の形態は南東側に屈曲部をもつ「J」字状である。周湟南側外縁はほぼ直線的であるが、屈曲部において直角より僅かに大きい角度で北へ折れ曲る。屈曲部で折れ曲った東側外縁もほぼ直線的であるが、北に向うにしたがって弧を描くように西側へやや彎曲している。

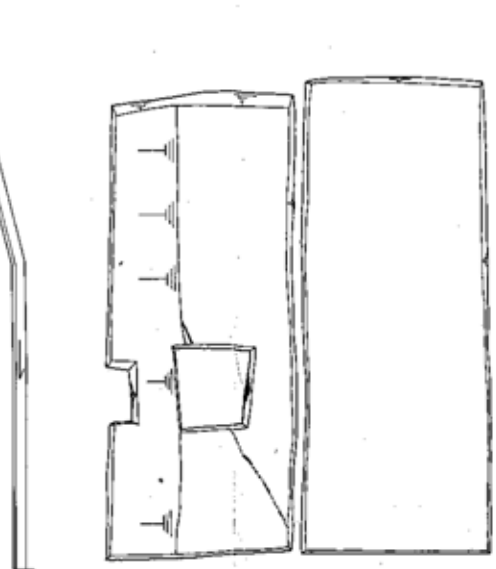
周湟外縁部と壁・底面の形態および堆積土の状況を観察するため、A・Bトレンチを設定した。その結果、次のようなことが明らかとなった。



古河川

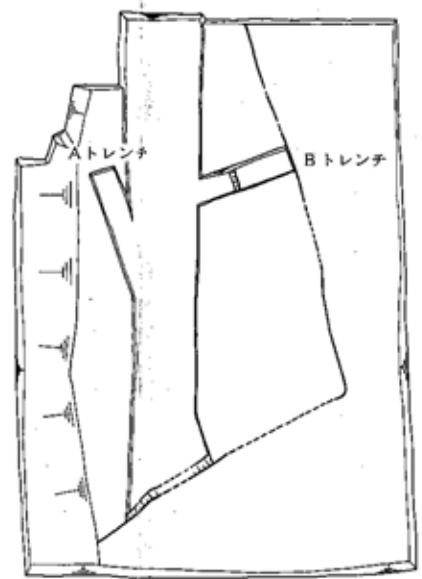
市川

ナール



原点A

原点B



- CO
- CN
- CM
- CL
- CK
- CJ
- CI
- CH
- CG
- CF
- CE
- CD
- CC
- CB
- CA
- BT
- BS
- BR
- BQ
- BP
- BO
- BN
- BM
- BL
- BK
- BJ
- BI
- BH
- BG
- BF
- BE
-

100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111



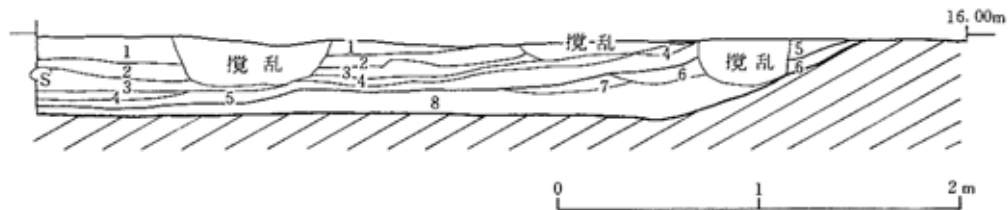
第3図 遺構配置図

層立は層に大別できる。第層は粗砂・中砂を含む黒褐色土層で、A・Bトレンチに認められ、周湟の中央に堆積している。第層は白みがかった黄褐色粘土ブロックを含む黒色粘土層で、A・Bトレンチに認められ、周湟の壁際から中央にゆるやかな傾斜をもって堆積している。第層は黒褐色砂層で、Aトレンチだけに認められ、周湟の壁際にあり、その傾斜に沿って、堆積している。第層は褐灰色砂層で、A・Bトレンチに認められ、周湟の壁際から底面に堆積している。第層は暗褐色土層で、Bトレンチだけに認められ、周湟の壁際に堆積している。周湟の堆積土中から埴輪片が十数点出土した。

Aトレンチの周湟の壁は比較的なだらかな傾斜をもって立ちあがる。Bトレンチの周湟の壁にはテラス状の段(外縁から約4.7m)があり、二段になっている。おのおのの壁は比較的垂直に立ちあがる。したがって、壁の状態は場所によって異なることが確認された。

周湟底面までの深さはいずれも約40cmである。

底面の形態はいずれのトレンチにおいてもほぼ平坦である。



大別	層No	土色	土性	混入物・その他	備考
II	1	黒褐色10Y R 2/2	silt	粗砂・中砂を細降り状に含む	周湟内埋積土
	2	黒色7.5Y R 2/1	clay	に白み黄褐色10Y R 4/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	3	黒色10Y R 1.7/1	clay	に白み黄褐色10Y R 4/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	4	黒褐色10Y R 3/1	clay	に白み黄褐色10Y R 6/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	5	黒色10Y R 1.7/1	clay	褐灰色10Y R 4/1の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
III	6	黒褐色7.5Y R 3/1	Fine sand		周湟内埋積土
	7	褐灰色7.5Y R 2/3	Fine sand		周湟内埋積土
IV	8	褐灰色7.5Y R 4/1	Fine sand		周湟内埋積土

第4図
Aトレンチ東壁断面図



大別	層No	土色	土性	混入物・その他	備考
II	1	黒褐色10Y R 2/2	silt	粗砂・中砂を細降り状に含む	周湟内埋積土
	2	黒色7.5Y R 2/1	clay	に白み黄褐色10Y R 4/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	3	黒色10Y R 1.7/1	clay	に白み黄褐色10Y R 4/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	4	黒褐色10Y R 3/1	clay	に白み黄褐色10Y R 6/3の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
	5	黒色10Y R 1.7/1	clay	褐灰色10Y R 4/1の粘土をブロック状に含む	周湟内埋積土
IV	6a 6b	褐色7.5Y R 4/3	silt	6aは6bよりやや明るい	周湟内埋積土
	7	褐灰色10Y R 4/1	silt		周湟内埋積土
V	8	褐灰色7.5Y R 4/1	Fine sand		周湟内埋積土
	9	暗褐色7.5Y R 3/3	粘土質 silt		周湟内埋積土

第5図
Bトレンチ北壁断面図

(2) 発見された遺物

埴輪 埴輪破片は総数 146 点発見されているが、完形品がないため全体の形状はよくわからない。破片から推測して円筒埴輪と考えられる。

口縁部破片は 2 点発見されている。第 6 図 1 は口縁がゆるく外反するもので、口縁端に行くにしたがって厚さは薄くなっている。口縁端は平坦である。色調はにぶい黄橙色である。内外面ともに剥落しているため不明である。

胴部破片は 136 点発見されている。そのうち、タガ状突帯のあるものは 20 点である。内外面の調整技法の明らかなものは 1 点だけであり、残りは両面もしくは片面が剥落している。第 6 図 4 はタガ状突帯をもつものである。外面には幅 1cm あたり 7~8 本の縦方向の刷毛目が施されている。突帯は、粘土紐を貼りつけたあと、横方向になでて仕上げている。その断形は台形に近い「M」形である。内面には縦方向のナデツケがみられる。色調はにぶい黄橙色である。タガ状突帯の成形工程がわかる破片が 1 点ある。剥落したタガの跡に縦方向の刷毛目が残っているものである。

基底部破片は 8 点発見されている。いずれも小破片のため、底部径を推定できない。内外面に調整痕を残しているものが 2 点ある。第 6 図 5 は外面に幅 1cm 当たり 5~6 本の縦方向の刷毛目を施し、内面に縦方向のナデツケが見られるもので、厚さは約 1.3cm である。色調は浅黄橙色である。

須恵器 須恵器破片は、口縁部 1 点、胴部 1 点の合計 2 点が発見されている。口縁部破片の器形は甕または壺と考えられる。口縁部は外傾しながら立ち上がり、口縁上部で大きく外反する。口唇部は垂直に立ち上がり、口唇部直下と口縁部中央に突帯がめぐっている。突帯の上下には波状文が施されている。色調は内外とも黒灰色で焼成は良好である。(第 6 図 8)

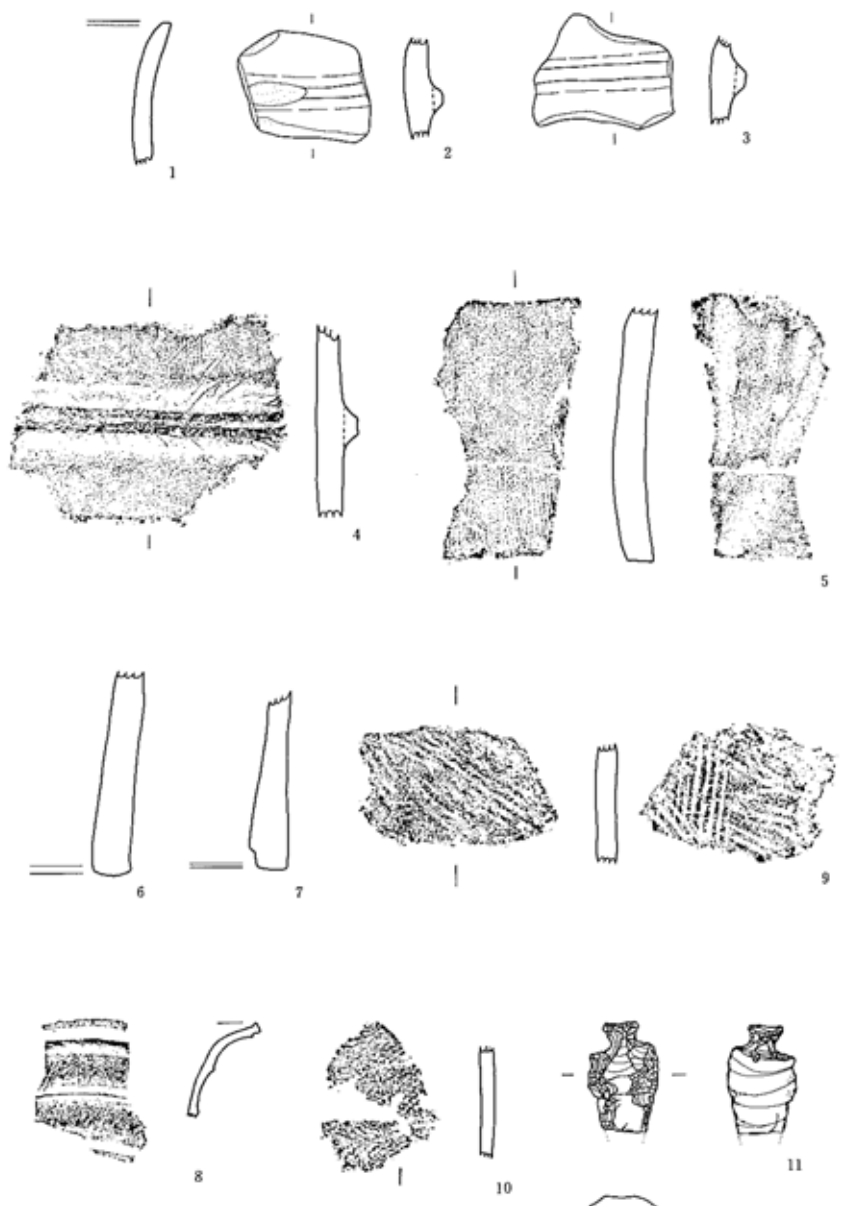
その他の遺物

縄文土器

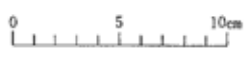
胴部破片 2 点が発見されている。外面に縄文、内面に条痕が施されている土器片(第 6 図 9)と外面に縄文、内面がみがかれ、繊維を混入する土器片(第 6 図 10)がある。前者は縄文時代早期、後者は縄文時代前期初頭のものと考えられる。

石器

縦形石匙が 1 点発見されている。刃部先端が欠損しているため長さは計測できない。幅は 3.1cm である。両面の側縁とつまみ部には調整剥離がみられる。(第 6 図 11)



1-7 円筒埴輪 (1 口縁部、2・3・4 胴部、5-7 基底部)
 8 須恵器 9・10 縄文土器 11 石甕



第6図 発見された遺物

5. 考 察

今回は限られた範囲での発掘調査であったため、全容を明らかにすることができなかった。よって、現段階までの調査成果をもとにして、兜塚古墳の墳形および造営年代について考えてみたい。

兜塚古墳は形とその規模の大きさなどから、仙台市内において古くから知られていた古墳である。正式な発掘調査は行なわれたことがないが、これまで高野松次郎・布施千造・笠井新也・松本彦七郎・三原良吉・伊東信雄・氏家和典氏等によって種々の点から観察と検討が加えられている。

(1) 古墳の形態

形態：前方後円墳とする見解（高野：1906、三原：1947）と円墳とする見解（笠井：1918、松本：1930、伊東：1950、1957、1974）がある。また、円墳としながらも、帆立貝式前方後円墳の可能性を秘めているとする考え方（氏家：1974）もある。次に詳細な形態については三段築成であるとする点で見解（高野：1906、布施：1906、伊東：1950、氏家：1974）の一致をみている。

内部構造：石槨とする見解（高野：1906）があるが、それを疑問とする考え方（伊東：1950）もある。

周濠：周濠の有無についてはわからないとする見解（高野：1906、伊東：1950）と15～20mの濠の存在を認定する見解（松本：1930）とがある。

その他の施設：以上、述べたものの他に「葺石・埴輪円筒」の律在が確認されて（伊東：1950）いる。

これらの点について、今回の調査成果をもとにして再検討してみたい。

周濠の幅は不明であるが、「J」字状の周濠外縁部（東西約23m、南北約60m）が確認された。その平面形は馬蹄形を示すものと推定される。周濠の平面形が馬蹄形とするならば、円墳とは考えられず、前方後円墳の可能性が強い。前方後円墳とするならば、兜塚古墳の主軸方向は北西 南東で、前方部を南東に向ける前方後円墳であると考えられる。前方部の規模は確認することができなかったが、後円部墳麓線と南側集濠外縁部との幅が広いことから、帆立貝式前方後円墳と推定される。

現状では墳丘周辺が荒れているため、埴輪の樹立された痕跡は認められなかった。しかし、周濠堆積土中から埴輪が出土したことから墳丘には埴輪をもつものと考えられる。出土した埴輪の大部分は内外面が剥落しており、完形品もないため明確な形状はわからない。破片から推測して円筒埴輪と考えられる。兜塚古墳出土の円筒埴輪の特徴は次のようにまとめられる。外面に縦の刷毛目による調整があり、その刷毛目の密度は1cm幅に7～8本がほとんどである。

引用参考文献（アイウエオ順）

- ア 甘粕 健（1977.7）：「考古資料の見方 遺物編」『地方史マニュアル』6
伊藤玄三（1958）：「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44の1
伊藤信雄（1950.8）：「仙臺市内の古代遺跡」『仙台市史』3
———（1954）：「遠見塚古墳」『宮城県文化財調査報告書』第1集
———（1957.3）：「古代史」『宮城県史』1
氏家典和（1974.11）：「東北における大型古墳の問題」『東北の考古・歴史論集』
氏家典和（1966）：「東北」『日本の考古学』 河出書房
加藤 孝
- カ 笠井新也（1918.2）：「奥羽地方に於ける原史時代遺蹟の概観（上）」『考古学雑誌』8の6
近藤義郎（1967）：「埴輪の起源」『考古学研究』13の3
春成秀爾
- サ 白鳥良一（1974.11）：「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』
仙台市教育委員会（1972.8）：「法領塚古墳調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第5集
———（1973.5）：「三神峯遺跡」『北東部緊急発掘調査概報』
———（1974.3）：「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第7集
———（1974.5）：「愛宕山横穴群発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第8集
———（1975.9）：「三神峯遺跡C地点」『緊急発掘調査現地説明会資料』
———（1976.3）：「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第9集
———（1976.3）：「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第11集
———（1976.12）：「上野縄文時代集落遺跡」『発掘調査市民報告会資料』
———（1977.1）：「六反田遺跡発掘調査現地説明会資料』
———（1977.3）：「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第12集
- タ 高野 松次郎（1906.6）：「仙臺市附近茂ヶ崎にて發見せる古墳」『考古界』6の2
- ハ 布施千造（1906.6）：「宮城縣名取郡茂ヶ崎村古墳探見記」『考古界』6の2
平安学園考古学クラブ（1966.4）：「陶邑古窯址群Ⅰ」
- マ 松本彦七郎（1930）：「陸前平野区域の古墳」『東北帝国大学地質学古生物学教室研究邦文報告』第九号
三原良吉（1947.9）：「根岸橋とその兩岸の歴史」
宮城教育大学日本史研究会（1968）：「宮城県仙台市三神峯遺跡発掘調査概報」『歴友』3
宮城教育大学考古学研究会（1974.6）：「名取川水系遺跡分布調査予報」『宮教考古』6
宮 城 県（1970）：「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32
宮城県教育委員会（1976.10）：「宮城県遺跡地名表」
- ワ 渡辺泰伸（1974.9）：「富沢窯跡」『古窯跡研究会』

発掘区遠景(南東から)

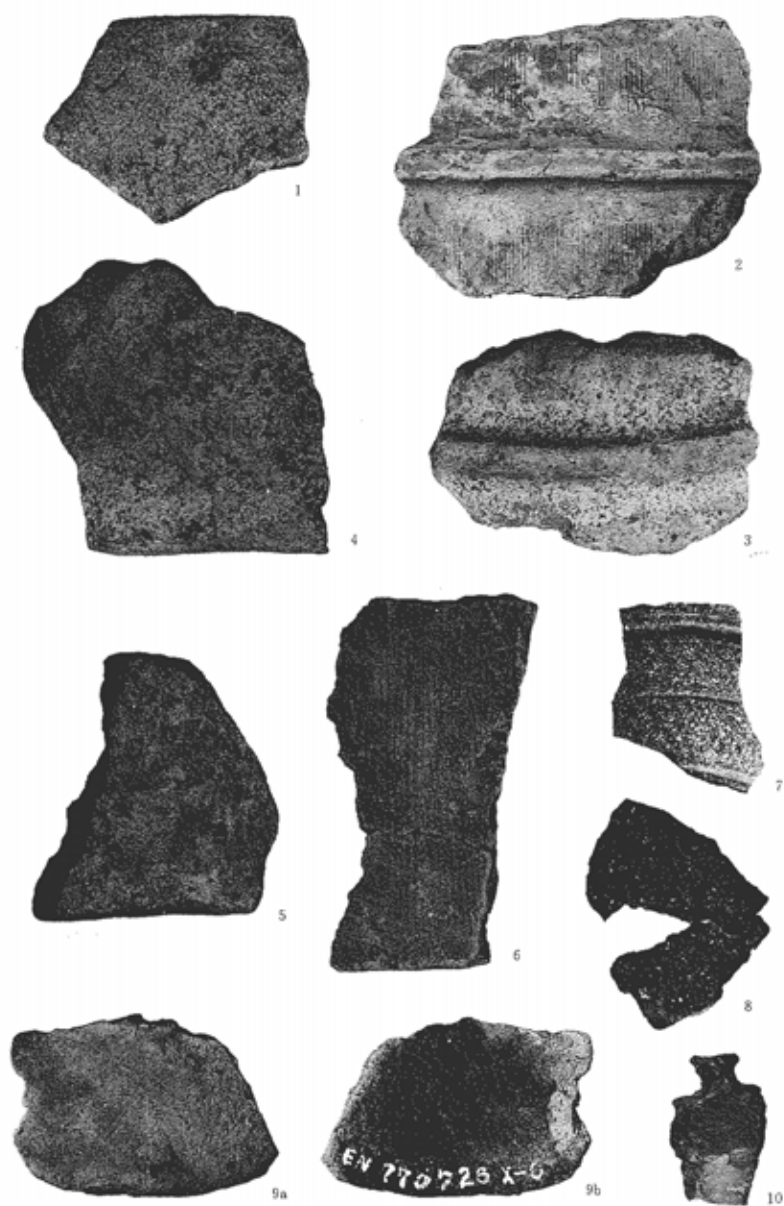


Aトレンチ周漕断面
(西から)



Bトレンチ周漕断面
(西から)





1-6 : 船輪 7 : 須恵器 8-9 : 鴨文土器 10 : 石辻

発見された遺物

古墳（測量調査）

古墳実測図収録について

古墳・古墳群の実測図の刊行にあたって

古墳とは墳丘をもつ古代の墓である。墳丘の形態には、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などがある。墳丘のまわりには周湊がめぐらされることが多い。内部構造には、竪穴式石室・横穴式石室・粘土槨・木炭槨などがある。古墳の中には、副葬品を豊富に伴ったり、墳丘外面が葺石で覆われ、埴輪がたてられているものもある。横穴古墳は、丘陵斜面に掘り込まれて作られているため、墳丘をもたない。その構造は横穴式石室と共通した点が多い。このような古墳の形態・内部構造・副葬品・その他施設のあり方は、時期の相違を示すとともに、古代社会における被葬者の社会的地位を敏感に反映している。

宮城県内にも数多くの高塚古墳があり、その概要は下表のようになる。その分布をみると、県南から県中央部に比較的多く、県北に行くに従って少なくなる。形態的には前方後円墳や円墳が一般的であるが、この他に初期の古墳との関連で前方後方墳や方墳の確認も行なわれている。前方後円墳には名取市雷神山古墳（主軸長 168m）にみられる大規模なものが多いが、中には主軸長 30m程の小さなものもある。最近、前方後円墳の中で、前方部が小さい帆立貝式のもの確認されてきた。仙台市兜塚古墳は、周湊確認調査によって帆立貝式前方後円墳の可能性が指摘されている。円墳は最も数が多く、名取市毘沙門堂古墳（主軸長約 50m）などを除けば、その多くは 10～20mと小規模で群集することが多い。

今、県内に分布する古墳は、大規模開発の下で破壊の危機にさらされているものが多い。古墳を文化的遺産として保護していくためには、現状の調査と精密な実測図の作成が緊急の課題となっている。ここに収録した古墳の実測図は、宮城県教育委員会の指導のもとに作成されたものである。今後、これらが参考となって、各地で実測図の作成がすすみ、古墳の保存が積極的になされることが期待される。

（注）『宮城県文化財報告書 第46集 宮城県遺跡地名表』による。ここでは横穴古墳は除き、高塚古墳の分布状況を知る上の参考資料として収録した。

宮城県市町村別高塚古墳集計表

市町村名	古墳群	単独墳	標高	地本	点	?	市町村名	古墳群	単独墳	標高	地本	点	?	市町村名	古墳群	単独墳	標高	地本	点	?	
01 仙台市	2	19	4	3	2		22 行府町	1	1					45 一迫町	1						
02 白石市	3	3					23 大和町	1	3			1	46 新峰町	2	2					1	1
03 角田市	11	7					24 大郷町	3	5		1	48 金成町		1							
05 蔵王町	2	3	1				26 大衡村		1			49 志保町		1							
06 大河町		1					27 古川市	8	6			51 迫町		1							
07 村田町	2	13					28 中郷町	3	1			54 中田町		1							1
08 柴田町	1	3					29 小野田町	2	2			58 南方町			1	1					
09 田崎町		3					31 色麻村	5	4			62 本吉町		1							
10 丸森町	3	4					33 三本木町	2	3			65 石巻市		1	1						
12 名取市	5	25	5		1		35 岩沼町	13	4			66 河北町		1	1						
13 亘理町	2	1					36 雫子町		3			67 穴本町		1							
14 山本町	2						39 小牛田町	2	15			71 鴨瀬町		1							
15 石巻市		6					41 警備町	3				72 北上町		1							
18 多賀城町	1						43 栗駒町	1													
														合計	89	143	31	5	5		

『宮城県文化財報告書 第46集 宮城県遺跡地名表』による

収録古墳・古墳群

古墳・古墳群名	遺跡番号	所在地	原図縮尺	調査年次
愛宕山古墳	07006	村田町関場字愛宕山	1/500	45年1月
台町古墳群	10050	丸森長平100の2、二本木151、金山、下片山190、台町4の1	1/500	45年3月
毘沙門堂古墳	12032	名取市下増田字杉ヶ袋54	1/500	45年3月
念南寺古墳	31002	色麻村四釜字根谷地	1/500	45年4月
賽ノ窪古墳群(8号墳)	12010	名取市愛島笠島・西小泉・南台・北台・愛島・塩手・拓上・仮宿	1/500	46年2月
亀田古墳群	02006	白石市齊川字弥平田	1/500	48年3月
雷神塚古墳	12035	名取市下増田字塚原・塚根	1/500	50年1月
大塚山古墳	12011	名取市愛島笠島字北台	1/500	50年6月
青塚古墳	27011	古川市塚ノ目字屋敷118	1/500	52年4月

収録古墳・古墳群参考文献

愛宕山古墳

- 沼辺村(1954):『沼辺村史』
 伊藤信雄(1957):「古代史」『宮城県史』1
 村田町(1974):『村田町史(青少年版)』
 氏家典和(1974):「東北地方における大型古墳の問題」『東北の歴史考古論集』

台町古墳

- 清水東四郎(1938):「宮城県内の古墳及び横穴」『宮城県史蹟名勝天然記念物報告』12
 清水東四郎(1940):「宮城県(伊具・亘理・牡鹿)に於ける史蹟」『』13
 志間泰治(1954):「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」『歴史』7
 志間泰治(1955):「宮城県丸森町台町古墳群調査概報」
 志間泰治(1961):「宮城県丸森町台町古墳群調査概報」『東北考古学』6

毘沙門堂古墳

- 伊東信雄(1957):「古代史」『宮城県史』1

念南寺古墳

- (1776):『安永風土記』
 (1925):『加美郡誌』
 色麻村(1952):『色麻郷土読本』
 中新田町(1964):『中新田町誌』

賽ノ窪古墳群

- 松本彦七郎(1930):「陸前平野区域の古墳」『東北帝国大学理学部地質学教室研究報告』9
 加藤孝(1955):「宮城県名取郡窪ノ窪古墳」『日本考古学年報』4

亀田古墳群

- 加藤孝(1966):「古墳時代(東北)」『日本の考古学』
 氏家典和(1972):「東北新幹線遺跡関係分布調査委員会 査報告書」『宮城県文化財報告書』27
 氏家典和(1974):「東北地方における大型古墳の問題」『東北の歴史考古論集』

大塚山古墳

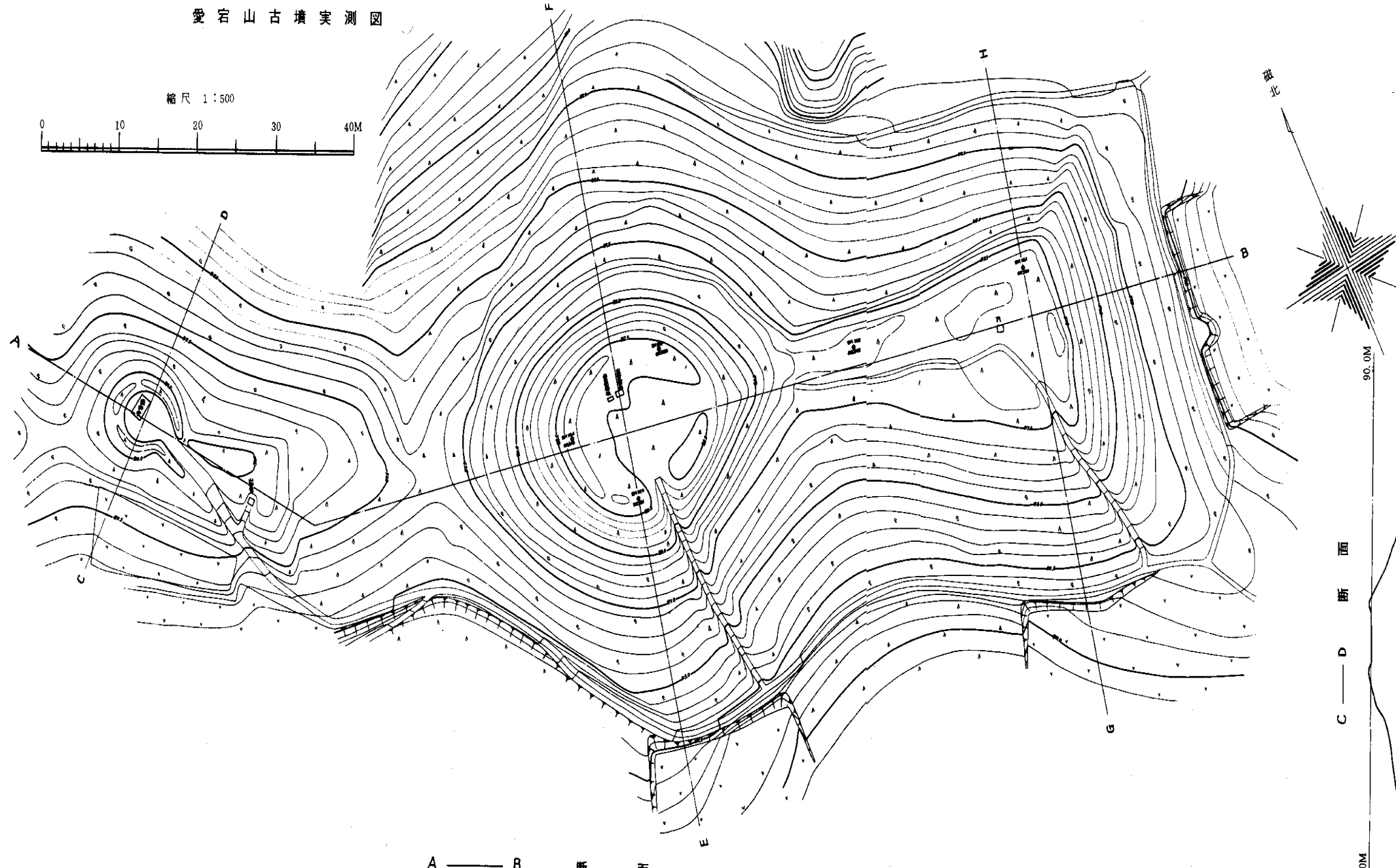
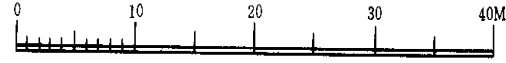
- 氏家典和(1974):前掲書

青塚古墳

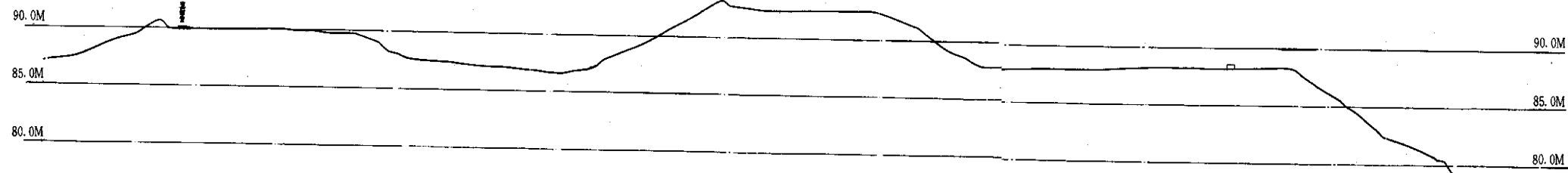
- (1776):『安永風土記』
 伊東信雄(1957):「古代史」『宮城県史』1
 佐々木忠雄(1968):「古代史」『古川市史(上)』
 宮城県教(1969):「埋蔵文化財緊急調査概報」『宮城県文化財調査報告書』18
 古川市教(1971):『古川の文化財』
 育委員会
 伊藤隆(1972):「史跡・名勝」『古川市史(下)』

愛宕山古墳実測図

縮尺 1:500

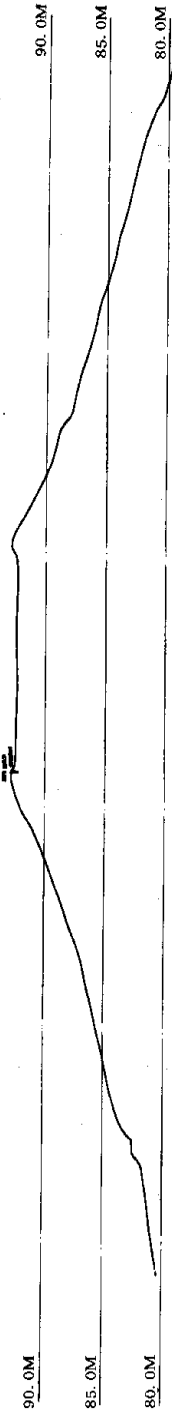


A — B 断面

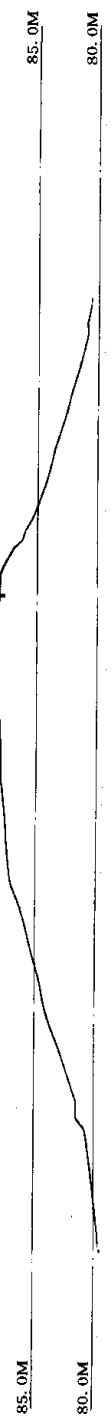


C — D 断面
90.0M
85.0M

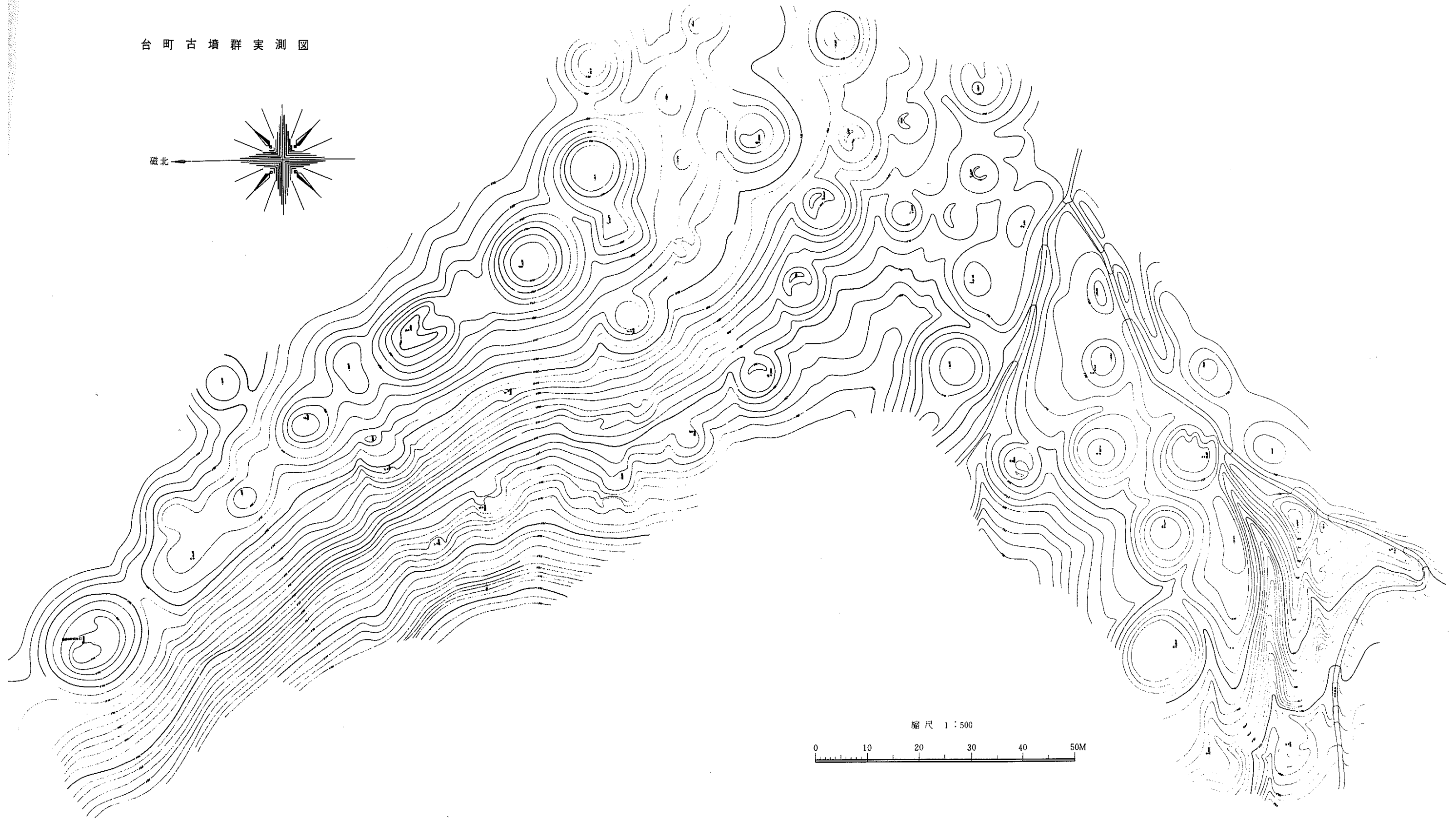
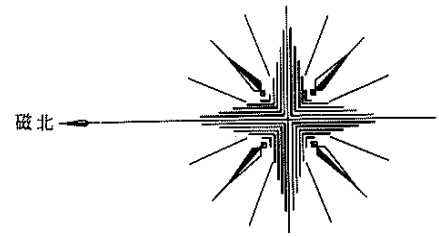
E — F 断面



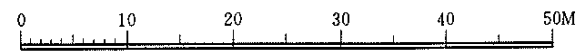
G — H 断面



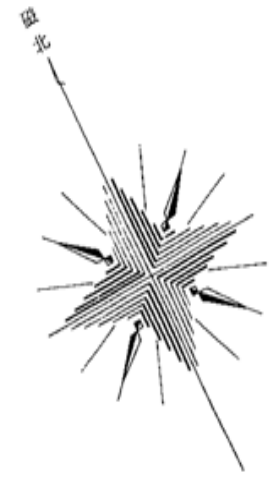
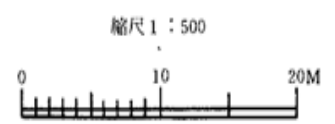
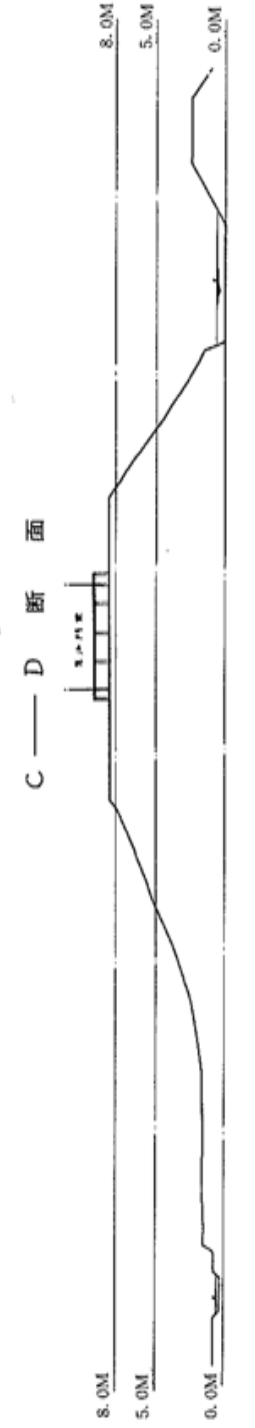
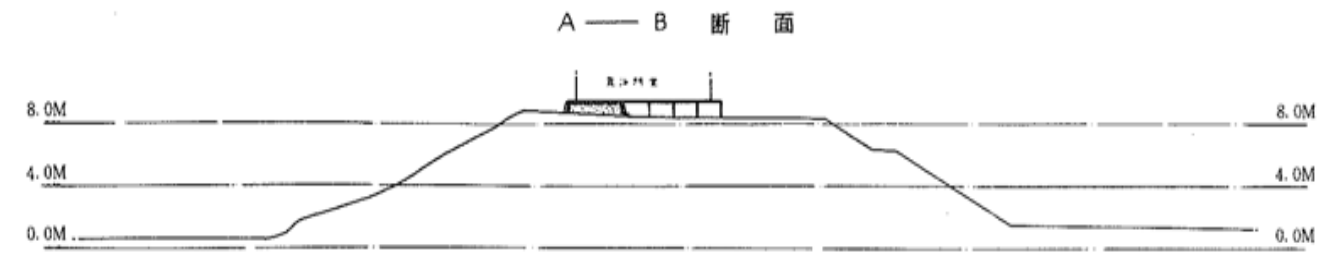
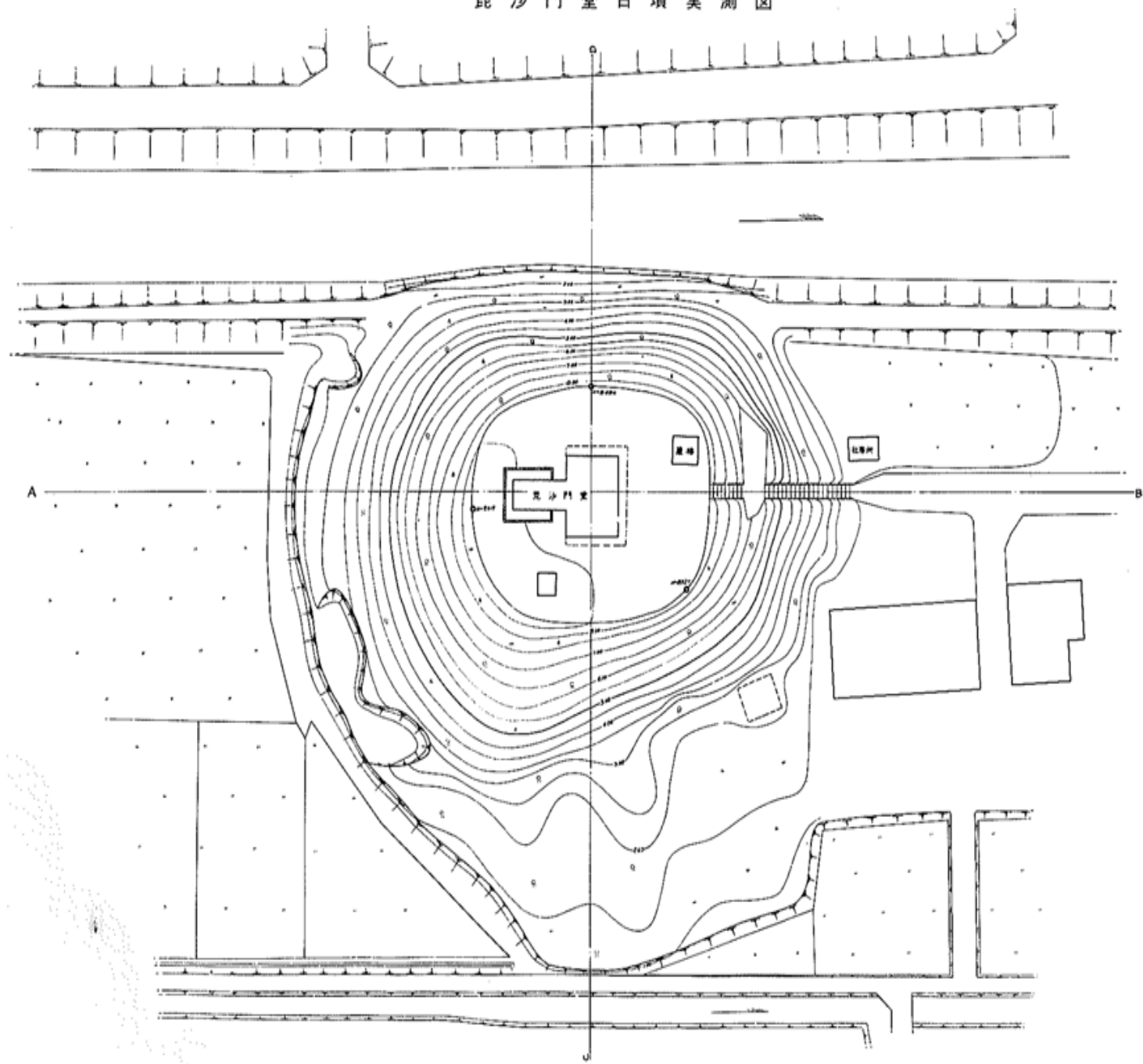
台町古墳群実測図



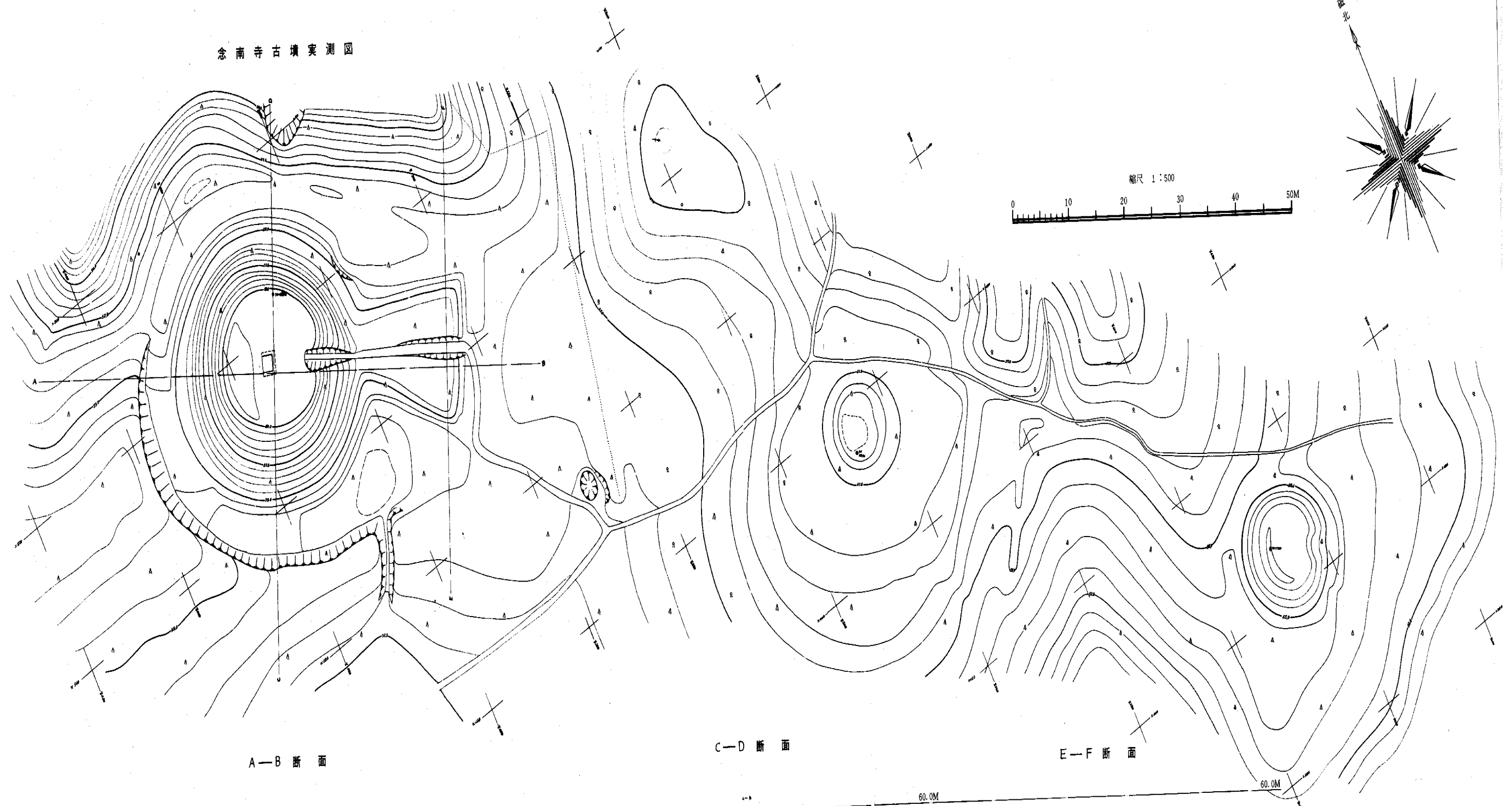
縮尺 1 : 500



毘沙門堂古墳実測図



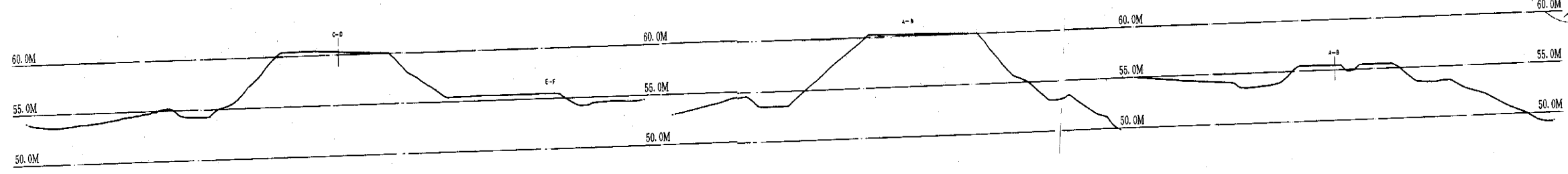
砂湖井坑填实测图



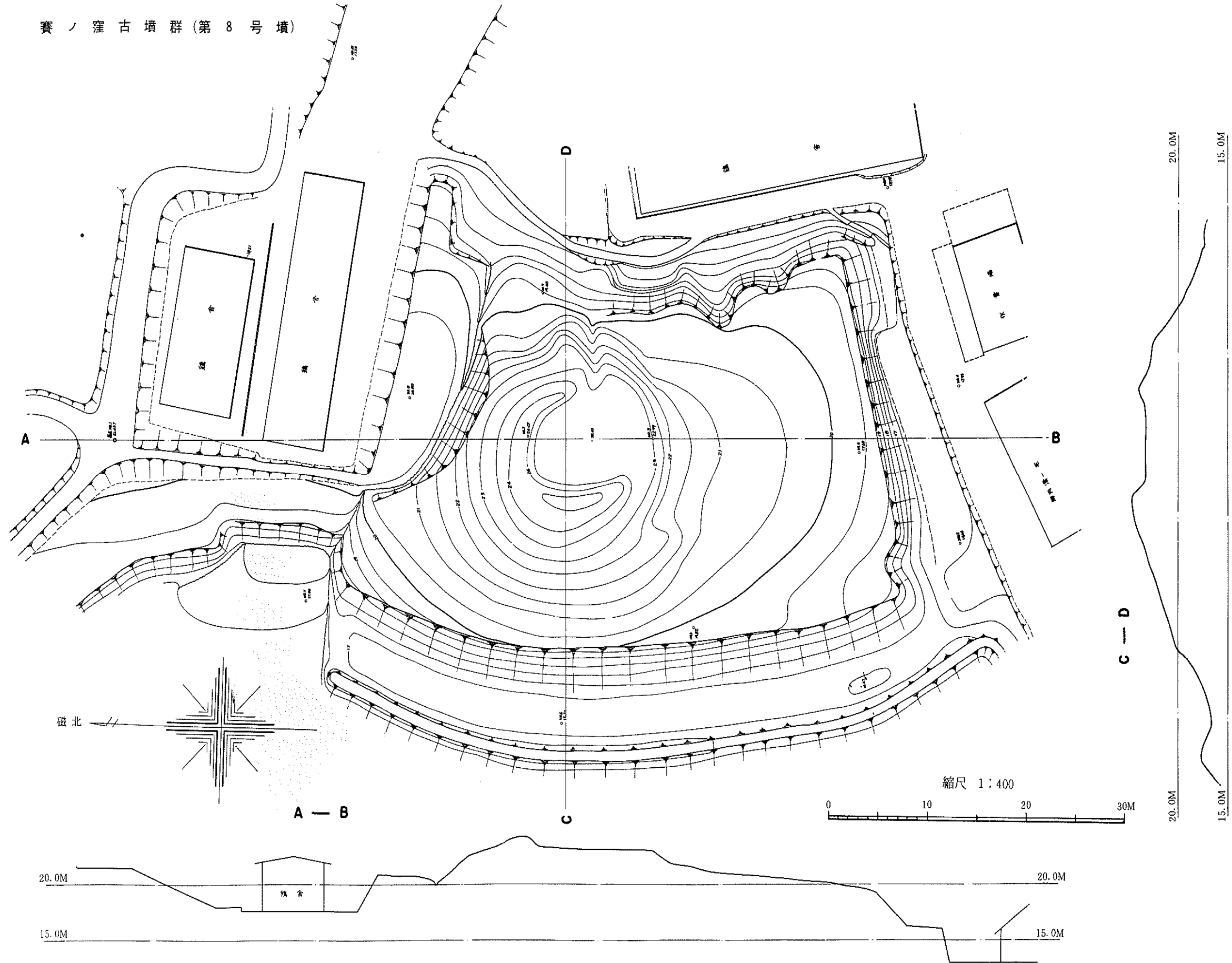
A—B 断面

C—D 断面

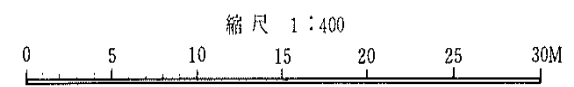
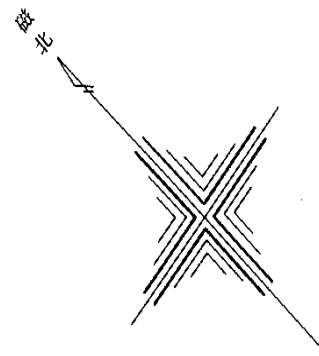
E—F 断面



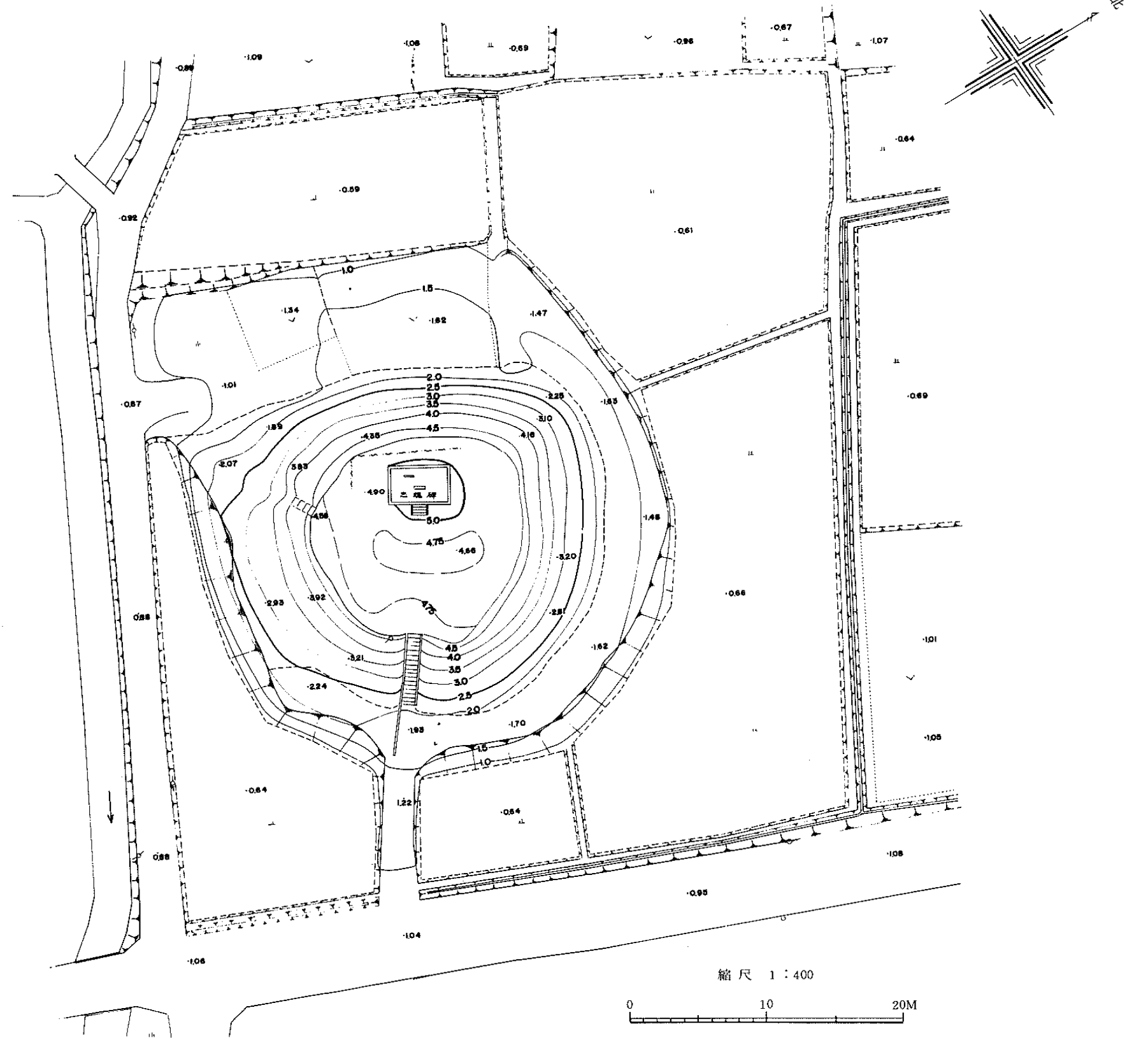
賽ノ窪古墳群(第8号墳)



龜田古墳群実測図



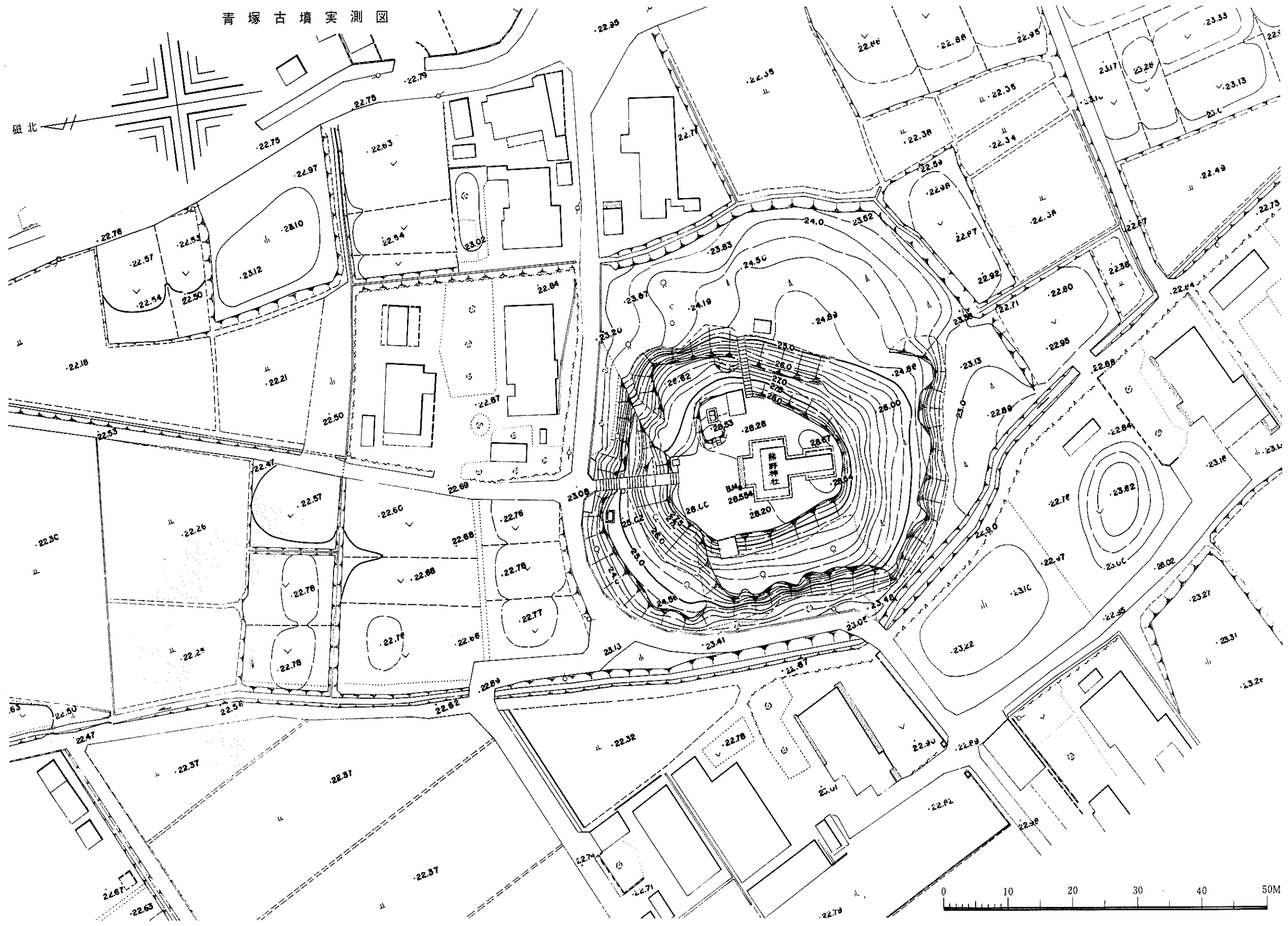
雷神塚古墳実測図



大塚山古墳実測図



青塚古墳実測図



宮城県文化財調査報告書一覧

宮城県文化財調査報告書刊行一覧

刊行年月日	報 告 書 名
1952 (昭和29年3月)	宮城県文化財調査報告書第1集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」
1954 (昭和31年3月)	宮城県文化財調査報告書第2集「菜切谷廃寺跡」
1956 (昭和33年3月)	宮城県文化財調査報告書第3集「高蔵寺阿弥陀堂・高蔵寺の仏像」
1960 (昭和33年3月)	「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」
1962 (昭和37年3月)	「昭和36年度多賀城発掘調査概報」
1963 (昭和38年3月)	「昭和37年度多賀城跡発掘調査概報」
1964 (昭和39年3月)	「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」
1965 (昭和40年3月)	宮城県文化財調査報告書第8集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 (崎山田洞窟・観塚古墳調査概報・田町裏遺跡・敷味遺跡・合戦原古墳群)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第9集「宮城県遺跡地名表」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗(民俗資料緊急調査報告)」
1966 (昭和41年3月)	宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(宇ノ崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財発掘調査報告書 (梶形横穴古墳群・鷹の巣古墳群・松崎古墳)」
1967 (昭和42年3月)	宮城県文化財調査報告書第13集「(新産業都市指定地区)埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (西ノ浜貝塚・三十三間堂)」
1967 (昭和42年12月)	宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報(西ノ浜貝塚)」
1968 (昭和43年3月)	宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道遺跡地名表・同試掘調査略報)」
1968 (昭和43年3月)	「蔵王山麓民俗図誌(釜房ダム水没地区)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 東北縦貫自動車道遺跡地名表・湯ノ倉館試掘調査概報」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(長根貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第4次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」
1969 (昭和44年3月)	宮城県文化財調査報告書第21集「蔵王山麓の社会と民俗」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山窯跡群」
1970 (昭和45年3月)	宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (下原田遺跡・二屋敷遺跡・持長寺遺跡)」
1971 (昭和46年3月)	宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 (白石市・柴田郡村田町地区)」
1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物球状斑れい岩調査報告」

1972 (昭和47年3月)	宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書 (地名表・試掘調査概報〈白石・高清水地区〉)」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第28集「宮城県遺跡地名表」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 (白石市・仙台市～大和町地区)」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第32集「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」
1973 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」
1974 (昭和49年3月)	宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ヶ宿の民俗」
1974 (昭和48年3月)	宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ(荒屋敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北台遺跡・西野田遺跡・岩切岡ノ渠遺跡・沢乙遺跡・中ノ釜A遺跡)」
1974 (昭和49年3月)	「宮城県の古民家」(宮城県民家緊急調査報告書)
	第37集欠 番
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第38集「宮前遺跡」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)」
1975 (昭和50年3月)	宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北隈地帯調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度分)」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」
1976 (昭和51年3月)	宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島(保存管理計画策定書)」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」
1976 (昭和51年10月)	宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第49集「清太原西遺跡・船渡前遺跡」
1977 (昭和52年3月)	宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」
1977 (昭和52年10月)	宮城県文化財調査報告書第51集「宮城県民俗分布図」緊急民俗資料分布調査報告書
1978 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第52集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅰ(上深沢遺跡)」
1977 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第53集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」
1977 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第54集「湯ノ坪遺跡」
1977 (昭和53年3月)	宮城県文化財調査報告書第55集「北沢遺跡」

宮城県文化財保護課職員一覧（昭和52年度）

課長	千葉与一郎	調査第1係	技術主幹 兼係長	後藤 勝彦	調査第2係	係長	佐々木茂楨
課長補佐	木村三智夫		技術主査	高橋 多吉		技術主査	平沢英二郎
管理第1係	係長 加藤 忠雄		"	早坂 春一		技師	後藤 彪
	主事 矢口セツ子		技師	小井川和夫		"	佐々木安彦
	" 三浦 正義		"	高橋 守克		"	加藤 道男
管理第2係	主幹兼係長 扇 正人		"	丹波 茂		"	一条 孝夫
	主事 佐藤 信子		"	斎藤 吉弘		"	阿部 恵
	" 渡辺 正憲		"	佐藤 好一		"	手塚 均
			"	遊佐 五郎		"	阿部 博志
			"	千葉 宗久			
			"	真山 悟			
			嘱託	熊谷 幹男			
			"	中島 直			